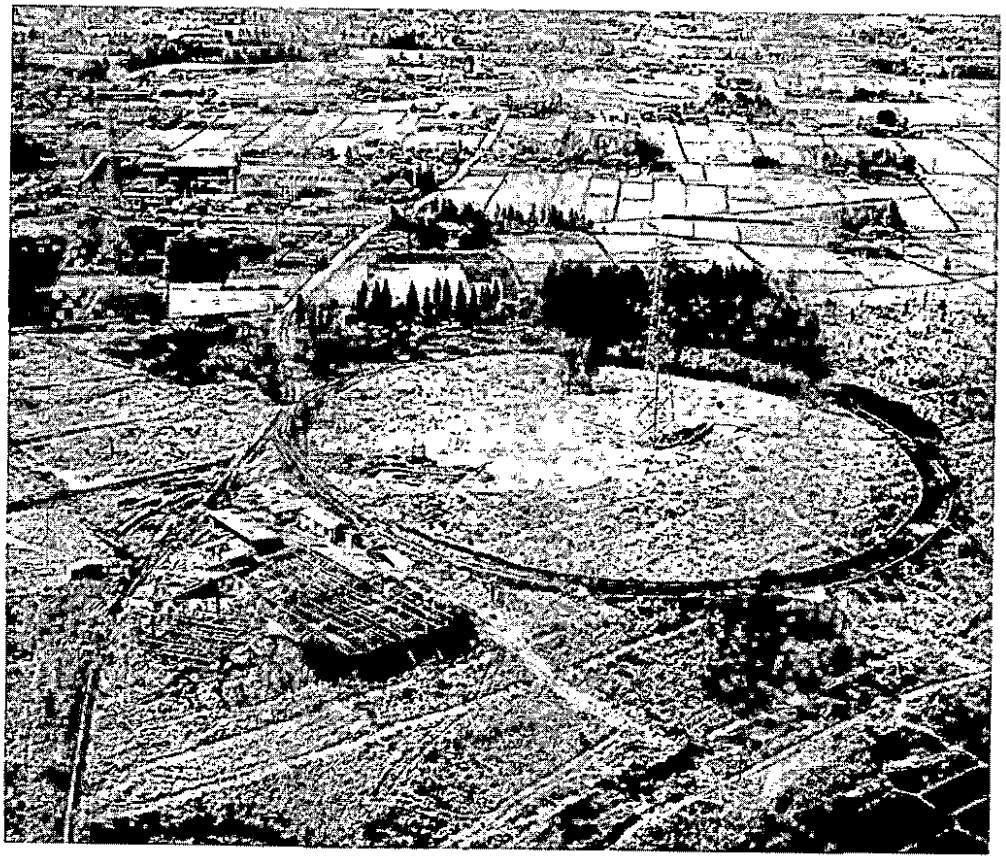
加曽利貝塚博物館20年の歩み

― 野外博物館をめざして ―

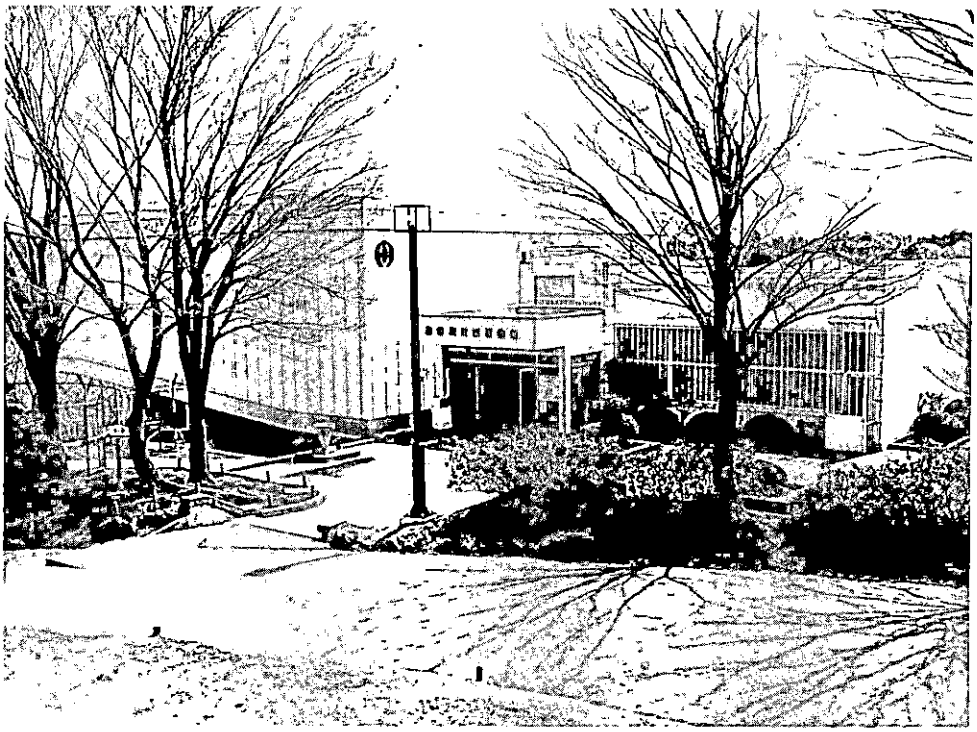


東方上空より見た博物館建設中の加曽利貝塚（昭和40年11月）

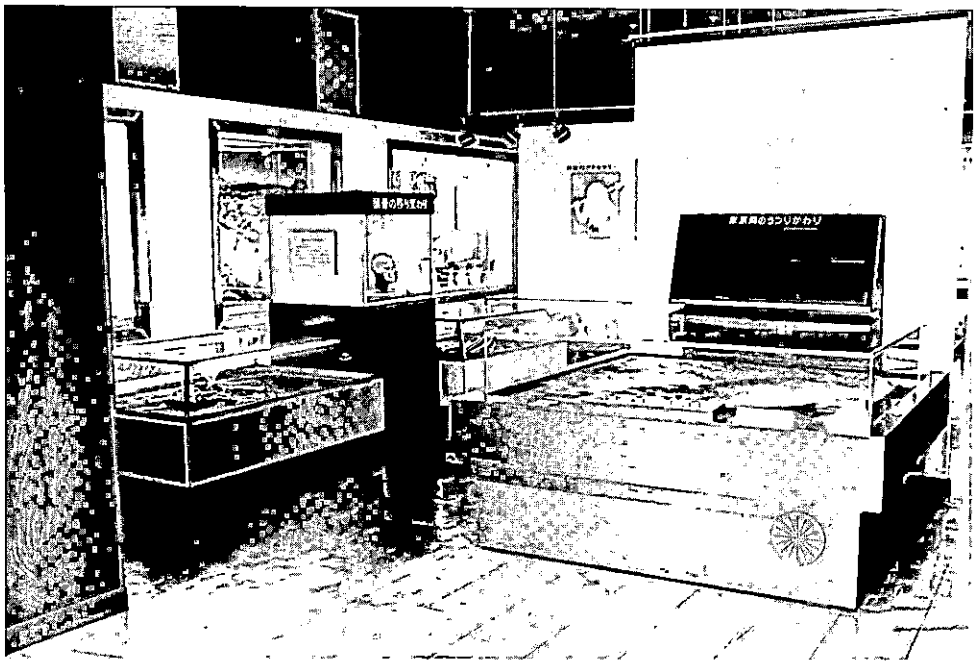
北方上空より見た加曽利貝塚（昭和49年３月）

発掘中の加曽利貝塚をご視察される皇太子殿下（昭和40年５月）

加曽利南貝塚の発掘調査（昭和39年10月）－南西上空より－

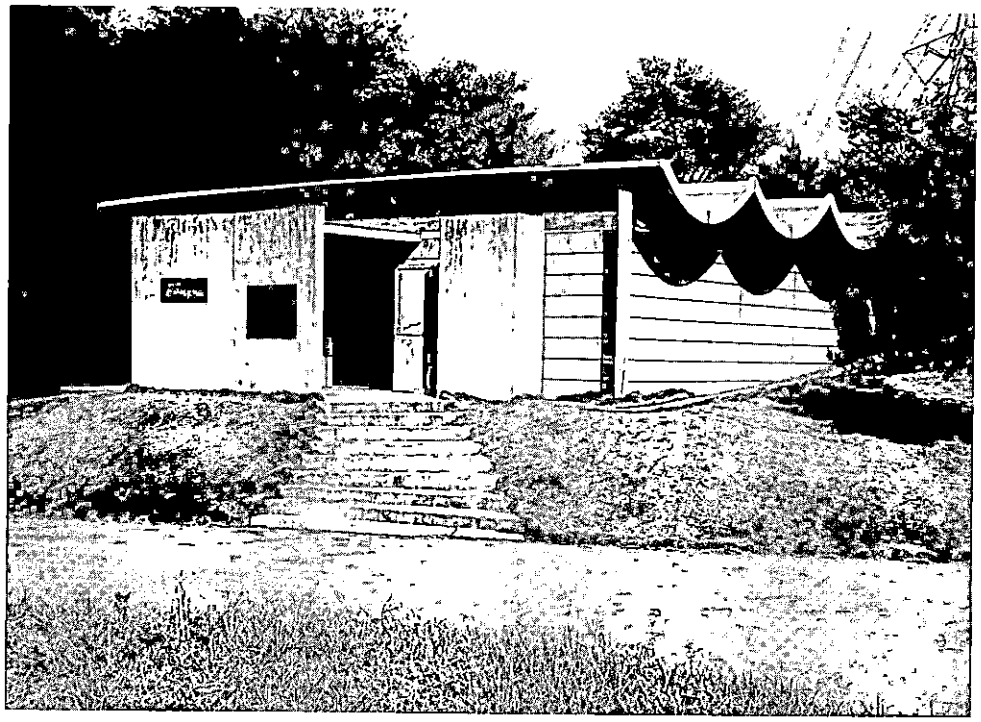


加曽利貝塚博物館全景（昭和61年）

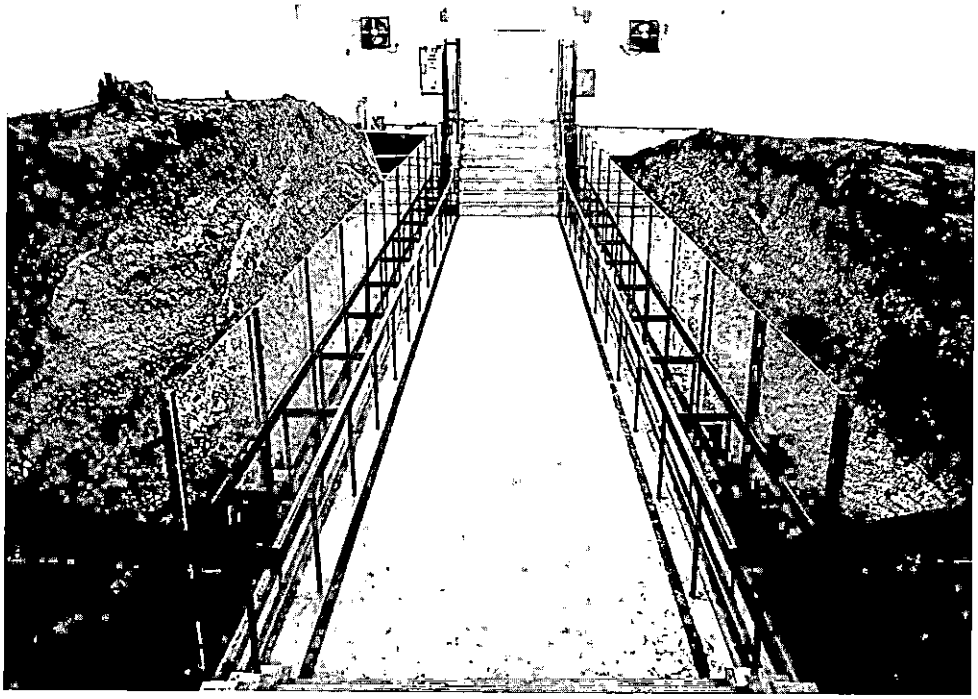


本館展示室の状況（昭和61年）

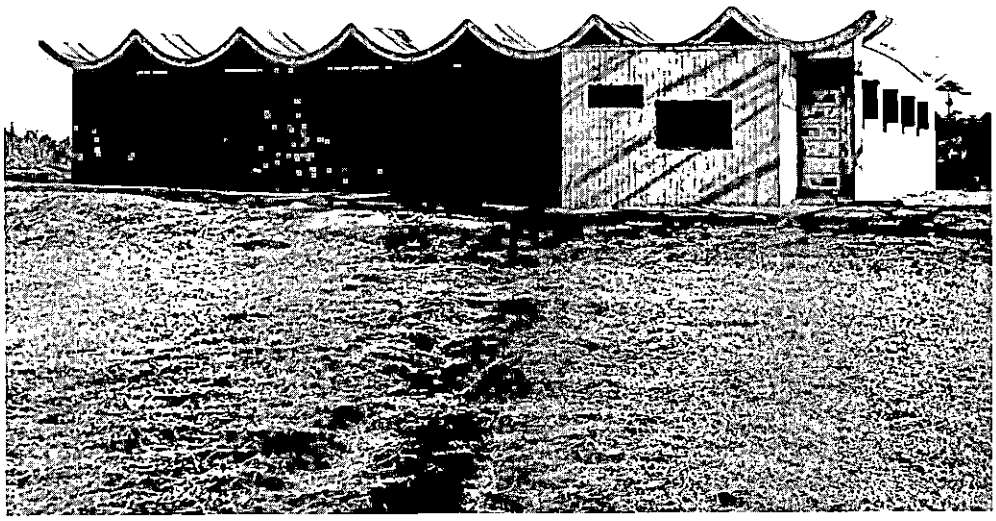
野外施設をご視察される天皇陛下（昭和48年10月）



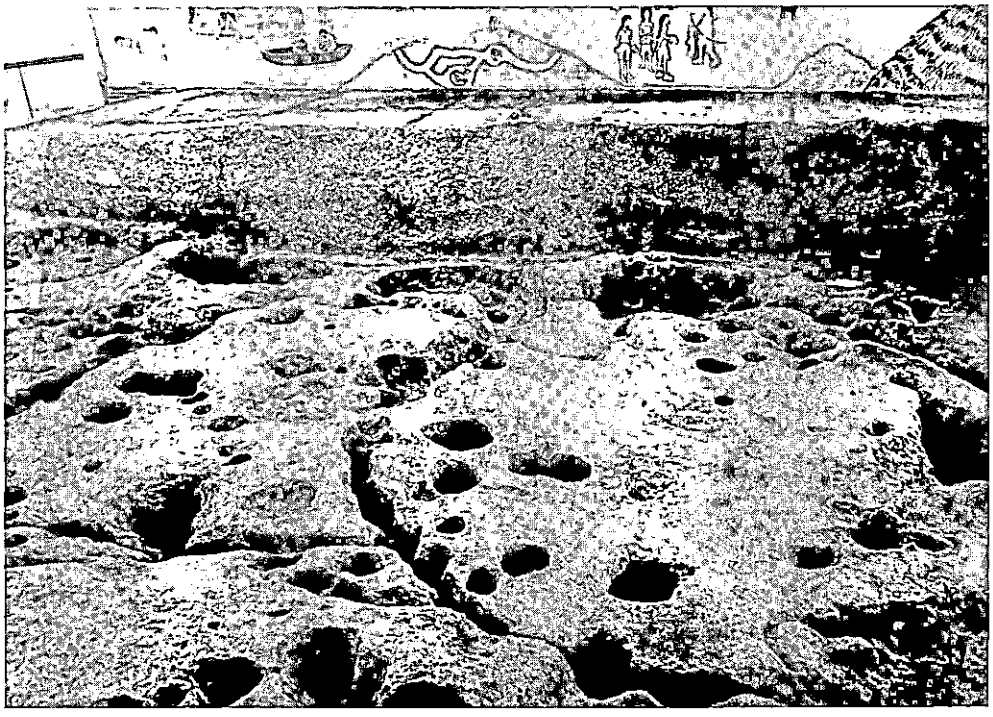
貝層断面観覧施設全景（北貝塚・昭和54年）



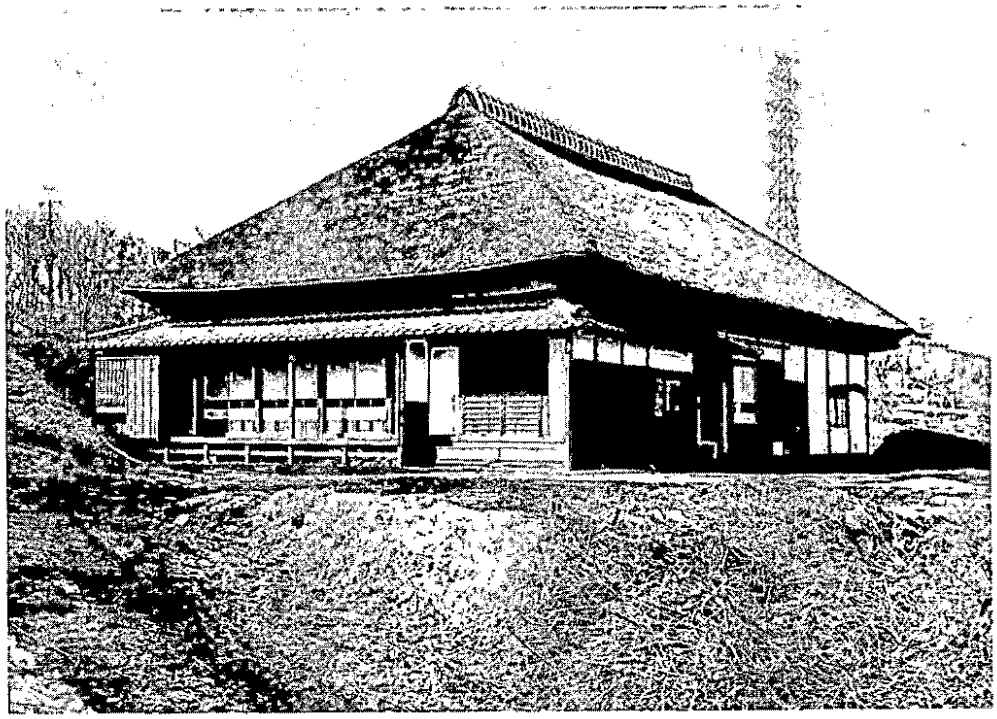
貝層断面観覧施設の内部の状況（昭和54年）



住居址群観覧施設全景（北貝塚・昭和54年）



住居址群観覧施設の内部の状況（昭和54年）



移築された旧大須賀家住宅（昭和44年３月）

体験学習「土器づくりの会」（昭和56年）

加曽利貝塚博物館20年の歩み
——野外博物館をめざして——

目　　次

ご　挨　拶	千葉市長	松井　旭
20周年を迎えて	千葉市教育長	吉田　治郎
20周年記念誌の刊行にあたって	千葉市立加曽利貝塚博物館長	片岡　茂房

第一部　加曽利貝塚博物館の歩み

一、加曽利貝塚の保存と博物館開館の経緯（武田　宗久）…… 1
二、加曽利貝塚博物館建設の動機と目的（遠藤　健郎）…… 12
三、加曽利貝塚の意義（後藤　和民）…… 14
四、加曽利貝塚の調査経過（庄司　克）…… 28
五、博物館活動の経過（庄司　克）…… 42
六、博物館の現状と活動（庄司　克）…… 51

第二部　将来の展望と計画

一、21世紀の博物館をめざして（滝口　宏）…… 61
二、加曽利貝塚の野外博物館構想（新井　重三）…… 63
三、遺構の保存科学的研究の推移（登石　健三）…… 70
四、貝塚博物館の新しいヴィジョンを求めて（金子　浩昌）…… 75
五、加曽利貝塚の整備計画（後藤　和民）…… 79
六、史跡整備のための予備調査（後藤　和民）…… 99

第三部　20周年に寄せて

◦ 千葉市立加曽利貝塚博物館20周年に寄せて（土屋　秀雄）…… 111
◦ 加曽利貝塚博物館と郷土博物館（中村　民男）…… 113
◦ カソリという地名（平野　馨）…… 115
◦ 縄文のにおい（早川　行一）…… 116
◦ 土器にかけた司郎さん（新井ミチヨ）…… 117
◦ 生きていた壁画（松下紀久雄）…… 120
◦ 南貝塚発掘調査のころ（大塚　喜一）…… 122
◦ 博物館と泥メンコの思い出（大塚　要）…… 123
◦ 加曽利貝塚博物館20周年に際して（石井　雅男）…… 124

第四部

一、加曽利貝塚博物館の小年表 …… 125
二、博物館の利用状況 …… 135
三、博物館の職員 …… 136
四、博物館協議会委員 …… 138
五、博物館の刊行物 …… 139
六、加曽利貝塚関係文献 …… 146

○　本誌は、昭和41年の博物館開館から61年までの20年に亘る加曽利貝塚博物館の軌跡と、将来への展望を記した記念誌である。

○　本誌の内容は、第一部　加曽利貝塚博物館の歩み、第二部　将来の展望と計画、第三部　20周年に寄せて、第四部　参考資料から成り、第一部～第三部では関係各位から玉稿をいただいた。

○　第三部の文中挿図（カット）は、画家・松下紀久雄氏の作品である。

○　第四部の資料作成及び本誌の編集は、加曽利貝塚博物館が行った。

○　本誌を出版するにあたり、博物館開館以来お世話になった諸先生、関係各位に厚くお礼申し上げると共に、今後ともご指導、ご鞭撻をいただきますようお願いいたします。

（編集者一同）

ご　挨　拶

千葉市長　松井　旭

この度、加曽利貝塚博物館におきましては、開館20周年を迎えることができましたこと、誠に意義深く存じているのであります。

当博物館は、昭和37年に行なわれた加曽利北貝塚、そして続いて行なわれた南貝塚の発掘調査の結果、直径130mのドーナツ状をした北貝塚と170mの馬蹄形をした南貝塚が連結した我が国最大規模かつ貴重なものであることが判明したのであります。時あたかも開発ブームであり、この遺跡の宝庫を開発から守り、さらに広く市民に知ってもらうため、昭和41年に当館を創設いたしたところであります。

開館以後も、保存区域を広げるとともに、昭和43年には、貝層断面と住居址群の遺構をそのまま固定した「野外施設」を建設・公開するなど、「縄文時代における貝塚文化の様相」を主なテーマとして、館内展示のみでなく、大自然と共に生きてきた縄文時代の人びとの生活のありさまを市民の皆様方がより実感をもって学習できるよう、周辺の地形および植生などの自然景観をも復元保存し、まさに「野外博物館」の建設をめざしているのであります。お陰様で、市内はもとより全国各地からの来館者で賑わっておりますこと、誠にうれしく存じているのであります。

一方、当博物館を中心とした教育普及活動にも力を入れており、「土器づくりの会」「郷土史講座」「文化財めぐりの会」等を開催し、展示では果たしえない、系統的専門的研究の紹介と市民との共同研究や体験学習を行なっており、大きな成果をおさめているのであります。

しかしながら、当博物館周辺をはじめ本市の開発は今だに活発であり、埋蔵文化財や遺跡の保存は気の抜けない状況が続いているのであります。そこで、昨年度には、市内での発掘出土品を整理・収蔵・公開するための施設であります埋蔵文化財調査センターをオープンさせるなど、様々な施策を強力に推進しているのであります。

私は、これを契機に、当博物館の一層の充実に努めてまいりますとともに、国民共有財産としての文化財の保存、また普及活動に意を配して参る所存であります。どうか、皆様方にも一層のお力添えを賜りますようお願い申しあげ、ご挨拶といたします。

２０周年を祝して

千葉市教育長　吉田治郎

千葉市立加曽利貝塚博物館が、昭和41年11月に開館して以来20年が過ぎ、ここに『20周年記念誌』を発行することは、この間の調査・研究の省察と今後の博物館活動を促進する上で誠に時宜にかなった企画だと存じます。

加曽利貝塚は明治・大正時代から十数度にわたって発掘・調査がなされてきましたが、とくに昭和37年の千葉市教育委員会による北貝塚調査をはじめ、昭和39年に行なわれた南貝塚の大発掘調査や昭和45年から３年間続けられた東傾斜面の調査によって、その歴史的重要性がますます認識されてまいりました。

その結果、127,800㎡という全国最大規模の貝塚遺跡の保存が実現し、昭和46年に北貝塚が、また昭和52年には南貝塚を含む周辺地域が、国の史跡に指定されました。

現在、南貝塚は整備計画中でありますが、北貝塚は史跡公園として、貝塚断面や竪穴住居跡の観覧施設が備えられ、全国でも稀な遺跡博物館として、高い評価を得ております。これはいずれも、種々の調査や保存運動および博物館建設に係わられた多くの方々のご尽力によるもので、この20年間のご指導、ご協力を賜った皆様方に深く感謝の意を表します。

昭和61年３月に発表した「史跡加曽利南貝塚整備基本設計」はこれから関係諸機関および市内関係部局での検討、承認を待つものでありますが、加曽利貝塚をより総合的に整備し「野外博物館」として広く公開するとともに、周辺遺跡を含めた広域的な歴史環境の保存・整備を目指すもので、多くの方々の一層のご指導、ご協力を念願する次第であります。

２０周年記念誌の刊行にあたって

千葉市立加曽利貝塚博物館
館長　片岡茂房

千葉市立加曽利貝塚博物館が、わが国最大級といわれる貝塚遺跡のなかに、昭和41年11月24日に開館してから、はや20年の歳月が経過しました。人間に替えると成人式を迎えることになり誠に意義深い年にあたりますので、記念事業の一環として、ここに20周年記念誌を刊行することにしました。

当博物館は、開館以来「東京湾沿岸における縄文時代の貝塚文化」を主テーマとして当時の「むらびとたち」の生産や生活の様相を浮き彫りできるように、絶えず調査・研究活動に当たり、その成果を反映させて館内展示を進めてまいりました。また、館内展示のみにとどまらず、遺構である貝層断面や住居址群を現地にそのまま固定した観覧施設を建設するとともに、約13万㎡に及ぶ周辺の地形・植生などの自然環境を確保（国史跡の指定）して、縄文時代における一大集落址として保存・活用できる「野外博物館」の建設・整備をめざして努力してまいりました。

おかげをもちまして、この間に、天皇・皇后両陛下、各皇族や多くの内外の要人をお迎えすることができました。また、千葉市民はもとより関東地方その他の多数の方々に「縄文の里」として、親しく利用されてきました。さらに、貝塚研究のメッカとして重要な役割を担い、輝かしい成果をあげて今日に至っております。間もなく延100万人に達するという入館者数は、全国的にみて市立の同規模館としては、上位にあるものと思われます。

このような成果は、市民各位の暖かいご支援と設立準備から現在まで当館を支え育ててくださいました多数の関係者の方々のご協力や厳しいご指導の賜物であると衷心より感謝し、厚くお礼申しあげる次第でございます。

幸いにして、現在、南貝塚整備事業もスタートし、「縄文の森と水辺」構想も具体化して、近い将来、この加曽利貝塚をとりまく環境は、大きく変化し、当館の存在は今後ますます重要性を増していくものと思われます。

この記念誌が、歩み来た20年の反省と、激動の社会を見つめながら国民の共有財産である貝塚の保存・活用や当館の今後の方向・可能性を探り、さらに充実、発展させる糧にしたいと存じますので、皆さまのご指導を心からお願い申しあげる次第であります。

第一部

加曽利貝塚博物館の歩み

一、加曽利貝塚の保存と博物館開館の経緯

千葉市文化財保護審議会長
武　田　宗　久

1．京葉臨海工業地帯の造成と埋蔵文化財

千葉県は昭和25年11月千葉市寒川～蘇我の海岸埋立地に川崎製鉄千葉工場の誘致決定を皮切りに、29年には千葉市浜野埋立地に東京電力火力発電所の建設を決めた。これが後の京葉臨海工業地帯へと発展するパイオニアとなった。

そして30年以降37年までに市川市南行徳から市原市姉崎までの海岸の大部分は埋立られ、市川・船橋・習志野・千葉市幕張～新宿の海岸は公共用地・軽工業・住宅団地・レジャー施設などとなり、千葉市寒川以南市原市の臨海には10数社にのぼる鉄鋼・石油化学のコンビナートが建設された。さらに40年には君津市に八幡製鉄（後の新日本製鉄）、42年には袖ケ浦町に住友化学が進出した。また35年以降これらの関連企業や精密工場などを内陸部へ誘致した。このため、35年には京葉有料高速道路の建設に着手し、36年には水資源開発公団を設立して工業用水の確保をはかった。

このような政策は国・県と大企業中心の独占設備投資によって推進され、37年以後の千葉県は工業立県として経済的に安定感のある県勢のもとに後進県から先進県へ脱皮した。しかし工業開発中心の経済政策のヒズミは大気・水質・土壌・交通などの公害、地盤沈下、農漁村の衰退、人工の過密と過疎の拡大、地価の上昇による物価騰貴のみならず、その後背地である両総丘陵の優れた自然環境の消失や各種埋蔵文化財の破壊などの問題をひきおこした。

昭和35年はこの開発計画が飛躍的に拡大された時期である。それはこの年７月に成立した池田内閣の掲げた高度経済成長政策の波にのった大企業の要望が京葉臨海工業地帯への進出に向けられたからである。加曽利貝塚を含む一帯が郵政省互助会に買収されたのは、まさにこの年の８月のことである。

2．発掘調査による加曽利貝塚研究の歩み

日本の近代考古学はアメリカの動物学者エドワード・モースが大森貝塚（東京都大田区山王）を発掘した明治10年に始まる。この報告書は明治12年の『大森貝塚』（英文）であるが、それから10年後に東京の考古学者上田英吉は『下総国千葉郡介墟記』と題して「千

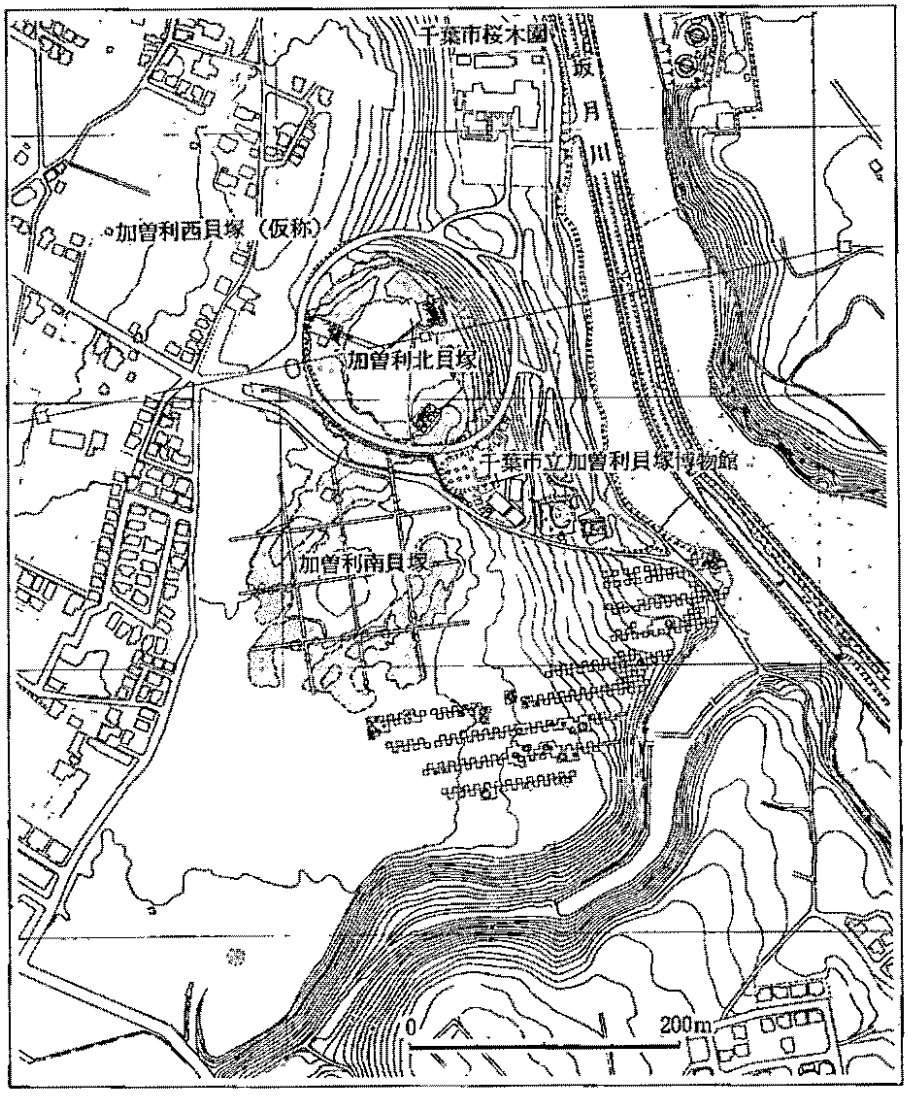
葉郡の介墟、丘腹絶陘に露出せる者凡二十所、其最大なるを仁戸名・加曽利・貝塚三村の介墟とす（下略）」（『東京人類学会雑誌』第２巻第19号）と述べている。当時仁戸名・加曽利・貝塚の諸村は千葉郡に属し、仁戸名村の月ノ木貝塚、加曽利村小字京願台の加曽利貝塚、貝塚村の台門・荒屋敷・草刈場貝塚などは大貝塚として早くも注目されていたことが知られる。

明治40年には東京人類学会が遠足会の名目で加曽利貝塚の規模を調べ、「本邦第一の貝塚」であると確認したことから、多くの学者が遺物の採集を試み、大正11年には東京大学人類学教室が人骨を発掘した。その後大正13年同教室によるB地点とE地点の層位学的発掘調査により、「加曽利B式」「加曽利E式」と呼ぶ土器型式が設定され、関東地方における縄文土器編年の標準遺跡となった。

さらに昭和11年の大山史前学研究所の発掘調査は主として加曽利貝塚全域の貝層分布と周辺の地形を総合的にとらえた最初の成果として注目された。また昭和33年明治大学考古学研究室が加曽利北貝塚において、前述の東京大学人類学教室が「E地点と名づけたと思われる箇所の東側に、数本のトレンチを設定し」、加曽利ＥⅠ式土器と加曽利ＥⅡ式土器との間の層位の区分に検討を加え、昭和37年には別項で述べるように千葉市教育委員会が加曽利北貝塚の２地点を選んで発掘を行い、７ケ所の上下に重複する竪穴住居址と６体の人骨及び若干の優秀な遺物を発見した。

加曽利貝塚の規模と周辺の地形が精密に調査されたのは昭和39年～40年春にかけて行われた日本考古学協会による加曽利南貝塚の全域にわたる予備調査の時で、これによって加曽利北貝塚はドーナツ状に盛りあがって環状をなし、その直径は約130メートル、加曽利南貝塚は３つの半月状の貝層が複合して馬蹄形をなし、長径約170メートルを測る。しかもこの２つの貝塚が８字型に連結するという全国に類を見ない巨大な貝塚であること、北貝塚も南貝塚もその内部は凹地（自然地形）となり、そこには貝層も遺構も認められないこと、南北両貝塚を乗せる台地の東側は古山支谷に対して急涯をなす部分とゆるやかな傾斜をなす部分があり、後者は加曽利貝塚人がこの支谷に降りる通路の役割をはたしていた可能性があること、北貝塚は中期の中ごろから後期の終末まで、南貝塚は中期の後半から晩期の前半まで続いていたこと、南貝塚の貝層下には北貝塚と同様に多数の竪穴住居址や埋葬人骨があることなどが判明した。

今日通常加曽利貝塚と呼ばれるのは、この南・北両貝塚を指すのであるが、北貝塚の西北方300～700メートルの範囲に少なくとも６ケ所の点在貝塚（民有地）がある。これを加曽利西貝塚と呼ぶ。さらに南貝塚南端の延長線上にある桜木団地（松島炭鉱から千葉県が買収した職員住宅敷地）にも中期の点在貝塚があることが昭和60年～61年の発掘によって判明した。また昭和45年～46年にかけて実施した遺跡の限界確認調査によって、南貝塚の



第１図　加曽利貝塚の調査区と出土遺構および貝層の分布状況

東側平坦部の一部に18軒の竪穴住居址（前期２・中期13・後期３）とゆるやかな傾斜部の突端に早期末の炉穴５ケ所が発見された。このうち中期の竪穴住居址２軒と後期の竪穴住居址１軒はブロック状の貝層を伴っていたことから、この台地に居住した早～前期の縄文人は漁撈活動を営んだ形跡が認められないこと、中～後期の縄文人の住居は南・北両貝塚の貝層下に限定されることなく、その周辺一帯に分布することが実証された。さらに昭和48年には北貝塚の東側傾斜面に後期中ごろの巨大な祭祀的竪穴家屋（長軸19メートル・短軸16メートル）の遺構が発見された。

従って上記縷述の南・北両貝塚、西貝塚、桜木団地貝塚、南・北両貝塚の東側平坦部～

傾斜部を含めたすべての遺跡は互に密接不可分離な有機的関係にある加曽利貝塚人の集落の単位と見なければならない。その範囲は東西600メートル、南北700メートルに及ぶ小字京願台と呼ばれる広大な舌状台地のほぼ全域に相当する。

3．保存運動の展開と経過

昭和35年2月千葉県は全国初の財団法人「千葉県開発公社」を設立、埋立計画を従来の6,600ヘクタールから一挙に11,200ヘクタールに変更し、さらに7月には内陸開発室を設けて内陸部の開発にも着手した。このような情勢を窺知した郵政省互助会は同年8月早くも加曽利貝塚周辺一帯を住宅地造成のふれこみで買収した。このあたりは貝殻の多い痩せ地で地価も安かったから、値上りを見越した恰好な買物であった。こうして雑木林の伐採が進行して翌年の秋には加曽利貝塚の形がほぼ地上に姿をあらわした。たまたま千葉市教育委員会はこの年の冬、奈良屋百貨店（現セントラルプラザ）で開催予定の文化財展覧会に出品する資料の一部として加曽利貝塚の写真を専門家に撮影させることになったので、文化財保護審議会のメンバーの1人である筆者に現地を案内せよとの依頼があった。そこで私は係官数名とともに現地を訪れてみると、意外にも樹木が盛んに伐採されていて遺跡地内の所々にクイが打ちこまれ、まさに破壊寸前の状態にあった。この時直観的に加曽利貝塚は何としても保存しなければならないと考えた。

北貝塚の発掘と保存運動の経過

しかし事態はあまりにも切迫していたので、この貝塚の一部なりとも早急に発掘調査したうえで世論に訴える以外に当面の対策はないと決意した。そこで同年冬に開かれた文化財保護審議会に加曽利貝塚の重要性を説明して是非とも発掘調査をする必要があることを提案したところ幸いに全会一致で了承された。こうして北貝塚の2地点を選び37年8月3日から10日間の予定で発掘を実施したのであるが、実際は3日延びて16日に終了し、一応の成果を収めたのである。

この発掘は千葉市教育委員会が主催し、直接の調査はその外郭をなす千葉市文化会が担当した。責任者は私があたり、調査員には千葉市教育長楠原信一・千葉市教育委員会社会教育課長遠藤健郎・加曽利中学校長沢本七郎・千葉市文化財保護審議委員（委員長鈴木正夫・国松真三郎・土肥刀泉・中村民男・和田茂右衛門・宍倉健吉・武田宗久）・早稲田大学考古学研究室金子浩昌が任命され、事務局長は千葉市社会教育課文化財担当官佐藤好子が担当した。作業は千葉県立千葉高等学校郷土研究クラブ、加曽利中学考古学クラブ、早稲田大学学生有志、早稲田高等学院生徒有志と地元の方々である。

なお発掘終了後、1箇月間はトレンチの埋めもどしを中止して一般に公開し、本遺跡の重要性を市民に訴える一助とした。これは地元住民の要望と歴史に深い造詣を持っていた

楠原信一・鈴木正夫氏の配慮によるものである。このことから加曽利貝塚を是非とも保存すべしという強力な要望が各方面からおこった。一方郵政省互助会はこの土地を松島炭鉱株式会社に売却し、さらに昭和38年1月ごろ東洋プレハブ工業株式会社がこれを買収して整地作業を開始し、加曽利南貝塚の南端を破壊するに至り、本貝塚の保存運動は急速にたかめられた。

38年2月14日全国の考古学者の集りである日本考古学協会の文化財保護対策協議会（代表者麻生優・甘粕健・大塚初重・岡本勇・小出義治）は『加曽利貝塚保存に関する要望書』と題して「1．加曽利貝塚を直ちに指定史跡にすること。2．その全域を買上げること。3．現地を公園化し、野外博物館的施設をつくること」の3項目を挙げ、4月27日に開かれた日本考古学協会第29回総会はこれを可決して国・県・市に要望することになった。この要望書に対しておりから開会中の第43回国会では文部省文化財保護委員会記念物課長須賀淳氏は「県のほうに補助金を交付して緊急調査をしていただくということを考えております」と答えた。これよりさき、3月6日千葉県社会教育課文化財主事高橋在久氏と私は加曽利貝塚の状況を視察し、最近数ケ所になまなましい盗掘のあとがあるのを発見した。同月25日「千葉日報社」は第1面に「加曽利貝塚を守ろう」と題してその重要性と破壊の危機を訴える記事を満載し、私も4月3日同紙に「加曽利貝塚の保存」と題して当局の善処を要望した。そして4月6日私は千葉市長宮内三朗氏に単独会見を申し込み「加曽利貝塚は千葉県が誇る最大の文化遺産で、これは弥生時代の登呂遺跡（静岡県）、古墳時代の仁徳天皇陵（大阪府）、奈良時代の平城宮跡（奈良県）と同等の価値を有するもので、いわば日本の四大遺跡の1つである」と説明したところ、市長は即座に全面支持を確約してくれ、直ちに社会教育課長遠藤健郎氏にこの旨を伝え、保存運動に積極的協力と適切な措置をこうずるように指示してくれた。これは恐らく教育長楠原信一氏の助言や地元住民の要望、マスコミの報道などによって加曽利貝塚の保存に多大の関心を寄せていたためである。

しかし当時の千葉県は京葉臨海工業地帯の造成が最重点施策として優先し、自然環境の保全や埋蔵文化財の保存などは全く軽視され、県・各市町村の文化財担当者は社会教育課の中の1係にすぎないので、その権限はせいぜい埋蔵文化財の記録保存を指示する段階にとどまり、よほどの好条件がない限り遺跡保存を積極的に表明することは不可能であった。それ故、県社会教育課の文化財担当官の1人は加曽利貝塚の保存問題が提起された37年夏のころ、「千葉県には貝塚がいたるところにあるから、その一つや二つ破壊されてもやむを得ない」と公言していた。事実、市原市の門前貝塚（東西100メートル、南北100メートルの馬蹄形貝塚）の如きはある大企業の住宅団地として全く記録保存すら行わず、完全に破壊しつくされてしまったほどである。

さて話題を元にもどして38年におけるその後の運動の経過をみると、6月18日の参議院

文教委員会（第43回国会）では加曽利貝塚の買上げの問題で野党議員の質問に対して、文部省文化財保護委員会事務局長宮地茂氏は「今御指摘の加曽利貝塚につきましては、これはまあ著名な貝塚でございますので、国当局としてもこれをできる限り保存するようにということを県と話し合っております。ただ、加曽利貝塚は御承知のように非常に面積が広いわけなんです。1万9千坪、2万坪近くの地域にわたってこれを全部買うことは、これはいいことでしょうけれども、やはりその辺が幾ら大蔵省に予算を要求する、あるいは県費を組むといいましても、1つの貝塚を2万坪もあるものを買えというのは無理だ」と答弁した。

この前後から文化財保護対策協議会は全国的な署名運動を展開した。これに呼応して地元千葉市では6月21日「加曽利貝塚を守る会」（会長は千葉大学学長長谷川久治）の設立総会を開いた。席上来賓として招いた東京大学教授江上波夫氏は『加曽利貝塚の意義』と題する講演の中で「加曽利貝塚は日本国内より世界的に著名な貝塚で、それが現在まで荒らされずに旧態を保存し続けてきたことは、ほとんど奇跡に近いことである」と述べて百数十名の参会者に大きな感銘を与え、直ちに前述の文化財保護対策協議会の要望事項である三ケ条を採択可決して、これを関係当局に要請することとし、同月23日には街頭署名活動を行った。そして同月26日現在で集められた1万768名の署名を携えた私は対策協議会の代表者とともに衆参両院に請願し、臼井荘一・中村庸一郎・山中吾郎・中山福蔵・高津正道・千葉千代世・小林武の各議員に面会して協力方を依頼した。

その後7月16日に「加曽利貝塚を守る会」の理事会が開かれたが、席上宮内三朗千葉市長は「世界的に著名な加曽利貝塚を保存するために、市としてはとりあえず6千万円を支出することを考慮している」と言明した。これによって我々の努力の一端がようやく効力を発するとともに、千葉県の消極的な態度が一変した。翌17日県文化財主事平野元三郎氏と私はNHK①から「加曽利貝塚を守ろう」と題して放送を行い、18日は会長以下数名の理事が友納武人千葉県知事に面会を求めて加曽利貝塚の保存方を陳情した。この時知事は来週中にこの問題で千葉市長と話し合い、県・市で保存のための協力体制をつくりたいと答えた。この間主として「千葉日報社」を通じて再三県民の世論の喚起につとめ、16日から開かれた県議会に於ては山村実議員が、また同月千葉市議会では林三蔵議員がそれぞれ質問を展開した。

8月2日友納知事・宮内千葉市長は加曽利貝塚を視察し、市長から知事に県の協力方を要請した。これに対して知事は一部を保存して公園化し、発掘物については博物館的な収蔵庫を同所に建設することを考慮していると述べた。更に同月5日千葉市議会の総務委員会の席上宮内市長は「加曽利貝塚の問題はこれまで約3万3,000平方メートルを買収したいと考えていたが、これだけでは8字形の貝塚のうち北方の環の全部にならないので、残

る約２万1,780平方メートルを追加買収して、貝塚外の用地を自然公園にしたい」と発言した。これによって北貝塚の全部とその周囲一帯計５万4,780平方メートルの買収が予定されることになり、市長の英断に感謝した。

９月３日市長は９月の定例市議会に上程する追加予算の審査の席上、加曽利貝塚についてはその用地買収費の第１期支出として4,000万円を組むことを発表した。これに対して知事は昭和39年度の予算に保存館を建設する計画であると述べ、最終的には市が１億１千万円、県も同額を投資して、市が自然公園を、県が保存館等の上部施設を建設する計画をもっていると伝えられた。

東京オリンピックの開催された39年の経過は、まず２月20日第46回国会参議院文教委員会に於ける野党議員の質問から始まる。小林武議員は「京葉工業地帯の加曽利貝塚の問題一つを見ましても、いま半分だけは市と千葉県でもって何とか保存の方法はできても、半分の方はどうかというとどうにも手がつかぬ。買ったほうは代替地さえあれば、これはもうほかに移ってもよろしいと言っていながらどうにもならなくなってしまった」と警告した。

南貝塚の保存対策に関して質問したのに対して文化財保護委員会事務局長宮地茂氏は「２万坪のうち半分の１万坪はそのまま保存できる見通しがつきました。残りは半分は結論的には破壊でございますが、できる限りの発掘調査をして十分記録にとどめる。もちろん発掘調査をした際に、これは学者先生にお願いしてやるわけですが、貝塚として何物にもかえがたいような形のところがあるとか、あるいはその貝塚の底の辺に住居あとがあるのではないかといわれておりますが、そういうものが出ましたときには、またさらにそのときの考えで、それをそのときはその部分は買収するとかいったようなことも起ころうかと思いますが、一応のところは発掘調査をして記録にとどめる」と云い、さらに「結局金の問題になるわけですが、調査費といたしましては200万円ばかりで、その半分を国が持って、残り半分を県・市で大体200万円くらいの調査をやって、必要があればお互いにもう少し増額もしようというようなところでございます」と答えた。

その後３月開催の千葉県議会には知事が去る38年８月２日に宮内市長に約束した博物館的な収蔵庫建設費は全く上程されなかった。一方北貝塚を含む周辺一帯の買収は着々と進み、最終的には39年３月18日をもって千葉市が５万5,152平方メートルを1億500万円で買収し、これに建設省からの補助金によって公園整備をすることになった。

南貝塚の発掘と保存運動の経過

しかし南貝塚に関しては保存の手が打たれないまま工場用地の材料置場となっていたので、加曽利貝塚全域の保存を強く要望する「加曽利貝塚を守る会」と「文化財保護対策協議会」は早急に発掘調査を実施し、調査の進行と併行して、発掘で明らかとなった事実をもって保存の必要性を訴える

ほかに道はないという結論に達し、日本考古学協会に南貝塚の調査を引き受けるよう要望した。これと同時に千葉県・市の教育委員会も連名で日本考古学協会に調査を依頼した。

39年5月2日に開かれた日本考古学協会第30回総会はこの問題を討議した結果、「学術調査によって重要性を明かにすることによって保存の実現を計るべきである」という意見が採択され、「破壊を前提としない前向きの調査」として取り組むこととなり、加曽利貝塚調査特別委員会（会長東京大学教授斉藤忠）が結成され、6月に加曽利貝塚発掘調査団（団長早稲田大学教授滝口宏・副団長明治大学教授杉原荘介・同慶応大学教授清水潤三）が組織された。

こうして7月20日から測量を開始、8月1日に鍬入式を行ない3日から発掘調査を実施した。調査方法は南貝塚を1辺170メートルの正方形でかこみ、この中に41メートル間隔で幅2メートル・長さ170メートル、深さは関東ローム層までのトレンチ（溝）を6本通し、次にグリット（格子目）方式によって全面発掘しようとする計画である。39年度の調査の主体となった学校は明治・早稲田・慶応・東大・国学院・同志社の各大学で、地元からは県立千葉・東金・茂原、千葉経済の各高校が夏季休暇中に参加したほか下総考古学研究会も協力し、その合計延人員は3,000名を越えた。39年度の調査費は国から100万円、県から200万円が千葉市に対して補助され、これに千葉市が200万円を加えた合計500万円である。

発掘作業は10月下旬までに6本のトレンチが完成し、10月24日から第11区のグリット作業（格子の小さい1区画は2メートル平方）に入ったが、11月末で一応中止し翌年3月から再開した。

40年5月1日に開かれた日本考古協会第31回総会で加曽利貝塚調査特別委員会委員長斉藤忠氏から次のような報告があった。「加曽利貝塚については、現在一応昨年度（39年度）の継続ということで調査を行っており、これは明後日の見学会で見ていただきたい。なお、市ならびに県当局から協会委員長あてに、今年度も継続調査をしてもらいたいという依頼があったので、一部調査をつづけたいと思う。我々として最大の関心は将来の保存の問題であり、この点についても去る2月26日特別委員会は、文化財保護委員会において報告を行い、併せて宮地事務局長に保存につき善処方を強く要望した。文化財保護委員会でも地主である工場側と折衝したり、色々と手をつくしているようであるが、なお楽観は許されない」。これに対して藤沢宗平会員から加曽利貝塚を全面的に保存する要望書を国に出してはどうかという提案が出て了承された。この要望書は5月14日に提出された。その内容は下記のとおりである。（『日本考古学協会』彙報30）

「日本考古学協会は市及県の要請により小規模な調査を行ったところ、左の如き南貝塚についての成果を得、私共はあらためて本貝塚がきわめて重要なことを再確認したのであ

ります。

1．その直径が170メートルに及び、北貝塚とあわせて日本最大の貝塚である。

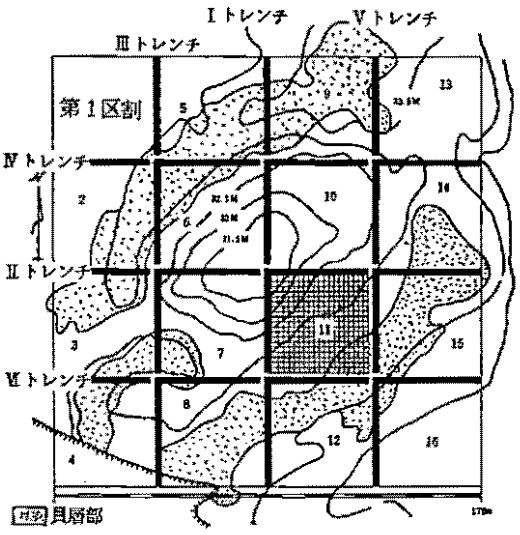
2．台地上の凹所を囲む特異な立地をもち、貝塚と地形との関係を研究する上に、きわめて重要な資料を提供する。

3．馬蹄形貝塚開口部に道路らしきものの痕跡を認めたが、これは当時の生活あるいは集落構成の復原上に大切な意味をもつ。

4．馬蹄形の内部に多くの貯蔵穴、貝塚下には多くの住居址を蔵し、わが石器時代の村落が完全に保存されている。

5．貝層は縄文時代の後期、晩期の文化層の層序を見事に示し、ことに西北地域は加曽利B式土器の設定として学史的にも貴重な場所である。

6．予備調査の段階でも、土器240点、石器363点、骨角器134点、貝器176点、土偶など土製品220点を発見し、その文化遺物の包蔵量が莫大であることを示している。



第2図　加曽利南貝塚の調査区

すでに明らかなように、加曽利貝塚は2貝塚が相接しているところに特徴があり、したがって南貝塚が完全に保護されることによって、はじめて真の保存が期せられるのであります。さる5月1日、東京教育大学で開催された日本の考古学者の全体会議である日本考古学協会総会の決議にもとづき、国の責任において加曽利南貝塚を保存し、両貝塚が相接するという特異な形状を元のままに後世に伝えるよう万全の措置を講ぜられたく、ここに要望書を提出します。

昭和40年5月14日

日本考古学協会委員長　八　幡　一　郎

文化財保護委員会委員長　　河　原　春　作　殿

この要望書を受理した文部省文化財保護委員会は南貝塚を記録保存（発掘調査後に破壊する）で処理する方針から現状保存の方向に転換を余儀なくされたのである。それはさきに述べたように、39年2月20日の第46回国会参議院文教委員会で、保護委員会の事務局長宮地茂氏が南貝塚を「結論的には破壊でございますが、できる限りの発掘調査をして十分

に記録にとどめる。もちろん発掘調査をした際に（中略）貝塚として何物にもかえがたいような形のところがあるとか、あるいはその貝塚の底の辺に住居あとがあるのではないかといわれておりますが、そういうものが出ましたときには、またさらにそのときの考えで、それをそのときはその部分は買収するとかいったようなことも起ころうかと思います」と言明しているからである。

従って文部省は5月14日以後南貝塚の地主である東洋プレハブ工業会社に対して敷地内に工場を新設しないように申し入れるとともに、40年度も前年度と同額の発掘費を計上して調査を日本考古学協会に委託した（40年8月5日第49回国会参議院文教委員会会議録第2号）。しかし9月24日文化財保護委員会事務局長村山松雄氏はついに加曽利貝塚調査団に対して発掘を停止して埋めもどすように依頼するとともに、工場に対して遺跡を破壊しないように申し入れ、南貝塚を買収する意志のあることを示唆するに至ったので、調査団はトレンチの中の調査未了の部分の調査後、全てのトレンチの埋めもどしを行ない、11月に完了した。

4．加曽利貝塚博物館の開設と史跡整備への展望

博物館の開設

その後南貝塚の買収交渉がどのように進んだかは知るよしもないが、貝層部の買収は42年から47年にわたって行なわれ、貝層部以外の東側平坦部から傾斜部の買収は52年から53年にかけて行なわれ、その面積は合計7万2,710平方メートル、金額合計5億6,690万円を国½・県¼・市¼を出資して53年9月22日に買収を完了した。

○　加曽利貝塚の買収に関する一覧表

総面積　127,862 ㎡			買収金額　6億7,190 万円	
内訳	種別	年月日	面積	金額
	北貝塚および周辺	昭和39年3月18日	55,152 ㎡	1億0,500万円
	南貝塚	昭和53年9月22日	36,239 ㎡	2億3,145万円
	南貝塚東傾斜部		36,471 ㎡	3億3,545万円

この間、南貝塚の買収に先だって去る39年3月18日に買収済みの北貝塚の貝層外の一画に博物館を建設することになり、40年11月下旬に起工し、41年11月24日に開館するに至った。これによって38年6月21日に設立した「加曽利貝塚を守る会」が要望した三ケ条のうちの1項目（現地を公園化し野外博物館的施設をつくること）の主要部分が達成され、残

りの２項目と公園化の問題についても完全に達成される見通しがついたので、開館を契機に解散し、新たに「加曽利貝塚友の会」を発足させることになった。

その後北貝塚は建設省の補助金により公園化が進むなかで、42年度に貝層断面と、去る37年に発掘した住居址群の固定施設がつくられ、46年に北貝塚及びその周辺が国史跡に、52年には南貝塚及びその東側平坦部と傾斜部を含めた一帯が国史跡に指定された。

○国史跡指定に関する年月日

北貝塚及び周辺	昭和４６年３月２２日
南貝塚及び南貝塚東傾斜部	昭和５２年９月２２日

史跡整備への展望

時代の波に先行した遺跡保存の形は、遺跡をめぐる周辺の自然景観や、そのおかれている歴史的環境を保全し、遺跡のもつ特色を最大限に発揮するような施設の整備が望まれる。このような広域保存と充分な施設の整備によってこそ遺跡の学術的価値は高められ、その活用が図られる。例えば文化庁が現在推進しつつある各県の“風土記の丘”の建設や、平城宮跡・太宰府跡・多賀城跡・朝倉氏一乗谷遺跡などの大規模な整備、さらには中華人民共和国が昭和29年から32年にかけて発掘した半坡遺跡（陝西省西安市）の整備の状況などは、今後に於ける加曽利貝塚整備の他山の石として充分参考になるであろう。

二. 加曽利貝塚博物館建設の動機と目的

元千葉市教育委員会社会教育課長
遠藤健郎

千葉市は現在予算2,500億、約人口80万人の大都市に成長したが、その発展の様子は急激であり戦後の日本経済発展の典型的な例といえる。しかし、千葉市発展の基盤はやはり縄文文化にあり、その象徴こそ加曽利貝塚なのである。

10年ほど前に千葉開府850年祭という催しが行なわれたが、私はつねづね、千葉氏850年祭を行なうよりも、加曽利貝塚5,000年祭を施行した方がよいと思っていた。850年というのは鎌倉時代に千葉へ流浪の民が集まってきたということだが、それよりすでに5,000年前に縄文人がこの千葉市に住みついて、世界にも稀な貝塚文化を築きあげていたのである。

加曽利貝塚博物館建設の動機については、千葉市文化財保護審議会の会長だった、故・鈴木正夫先生が、「加曽利貝塚博物館に望むこと」として博物館紀要創刊号に書かれているが、私の願いは、加曽利貝塚博物館を単なる市の施設の一つとしてではなく、あくまでも千葉市の核や象徴として育ててゆきたいと思った。

つまり、もともと、根無草の人が多く千葉市の精神的な象徴や核として、加曽利貝塚を育ててゆくのが望ましいのではないか、そして単に地元加曽利の博物館ではなく世界でも有数な貝塚研究のメッカとしての「貝塚博物館」の設立をめざしたかったのである。

これは何も単なる夢や絵空事ではなく、当時の見通しとしてすでに千葉市はこのような文化施策を進めていくだけの経済力があったのだから、しようと思えばできたのだが、実際には、行政は加曽利に力を入れてくれなかった。なぜ行政が力を入れてくれなかったかといえば、市長、教育者、学者、国にそれぞれのおもわくがあり、考え方が狭いため前向きにはならなかったのである。いま考えても非常に残念でならない。

博物館建設の構想については、原案は私が作成した。これは第1図のような博物館の本館や、遊歩道、貝塚断面や住居址の露呈施設などをもりこんだものである。これらは限られた予算の範囲の中で、可能なものを網羅した最低限度のものであった。

しかし、この加曽利貝塚を市民の精神的な象徴とし、いこいの場とするには、これでは不充分で、できれば谷や対岸の台地もひっくるめた地域をも買収しなければならないと考えていた。千葉市民はもともと流浪の民なのであるから精神的なふるさとがない。何を持ってくるかとすれば加曽利貝塚しかないのである。

将来は、むこう岸に考古学研究所をたてて加曽利貝塚を中心とした、貝塚と縄文文化を研究する場を作りたい、そして、企業や市民の税金を充分に使い、学者も狭い考えにとど

まらず、広い分野に目をむけてほしい。天照大神よりずっと以前にこのようにすばらしい時代があったことを１人でも多くの人に知ってもらえればと考えていた。

また、学問を実のあるものにするには、単に遺跡を残しさえすればいいというわけではない。遺跡は保有するだけではなく、活用しなくてはいけない。たとえば、１万坪の土地が必要ならば、１万坪のロスが出るわけであるが、そのロスをこす分だけ価値を作り出さねばならないのである。よく加曽利貝塚と並んで、史跡保存で、引き合いに出されるのは静岡県の登呂遺跡であるが、登呂は中途半端で失敗に終った例である。大事なことは、現在の住民と、どれほどしっかり結びついているかということである。

消極的に考えれば、急速に都市化が進むなかでこれだけの自然・みどりが残ったといえるかもしれないが、残した自然を現在の生活とどう結びつけるかが大事なことである。単に保存したというのでは破壊に等しい。活用しなくては意味がないのである。活用しなくて保存はありえない。

加曽利貝塚は千葉市のかかえている一番大きな問題で、新しい施設を作るよりは、いますでにあるものをいかにすばらしいものに育てていくか、それが大切なことである。

加曽利貝塚博物館ができてから20年経過し千葉市の予算は100倍になったが、加曽利貝塚博物館の予算は、ほとんどふえていない。単なる史跡の保存にとどまらず、千葉市の精神的なシンボルとして、関心のある人や筋の通った考えをもてる人を組織化していくことと、たとえば「加曽利貝塚友の会」を財団に仕上げていくことが、これからの博物館の当面の役割であろう。

第１図　加曽利貝塚博物館建設構想図（遠藤健郎氏作図）

三．加曽利貝塚の意義

後　藤　和　民

はじめに

一史跡の意義・内容も、それを捉える基本的な観点によって大きく変化する。これは、時代の推移によって、歴史的観点や学術研究の進展に伴う当然の帰趨である。だからこそどんな遺跡でも、その意義・内容を的確に捉えるには、十分な時間をかけ慎重な調査・研究を積み重ねていかねばならない。

ところが現実に、史跡が保存されるときは、常に開発を目前にして、保存か破壊かの二者択一を迫られ、早急にその存在意義を判定しなければならず、一般の多角的な検討を俟っている余裕などは全くない。せめてあわてて局部的な緊急調査を行い、保存か破壊かの判断資料を得ようとするが、却って、その発掘調査が「記録保存」にすり替えられ、やがて遺跡は消滅するという例が多いのである。

こうした限界状況のなかで、将来新しい意義・内容を発見しうる可能性をも含めて、その保存すべき範囲を決定し、それを現実に買収保存するのは、まさに至難の業である。しかも、保存は実質的な活用のための当然の必要条件にすぎない。だから、現在および将来において、「国民共有の財産」としてひろく活用しうるような保存でなければ、それは破壊に等しい。こうした観点からすると、従来の考古学における加曽利貝塚の捉え方では不十分であり、その保存対象も違ってくる。

もともと考古学本来の目的は、遺物や遺構や遺跡全体によって、具体的な歴史を叙述することにある。そして、加曽利貝塚を保存する目的は、当時の生活環境や文化活動の様相を具体的に示し、見学者が現地で実物によって直接、実感で調査・研究・学習できるように、周辺地形や自然環境とともに遺跡全体を現地に展示する「野外博物館」として整備することにある。

こうした目的のために、加曽利貝塚の具体的な意義・内容を把握するには、現地の博物館において、独自の観点によって独自の調査・研究を行う必要がある。そこで昭和41年の開館当初の課題として、まず次のような研究に着手したのである。

(1)　縄文集落と大型貝塚との関係についての総合的研究

(2)　市内貝塚遺跡出土の石器・石材の原産地鑑定による交流経路の研究

(3)　県内貝塚遺跡出土の動物遺存体分析による狩猟・漁撈活動の実態的研究

(4) 縄文土器製作技術の実験的研究

20年に及ぶ以上の調査・研究によって、新しい成果が蓄積され、また加曽利貝塚の保存や整備に伴う数ケ所の発掘調査によって、従来の認識を改めるべき重要な問題が続々と提示された。そのなかで筆者が捉えた加曽利貝塚の意義を、ここに簡単にまとめておきたい。

1．従来の学史的意義

日本の近代考古学が、明治10年（1877）にE. S. モースの大森貝塚発見によって開幕したように、縄文文化の研究は、おもに貝塚を中心に展開されてきた。そのため加曽利貝塚の名は、すでに明治20年(1887)、上田英吉の報文（註1）によって学界に知られている。

(1) 日本最大の貝塚

とくに明治40年（1907）、東京人類学会の「遠足会」に加曽利貝塚が選ばれ、はじめて発掘調査が行われた。しかし当時の発掘は、縄文人種論争のため風俗的な珍品を掘りあさるといった状態で、決して学術的とはいえないが、それでも、「本邦第一の貝塚」として、その規模の最大が認識され、加曽利貝塚の名は一躍世界的に有名になった。

(2) 縄文人骨の宝庫

貝塚の特色は、貝殻のカルシウムによって他の遺跡では残らない動物遺存体が良好な状態で保存されていることにある。そのため、鳥獣・魚貝など当時の狩猟・漁撈の具体的な対象がわかり、生産の実態がつかめる。とくに、それらの文化活動を行い遺跡を残した主人公そのものが、埋葬人骨として保存されている。明治時代から大正時代にかけては、縄文人種論争が活発だったときで、その形質人類学の実証的資料として縄文人骨を求める発掘が盛んであった。この加曽利貝塚は、縄文人骨の宝庫としても知られていた。

(3) 貝塚の特異な形態

大正12年（1923）、大山柏が主宰する史前学研究所によって、はじめて加曽利貝塚の全域が測量され、この貝塚が、直径130mの環状を呈する北貝塚と直径170mの馬蹄形をなす南貝塚という2つの大型貝塚が連結して、8字形の特異な形態を有することが明らかとなった。このように、貝塚の形態・規模および立地地形などを具体的に図面上に定着したのは、これがはじめてである。

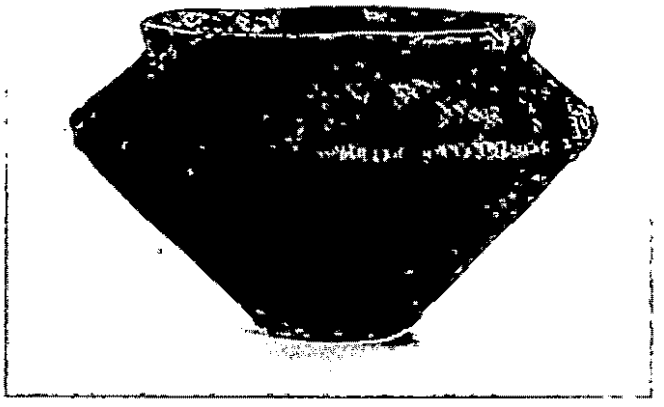
(4) 編年の標準遺跡

大正13年（1924）、東京大学人類学教室が人骨採集のための発掘調査を行ったが、その時参加したのは、土器型式による編年に情熱を燃やしていた山内清男らの若き研究者であった。前年の測量の際区分けされたA・B・C・Dの各地区から各1地点づつ、そしてD地区の東端に新たにE地点を設けて、層位的な分層発掘を試みた。

その結果、B地点およびE地点から、それぞれ新しいタイプの土器が発見され、それが後日「加曽利B式」および「加曽利E式」と命名されることになる。しかも、このとき、市川市堀之内貝塚から発見された「堀之内式」も伴出しており、B地点では、上層から加曽利B式、下層から堀之内式が出土し、E地点では、上層から堀之内式、下層から加曽利E式が発見された。したがって、地層の上下関係によって、加曽利E→堀之内→加曽利Bという新旧関係が実証的に捉えられ、これが土器型式による編年的研究の基礎となり、加曽利貝塚の名は、編年の標準遺跡として、不動のものとなったのである。（第1図～第3図）。

第1図　加曽利EII式・深鉢形土器、昭和40年・北貝塚・加曽利貝塚調査団発掘

第2図　堀之内I式・深鉢形土器、昭和37年・北貝塚・千葉市文化会・武田宗久氏発掘



第3図　加曽利BII式・深鉢形土器、昭和39年・南貝塚・加曽利貝塚調査団発掘

(5) 馬蹄形貝塚と縄文集落

従来考古学界では、貝塚とは食糧残滓の「ゴミ捨場」であるというのが一般常識的な定説であった。だから貝塚が存在する以上、その周辺には日常生活の場である集落が展開していたはずであるという。そして、点在貝塚などの下から竪穴住居址が発見される例が多いことから、貝塚の形は集落の形によって規定されたものであり、馬蹄形貝塚はすなわち馬蹄形集落であるという説が提示された。

この説は、昭和23年（1948）の和島誠一の「原始聚落の構成」（註２）において、馬蹄形をなす貝塚の中央空白部は「共同体結集の場」であったとする、当時の集落構造や社会組織に関する仮説を基にしており、その影響を受けた麻生優氏（註３）や岡本勇氏（註４）によって、積極的に提唱されたものである。

２．新しい研究成果

その後、「加曽利貝塚の調査経過」のとおり、昭和37年から昭和48年にかけての数回にわたって行われてきた発掘調査と、博物館における学芸員の全国に及ぶ縄文集落と貝塚遺跡の総合調査によって、次々と新しい事実と所見を得ることができた。

(1) 馬蹄形貝塚の解体

北貝塚における４ケ所、南貝塚における８ケ所におよぶ貝層断面の調査によって、それらの各地点において貝層堆積の時期や貝の投棄状態が異なることが明らかとなった。とくに貝層部全体を、各時期ごとに分析してみると、その貝層分布が馬蹄形をなしていたことは一度もなく、各地点においては貝層と貝層との間に、土層・混貝土層・混土貝層などが何枚も互層になって挟まっており、そこで常時貝が捨てられていたのではなく、時期ごとにその位置が移動し、貝の捨てられなかった時期が何度もありながら、やがて同じ場所に回帰していたことを物語っている。

(2) 馬蹄形集落の解体

住居址の展開をみても、従来の定説によると、貝層がおもに縄文中期に属している北貝塚においては、当時の住居址はその環状貝塚の内側に環状に展開していなければならないはずである。ところが、縄文中期の住居址は、南貝塚の貝層下や東側傾斜面や西側平坦部にも、かなり広範囲に多数散在している。そして、貝層がおもに縄文後期に属している南貝塚においても、当時の住居址はその馬蹄形貝塚の内側や貝層下ばかりでなく、北貝塚の貝層上や東傾斜面などに、やはり広範囲に散在していることがわかった。

すなわち、縄文中期から後・晩期にかけて、各時期ごとの住居址の展開をみると、それが環状や馬蹄形をなしていた時期は一度もなく、その分布は、各時期によって位置を変え

ながら、かなり広範囲に拡がっていたことがわかった。では、各時期の住居址は広範囲に分布し、しかも、その地点を不規則に移動させていながら、また貝殻の投棄も各時期によって、その地点を変えていながら、なぜ、その貝塚が最終的には環状や馬蹄形を呈するのであろうか。

これは、環状や馬蹄形の大型貝塚が、直接住居址の展開とは関係がなく、貝殻投棄という行動そのものの必要性や必然性によって招来した形態であったとみるべきであり、個々の住居址に付随した「ゴミ捨場」ではなかったことを雄弁に物語っている。

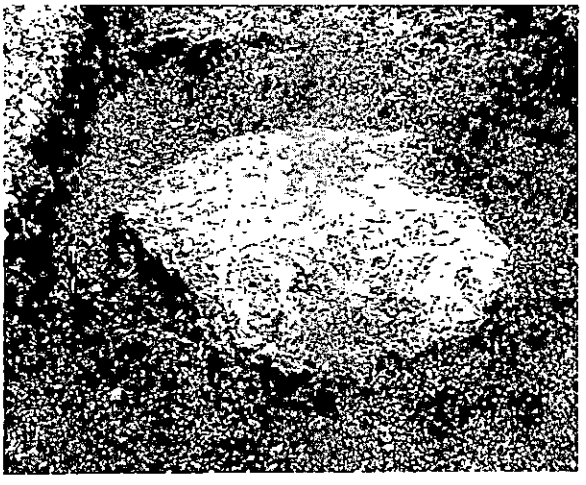
(3) 無数にある焚火址

ところで、かねてより、この種の大型貝塚においては、貝層中に直径2m前後の大型の焚火址が随所にあり、その周辺に煮沸用の土器片が多数散っていることが、再三指摘されていた。それを「環状灰床」とよび「平地式住居址」とか「土器製作址」などと解釈する向きもあったが、いずれも一般の承認を得るには至らなかった（註5）。

昭和39年における南貝塚および昭和41年度における北貝塚の発掘調査でも、随所において、貝層上に多数の焚火址が発見されている（註6・第4図）。そのおびただしい灰の量や煮沸用土器片の散布などから、そこで何かをしきりに煮ていたに違いない。貝層の上で行われている以上、貝を土器で煮ていたと考えるのがもっとも自然であり蓋然性がある。

(4) 「干貝」の加工場であった

大型の焚火址も、その周辺に集中的に投棄された大量の貝殻も煮沸用の土器片も、それらと同時期の住居址の分布からかなり離れている。それを、日々の調理のために、あるいは食糧残滓や破損した土器を捨てるために、わざわざ運びこまれたものとは到底考えられない。したがってこの大型貝塚は、日常の「ゴミ捨場」のような個人的な消費の場ではなく、むしろ集団的な共同の生産・加工の場であった可能性が大きい。



第4図　無数にみられる貝層中の大型焚火址

すなわち、海岸で共同で採集してきた大量の貝をはるばる運んで来て、そこで土器で煮て身だけを取り出し、それを天日にさらして「干貝」を加工していた共同作業場であったとみるべきである。（註7）

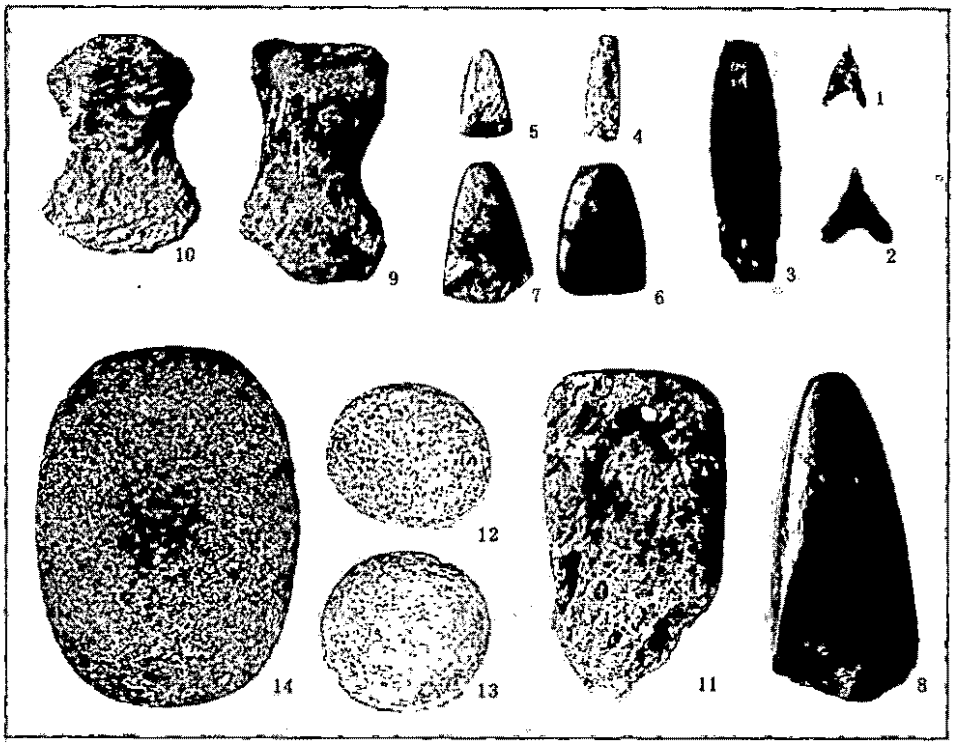
(5) 山の幸と海の幸

しかし海岸地域では、貝はいつでも採れるから干貝に加工して保存する必要はない。それは、この地域の集落が自家消費するためのものではなかったのである。

大型貝塚が密集している千葉県は、古来、「石なしの国」といわれ、石器が作れるような堅い石材がない。しかし縄文時代は「新石器時代」で、堅い石材がなければ生産も生活もできない。だから実際に、千葉県下の縄文集落から必ず各種の石器が出土する。（第5図）

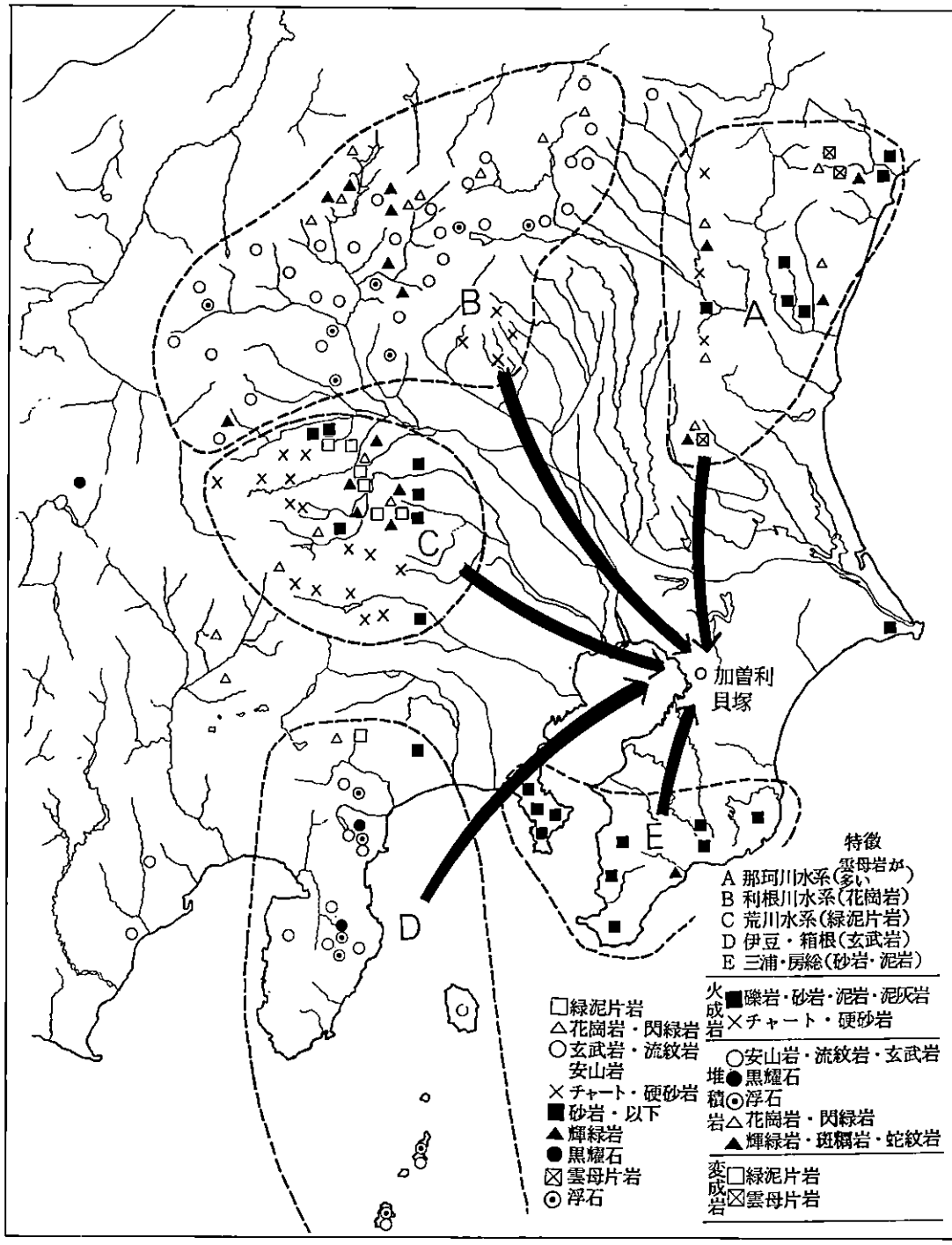
加曽利貝塚博物館で、加曽利貝塚から出土した石器の石材原産地を調査したところ、それらは、榛名・赤城・秩父・天城・和田峠・姫川など、かなり遠くから運ばれていたことがわかった。しかも各種の生産・生活・祭祀などの用途に合わせて、各種の石材が各地から取り寄せられており、同じ石器でも、各地の各種の石材が用いられているので、各集落ごとに、自給自足で各地の石材を採取して歩いていたとは到底考えられない。

むしろ、石材の乏しい地域では、豊富な海産物をもって、海産物は乏しいが石材の豊富な山地と物々交換を行っていた可能性が強い。そして、その仲介となる原始的な市場や共同的な交易所が、当時すでにあったはずである。（第6図）



第5図　加曽利貝塚出土の生産用・生活用石器

1・2石鏃、3石槍、4～8磨製石斧、9・10打製石斧、11浮子、12・13すり石、14凹石



第6図　加曽利貝塚出土の石器石材の原産地分布図（新井重三氏による）

3．大型貝塚の意義

(1) 東京湾沿岸の縄文遺跡

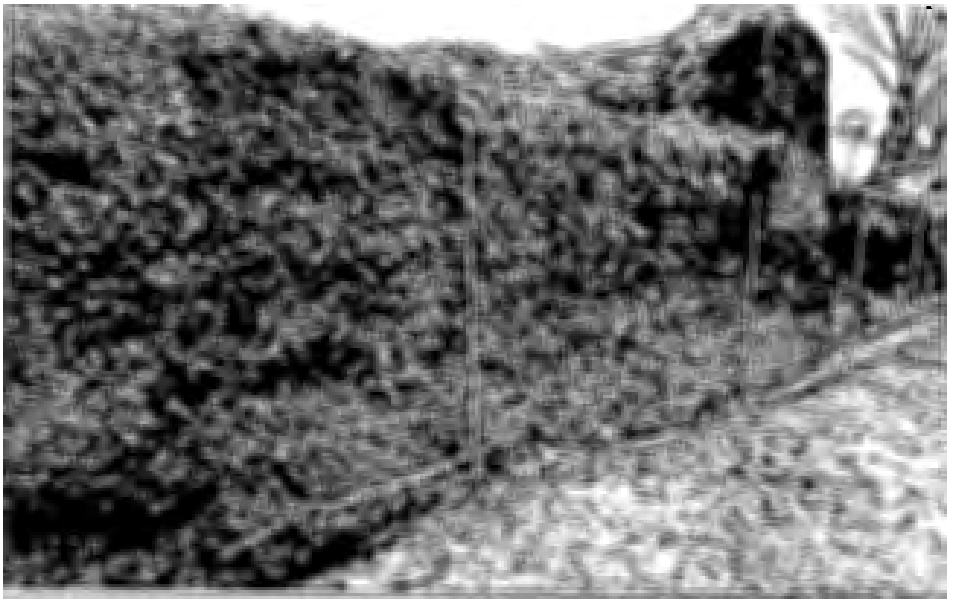
従来、大型貝塚を伴う遺跡は、「馬蹄形集落」の名のもとに一般の集落と混同され、むしろ一般集落の典型であるかのごとく認識されてきたきらいがある。

千葉市は全国でも縄文貝塚がもっとも密集した地域として、明治時代以来あまりに有名であったため、貝塚遺跡のみが注目され、それ以外の遺跡については閑却視されてきた。ところが、その同じ東京湾沿岸の千葉市内にも次のようなさまざまな種類の遺跡がある。

A. 貝塚を伴わない集落……縄文早期から晩期まで常に存在し、その存続期間は土器型式で1～3型式程度、生産用・生活用の遺物・遺構のほか、特殊な遺物・遺構はほとんど出土しない。

B. 小型貝塚を伴う集落……縄文早期から晩期まで常に存在し、その存続期間も土器型式で2～3型式継続。生産用・生活用の遺物・遺構のほか、特殊な遺物・遺構はほとんど出土しない。この貝塚は、廃棄された住居址のなかに少量ずつ投入されたものであり、住居と結びついているので、日々のゴミ捨場であったと思われる。

C. 大型貝塚を伴う遺跡……縄文中期から後期に発達し、その存続期間も数型式以上の長期にわたるが、その間に何度も断続した形跡があり、回帰的な様相を呈する。一般の生産用・生活用の遺物・遺構のほかに、土偶・石棒・装身具などの特殊遺物や、人骨埋葬・家犬骨埋葬、柄鏡形住居址、巨大な竪穴などの特殊遺構が多数集中している。



第7図　都町・宝導寺台貝塚の貝層断面

D. 集落を伴わない貝塚……縄文前期から中期初頭にかけて出現し、台地末端の麓部低湿地に大型の貝層堆積を残しているが、その周辺に隣接する集落は見当たらない。石皿やたたき石やすり石などの特定な石器のほか、一般の生産用や生活用の遺物はほとんど伴出しない。現在発見されている遺跡数はごく少ないが、台地縁辺の低湿地に立地していたため、後世の開発によって消滅または埋没したものが多いと思われる。この貝層の中間でも、多数の大型焚火址が発見されており、数型式にわたる半長期の回帰性を示しているので、これも日常の生活の場から離れて共同で干貝加工をしていた作業場の跡であったと思われる。たとえば、都町宝導寺台貝塚など（第7図）。

(2) 大型貝塚は集落か

千葉市内の縄文遺跡の全体を、以上4種の遺跡に分類して、その数と時期的な変化を検討してみると、およそ次のことがわかる。まず、貝塚がもっとも密集している千葉市内にありながら、A.貝塚を伴わない集落が約72%を占め、B.小型貝塚を伴う集落が約10.5%を占めているが、C.大型貝塚はわずか3.7%を占めるにすぎない（第1表）。

また、これらの遺跡のなかで早期から晩期まで常に存続しているのは、A.貝塚を伴わない集落とB.小型貝塚を伴う集落だけである。しかもこの両者は、存続期間も伴出する遺物や遺構も日常的な生活や生産に伴うもので、きわめて類似している。一方には貝塚がなく他方には貝塚を伴っているものの、ごく少量である。この両遺跡こそ一般的な集落である。

これらに対して、C.大型貝塚を伴う遺跡は中期に急速に発達し、後期にもっとも隆盛を極めながら、晩期には急激に消滅してしまう。その存続期間も、一般集落に比べるときわめて長期にわたっている。しかもそれは断続的でありながら何度も同じ場所に回帰している。とくに、一般日常的な生産用や生活用の遺物や遺構のほかに、この種の遺跡にのみ、土偶・石棒・石剣・装身具類などの特殊遺物や、人骨埋葬・家犬骨埋葬、柄鏡形住居、大型貝塚や巨大な竪穴などの特殊遺構が多数集中している。

これらの現象からみて、ただ遺跡全体の中で数がわずか3.7%を占めるにすぎないことばかりでなく、遺跡の実質的な内容や様相それ自体が一般集落とは異なっている。大型貝塚を伴っていることとともに、この種の遺跡が特殊な機能や性格をもっていたことは明らかである。

(3) 大型貝塚を伴う遺跡の特殊遺物

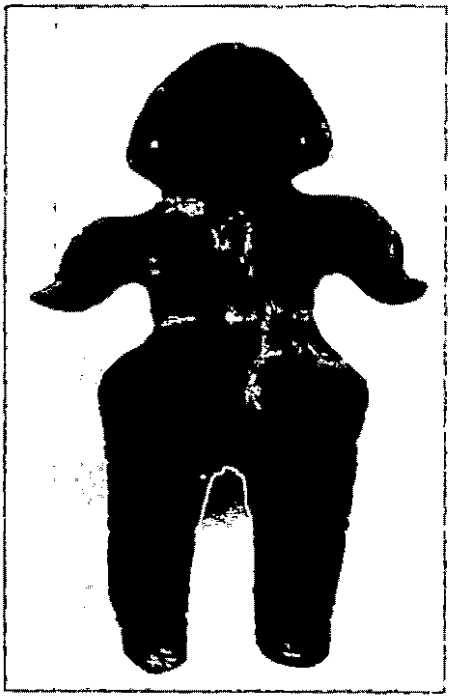
大型貝塚を伴う遺跡のおもな特殊遺物とその意義は、およそ次のとおりである。

A. 土偶……安産祈願の対象、集落全体や集落間の共同祭祀として集団で行う（第8図）

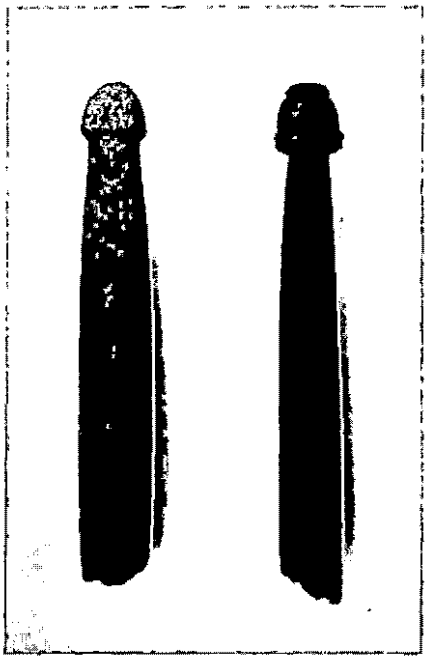
B. 石棒・石剣……ストーンサークルなど共同墓地の中央に立てられた立石から変形し、儀仗化したもの。血縁集団の祖霊が宿るシンボル（トーテムポールのごときもの）で、集団的祭祀に伴うもの（第9図）

第1表　千葉市における縄文遺跡の種別とその変遷　　1986.K.Goto 作成

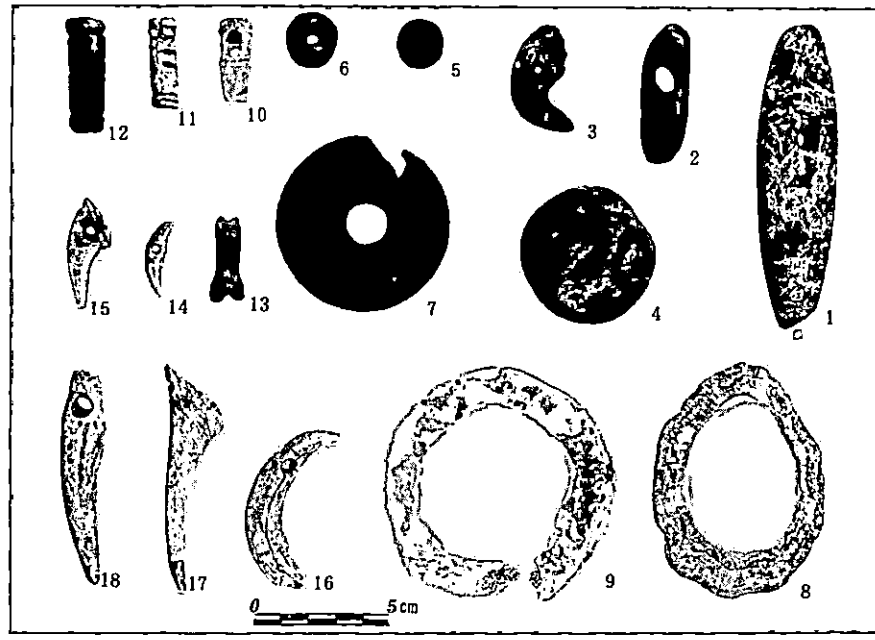
種類別＼時期別	遺跡の実在数	早期	前期	中期	後期	晩期	累計
		10,000～7,500	～6,000	～4,000	～3,000	～2,500	
A　貝塚を伴わない集落	(83.2%) 485 (72.0%)	(79.4) 77	(79.7) 55	(85.0) 266	(82.8) 264	(22.2) 4	666
B　小型貝塚を伴う集落	(12.2%) 71 (10.5%)	(20.6) 20	(17.4) 12	(9.3) 29	(10.0) 32	(77.8) 14	107
C　大型貝塚を伴う遺跡	(4.2%) 25 (3.7%)	0	0	(5.1) 16	(6.9) 22	0	38
D　集落を伴わない貝塚	(0.3%) 2 (0.2%)	0	(2.9) 2	(6.4) 2	(0.3) 1	0	5
その他（性格・時期の不明なもの）	91 (13.5%)	—	—	—	—	—	91
計	(583) 674 (100%)	(100%) 97	(100%) 69	(100%) 313	(100%) 319	(100%) 18	907 / 816



第8図　加曽利貝塚出土の土偶



第9図　加曽利貝塚出土の石棒



第10図　加曽利貝塚出土の装身具
1～4垂飾、5・6耳栓、7滑車形耳飾、8・9貝輪、10～12鳥骨製髪飾、13～18骨角牙製腰飾

C. 装身具……髪飾（ヘヤーピン・櫛）、耳飾（耳栓・滑車形）、首飾（硬玉製大珠・勾玉）、腕飾（貝輪）などはすべて女性が身につけ、男性の装身具は食肉獣の骨や牙に穴をあけて紐に通してぶら下げる腰飾だけに限られている。これは、単なるアクセサリーではなく、結婚式や埋葬のとき、男女の性別や出身などを明示するための一種の祭器であった（第10図）。

このように、土偶・石棒（石剣）・装身具などの特殊遺物は、いずれも個人的な所有による日常用品ではなく、共同体の間で共有されていた集団的な祭祀に伴う祭器である。

(4) 大型貝塚を伴う遺跡の特殊遺構

大型貝塚を伴う遺跡のおもな特殊遺構とその機能は、およそ次のとおりである。

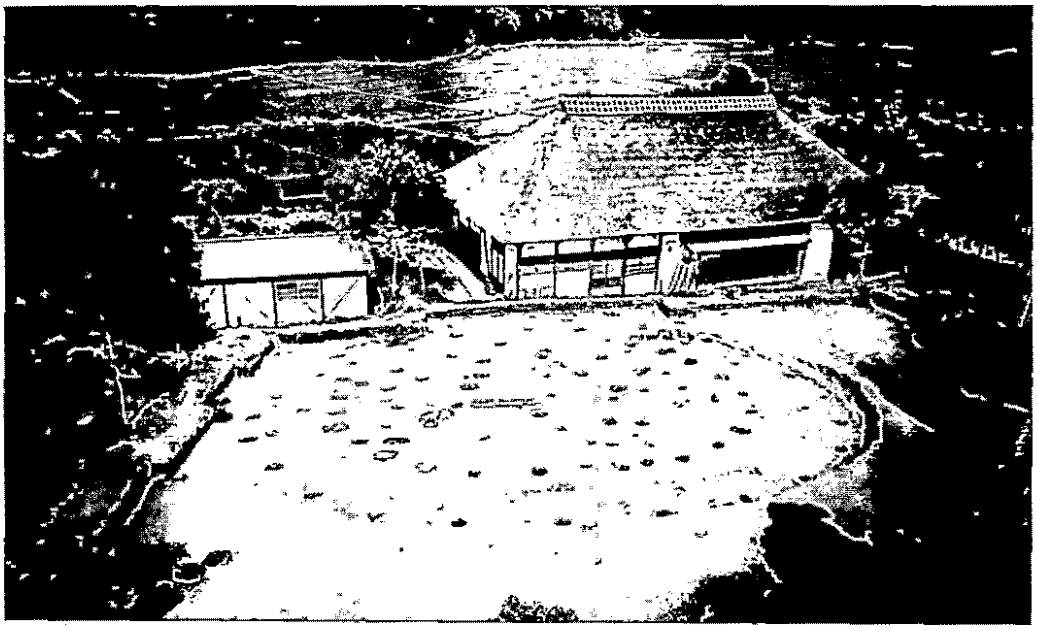
A. 墓壙……人骨を埋葬した土壙や、死産流産児を埋納した甕棺など、特定な場所に埋葬ゾーンがあり、共同墓地があった。

B. 特殊住居……石の豊富な山間地帯の敷石住居址に相当する柄鏡形の特殊住居址があり、構造や形態が特殊であり、双口異形土器など特殊遺物が伴出する。

C. 巨大な竪穴……加曽利貝塚の東傾斜面から、長軸19m、短軸16mの楕円形を呈し、床面に3重の柱穴列がめぐり、外側の廻廊から数ケ所、中央から1ケ所の炉址が発見された。しかもこの遺構からは、異形台付土器と石棒および土偶が発見されているほか、日常の生活や生産に用いられる用具類はほとんど伴出しなかった。これが日常生

活の場ではなく、集団的な共同祭祀を行う特殊な施設であったことは明らかである。これと類似する遺構が佐倉市吉見台遺跡からも発見され、同様な様相を呈していたので、同じような機能をもっていたと考えられている（第12図）。

第11図 ▶
加曽利南貝塚発見の伸展葬人骨
－堀之内Ⅰ式期－



第12図　加曽利貝塚東傾斜面発見の特殊遺構　　－加曽利BⅡ式期－

(5) 大型貝塚を伴う遺構の特殊性

以上のような特殊遺物や特殊遺構は、一般集落においてはほとんどみられず、伴出する場合でも、きわめて少数のものが断片的に発見されるにすぎない。ところが、加曽利貝塚をはじめ大型貝塚を伴う遺跡には、各種のものが多数集中している傾向が強い。

こうした現象からみて、ただ発見される特殊遺物や特殊遺構が、たまたま一般集落より種類や数量が多いというだけには止まらない。むしろ、それらの遺物や遺構がもっている特殊な機能や意義が、そこにことさら集中しているところに問題がある。だからこそ、大型貝塚を伴う遺跡が一般集落ではなく、それと同質・同格に論じたり混同すべからざる特殊性があり、また、この種の遺跡の存在意義が秘められているのである。

(6) 周辺集落結集の場

縄文中期から後期にかけて、A.貝塚を伴わない集落とB.小型貝塚を伴う集落、すなわち一般集落が遺跡全体の94.3～92.8%を占めており、C.大型貝塚を伴う遺跡はD.集落を伴わない貝塚を加えても、5.5～7.2%を占めるにすぎない。実際に、遺跡の分布をみても、大型貝塚を伴う遺跡を取囲むように、多数の一般集落が展開しており、大型貝塚を伴う遺跡が一般集落の中心にあって、核的な存在であったことを物語っている。

すなわち、大型貝塚を伴う遺跡は干貝加工の共同作業場であったばかりではなく、石器・石材や土器などとの共同交易の場であり、土偶を中心とする安産祈願の場であり、抜歯や装身具を伴う婚姻儀礼の場であり、埋葬に伴う葬送儀礼や石棒（石剣）を用いる祖霊祭祀の場でもある。そうした共同祭祀が特殊住居や巨大な竪穴などの特殊施設で行われていた。これら各種の祭祀が、それぞれの一般集落で個別に行われていたのではなく、常に特定な遺跡において共同で集中的に行われていたのである。ここにこそ、加曽利貝塚をはじめとする大型貝塚を伴う遺跡の特殊性がある（註８）。

このように加曽利貝塚は、ほかの遺跡に比べて、ただ格別に長期にわたって存続し、最大の貝塚を残した大規模な集落であったというだけでは、到底捉えることのできない特殊な存在意義をもち、むしろ特定な地域に展開する一般の集落群が、共同生産・共同交易・共同祭祀のために結集した核的存在であった可能性がある。だからこそ加曽利貝塚は、関東地方における縄文時代の共同社会の実体を捉える上で不可欠な存在なのである。

カット　松下紀久雄

おわりに

加曽利貝塚という一史跡を実質的に保存し活用するには、この遺跡が秘めている歴史的意義・内容を巨視的・多角的に捉えながら、将来派生すべき問題や潜在的な意義を解明しうる可能性を確保しなければならない。そのためには、ただ既知の意義や価値を保護する場合とは、当然保存すべき対象も違ってくる。

従来のように、貝塚は「ゴミ捨場」であるという偏狭な観点から、馬蹄形貝塚の部分だけを保存したのでは、結局将来においても、ただ「ゴミ捨場」の研究しかできなくなる。また、馬蹄形貝塚は馬蹄形集落であるという観点から、大型貝塚を伴う遺跡を当時の典型的な単独集落であるとすると、その周辺にある一般集落との比較検討もできず、加曽利貝塚の特殊性さえ永遠に把握できなくなってしまうであろう。ここに、開発造成による破壊の危機のなかで、加曽利貝塚の永久的な意義や価値の追求のための可能性を確保しようとする基本的な観点こそ、もっとも重要であり必要となってくるのである。

そのような観点から、ここに一つの可能性として、加曽利貝塚の意義についてつたない試論を提示したが、もちろんその実証的研究が十分に行われたとはいえないし、あくまでも今後の更なる調査研究の積み重ねによって多角的に検討・吟味していかねばならない。

しかし、この試論を契機や捨石として、加曽利貝塚のより深遠なる意義や価値を見出しうる可能性を確保するためには、これまでの学界における把握よりは、はるかに巨視的であり多角的であり、しかも、より本質的な問題に近づきえたと確信している。

（千葉市教育委員会文化課・主査）

＜脚註＞

註1．上田　英吉　「下総国千葉郡介墟記」『東京人類学会雑誌』2巻19号　昭和20年

2．和島　誠一　「原始聚落の構成」『日本考古学の発達と科学的精神』昭和23年

3．麻生　優　「縄文時代後期の集落」『考古学研究』7巻2号　昭和33年

4．岡本　勇　「加曽利貝塚の意義」『考古学研究』10巻1号　昭和38年

5．大宮　守誠　「千葉県加曽利古山貝塚に就て」『考古学雑誌』27巻6号　昭和12年

6．後藤　和民　「加曽利北貝塚の貝層堆積」『加曽利貝塚Ⅲ』　昭和45年

7．後藤　和民　「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』　昭和48年

8．後藤　和民　「馬蹄形貝塚の再含味　東京湾沿岸における縄文集落の一様相について」『論集　日本原史』　昭和60年

四. 加曽利貝塚の調査経過

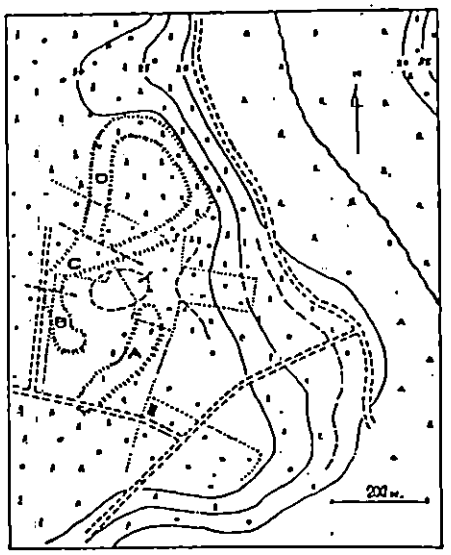
庄 司　　克

はじめに

加曽利貝塚の存在が学界に紹介されたのは、明治20年、上田英吉によってである。その後明治40年に、東京人類学会の「遠足会」によって発掘調査が行われ、加曽利貝塚の大きさが知られるようになった。特に大正12年、大山史前学研究所の手によってはじめて貝塚の測量が行われ、これによって加曽利貝塚は8の字形を呈する我国最大規模の貝塚であることが明らかになった。また翌年の大正13年には、東京大学人類学教室によって、前年の測量調査によって設定されたA～D地点の発掘調査が行われ、E地点（北貝塚）とB地点（南貝塚）から、従来まで知られていなかった新しいタイプの土器群が発見された。これらは発見された地点名をとって、加曽利E式土器、加曽利B式土器と命名され、その後、前者は縄文中期後半の、後者は後期中葉の標準型式としてその編年的地位を与えられ、今日に至っている。また、大正年間には東京人類学会によって人骨採集の調査が行われたことも著名である。

このように、加曽利貝塚における発掘調査は、大正時代後半～昭和初期にかけて、おもに土器型式による編年研究の上で学史に残る調査が行われたが、近年各地で行われているような大規模調査は、昭和39年日本考古学協会によって組織された加曽利貝塚調査団による南貝塚の調査が最初である。この調査の契機となったのは、加曽利貝塚が工場用地として買収されたのをいち早く察知して、昭和37年に行われた武田宗久氏を団長とした千葉市教育委員会による北貝塚の調査である。この調査結果は、第30回日本考古学協会総会で発表され、やがて全国的な保存運動として発展し、昭和39年3月には北貝塚の保存が決定した。その後、前述の如く昭和39年8月から南貝塚の調査が行なわれ、以後毎年のように調査が実施された。昭和41年11月には加曽利貝塚博物館が開館し、昭和52年には南貝塚の保存も決定したが、その後も調査は継続して行われた。とくに昭和45年～47年に行われた南貝塚東傾斜面における遺跡限界確認調査では、南貝塚の周辺区域にも遺跡が広がっていることが確認され、これは貝塚集落の遺跡範囲を考える上で重要な調査となった。

ここでは、昭和37年以後に行なわれた加曽利貝塚の調査についてその概略を記してみたい。調査は、昭和37年北貝塚（貝層部）、昭和39年南貝塚（貝層部）、昭和40～41年北貝塚（第1、第2住居址群観覧施設）、昭和41年北貝塚（貝層断面観覧施設）、昭和42年北



第1図　大山・大給両氏実測図
（大正12年）

貝塚（第1区住居址群観覧施設、貝層断面観覧施設）、昭和43年北貝塚（野外施設電線ケーブル埋設、旧大須賀家住宅移転に伴なう調査）昭和45～47年東傾斜面（老人ホーム移転計画に伴なう遺跡限界確認調査）と延べ11年に亘って行われたが、その調査経過を調査区別に分けると次のようになる。

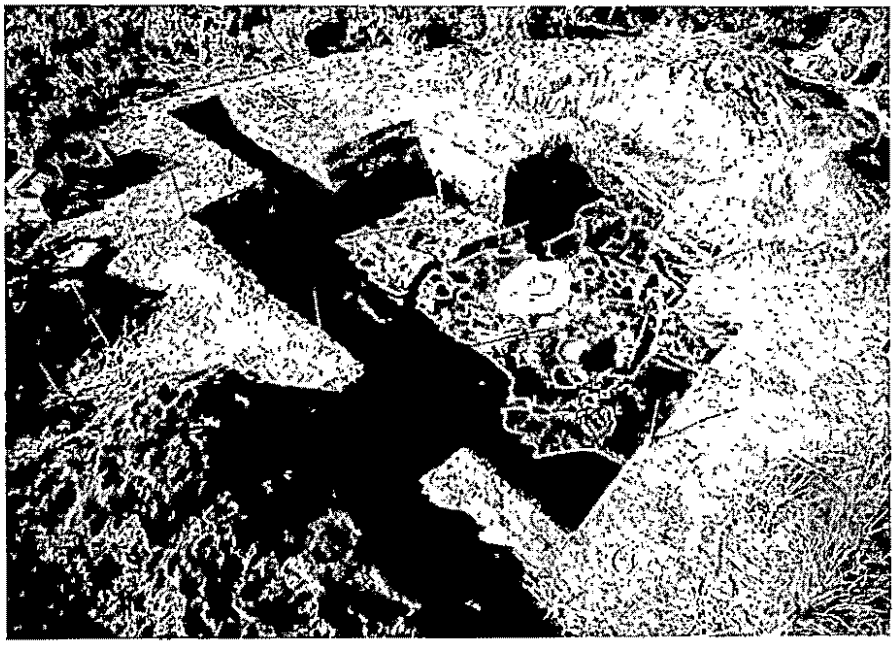
(1)　北貝塚第1調査区……旧第1住居址群調査区（昭和37年、昭和40年、昭和42年）
(2)　北貝塚第2調査区……旧第2住居址群調査区（昭和40年10月～昭和41年7月）
(3)　北貝塚第3調査区……旧貝層堆積群調査区（昭和41年6月～7月、昭和42年11月～12月）
(4)　北貝塚第4調査区……野外施設電線ケーブル埋設に伴なう調査区（昭和43年8月～9月）
(5)　北貝塚第5調査区……代官屋敷移築に伴なう調査区（昭和43年11月）
(6)　北貝塚第6調査区……防火水槽建設に伴なう調査区（昭和48年5月～昭和49年3月）
(7)　南貝塚……工場建設に伴なう調査（昭和39年8月～昭和40年12月）
(8)　東傾斜面……老人ホーム移築に伴なう限界確認調査（昭和45年～昭和47年）

1　調査の概要

(1)　北貝塚第1調査区における調査

本調査区は、北貝塚の内側、北東部に位置し、貝層部の高まり部分から環状貝塚中央の凹地にかかる部分にあたり現在は野外施設・住居址群観覧施設が建っている。昭和37年に、千葉市教育委員会（調査団長・武田宗久氏）によって、第1地点、第2地点の調査が行われた。その後、昭和40・42年に加曽利貝塚調査団（団長・滝口宏氏）によって、野外施設整備のため、北貝塚第1住居址群・同東側トレンチの調査が実施されている。当初、この調査地点は「第1住居址群調査区」と呼ばれた。昭和37年、武田宗久氏が調査した第1地点もこの中に含まれている。

これらの調査の結果、本調査区内から縄文中期・阿玉台式～後期・堀之内Ⅰ式に至る20基の住居址が発見されている。このうち後期（堀之内Ⅰ式）の所属は4基で、他はすべて



第２図　昭和37年における北貝塚第１地点の発掘状況（武田宗久氏撮影）

中期である。また貯蔵穴と思われる小竪穴も16基発見されている。これは円形プランで、中央に柱穴１口を有するものが主で、時期は中期９、後期５、不明２である。

本調査区内発見の遺構中特筆すべきは、昭和37年に武田宗久氏が調査された第１地点中のC住居址と第２地点の上層住居址である。C住居址は、第１調査区の南端近くにあり、他住居と重複していたため、中央部のみが残存していた。その時期は後期・堀之内Ⅰ式で、その中央部に石材の乏しい千葉県下では珍しく大型の石囲炉を有している。石皿片３点は、石囲炉の一部として利用されていた。住居址床面には焼土と炭化物が充満しており、この中に包含されていた遺物類はすべて火熱のあとを受けていた。

注目すべき遺物は異形石棒で、その形状は扁平板状を呈しており、体部はとくに強い火熱を受けた形跡がみられ、３つに割れて床面上より発見された。またこの住居内より、釣手土器が出土しているが、火熱によって原形が変容している。以上のことから本住居址は日常的な遺構とは考え難く他の住居址とは異質のものであった可能性が強い。

また、第２地点発見の上層住居址（後期・加曽利BⅡ式期）は全体プラン、床面など明確にはとらえられていないが、床面上に２ケの炉址が認められ、同一面上より５体の人骨が発見された。この人骨群は、その出土状態から埋葬されたものではなく、疫病等の事故死の可能性が強く、当時の家族構成を考える上で貴重な出土例といえる。

(2)　北貝塚第２調査区における調査

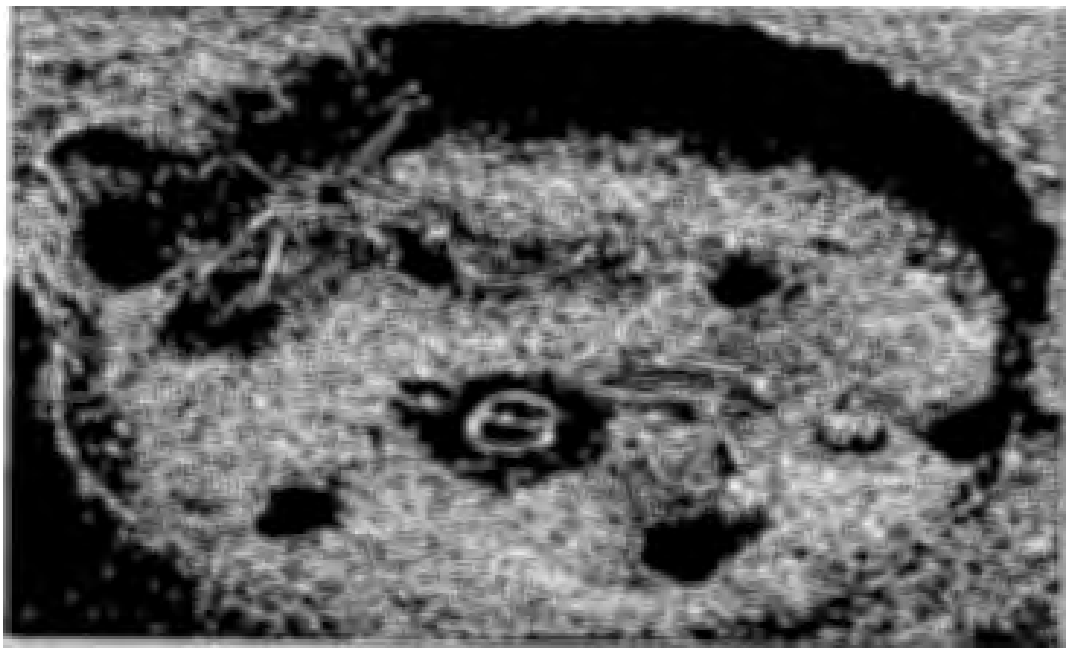
野外施設整備事業の一環として予備調査を、加曽利貝塚調査団（団長・滝口宏氏）が昭

和40年10月～41年７月に実施した。本調査区は北貝塚の内側南東部に位置している。当初は「第２住居址群調査区」と呼ばれ、第１調査区同様に野外施設として整備されるはずだったが、現在は埋め戻されている。この区域は大正13年に小金井良精らが調査した「E地点」と昭和33年に行われた明治大学考古学研究室の調査地点に接している。本調査区内からは縄文中期・阿玉台式～加曽利EⅡ式の住居址10基、後期・堀之内Ⅰ式の住居址２基が確認されている。小竪穴は７基発見されているが、いずれも中期である。貝層下発見の遺構は全て中期である。また、これらを覆っていた貝層も中期（阿玉台～加曽利EⅡ式）が主体で、後期（堀之内Ⅰ式）の堆積は少ない。

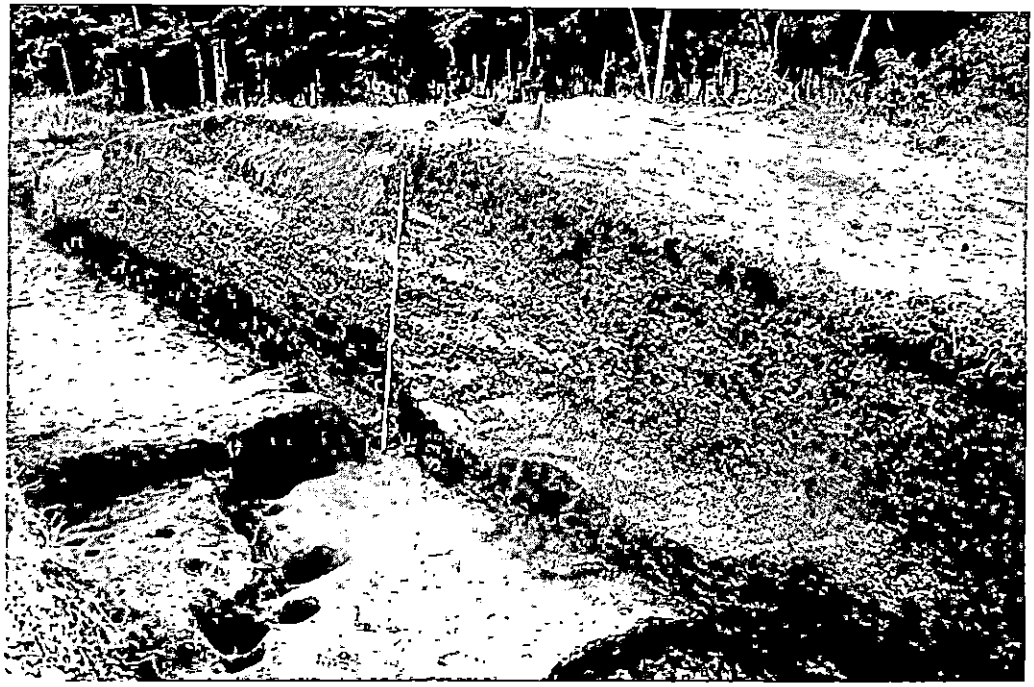
発見された住居址中、29号住居址は、いわゆる中峠式期の埋甕炉をもつ平面プラン円形の小住居址で、住居内より４体の人骨が出土した。この人骨群はローム層を掘り込んだ床面直上にあり、その上を厚い焼土と貝層が覆っていた。このような人骨群の出土例は、昭和37年の調査によっても出土している。本例も前例同様、おそらく食中毒か疫病による事故死の可能性が強い。

(3)　北貝塚第３調査区における調査

野外施設（貝層断面観覧施設）の整備事業として予備調査を昭和41年６月～７月、整備調査は昭和42年11月～12月に、いずれも加曽利貝塚調査団（団長・滝口宏氏）によって実施された。



第３図　北貝塚第２住居址群調査区における住居内出土人骨群（昭和42年）



第4図　北貝塚における貝層の堆積状況

本調査区は北貝塚の西側部分にあり、環状貝塚の外側から中央部の凹地に向って貝層部を切断するようにA、B、Cの3本のトレンチから成り、中央部のCトレンチは幅3m×長さ80mで貝層部から中央凹地にかけて設定され、左右のA、Bトレンチは幅2m、長さ28mで、貝層部分にのみ設けられている。調査当初は、「貝層堆積群調査区」と呼ばれていた。現在、Cトレンチの貝塚の内側にあたる中央凹地部のトレンチは埋め戻され、貝層部のみが野外施設・貝層断面観覧施設として公開されている。この地点の貝層部は最大幅25mで中央部が厚く、レンズ状に堆積しており、その厚さは約2mを測る。貝層の堆積時期は縄文中期・加曽利EⅠ～EⅡ式期に限定されるが、とくに後者は大量投棄の傾向がみられる。貝の堆積は、ハマグリを主体とした二枚貝が多く、部分的にイボキサゴの集中ブロックがあり、この中に含まれる二枚貝は小型のものばかりである。貝層下からは中期・阿玉台～加曽利EⅡ式期の住居址15基が発見されている。しかしその分布は、環状貝塚の内側部分に偏る傾向がある。小竪穴は19基発見され、いずれも加曽利EⅠ～Ⅱ式期のものである。

(4)　北貝塚第4調査区における調査

野外施設の電線ケーブル埋設工事に伴う予備調査として、昭和43年8月～9月まで実施された。本調査区は加曽利貝塚博物館講堂の西約30mにある農道脇から北貝塚の遊歩道外縁部を経由して、「貝層断面観覧施設」と「住居址群観覧施設」を結ぶように設定され、

トレンチの総長は290mにも及んでいる。これらは便宜上、博物館講堂西から貝塚公園入口までを第4調査区Ⅰトレンチ、また公園入口から貝層断面観覧施設を経由して、住居址群観覧施設に至るまでを同Ⅱトレンチと呼称している。Ⅰトレンチは更に1～21グリッドに、またⅡトレンチは1～8グリッドに分割されている。Ⅰトレンチは北貝塚の南側部分を斜めに約100mに亘って切断しており、6グリッドから16グリッドは貝層部分にかかっている。しかし、Ⅱトレンチは、1グリッドが北貝塚第1調査区の東端に接しているにもかかわらず、貝層の堆積はみられなかった。

この両トレンチを通じて発掘された住居址は、中期、勝坂・阿玉台式期7基、同加曽利E式期4基、および後期・安行Ⅰ式～Ⅱ式期の2基、合計13基であり、やはりこの区域でも中期の遺構が主体を占めている。主体となる中期住居址群は北貝塚の他地点と同様に貝層部～内側の中央凹地部にかけて分布しており、後期・安行Ⅰ～Ⅱ式期のものは、Ⅰトレンチの貝塚外側部分から発見されている。

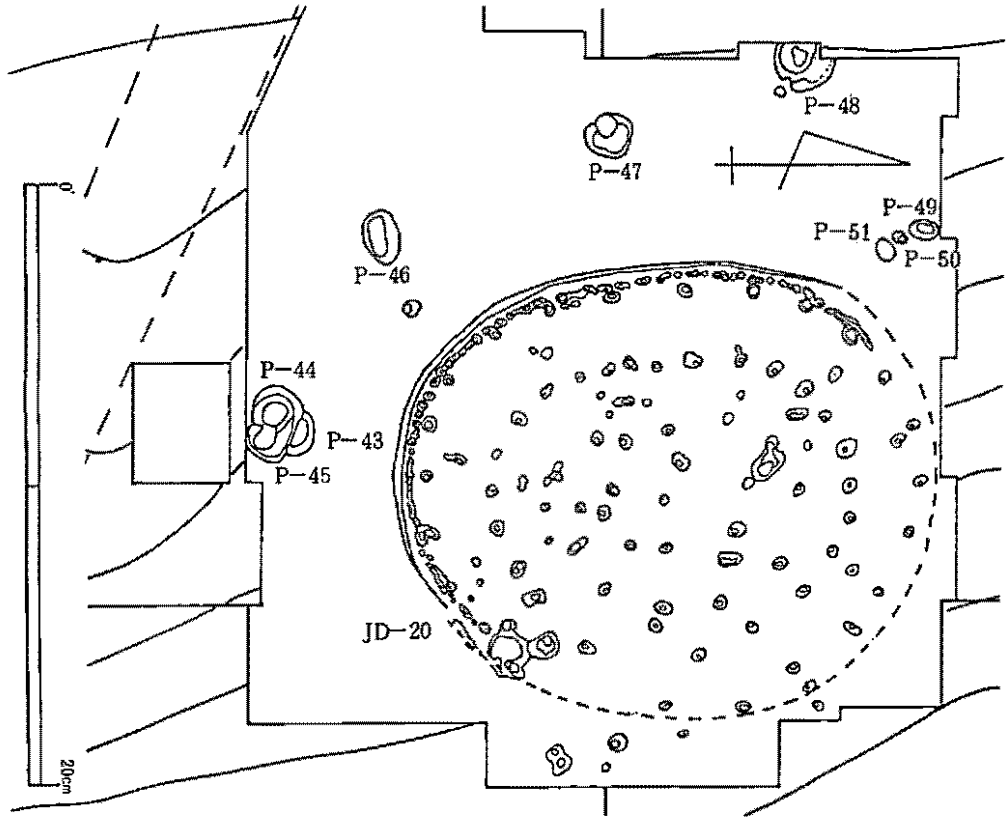
本調査区のⅠトレンチ、北貝塚の南東部より人骨3体と犬骨2体が、いずれも埋葬された状態で出土した。人骨は加曽利EⅠ・Ⅱ式期のもので、うち2体は甕被葬であった。犬骨は2体とも加曽利EⅠ式期のものである。

(5) 北貝塚第5調査区における調査

代官屋敷移築に伴なう予備調査として昭和43年11月に実施された。この区域は加曽利北貝塚の東端から東へ約100m離れた台地斜面部分で、標高15～20mを測る。調査範囲は、東西30m×南北20mの長方形に設定。この調査の結果、4層におよぶ遺物包含層が検出された。このうち、1層～3層は中期～後期の遺物が混在していたが、最下層の4層は後期・加曽利BⅠ式期の遺物を主体に包含していた。そして調査区の中央部分より、第4層を削平して作られたテラス状遺構が検出され、出土遺物からその所属時期は縄文後期・加曽利BⅡ式期と断定された。このテラス状遺構は、台地上から谷側へ向ってゆるやかな傾斜を持つものの、巾6mで、2段認められ、その覆土中より、破片ではあるが、石棒などの特殊石器類が発見され、遺構上面には焼土や炭化物も確認されていることから、この遺構は日常的な生活遺構とは異なる特殊な遺構であると考えられている。

(6) 北貝塚第6調査区における調査

昭和44年に移築された旧代官屋敷の防火水槽建設に伴なう予備調査として昭和48年に実施された。調査区の位置は北貝塚第5調査区の西に隣接する斜面部で、南貝塚の貝層南端から約80m東方にあたり、標高は25～21mを測る。この調査によって、長径19.4m×短径14.5mの長円形を呈する竪穴遺構（縄文後期・加曽利BⅡ式期）が出現した。この床面上には口径30cm～60cm、深さ90cm～150cmのピット列が同心円状に3列巡っており、各所に火を焚いた跡が残されていた。また床面から台付異形土器（加曽利BⅡ式）3点を始め、

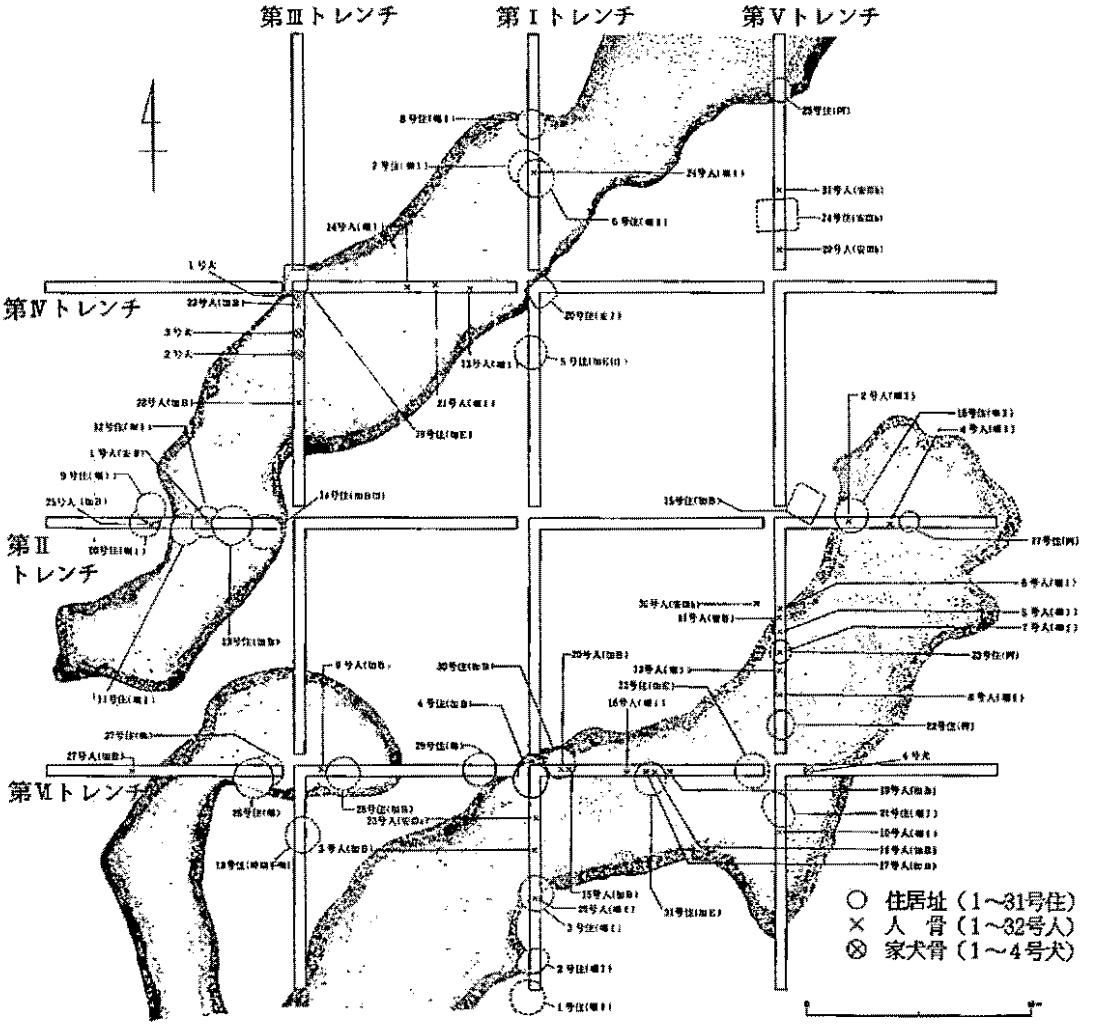


第5図　東傾斜面発見の特殊遺構平面図

山形土偶片などと共に石棒やヒスイ製小玉など後に述べる特殊石器、石製品が出土している。この巨大な竪穴は以上のような所見から祭祀などに関連した特殊な遺構であると考えられている。

第6調査区における遺物包含層は大きく2つに区分される。その1は特殊遺構内の堆積土（覆土）と、2は特殊遺構全体を覆っている斜面上部からの堆積土である。前者は覆土1層、2層と床面直上層の3層に分かれ、最下層からは石棒や垂飾を含む石器群と共に、双口異形土器などの特殊遺物が発見された。2の斜面上部からの堆積土も3層に亘っており、遺物の包含は第2・第3層に多い。この2層中には、すり石、くぼみ石、石皿などの生活用石器と石鏃、打製石斧などの生産用具を主体に、石棒片なども混在していたが、ほとんどが破片であり、その出土状況からみてやはりこれらは台地上集落からの混入と考えられる。

この調査区は前述の如く北貝塚第5調査区のすぐ西に隣接しており、今回発見された巨大な特殊遺構は第5調査区内のテラス状遺構と約20mの距離にある。このことからこの斜面部一帯は、日常生活とは異なる特殊な区域であると考えられている。



第6図　加曽利南貝塚における住居址・人骨・および家犬骨の発見地点

(7)　南貝塚における調査

昭和39年日本考古学協会を中心として加曽利貝塚調査団が結成され、同調査団によって同年8月～40年12月まで、馬蹄形を呈する南貝塚に巾2m、長さ170mに及ぶ6本のトレンチを東西、南北に設定、調査された。南貝塚は北北東に開口した馬蹄形状を呈し、貝塚の西北部にある標高31.5mを超える貝塚最頂部が、従来B地点と呼ばれていた場所で、貝層の厚さは2mを超える。これに対して南貝塚中央部凹地の標高は29mしかなく、このすり鉢状の地形は古くから大型貝塚形成の要因についての論議の的になっていた。昭和39・40年の調査によって南貝塚からは合計32基の住居址が発見された。時期別の基数は、中期（阿玉台式・加曽利E式）8基、後期（称名寺式～加曽利B式）22基、晩期（安行Ⅲb式）1基、不明1基である。このうち単一型式で一番多いのは後期・堀之内Ⅰ式期で、13基を

第1表　加曽利貝塚における各調査区の住居址発見状況（「加曽利貝塚Ⅳ」より）

時期別	調査区別 / 土器型式別	昭和37年度	昭和40～42年度			昭和43年度		北貝塚	昭和39年度南貝塚	合計
		第2地点	第Ⅰ調査区	第Ⅱ調査区	貝層調査区	第4調査区	第5調査区	合計		
中期	勝坂・阿玉台	—	4	1	—	7	—	12	4	16
	原加曽利E	—	—	2	4	—	—	6	—	6
	加曽利EⅠ・Ⅱ	1	12	7	11	4	—	35	4	39
	加曽利EⅢ	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	（小計）	(3)	(16)	10)	(15)	(11)	(—)	(53)	(8)	61)
後期	称名寺	—	—	—	—	—	—	—	2	2
	堀之内	—	4	2	—	—	—	6	13	19
	加曽利B	1	—	—	—	—	1	1	6	7
	安行Ⅰ・Ⅱ	—	—	—	—	2	—	2	1	3
	（小計）	(1)	(4)	(2)	(—)	(2)	(1)	(9)	(22)	(31)
晩期	安行Ⅲa	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	安行Ⅲb	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	（小計）	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)	(—)	(1)	(1)
合計		2	20	12	15	13	1	62	31	93
調査面積（㎡）		32	240	224	276	318	360	1,450	2,004	3,454
建蔽率（%）（発見基数/調査面積）×100	中期	3.1	6.7	4.9	5.4	3.5	0.3	3.8	0.4	1.8
	後期	3.1	1.7	0.9	0	0.6	0	0.6	1.1	0.9
	全体	6.3	8.3	5.4	5.4	4.1	0.3	4.3	1.6	2.7

数える。これらを覆っていた貝層の堆積期間は後期・堀之内Ⅰ式期、加曽利B式期が主体で、中期は稀である。

また、この時、第Ⅰトレンチ2区、第Ⅱトレンチ3区、第Ⅴトレンチ2区、第Ⅵトレンチ3区に挟まれた第11区の平面発掘も行われた。これは調査の第3期事業として、加曽利南貝塚の最終形を露呈しようとするもので、貝層部上の堆積土の調査を中心に行われたが、11区のみで中止された。

加曽利南貝塚の調査によって、貝層下より31体にのぼる人骨が発見された。これらの人骨群は南貝塚の東南部域に集中する傾向がみられ（第6図）、その埋葬形態は第2表の通りで、時期は31体中、後期27体、晩期4体であった。出土遺物は、中期～晩期にかけての土器、石器、骨角器、土製品など多様に亘りその量は莫大なものとなった。

この南貝塚の調査面積は、トレンチ調査1,980㎡、11区約1,600㎡計3,580㎡余に及び、この調査によって加曽利南貝塚は縄文後期前半を主体とする集落である可能性が強まった。

(8)　南貝塚東傾斜面における調査

本調査区は「加曽利貝塚東傾斜面」と呼ばれていた区域で、南貝塚の南平坦部と東側に続く傾斜地全域を含んでいる。この地域における調査は、加曽利貝塚の遺跡限界確認調査の一環として昭和45年から三年次に亘って、千葉市加曽利貝塚博物館の手によって行われた。

①　昭和45年度の調査

対象区域は南貝塚の第Ⅴトレンチ南端より最も近い所で約60m南方に広がる。標高29～

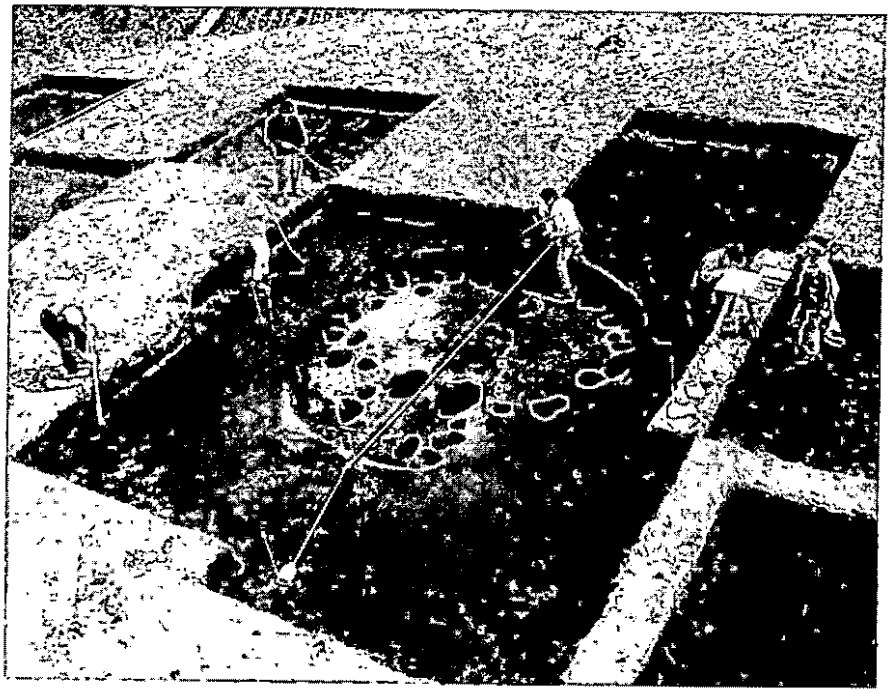
第2表　加曽利貝塚における各調査区の人骨発見状況（「加曽利貝塚Ⅳ」より）

時期別	調査区別 / 土器型式別	昭和37年度	昭和40～42年度			昭和43年度		北貝塚合計	昭和39年度南貝塚	合計
		第2地点	第Ⅰ調査区	第Ⅱ調査区	貝層調査区	第4調査区	第5調査区			
中期	勝坂・阿玉台	—	—	4	—	—	—	4	—	4
	原加曽利E	—	—	—	—	—	—	0	—	0
	加曽利EⅠ・Ⅱ	—	3	—	3	3	—	9	—	9
	加曽利EⅢ	—	—	—	—	—	—	0	—	0
	（小計）	（—）	（3）	（4）	（3）	（3）	（—）	（13）	（0）	13）
後期	称名寺	—	—	—	—	—	—	0	—	0
	堀之内	—	3	—	—	—	—	3	14	17
	加曽利B	5	—	—	—	—	—	5	11	16
	安行Ⅰ・Ⅱ	—	—	—	—	—	—	0	2	2
	（小計）	（5）	（3）	（—）	（—）	（—）	（—）	（8）	（27）	（35）
晩期	安行Ⅲa	—	—	—	—	—	—	0	1	1
	安行Ⅲb	—	—	—	—	—	—	0	3	3
	（小計）	（—）	（—）	（—）	（—）	（—）	（—）	（0）	（4）	（4）
合計		5	6	4	3	3	0	21	31	52
調査面積（㎡）		32	240	224	276	318	348	1,438	2,004	3,442
建幣率（%）（発見人骨数／調査面積×100）	中期	0	1.25	1.8	1.1	0.9	0	0.9	0	0.4
	後期	15.6	1.25	0	0	0	0	0.6	1.3	1.0
	全体	15.6	2.5	1.8	1.1	0.9	0	1.5	1.5	1.5

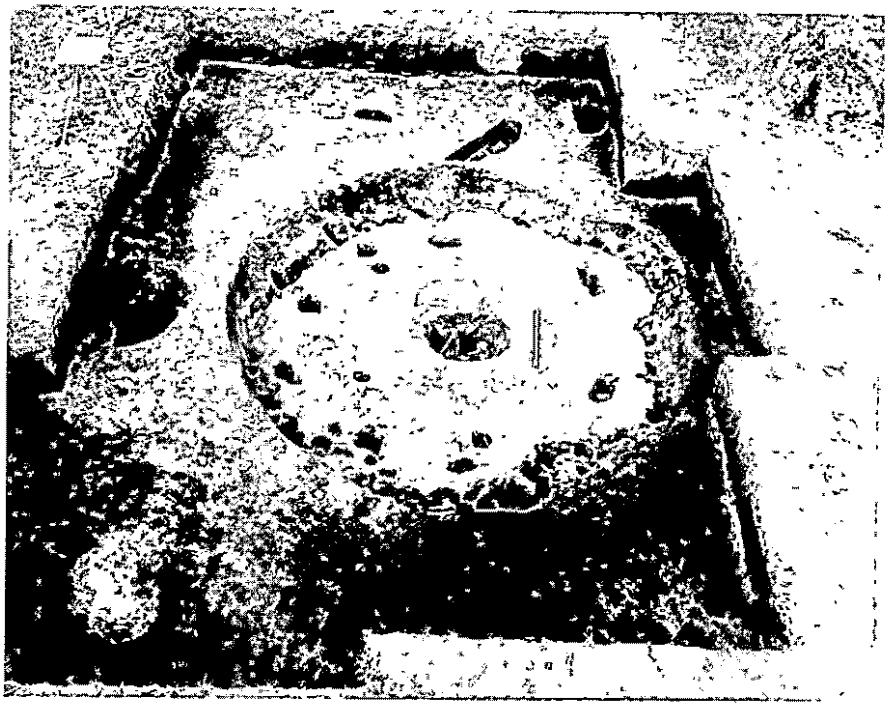
30mの平坦部分である。調査対象面積は約1,000㎡であったが、この調査によって古墳時代・鬼高式期の住居址4基を確認し、このうち1基を完掘した。また調査区の東側部分において縄文中期の阿玉台式期の遺物包含層を確認した。

② 昭和46年度の調査

調査対象区域は、前年度調査区の北に隣接する台地上平坦部から東方の古山支谷に向かって張り出した傾斜面一帯である。この斜面の先端部は、加曽利貝塚の東にある古山支谷に岬状に突出している。標高は斜面上部で29m、谷に近い岬状部で15mを測る。調査の結果、本調査区内より縄文時代と古墳時代の遺構群が発見されたが、この地域における遺構の分布状況は一様ではなく、これらは3ケ所に偏在している。まずその1は、古山支谷に張り出した岬状部分で遺構の集中度は一番高い。この地域の発掘面積約300㎡中より、縄文早期の炉穴5基、同前期の住居址2基、古墳時代・鬼高式期の住居址2基が発見されている。その2は昭和45年度調査区の北に隣接する台地上平坦部で、縄文中期の住居址10基（阿玉台式2、加曽利E式3、加曽利EⅡ式5）と小竪穴11基が出土している。住居址10基のうち加曽利EⅡ式の4基の住居址に小規模ながら貝層堆積が認められた。そして3番目は、1と2の中間地帯で標高22～19mの斜面部である、ここから縄文後期・加曽利B式期と安行Ⅰ式期の住居址が1基ずつ発見されている。両者の間は約40mも離れており、前述の1、2地点とは様相を異にしている。



第7図　東傾斜面における竪穴住居址の調査状況（昭和46年）



第8図　東傾斜面発見の竪穴住居址（加曽利ＥⅢ式期・昭和46年）

③　昭和47年度の調査

南貝塚の貝層部と昭和45年度調査区との間の三角地帯が対象区域である。地形はほぼ平坦で、標高は30.5mから29.5mである。南貝塚に近いにもかかわらず、本調査区内における住居址の発見はわずか4基（縄文中期・加曽利EⅡ、Ⅲ式期3基、後期・堀之内Ⅰ式期1基）で、加曽利EⅡ式期と堀之内Ⅰ式期の柄鏡形住居が一基ずつ発見されている。前者は入口を北方に、後者は南に有しており、前者の床面中央部から加曽利EⅡ式の深鉢を被った人骨が土壙内に埋葬されているのが発見された。また、今回調査の北側部分を中心として中期の小竪穴遺構が42基発見されており、この区域は小竪穴遺構の集中区域として注目されている。

2　調査のまとめ

以上、昭和37年から開始された加曽利貝塚の大規模調査によって、集落遺跡としての加曽利貝塚の概要が明らかになった。昭和61年度に史跡整備のための遺構確認調査が実施されているが、現時点で発見遺構から見た集落址としての加曽利貝塚をまとめてみると次のようになる。

(A)　干貝加工場としての大型貝塚と中央広場

・北貝塚と南貝塚の貝層部は、厚いブロック状の堆積から成り、一度に大量の貝類が集中的に投棄されている。

・南・北両貝塚では、貝層中の各所に直径1～2mの大型焚火址があり、その周辺に煮沸用土器片が数多く散在している。

・これらの現象から、大型貝塚とその中央空白部は、単なる日常生活の場ではなく、むしろ集落間共同の生産の場であった可能性が強い。すなわち、中期には北貝塚で、後期には南貝塚でその貝層の周辺において、貝を土器で煮て取り出し、中央広場で天日にさらして「干貝」を加工していたと思われる。

(B)　居住地としての埋没貝層を伴なう住居址分布区域

・南・北両貝塚の周辺において、多数の竪穴住居址が展開しており、その中には住居址内に埋没した小型貝塚を伴うものがかなりある。

・北貝塚の西側には、直径3m前後の小型貝塚が6ケ所点在し、周辺に堀之内Ⅰ式を中心とする後期の土器が散在している。

・南貝塚の東側傾斜面では、阿玉台～加曽利EⅡ式期の住居址13基が発見され、その半数に小型貝塚が伴っていた。貝層中には、魚骨や獣骨、土器や石器などが包含されていた。

・このように大型貝塚の周辺には、前期～晩期の各時期の居住空間が、時期ごとに位置を

変えながら展開している。

(C) 祭祀場としての特殊遺構

・テラス状遺構……北貝塚の東側傾斜面において、その斜面を階段状に削平してテラスをつくり、その縁辺に柱穴列が設けられ、石棒・ヒスイ製垂飾など特殊遺物が出土した。

・巨大な竪穴遺構……同じ東側傾斜面の中腹にテラスをつくり、長径19m×短径16mの楕円形の竪穴を掘り、3重の柱穴列がめぐらされ、床面から石棒2、台付異形土器3、土偶などが出土し、数ケ所に炉址が点在していた。

・いずれも加曽利BⅡ式に属し、この周辺が縄文後期の祭祀場であったことは明らかである。

(D) 人間と家犬の埋葬ゾーン

・埋葬人骨は、南貝塚では北西に8体、南東に24体発見され、北貝塚では北西に3体、南東に18体が発見されている。

・これによって加曽利貝塚では、各貝塚の南東部に人骨が偏在しており、そこに埋葬ゾーンがあったことが判明した。その時期も、北は中期、南は後期が主体を占めている。

・その埋葬地点も、南貝塚では後期後半から晩期になると、1ケ所には集中せずにやや分散的になる傾向がある。

・家犬骨は、北では南東に、南では北西に偏在している。

(E) 湧水点と交通路としての河川

・湧水点……従来3ケ所確認されていたが、現在は涸渇。

a. 北貝塚北方の台地縁辺部、現在の桜木園の敷地内。

b. 南貝塚東傾斜面岬状突出部の先端

c. 南貝塚南側、京願台支谷中流部、かつて湧水池があった。

・河川（京願台支谷）……その水流は、貝塚の西側平坦部に向って遡上し、その先端にかつて大きな池があり、それが水源であったが、埋め立てられゴルフ練習場になっている。

・坂月川……当時は周辺の湧水を集めて、かなり水量のある川が流れていたと思われ、東京湾からの海水は入っていない。縄文人は丸木舟を操って約6㎞離れた海岸まで貝や魚を獲りに往来した重要な交通路であった。

(F) 舟着場

・南貝塚の東傾斜面の先端部は、坂月川に向って岬状に張出しているが、かつてはもっと長く突出していたと思われる。

・岬状突出部の南方約150mの地点において、丸木舟らしい木質の存在が確認されている。なお岬状突出部の先端からは、古墳時代後期の住居址2基が発見されている。

・したがってこの地点は、縄文時代においては舟着場であった可能性が強い。

おわりに

昭和37年より昭和48年までの発掘調査によって加曽利貝塚より発見された遺構、遺物は膨大な数にのぼっており、調査総面積は、11,000㎡に及んでいるが、この数値は現在保存されている面積の8.6％でしかない。縄文時代のむらびとの生活をより詳しく知るためには、今後も計画的な調査が必要である。

また昭和45～昭和47年に行われた東傾斜面における遺跡限界確認調査によって、従来まで遺跡の外と見られていた地域より、小貝塚（住居址内埋没）や住居址群が相ついで発見され、加曽利貝塚における縄文時代の生活の舞台は、8の字形を呈する南・北貝塚のみでなく、その周辺に大きく広がっていたことが判明した。このような貝塚外側に及ぶ調査は現在でこそ各地で行われているが、昭和40年代の調査としては例がなく、当時としては画期的な調査であり、遺跡の限界を考える上で非常に価値ある調査であったと評価できよう。しかし、加曽利貝塚における遺跡限界確認は貝層部の東側部分のみで中断しており、現在宅地化が進んでいる西側区域は住居址内埋没と思われる小貝塚の存在が知られていながら、未調査のままである。加曽利貝塚の全容を把握するためには、この仮称加曽利西貝塚と呼ばれる区域を含めた、長期的な調査計画が必要である。

（千葉市立加曽利貝塚博物館・学芸係長）

五．博物館活動の経過

庄司　克

はじめに

加曽利貝塚博物館は、当初社会教育課に属し、当館学芸員が市内の文化財関係業務を担当していたため、昭和46年まで当館学芸職員が、市内の埋蔵文化財調査や一般文化財関係の調査も行った。このため、当館の調査・研究活動をふりかえると、開館後数年間は市内における埋蔵文化財の緊急発掘調査にかなりの重点がおかれていた。しかし、昭和47年4月に社会教育課内に文化財係が新設され、その後は、博物館独自の調査・研究活動や教育普及活動など博物館本来の活動を主に行うことになった。

1　調査研究活動

当館では開館当初より、東京湾沿岸における縄文時代人の生活の様子を明らかにするため「貝塚集落」の研究に取り組んできた。この成果は研究の進展に伴い、展示活動に反映された。

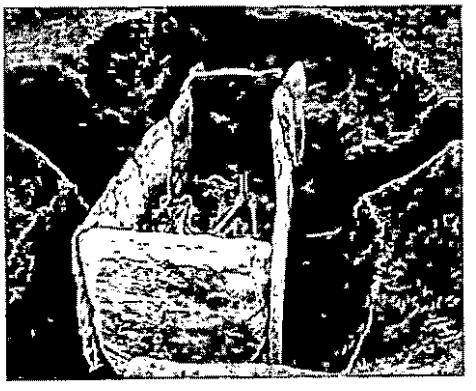
加曽利貝塚博物館におけるもう一つの研究活動は、縄文土器の製作技法や使用用途についての研究である。この土器製作研究は教育普及活動の主要事業である体験学習「土器づくりの会」を生み市民の好評を博している。

(1)　市内における埋蔵文化財の発掘調査

加曽利貝塚博物館の開館当初は館職員が千葉市の埋蔵文化財の調査を担当していたため昭和41年～46年にかけて下記の調査を実施した。その概要は次のとおりである。

①　兼坂古墳（加曽利町）

昭和41年5月調査、鶏舎移転の工事に伴い、直径20m円墳一基を発掘調査。主体部は組合式箱型石棺で、人骨9体が追葬されていた。（「貝塚博物館紀要」創刊号所収、昭和43年）



第1図　兼坂古墳の組合式箱型石棺（昭和41年）

② 新山古墳群（加曽利町）

昭和42年3月調査、長軸約35m（1号墳）と20m（2号墳）の前方後円墳2基の発掘調査を行ったが、主体部はすでに攪乱されていた。（「貝塚博物館紀要」創刊号所収、昭和43年3月）

③ 菱名貝塚（赤井町）

昭和42年10月調査、直径100mの馬蹄形貝塚で、地形測量と一部の発掘調査を実施、縄文中期・加曽利E式の竪穴住居址7基と埋葬人骨1体および埋葬犬骨1体が出土した。（「貝塚博物館紀要」第2号所収、昭和44年3月）

④ 荒屋敷貝塚、草刈場貝塚（貝塚町）

昭和42年10月調査、千葉県考古学会（会長・杉原荘介）の主催で地形測量調査を行い、いずれも直径100mを超える馬蹄形貝塚であることが判明した。（「千葉市史史料編」原始・古代所収、昭和51年）

⑤ 西の花遺跡（大森町）

昭和42年6月調査、土取り工事に伴う緊急発掘調査、古墳時代の竪穴住居址2基が発見された。（「貝塚博物館紀要」第2号所収、昭和44年3月）

⑥ 宝導寺台貝塚（都町）

昭和43年12月調査、道路拡幅に伴う緊急発掘調査、標高7mの低地部から、厚さ3mの貝塚（縄文前期～中期初頭）が出現。当時の海岸に残された貝塚であることが判明した。（「貝塚博物館紀要」第3号所収、昭和45年3月）

⑦ へたの台古墳群（仁戸名町）

昭和44年10月～45年3月調査、小学校建設に伴なう緊急発掘調査、細長い台地上より円墳6基（墳丘部最大径20m）と「もがりや」と思われる竪穴住居址5基が発見された。主体部の確認された円墳は4基でいずれも木棺直葬で直刀、刀子、鉄鏃、ガラス玉等が発見された。（「貝塚博物館紀要」第4号所収、昭和46年3月）

⑧ すすき山遺跡（源町）

昭和45年5月～9月調査、土地区画整理事業に伴なう緊急発掘調査、縄文時代中期終末の竪穴住居址12基、土壙13基のほか平安時代の方形周溝状遺構10基が発見された。（「貝塚博物館紀要」第5号所収、昭和47年3月）

⑨ 内野古墳群（多部田町）

昭和46年10月調査、平和公園（市営墓地）造成工事に伴なう緊急発掘調査、古墳時代の円墳1基（組合式箱型石棺・埋葬人骨片および直刀出土）と平安時代の竪穴住居址一基を調査、予定地内の他の円墳4基は緑地として保存された。（「千葉市史史料編」原始・古代編所収、昭和51年3月）

⑩ 荒屋敷貝塚（貝塚町）

昭和55年11月～12月調査、荒屋敷貝塚北側斜面部にあたる貝層部分の発掘調査、貝層の厚さは2mを超えその堆積時期は、縄文中期・阿玉台式～加曽利EII式に亘っていることが判明した。貝層中から甕被葬1体を含む人骨片9体分が発見された。

※、加曽利貝塚関係の調査については第一部四章について述べてあるので、ここでは省略する。また、市内における埋蔵文化財の緊急発掘調査に伴ない、該当地域の分布調査も頻繁に行われたが、これらは巻末の参考資料中にふれてあるので省略する。

第２図　寄贈された民具（昭和47年）

(2)　市内民俗資料の収集調査

旧大須賀家の移築に伴ない、将来の展示公開のため昭和43年より市内の民俗資料の収集を開始した。当初は市民からの情報をもとに館職員が収集に当たったが昭和46年より２年次に亘って、郷土史家・和田茂右衛門、宍倉健吉、吉田公平ら３氏に民俗資料の収集調査を委託し、組織的収集を行った。寄贈者は延べ46人で市内全域に及び、収集された資料は、地方文書類のほかに、農具、漁撈具、商業用具など1000点を数えた。

(3)　貝塚文化の研究

従来考古学界では、縄文時代の貝塚は単なるゴミ捨て場と考えられていた。このため、加曽利貝塚の評価も明治20年にその存在が知られてから、我国最大規模の貝塚で、南貝塚と北貝塚が連結して８の字形を呈する貝塚の形状の珍しいものとして捉えられていた。

また、大正時代には東京人類学会の遠足会や、人骨採集のための調査によって人骨の宝庫として知られていた。その後、北貝塚から加曽利E式、南貝塚から同B式土器が発見され、編年学上の土器型式の標式遺跡として学史的に意義ある遺跡として学界に登場したが、縄文時代人の生活舞台である集落遺跡としての評価はされていなかった。

加曽利貝塚博物館では、前掲表の一連の調査によって、加曽利南・北貝塚は縄文時代の集落遺跡の一部であり、しかも、従来考古学界で考えられていた貝層内に当時の集落があったのではなく、貝層の外側にも当時の生活の舞台は広がっていることを提唱した。これは、昭和45年から実施した東傾斜面等の遺跡限界確認調査によって実証された。

また、貝層面の厚さ２m、直径100mを超える貝層堆積の状況や、貝層中における大型炉址群の存在から加曽利貝塚などの大型貝塚では「むらびと」の主食として貝を採集したのではなく、保存食および、物々交換材として干し貝をつくったという「馬蹄形貝塚干貝加工場説」を打ち出し、当時の「むら」は単なる自給自足の生活の場であったという従来の考古学界の考え方に対して、新説を唱えた。

現在、この考えは次第に考古学界にも浸透しつつある。

(4)　縄文土器製作技術の研究

縄文土器の製作技法については、土器そのものを観察することによってある程度の推測はできても、明確な根拠がなく、考古学界でも長い間の謎であった。幸い当館では、群馬

県桐生市在住の縄文土器製作研究家・新井司郎氏の協力を得て、昭和45年からこの実験的研究にとり組んだ。不幸にして新井氏は志半ばにして亡くなられたが、その研究は当館職員に引き継がれ、複製土器の製作とその使用実験によって多大な成果をあげることができた。

その研究結果から推定される縄文時代の土器製作工程は次のとおりである。

1）粘土と混入物の採集……関東ローム層下の白粘土と砂を使う。

2）ねりあげ……白粘土と砂を6：4の割合で混ぜ、水を加えて2時間以上よくねる。

3）ねかせ……ねりあがった「土」を日陰、低温の場所で48時間以上ねかせる。

4）成形、文様づけ……土器の形は輪づみ法で底部→胴部→口縁部の順でつくる。

5）陰干し……できあがった土器は急激な乾燥をさけるため屋内で3週間ほど乾かす。

6）内面のつぶし……水漏れを防ぐため内面をつぶす。

7）焼きあげ……焼成時間は約40分、焼成温度は850℃前後である。

以上の方法で土器を製作してみて、土器づくりの専業集団の存在がクローズアップされてきた。また、土器づくりは、当時の厳しい自然条件を考えると、土器づくりの季節があったことも確信されるなど、従来の考古学界の常識を超えた成果をあげることができた。

(5) 研究委託

野外博物館として、また貝塚研究のメッカとしての博物館活動を展開してゆくため、下表のとおり、専門家に研究委託を行った。なお、1～4については「貝塚博物館研究報告・Ⅰ～Ⅳ」として刊行されている。（巻末の参考資料・博物館の刊行物参照）

研究委託託一覧

	委託内容	受託者	実施年度
1	縄文土器製作技術調査研究委託	新井司郎	昭和44年～46年
2	遺構・遺物に関する保存等の研究委託	関野克（東京国立文化財研究所長）	昭和45年～49年
3	発掘出土貝類・動物資料鑑定研究委託	金子浩昌（早稲田大学講師）	昭和47年～58年
4	発掘出土岩石資料鑑定研究委託	新井重三（埼玉大学教授）	昭和47年～58年
5	旧大須賀家現状調査委託	大河直躬（千葉大学教授）	昭和48年
6	旧大須賀家復原調査委託	大河直躬（千葉大学教授）	昭和49年
7	縄文土器胎土分析委託	富沢威（東京国立文化財研究所）	昭和59年～60年

2．教育普及活動の経過

(1) 講座・体験学習

開館当初の博物館活動は市内における埋蔵文化財の調査や内的研究事業を優先的に行われたが、昭和40年代後半に入り、県内の小・中学生をはじめ、市内の文化団体や、公民館主催の見学会などが、しだいに増加してきたため、教育普及活動等の外的活動に重点をおくようになった。

第3図 「土器づくりの会」(昭和47年)

とくに、昭和50年代に入ると週休2日制等による余暇の活用を市民が文化施設の利用に求める傾向が強くなり、社会教育機関としての博物館の性格を強め、市民の期待にこたえるため、体験学習や各種講座の充実をはかった。

① 土器づくりの会

博物館では縄文土器製作研究家、故・新井司郎氏の研究結果を受けついで従来の考古学界では推定でしかなかった縄文時代の土器づくりに関する謎の解明にあたってきたが、その成果を市民に還元するため、体験学習「土器づくりの会」を昭和47年より実施した。

この会の目的は、形や外面的な文様だけを模した、縄文土器のにせものをつくるのでなく、縄文土器を当時の生活用具としてとらえ、縄文時代と同じ製作方法で、道具としての土器をつくり、この体験を通して縄文人の生活の一端を市民に身をもって理解してもらおうとするものである。この会の開催当初は、粘土採集費、薪代等を実費徴収して、加曽利貝塚博物館友の会の主催で行ったが、昭和49年に「土器づくり同好会」が発足し、同好会員のボランティア活動によって材料等の収集ができるようになったため、昭和51年度より館の主催事業となり、昭和55年より参加者の実費負担はなくなった。

土器づくり会の定員は20名で原則的に春と秋の2回実施し、当初は一般市民のみを対象としたが、昭和54年に国際児童年を記念して、小・中学生を対象にした「子どもの土器づくり」と「親と子の土器づくり」を実施したところ、好評を得たので、以後毎年3回（春・夏・秋）の実施を原則として、夏休みの土器づくりについては、学校教育との関連を持たせた内容になった。昭和57年～58年度には小・中学校教職員を対象とし、59年以後は小・中学生のための土器づくりを行っている。

② 郷土史講座

市民が郷土「千葉」の歴史をよりよく理解できるよう、加曽利貝塚をはじめ市内遺跡か

ら発掘された考古遺物や、市民から寄贈された民俗資料などの博物館資料を利用し、専門家による講義形式で実施している。一般市民を対象とし、定員は当初50名で実施した。郷土史講座の変遷は下表のとおりである。

③ 文化財めぐりの会

千葉市および周辺地域の文化財を実地見学し、専門家の説明を聴くことによって、市民が体験的に郷土の歴史を知り文化財に対する理解を深めることを目的とした。

定員は50名で、一般市民を対象とし、観光バスを利用している。年度ごとの見学地・講師は下表のとおりである。（昭和58年度より、貝塚博物館友の会と共催で実施している。）

郷土史講座年度別一覧表

年　月	回	テ　ー　マ	講　師
53年3月	1	「東京湾沿岸における縄文時代の貝塚文化」	金子　浩昌 後藤　和民ほか
53. 7		「遺跡・遺物からみた千葉市の歴史」（先土器時代～古墳時代）	武田　宗久 後藤　和民ほか
9	2	「遺跡・遺物からみた千葉市の歴史」（王朝時代～中世）	
54. 9	3	「千葉市の民俗」	平野　馨 小泉正太郎ほか
55. 9	4	「千葉市の貝塚」	武田　宗久 金子　浩昌
56. 9	5	「千葉市周辺の貝塚」	武田　宗久 小川　和博
57. 10	6	「掘り出された千葉の歴史」	武田　宗久
59. 3	7	「加曽利貝塚とその調査」	武田　宗久
60. 3	8	「千葉市における埋蔵文化財の調査」	武田　宗久ほか
60. 7	9	「加曽利貝塚周辺の自然環境の変化」	杉原　重夫 小滝　一夫

年　月	見　学　先	講　師	年　月	見　学　先	講　師
昭和47年3月	宗吾霊堂・成田山史料館・芝山はにわ館ほか	武田　宗久	昭和56年3月	多古町周辺の文化財（多胡城址・志摩城址ほか）	武田　宗久 浜名　徳永 ほか
49. 3	大原幽学保存館・香取神宮宝物館周辺ほか	武田　宗久 後藤　和民	57. 3	千葉市内の中世史跡ほか	武田　宗久
50. 3	師戸城址・松虫陣屋址ほか	和田茂右衛門 渡辺　太助	58. 3	千葉市北部の指定史跡をたずねて	武田　宗久
51. 3	養老川周辺の文化財（県立総南博物館ほか）	武田　宗久 渡辺　太助	58. 10	国立歴史民俗博物館とその周辺史跡を訪ねて	武田　宗久 渡辺　太助 ほか
52. 3	房総風土記の丘・竜角寺ほか	和田茂右衛門 川戸　彰			
53. 3	大椎城址・土気城址ほか	武田　宗久 後藤　和民	59. 10	佐倉市吉見台遺跡と印旛沼周辺の史跡を訪ねて	田川　良 小川　和博 ほか
54. 3	佐倉市周辺の中世史跡（佐倉城址・臼井城址ほか）	武田　宗久 渡辺　太助	60. 10	堀之内貝塚と北総地方の史跡を訪ねて	堀越　正行 ほか
55. 3	多古町方面（多胡城址・志摩城址ほか）	武田　宗久 ほか			

3．展示活動の経過

a．常設展

当館の展示活動は、本館展示室における常設展 —縄文集落における文化の様相— から出発した。これは、発掘された考古遺物によって縄文時代の生活の様子を明らかにしようとするもので、加曽利貝塚出土品とその他の借用資料によって構成された。

その後、昭和44年には千葉県との比較資料として長野県・井戸尻考古館より縄文中期土器を、昭和46年には青森県・小河原湖博物館より縄文中期～晩期土器を借用し、館内展示の一部展示替えを行った。

昭和47年になり、昭和48年10月に第28回国民体育大会が千葉県で開催され、当館への天皇陛下の行幸が決定したため、急拠、館内の展示替えが計画され、昭和47年より展示構成の資料調査を行い、昭和48年６月～９月まで展示替えおよび内・外装工事を行った。

新しい展示テーマは「東京湾沿岸の貝塚文化」—貝塚を残したむらびとたち— とし、展示物は考古資料のほかに、獣類・鳥類・魚類の剝製や石器の復元模型などの二次資料と、各コーナーには電動の地形模型やカラーコルトンなどを配した斬新な展示となった。

昭和59年～60年には、展示ケースの老朽化に伴い、縦ケースの新築と内装工事を行い、変色した展示パネルも一新した。説明パネルには、外国人入館者の増加を考慮して英文解説をつけ加えた。

昭和41年～47年の展示室の状況

当館の展示室は、通路を兼ねた回廊に囲まれた正方形のワン・ルームで、床面積196㎡しかなく、この限られた空間の中で特色ある展示を展開すべく、くり返し試行錯誤が行われた。当初の問題点は次のとおりである。

1．回廊部が登り、下り勾配になっている。

2．展示室内はまわりが縦ケースになっているが、両面がガラス引戸のため、外回廊部から内（展示室）がみえる。

また、展示室内は平ケースだけなので、展示室入口から内部が全部見渡せてしまい、順路に関係なく、観覧者は、興味をひいたケースに群がってしまう。

3．ラセン階段や建物の柱が、むき出しになっていた。

昭和48年～59年の展示室の状況

当初の問題点をふまえて、昭和48年の全面展示替えでは、入館者に対して見やすく、解りやすい展示と心がけ、次のように改良した。

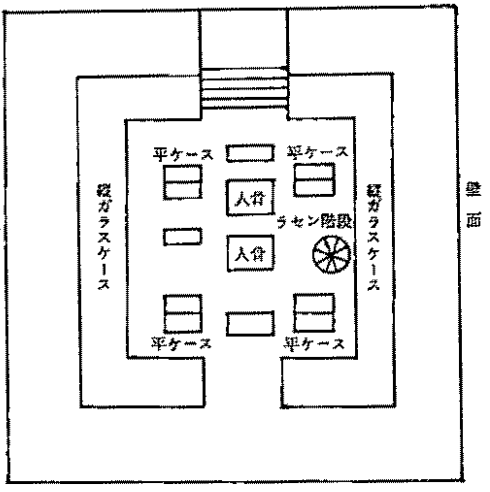
1．回廊部は構造的に観覧者が足をとめにくい状況なので、壁面を前方に向って内側に張り出し、壁面を４区分し、なおかつ、四隅にカラーコルトンや模型を設置。

2．展示室内には、ついたて状の間仕きりを設置し、順路を明確にした。

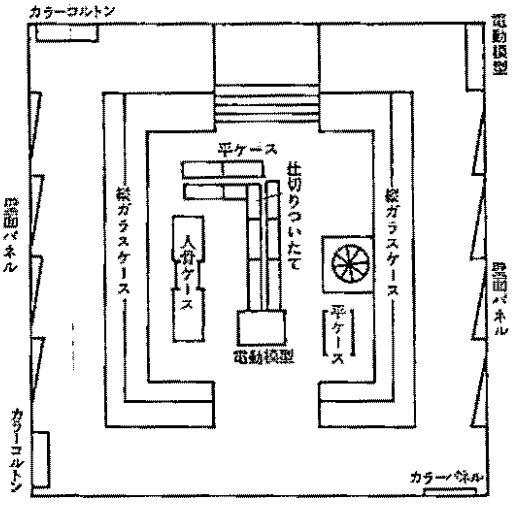
また、縦ケース内に仕切りパネルを入れ、外から内部が見えないようにした。

3．ラセン階段や柱を木製のボックスで覆った。

展示構成の変遷



第4図　昭和41年～47年の展示室の状況（左、展示状況　右、平面図）



第5図　昭和48年～59年の展示室の状況（左、平面図　右、展示状況）

b　特別展

常設展だけでは多様化する市民の要望に応じられないので、昭和51年より講堂を利用して特別展を開催している。

イ）縄文土器作品展

土器づくり同好会（昭和49年発足）と共催で、昭和53年より毎年11月1日～30日まで博物館講堂にて開催。土器づくり同好会の研究成果や、館主催の「土器づくり会」参加者の作品も合せて展示している。

また、作品展期間中の毎日曜日、野外で縄文土器の製作実演や複製土器による煮たき実演を行っており、とくにドングリを加工した縄文料理の試食会は見学者に好評である。

縄文土器作品展の経過

回	開催年月	展示テーマ
1	昭53年11月	「早期の土器」
2	54 〃	「子どもの土器づくり」
3	55 〃	「火焔土器に挑戦」
4	56 〃	「縄文土器の用途」
5	57 〃	「阿玉式土器をつくる」
6	58 〃	「土器づくり同好会10年の成果」
7	59 〃	「大型土器をつくる」
8	60 〃	「縄文後期の土器を考える」
9	61 〃	「後期の土器をつくる」

ロ）収蔵品展

館内展示の充実をはかるため、昭和54年度より縄文時代および貝塚関係資料を購入しているが、これらの全てを常設展にて展示することが難しいため、昭和57年に講堂を使用して収蔵品展と題した特別展を開催した。

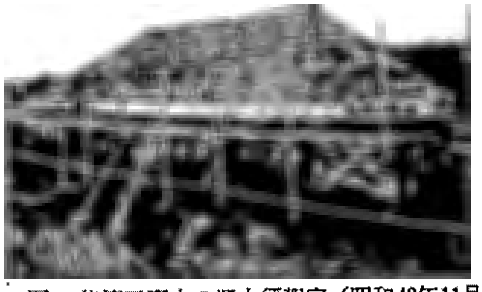
展示物は、1.青森県三内遺跡・高杉遺跡出土品（縄文土器88点、石器50点）、2.骨角器複製品（楠本政助氏製作49点）、3.骨格標本3体（タヌキ、イノシシ、ニホンジカ）の合計190点で、同時に収蔵品目録も作成した。

ハ）旧大須賀家の展示・公開

昭和43年10月に幕張町の大須賀家より千葉市に民家の寄贈があり、早速、移築予定地の発掘調査を行った後、昭和44年3月に、現在の地点に移築された。大須賀家は幕張町周辺が江戸時代に天領として北町奉行所の支配下にあったとき、代官を務めていたと言われている。

旧大須賀家は木造平屋建草葺で後世の改造の跡が随所に見られたが、千葉大学大河直躬教授（建築学）の復原調査によって、間取りは居間、寝間、客座敷2室、勝手、倉庫、土間からなり、構造的には「せがい造り」を用いるなど、江戸中期の千葉県上級農家の特長を揃えていることが判明した。

昭和60年より、建物内部に展示パネルを設置し、一般公開している。



第6図　移築工事中の旧大須賀家（昭和43年11月）

六．博物館の現状と諸活動

庄司　克

1．博物館の概要

所在地　千葉市桜木町163

名称　千葉市立加曽利貝塚博物館

敷地面積　127,862㎡　加曽利北貝塚　55,152㎡

加曽利南貝塚　72,710㎡

施設とその面積

本館　696.4㎡　鉄筋コンクリート造２階建

１階　講堂、事務室、図書室、その他（329.8㎡）

２階　陳列室（366.6㎡）

第１収蔵庫　152.5㎡　鉄筋コンクリート造　平屋

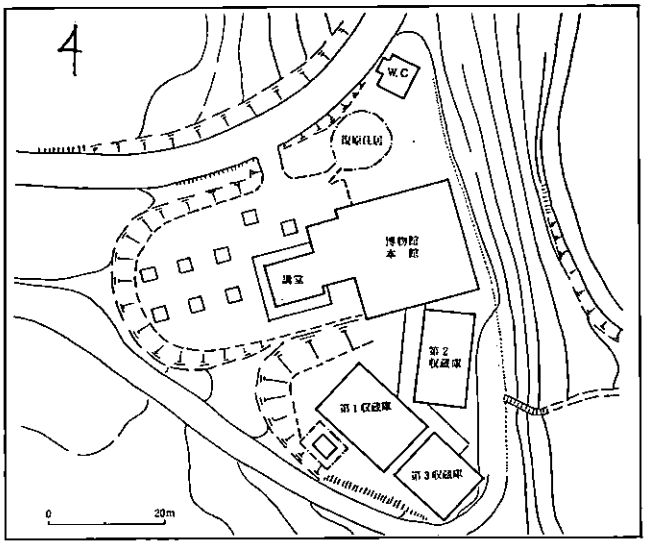
第２収蔵庫　228.0㎡　軽量鉄骨造　２階建

第３収蔵庫　198.7㎡　軽量鉄骨造　２階建

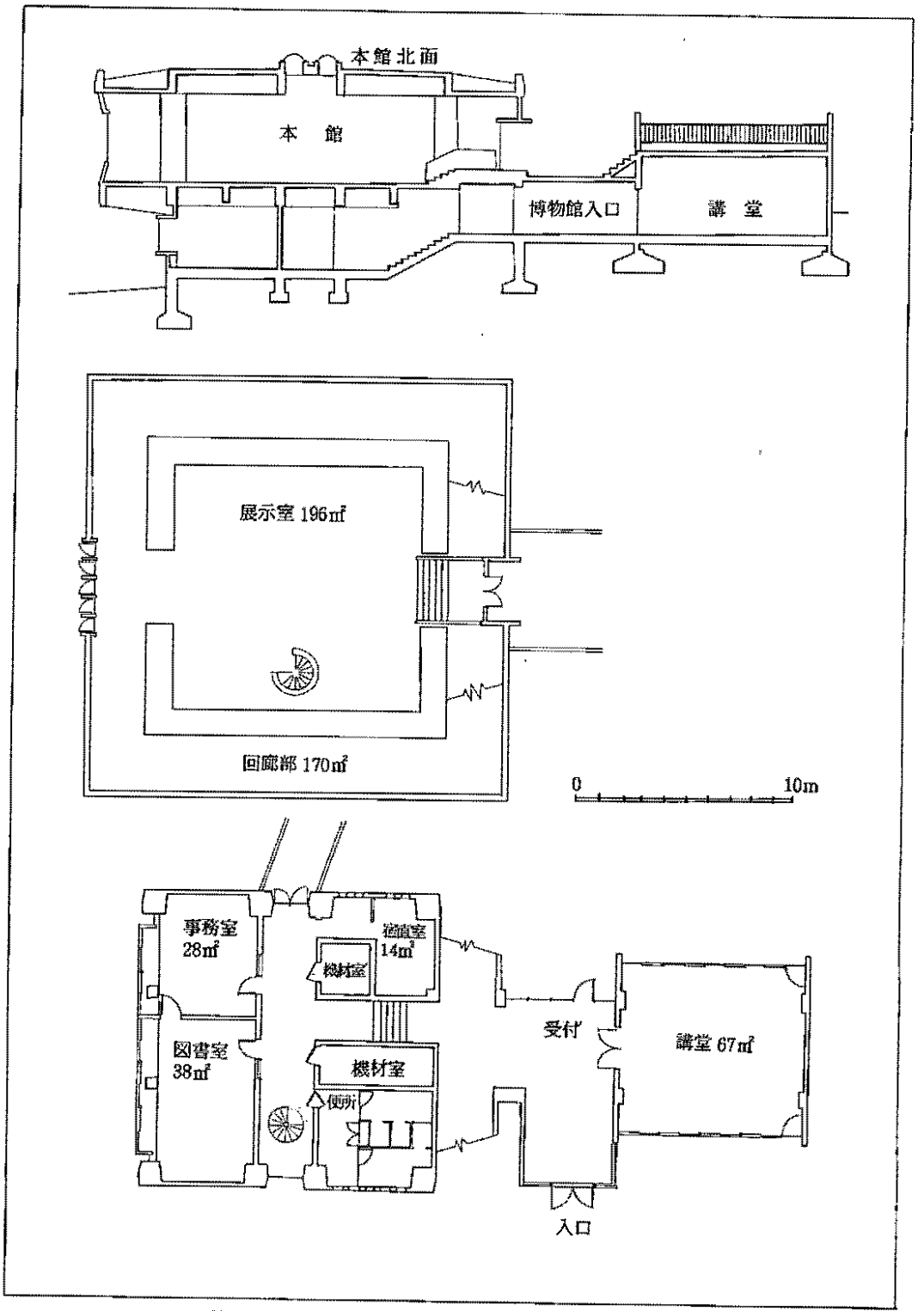
貝層断面保存施設　224.3㎡　鉄筋コンクリート造　平屋

住居址保存施設　282.0㎡　鉄筋コンクリート造　平屋

旧大須賀家住宅　254.3㎡木造　平屋　かやぶき



第１図　博物館本館周辺の建物配置図



第2図　加曽利貝塚博物館本館の立面図と平面図

2．博物館の組織及び事務分掌

所　属
教育委員会　社会教育部　文　化　課

名　称	千葉市立加曽利貝塚博物館

館長

管理係　　係長１．　主事１．　運転員１．

- 文書の収受、発送に関すること。
- 予算・決算に関すること。
- 施設の維持・管理に関すること。
- 入館料に関すること。
- 博物館協議会に関すること。
- 他の博物館及び関係団体等との連絡に関すること。
- その他

学芸係　　係長１．　学芸員１．　主事１．

- 博物館資料の収集保管及び展示に関すること。
- 博物館資料の調査研究に関すること。
- 博物館資料の貸借に関すること。
- 博物館研究報告書、紀要等の発行に関すること。
- 特別展、土器づくりの会等の教育普及事業に関すること。
- 博物館の社会教育、学校教育利用に関すること。
- その他

千葉市立博物館協議会

博物館運営の円滑化をはかるため、館長の諮問機関として置かれ、学校教育及び社会教育の関係者並びに学識経験者の中から、10名を市教育委員会が任命している。

3．調査研究活動

研究活動のメインテーマである「東京湾沿岸の貝塚文化」と「縄文土器製作技術の研究」は開館以来、継続して行われている。いずれも学芸職員が中心となり、独自の成果を収めているが、とくに土器製作研究は土器づくり同好会との協同研究によって豊富な実験データが得られるようになった。また、研究の進展に伴い、土器製作技術の問題から、その用途の研究へと発展しつつある。

昭和61年度の委託研究は、加曽利南貝塚の貝層部周辺における遺物包層中の花粉分析（縄文中期・後期）を県立幕張西高校教諭・田原豊氏に依頼し、縄文時代の植生復原を試みた。台地上の土中における花粉分析は初めてである。

4．教育普及活動

(1) 各種講座と開館20周年記念特別講座

昭和61年度は、加曽利貝塚博物館の開館20周年にあたり、記念事業として特別講座「加曽利貝塚の自然と文化」を開催した。これは考古学における発掘調査の成果だけでなく、地理学、植物学、動物学、人類学などによって、加曽利貝塚における縄文人の生活の様子を多角的にとらえ、当時の厳しい自然条件の中で彼らがどのようにして全国最大規模の加曽利貝塚を築き上げてきたのかを探ろうとするものである。講座の内容、期間は右表のとおり。全6回のうち4回は、東京大学名誉教授・鈴木尚氏ら各分野の先生方の講演を都賀地区コミュニティーセンターで行い、5回目の野外観察は加曽利貝塚にて実施した。受講生は市民100名を市政だよりで公募したが、加えて県内埋蔵文化財担当者40名の参加を得て盛況のうちに終了した。

また、体験学習「土器づくりの会」は例年どおり、春（一般市民・20名）夏（市内小学生・

開館20周年記念特別講座
「加曽利貝塚の自然と文化」

	月／日	講座内容と講師	
		午後1：00～3：00	午後3：00～5：00
1	5／11	・開講のことば　片岡館長 ・「遺跡と博物館」 国立歴史民俗博物館 岡田茂弘	・「環境考古学と加曽利貝塚」 筑波大学教授 加藤晋平
2	6／8	・「遠くから運ばれた石」 埼玉大学教授 新井重三	・「骨からみた縄文人の生活」 東京大学名誉教授 鈴木尚
3	6／29	・「食料になった貝と魚とケモノ」 早稲田大学講師 金子浩昌	・「縄文時代の土器」 千葉大学教授 麻生優
4	7／20	・「花粉からみた縄文時代の植物」 幕張西高教諭 田原豊	・「東京湾東岸における縄文海進と海退」 市文化財保護審議会長 武田宗久
5	9／7	野外観察実習（加曽利貝塚） ・「加曽利貝塚の地形」 明治大学教授　杉原重夫	・「加曽利貝塚の花草木」 市都市緑化植物園相談員 小滝一夫
6	10／5	・「貝塚とは何か」 市文化課主査 後藤和民	・パネルディスカッション 「加曽利貝塚における自然と文化」 司会　麻生優 パネラー　新井　岡田　金子 杉原　田原　後藤 ・閉講のことば　片岡館長

30名）、秋（一般市民・20名）の3回実施した。

「文化財めぐりの会」は、博物館友の会と共催で実施し、市原市・長南町の文化財を現地見学した（講師・田中喜作氏）

「郷土史講座」は博物館講堂にて、小池裕子・埼玉大学助教授による講演「貝塚の貝は、いつとられたか？」を開催した。

(2) 博物館実習生の館務実習

博物館の専門職員である「学芸員」になるには、大学で博物館学などの規定の単位を履修するなど、学芸員の資格認定を受けなければならない。当館では、昭和44年より、県内および近県における各大学の学芸員養成課程の実習の場として、実習生（学生）を受け入れている。

館務実習の期間は10日間で、例年だと約10名の学生を受け入れているが、昭和61年度は千葉大学学生3名の館務実習を行った。

5. 展示活動

(1) 常設展の概要

展示テーマ 「東京湾沿岸の貝塚文化」－貝塚を残したむらびとたち－

展示室は、中央部の単室（ほぼ正方形、面積約196㎡）と、それをとりまく回廊部（面積170㎡）から成る。回廊部は機能的に遺物類の展示が不可能なため、写真・イラストパネルによって展示構成されている。

中央部の展示室においては、別表のように加曽利貝塚等から出土した縄文土器、石器、骨角器等の生活用具のほか石棒や石器の着装復原などのレプリカも展示している。また、貝塚から出土した獣骨、魚骨、貝類も展示し、当時の食生活についてもうかがい知ることができるよう考慮した。

この他に電動の地形模型やカラーコルトンボックスが展示室の要所に配置され変化をもたせた展示構成となっている。順路は正面玄関より受付けを通り、左廻りで回廊部から中央の展示室に入り、順路に沿って①～㊻の展示コーナーが設定されている。

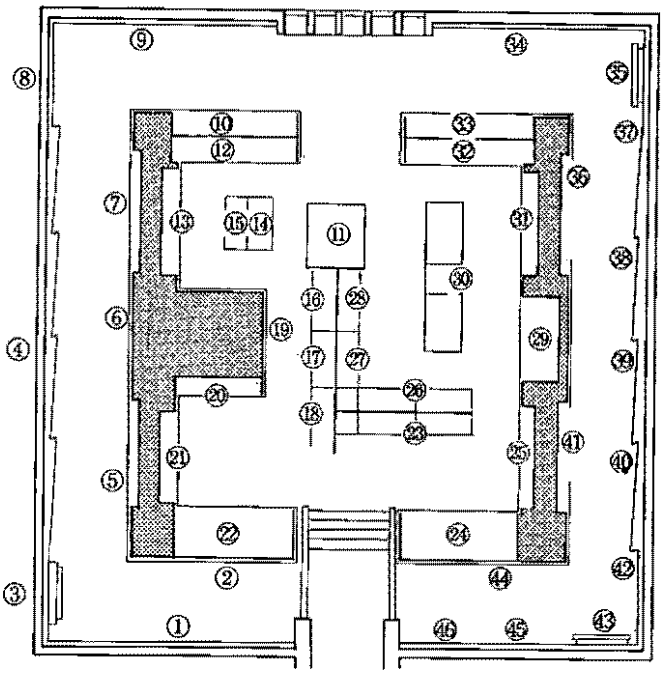
(2) 展示構成

常設展示室における各コーナーのタイトルと内容は次のとおりである。

①「全国の主な貝塚」 日本列島における貝塚分布模型、国指定史跡の全景パネル。

②「千葉市の貝塚」 航空写真を使用した大型パネルに市内の貝塚分布を表示。

③「東京湾は貝塚の宝庫」 東京湾沿岸における貝塚分布の変遷を光電管の点滅によって時期別に表示。



第３図　常設展「東京湾沿岸における貝塚文化」展示構成

④「縄文時代集落の変遷」　早・前期、中期、後期、晩期遺跡の分布図と代表的遺跡の全景写真および説明パネルで構成。

⑤「加曽利Ｅ式と加曽利Ｂ式土器」　加曽利貝塚出土品と解説パネルにて構成。

⑥「加曽利貝塚の発掘調査」　昭和39年に発掘状況を大型写真パネルで紹介。

⑦「むらを掘り出す」　加曽利北貝塚と東傾斜面の発掘状況を写真パネルにて解説。

⑧「加曽利貝塚におけるむらの移り変り」　大型貝塚（生産の場）と小型貝塚（日常生活の場）の立地状況を地形測量図によって解説。

⑨「文化のうつりかわり」　縄文時代を中心とした、生産・住居等の変遷をパネル解説。

⑩「東京湾の貝類」　房総半島における、今から30万年前、10万年前、６千年前の自然貝層中出土の貝化石を展示。

⑪「東京湾のうつりかわり」　今から２万年前、６千年前、３千年前、現在の４時期における東京湾の海岸線の変化と縄文遺跡の分布を電動模型で表示。

⑫「魚のとりかた」　貝塚出土の魚撈具の展示とイラストパネルによる魚撈活動の紹介。

⑬「海のめぐみ」　貝塚出土の魚骨類と東京湾沿岸で獲れた現生魚類の剝製を展示。

⑭⑮「海のめぐみ」　カジキマグロなど外洋性魚類とウミガメ、イルカ等の出土品を展示。

⑯⑰⑱「当時食べられた貝」　東京湾の内湾貝塚出土のハマグリ、アサリ、岩礁性貝塚出土のアワビ、サザエ、その他全国各地の貝塚出土の貝を、現生貝類と比較展示。

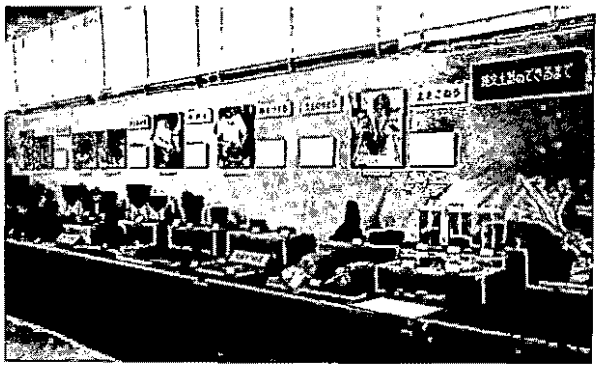
⑲「魚とりの道具のうつりかわり」　モリ、ヤス、釣針などの変遷をイラストで表示。

⑳「ケモノを捕える道具」　貝塚出土の石鏃と石槍およびその着装復原模型を展示解説。
㉑「食べられたケモノ」　貝塚より出土したシカなどの獣骨やガンなどの鳥骨を展示。
㉒「加曽利貝塚周辺のケモノ」　シカ等11種の剝製を使ったジオラマ展示。
㉓「石でつくった生活の道具」　磨製・打製石斧、石皿等の出土品と着装復原模型。
㉔「貯蔵が盛んになる」　加曽利貝塚など市内遺跡出土の縄文中期土器17点を展示。
㉕「生活が複雑になる」　加曽利貝塚ほか市内遺跡出土の縄文後期土器15点を展示。
㉖「アクセサリー」　石製ペンダント、貝輪、土製耳飾、骨角牙製品などを展示。
㉗「特殊な土製品」　土偶、土版など祭祀的臭いの強い土製品の展示。
㉘「特殊な石製品」　縄文後期～晩期の石棒、独鈷石、石冠などを展示。
㉙「村のシンボル」　県内最大の印西町南山遺跡出土の石棒レプリカ、市内東寺山町出土の大型石棒を展示。
㉚「埋葬された人骨」　貝塚内に埋葬された人骨２体（男・女各１体）を保存処置後ガラスケースに収納・展示、両者の中間に回転式の頭骨復原模型を設置。
㉛「むらの行事」　注口土器、異形台付土器などの特殊土器を展示。
㉜「赤ん坊のとむらい」　幼児埋葬に使われた、縄文中期～後期の甕棺４点を展示。
㉝「犬のとむらい」　貝塚内に埋葬された犬骨２体を保存処置を施して展示。
㉞「死者をほおむる」　埋葬人骨の出土状態を写真パネルで解説。
㉟「埋葬されなかった人骨」　加曽利北貝塚の住居址内から発見された人骨群（４体）の出土状態をカラーコルトンボックスで再現。
㊱「縄文土器を作る」　縄文土器の製作工程を、土器製作研究の成果に基づいて展示。
㊲㊳㊴「土偶をつくるむら」「アクセサリーをつくるむら」「生産用具をつくるむら」など、特産品をつくる集落の分布と、その代表的遺跡を写真パネルで紹介。
㊵「遠くから運ばれた石材」　加曽利貝塚出土の「石」の原産地をパネルで紹介。
㊶「物と物との交換」　加曽利貝塚出土の石器とその産地採集の標本を比較展示。
㊷「塩をつくるむら」　製塩土器の出土遺跡分布と製塩遺跡の調査状況をパネルで解説。
㊸「現代の製塩」　宮城県・塩釜神社の藻塩焼神事等をカラーコルトンボックスで再現。
㊹「現代の貝塚」　広島県草津におけるマガキの投棄状況を大型写真パネルで展示。
㊺「貝塚とは何か」　県内の貝塚を伴う集落の変遷をイラストパネル（グラフ）で表示。
㊻「むらの集会場」　昭和48年の調査で発見された特殊遺構の全景を写真パネルで展示。

なお、特別展は博物館本館に隣接する講堂において、毎年11月に土器づくり同好会と共催で「縄文土器作品展」を開催している。これは前章の博物館活動の経過の中でふれているので、ここでは省略する。

6．博物館友の会と土器づくり同好会

(1) 加曽利貝塚土器づくり同好会の活動



◀第4図　特別展「子どもの土器づくり」
（昭和54年）

① 同好会の概要

加曽利貝塚博物館土器づくり同好会は、館主催の「土器づくりの会」から発展した。当初の同好会に対する博物館の対応は、まず土器づくりの場を提供し、土器づくりに関する指導、助言を行うことであった。

現在も館の専門職員が同好会の要求に応じて指導、助言を行なっているが、同好会の活動そのものは完全に独立しており、会の目的である「縄文時代の生活復原による正しい歴史、文化の追求」へとしだいに近づきつつあるように思える。またその機関紙「縄文の炎」に発表された各自の研究成果や細かいデータは、会員独自の発想から生まれたものであり、考古学者とは異なった視覚でとらえられており博物館としても学ぶところが多い。土器づくり同好会が発足してから11年目を迎えた現在、もはや同好会は単なる博物館所属のグループではなく、館との共同研究者としての役割を果しているといえる。

② 同好会の事業

現在の同好会の事業は次の通りである。

（イ） 加曽利貝塚博物館主催「土器づくりの会」（市民対象）指導補助。

年3回実施。毎回、同好会員5～6人が技術指導員として参加している。

（ロ） 同好会主催「土器づくりの会」（同好会員対象）。

於加曽利貝塚博物館、年3回実施。

（ハ） 地元自治会、ボーイスカウトなどの「土器づくり出張指導」

年間1～2回ほど同好会が独自で外部に対しての教育普及活動を実施している。

（ニ） 「土器作品展」（加曽利貝塚博物館との共催）。

於加曽利貝塚博物館講堂、年1回実施（11月1日～11月30日）

同好会最大の行事。その年の活動の成果を発表すると共に、市民サービスとして土器づ

くりの実演と、複製土器による試食会を行なっている。昭和54年度の国際児童年を記念した「土器作品展」は１ケ月間の入場者が12,000人を記録した。

（ホ）「縄文土器研修会」於加曽利貝塚博物館講堂

各年度の活動テーマに沿って、同好会員のための学習会を開いている。

（ヘ）「現地見学会」（県外の遺跡および博物館）

同好会員の学習活動の一環として、加曽利貝塚だけでなく周辺地域の遺跡や博物館をたずねている。

（ト）機関紙「縄文の炎」の発行

会員相互の情報交換や相互研修の目的のため、昭和55年に創刊された。既刊数は次のとおり。

創刊号（昭和55年発行）B５判24頁、寄稿者21人　第２号（昭和57年発表）24頁、寄稿者17人　第３号（昭和59年発表）42頁、寄稿者49人

第５図　土器づくり同好会見学会　▶
新潟県与板市立歴史
資料館前にて（昭和61年）

(2)　加曽利貝塚博物館友の会の活動

①　「守る会」から「友の会」へ

友の会の前身は、昭和30年代の京葉工業地帯造成に伴う開発により、加曽利貝塚が破壊の危機に直面した時に、この遺跡保存を強く願った学者、実業家、ジャーナリスト、国・県・市議会議員等120名が設立した団体「加曽利貝塚を守る会」である。昭和38年６月に結成（当時の会長、谷口久治千葉大学々長）以後、マスコミを通じての啓蒙運動、全国的な署名運動をはじめ、関係当局への陳情等々を活発に展開し、幾多の困難を克服して、遺跡の買収、博物館建設に漕ぎ着けるまでの原動力となって活躍してきたという輝かしい業績を残している。

目的達成をみた昭和41年11月、博物館の開館に先立って「守る会」は解組、発展的に誕生したのが「加曽利貝塚友の会」（当時の会長　鈴木正夫千葉大学名誉教授）」である。

② 発足当時の活動

30人弱からなる「友の会」は、開館当時、博物館の人員や予算等が不充分であり、施設も貧弱、未整備で、その機能を充分に発揮できる状態でないことから、その不足を補い、市民に啓蒙とサービス活動を進めること等が主なる活動内容であった。

その後、遺跡の範囲も拡大し、博物館としての形や内容も漸次整備され、その重要性の認識が定着してくる昭和50年代後半になって、会としても形と内容を整えていこうとする機運が漸く高まってきたのである。

③ 友の会の現状

会の再生化を図るために、最初に取り組んだことが一般市民より会員を募ることであった。これに並行して、友の会会則を整備し、組織づくりを進めているが、その歩みは遅々たるものである。

しかし、その結果現在では、会則も新しく改訂され、会員も総数80余名を数えるに至り、会の活動（事業）は、多くの課題を抱えながらも次第に充実の方向に進んでいるといえよう。以下、会の内容を抄述する。

会　　長　　土屋　秀雄（千葉日報社々長）昭和55年度より就任

役　　員　　副会長　、顧問、常任理事、理事、監事、事務局長等24名

会の目的

- 史跡加曽利貝塚の保存と活用に協力すること
- 博物館の事業に関すること
- 会員相互の親睦と研修

主な事業

- 加曽利貝塚と博物館を解説するパンフレット（英文入り）や絵葉書の作成・販売
- 加曽利貝塚の学術的意義を啓蒙する図書類の作成・販売
- 史跡を現地で観察し、自らの実感を得ることを目的とした館との共催事業（昭57年度より）「文化財めぐりの会」の実施（現行，年1回）
- 会員相互の情報交換と、市民へのP・Rを兼ねた会報誌「貝塚」の発行（昭59年度より、現行年1回）
- 研修会の実施（現行年1回）
- その他

第6図 「文化財めぐりの会」印旛村師戸城址・昭和52年

第二部

将来の展望と計画

一、２１世紀の博物館をめざして
―― あと１５年 ――

早稲田大学名誉教授
滝口　宏

千葉県がわが国でも有数の貝塚県であることは衆知のことである。しかも、わが国が世界でも有数の貝塚国であることを考え併せると、何としてでも、千葉に模範的な貝塚の保護と研究の施設を置かなければならないと、私は思っている。

加曽利貝塚は、その規模において日本最大であるばかりでなく、その貝塚成立の歴史的意義からみても、さらに東京から近かったということもあって、過去ここを訪れた愛好者ないし積極的な調査研究者とその業績についても・つまり「学史的」な見地からも、取りあげるべき第一の貝塚である。このことについては、誰も異論のないところであろう。

大正13年における東京大学人類学教室や、昭和10年における史前学研究所の大山柏さんなどの、当時としては組織的な学術調査によって、縄文中期の加曽利E式と同じく後期の加曽利B式が、ここを標式遺跡として確立されている。そのころは、このあたりもまだ千葉市郊外の田園地帯で、貝塚の探訪にも一日がかりであった。ところが、戦後の都会地近傍の開発造成という土地利用方法がここにも及び、危うく全面破壊されるという運命が待ちかまえていた。地元研究者はもちろん、全国的規模での保存運動が起こり、それが効を奏して、国・県・市の理解もあり、この難を避けて、全面保存を前提として公有化されるに至った経緯は、まだ記憶に新しい。

そこで当然ながら、この貝塚をより完全な姿で保存することに望みがふくらんでくる。それは少なくとも、貝塚形成時における立地条件をありのまま再現するために、東側台下の支谷（坂月川）とその向い側の台地一帯を、その自然景観を含めて保存すること、また、８字形に連なっている南・北両貝塚の西側周辺に展開する関連遺跡や遺構を、できるだけ広く確保すること、この２点をまず強く要望したい。

８字形の貝層部の周辺には、かなり広範囲に小型貝塚が点在しており、貝塚形成時の長い期間中にも、その前後の時期にも人々の居住の痕跡がある。つまり、貝塚を中心にして、さまざまな人々が、長期にわたっていろいろな形でこの地を利用していたことが、貝塚博物館の学芸員諸氏によって把握されている。これらの痕跡も、加曽利貝塚の存在を浮き彫りにする重要な意義をもつものであるから、貝塚と共に当然保存すべきである。

これまで、武田宗久さんが市の文化財保護審議会々長のお立場から、率先して加曽利貝塚を守ってこられたばかりでなく、後藤和民さんをはじめ庄司克さんたち学芸員の、この貝塚に寄せる情熱にも見るべきものがある。しかも、進んで各種の実験的・分析的研究を

重ねながら、貝塚成立の理由を石器・石材などとの交易のために保存食糧の共同生産を行った結果であると解明した。さらにそのため、この貝塚の人たちが、東側の坂月川の流れを下って海岸に出て貝を採り、曳舟によってここに大量に運搬したものと推定するなど、従来の貝塚成立説とは異なる生産技術面での解釈を与えた研究は、貝塚研究を数歩進めたものである。

最近、久々に千葉に行って加曽利貝塚を訪れるとともに、上記の方々にお会いしたところ、千葉市では、後藤さんが史跡整備計画を担当し、加曽利貝塚についても、すでに綿密な保存・整備計画が立てられていることを知った。そこで、私なりに考えて、やがて迎えるであろう15年後の貝塚博物館35周年記念式典の折の加曽利貝塚の姿を頭に描き、それを私も共に大いに祝うことにした。そのとき私は、こんなメッセージを贈りたい。

「加曽利貝塚は、国・県・市の行政当局の絶大の支持と、学界・教育界・市民諸氏総合の尽力によって、この15年間に8字形の貝層部の整備はもちろん、その周辺部の自然地形も広く確保され、新博物館は谷の対岸の広々とした場所に設置され、それに施設の完備した『貝塚研究所』が付設されている。この研究所は、世界におけるこの種最高のもので、貝塚研究のみならず、広く石器時代人類史研究のメッカとして、国内外の機関と緊密な連携をもつもので、最新の装置をもち優れた人材によって研究が進められることが約束されている。佐倉の国立歴史民族博物館とは姉妹関係にある研究機関としても、その存在が広く認められつつある……」。

加曽利貝塚博物館の創立35周年とは、西暦2001年、21世紀開幕の年である。その日の館長さんのうれしそうな笑顔を心に描きながら、いまからでも遅くない。あと15年をめざして、皆で力を合わせて邁進したいものである。そして15年たった暁には加曽利貝塚も「野外博物館」として定着し、21世紀にふさわしい明快な新型の名所になっているに相違ない。

加曽利南貝塚調査時の滝口宏先生（中央）左は慶応大学・清水潤三教授、右は明治大学・杉原荘介教授

二. 加曽利貝塚の野外博物館構想

元埼玉大学教授
新 井 重 三

1．加曽利貝塚の保存と活用の途をさぐる

加曽利貝塚が世界でも稀にみる貴重な考古学的文化遺産であることは今更申し述べるまでもない。この文化財を永く後世の人々に継承する責務と現代に生きる人々に、その恵みを分けること、即ち保存と活用は目下急務の課題である。特に土地開発の波が足下にまで及んでいる昨今、多くの識者が共に、その成り行きを危惧しているところである。

千葉市史跡整備基本計画策定委員会では過去数年にわたって、この課題に取り組み、前述した保存と活用という一見矛盾対立しているかにみえる両者を両立させる方途として野外博物館構想を浮上させた。千葉市は①市街地を中心として、その周縁、後背地は史跡の園によって飾られていること②史跡はその環境と共に保護されることにより一大野外博物館となり得ること③この野外博物館は学会にとっては研究情報の泉となり、教育界にとっては自然のままの教室となり、かつ一般市民にとっては、いこい、やすらぎ、そして生涯学習の場を身近に持つ郷土の誇りを余すところなく満足させてくれる場として位置づけられるのである。筆者も野外博物館構想に賛同した者の一人として若干私見を述べる。

2．野外博物館の概念の諸相のなかで

野外博物館については博物館関係者のなかでは既に定着している言葉ではあるが、定義があいまいのまま、言葉だけが一人歩きしてきたため誤解されているむきも多いので、一応整理しておく。そのなかで加曽利貝塚野外博物館の位置を確認しておくことにする。まず、広義の野外博物館の語源を欧米先進国に求めることはできない。Open-air Museum を野外博物館と訳す人がいるが、それは誤りである。日本で最初に「野外博物館」なる用語を使った人は1949年に木場一夫が彼の著書「新しい博物館」の中で用いている。しかし定義はなく、内容からみると筆者の表１の中にある現地保存型野外博物館のみで具体例として自然観察路・路傍博物館そして考古遺跡博物館があげられている。従ってスエーデンのスカンセンなどで代表されるOpen-air Museum は収集展示型野外博物館として排除されている。本来は、それが正しいのかも知れないが、現在では博物館明治村、川崎市日本民家園、箱根彫刻の森美術館のように、本来、その土地とは何の縁もゆかりもないところへ展示資料を運び込んで観せている青空市場的博物館に対しても野外博物館とよんでいる

表1．野外博物館分類一覧表と加曽利の位置　　新井重三（1987）

分類				野外博物館の名称	具体的博物館名
野外博物館（FIELD MUSEUM）	現地保存型野外博物館	総合		Combined Field Museum 人文・自然総合野外博物館	新構想：加曽利貝塚野外博物館
		自然系野外博物館	自然共通野外博物館	Nature Center（自然保護区）（自然公園）	大山自然保護センター（鳥取県）
				Environmental Museum（環境博物館）	白山自然保護センター（石川県）
				Nature Trails（自然観察路）	Bear Mountain Trail side Museum (U.S.A)
				Trail side Museum（路傍博物館）	Rocky Mountain Trail side Museum (U.S.A)
				National Monument（天然記念物）：	Yosemite National Park Museum (U.S.A)
				National Monument Museum（天然記念物博物館）	Dinosaur's National Honament (U.S.A)
				National Park（Visitor Center）ビジターセンター	山梨県立富士船津ビジターセンター
				National Park Museum（国立公園博物館）	埼玉県三峯山ビジターセンター
				Living Museum（生きている博物館）	Besano Fossil Museum (Italy)
			地学	Mining Museum（鉱山の坑内博物館）	足尾銅山坑内博物館（栃木県）
				Fossil Museum（化石の露頭博物館）	瑞浪化石博物館（岐阜県）
			生物	Wildlife Sanctuary（Refuge）野生生物保護区	伊豆沼（宮城県），サロベツ（北海道）
				Forest Conservation Center（森林保護センター）	仁別森林博物館（秋田県）
				海中公園（海洋水族館）	沖縄海洋水族館，下田海中水族館
		人文系野外博物館	歴史	Historic House（Building）歴史的家屋・建物	野口英世の生家（福島県），国宝犬山城（愛知県）
				Historic Site（史跡・遺跡博物館）	信濃国分寺資料館（長野県）
			民俗	Old-town（Village）Museum（古い町・村落博物館）	白川郷合掌村（岐阜県），妻籠（長野県）
				Folklore Museum（民俗野外博物館）	Welsh Folk Museum（ウェルズ民俗野外博物館）
			考古	Archaeological Site（考古遺跡博物館）	加曽利貝塚博物館（千葉県）
				Heritage Museum（遺物博物館）	Bishop Hill Heritage Museum (U.S.A)
			美術	Historic Arts Site（歴史的芸術史跡）	臼杵磨崖佛（大分県），敦煌（中国）
				Fork Arts Site（伝統民芸保存地）	小原村和紙博物館（愛知県）
	収集展示型野外博物館	総合		Combined Field Museum 人文・自然総合野外博物館	Skansen（スカンセン）スウェーデン
		自然系	地学	Rock Garden（岩石園）	長瀞総合博物館附属秩父石庭(埼玉県)
				Fossil Garden（化石園）	茶臼山恐竜園（長野県）
			動物	Zoological Garden（Park）動物園・水族館	日本モンキーセンター（愛知県）
				Wild life Park（サファリパーク）	富士サファリパーク（静岡県）
			植物	Botanical Garden（Park）植物園	東大附属小石川植物園（東京都）
				Arboretum（樹木園）	アリタキ　アーボレータム（埼玉県）
		人文系	歴史・民俗・考古・美術	Open-air Museum（青空博物館）	博物館明治村（愛知県）
				Out-door Museum（戸外博物館）	人間博物館リトルワールド（愛知県）
				Old-town（Village）【古い町（村）博物館】	日本民家集落博物館（豊中市）
				Fork-art Museum（民俗野外博物館）	川崎市日本民家園（川崎市）
				Open-air Art Museum（野外美術館）	北海道開拓の村（札幌）
					箱根彫刻の森美術館（箱根）
					美ケ原高原美術館（長野県）

事実は認めざるを得ないように思われる。加曽利貝塚野外博物館は申すまでもなく、れっきとした現地保存型野外博物館である。

次に現地保存型野外博物館にも自然系野外博物館と人文系野外博物館とがある。欧米では考古学はその研究手法が自然科学的であることから自然史科学分野で扱っているが、筆者は日本の慣例に従って考古遺跡博物館は人文系野外博物館の分野に位置づけた。第1表で示すように現在の加曽利貝塚博物館は人文系野外博物館として位置づけることが可能である。しかし千葉市史跡整備基本計画策定委員会では、野外博物館としての整備方法として次のように述べている「遺構などを現地に固定し、その周辺に自然地形や現存植生を保全し、あわせて目標植生を復元して野外博物館として整備する」。ここで目標植生と述べている内容は、縄文貝塚をとりまく植生は縄文時代の植生がふさわしいという発想から来ているものであり、保存、育成の対象は遺跡から発展して地形、地質、植生にまで及んでいることを意味する。このことは展示、教育の対象として自然環境が位置づけられたことになり、自然系野外博物館をも包含した総合野外博物館への飛躍を意味する。従って第1表で示したとおり、新構想の加曽利貝塚野外博物館は自然と考古（学）を完全に結合させた総合野外博物館たり得るのである。このような博物館は未だ日本では実現をみていないが、加曽利がその第一声をあげることは、すべての人々が期待し、祝福することであろう。

3．総合野外博物館構想の基本理念

加曽利貝塚地帯が一大総合野外博物館として再出発することは国際的にみても輝かしい門出であることに間違いはない。日本におけるモデルとなることを思うとき、失敗は許されない。整備に当たってはやるべきことと、やってはならないことを明確にしておく必要がある。まず、やるべきことから述べることにする。筆者は整備の基準として、博物館法の精神をベースに据えて検討を試みた。表2は博物館法にもとづく機能と野外博物館としての整備指針、さらに具体的な設備や施設についてまとめたものである。

博物館の機能を大別すると目的機能として研究・保存・伝達（教育）の3機能があり、その目的を達成させる手段として調査・収集・展示がある。それらの機能を達成させるためには当然のことながら設備、施設、器具、機械類が必要であり、専門職員が必要になる。

次に野外博物館として体面を保つ上に必要な規模は加曽利貝塚の全体像が理解できる広さが最小単位になるであろう。台地の存在は低地があることにより理解されるので、貝塚遺跡に隣接する谷部は勿論、その対岸の斜面林も完全に博物館用地として確保し保存されるべきである。また、博物館活動に必要な施設・設備は充実すべきであるが、野外博物館は景観そのものが展示であるので、展示にとって不必要な施設はできるだけ移転して直接

表 2. 加曽利貝塚総合野外博物館構想

── 博物館法を基準として ──

新井重三（1987）

No.	博物館法による機能	整備指針	設備・施設・職員
1	資料を収集し、保管育成する（博物館法第2条）	貝塚及び縄文時代に関する資料（図書・文献・実物資料等）を、内外より収集する。また、保存区域内の植相その他の環境は保存と同時に育成に努める。	資料の収蔵施設をつくる。収集のための事前調査器具。環境保存と育成施設。埋蔵文化財の保存、保護施設
2	資料に関する調査・研究を実施する。（博物館法第2条）	加曽利貝塚に関する調査、発掘、研究を実施する。 加曽利貝塚を知るために当該地域外の考古学的調査・研究を実施する。	調査用機械の整備 研究用設備・施設の設置 学芸員の充実(調査・研究要員)
3	資料を展示して、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供する。（博物館法第2条）	野外博物館の場合、その主たる展示場所は野外であることに留意し、野外展示を実施すると共に路傍博物館(建物)も整備する。	路傍博物館の設置 野外見学路の整備 野外展示施設の整備 園内管理・清掃職員の整備
4	一般市民の教養・調査研究・レクリエーション等に資するために必要な事業を行う。（博物館法第2条）	レクリエーションの内容(質・量等)については法律では具体的には示されていないが、調査研究のため以外にレクリエーションを目的として博物館を訪れる市民もいるという意味と解されるので、興業的レジャーランドにしてはならない。	休憩施設、救護施設 博物館売店 博物館食堂 パーキングエリア 手洗場（トイレ）
5	分館を設置し、資料を本館外でも展示すること。（博物館法第3条2項）	野外博物館の場合、本館は入口附近に設置し、主としてオリエンテーション展示を行い、さらに見学コース沿いに分館をいくつか設置する。この分館をトレイルサイドミューゼアム（Trail side Museum）とよんでいる。	博物館本館（野外博物館の入口附近に建て、景観を傷つけないように配慮する。） 分館はTrail side Museumとする。
6	一般公衆に対し、必要な説明、助言、指導を行い、又は研究室、実験室、工作室、図書室等を設置利用させる。（博物館法第3条3項）	野外博物館の園内説明要員を充実させる。（専任のインストラクター、又はボランティア） 相当広い工作室及び野外空間を用意して土器作り、及び土器による煮炊き実験、試食会等、体験学習により、参加型博物館の実現を目指す。	専任インストラクター ボランティア 土器作り講習・研究会 煮炊き実験・試食会 石器作り、（設備） 石器活用実験・擬似狩猟
7	博物館資料の保管及び展示等に関する技術的研究を行う。（博物館法第3条5項）	野外において保存と展示を両立させることはきわめて困難な課題であり、現在も未解決の分野が多いので保存科学の研究を進める。同時に、野外展示の方法、教育効果の測定、維持、管理面等、博物館学的研究の日本の拠点として、その実現を目指す。	保存科学研究施設・設備， 野外展示の研究
8	博物館は学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。（博物館法第3条10項） 博物館は「友の会」などを組織して、継続的利用をはかる。（公立博物館の設置・運営に関する基準第8条の取り扱い）	総合野外博物館は学校における考古分野は勿論であるが、それ以外にも社会科教育、理科教育、美術教育等の現場として好適であるので学校と協力して具体化する。 博物館は外部諸団体と提携し、風通しをよくし、相互協力して発展をはかるように努める。	学校教育への援助設備 （貸出しキットの作製） 体験学習活動設備、器具、「友の会」集会室博物館教師の配置 （担当指導主事制度の導入）

影響のないところに建てるべきである。その意味で博物館本館は保存区域を避けて建てることが望ましい。活用のための施設・設備は、ややもすると破壊につながりかねないので特に注意が必要である。市民の憩いとレクリエーション施設は保存と活用の接点にある場合が多いので、そのような場合には保存を第一義に考える方が無難である。筆者が表2にまとめた設備、施設、職員等を整備することだけでも相当の時間と期間がかかると思われるので、まず野外博物館としての施設・設備を整えることから始めるべきである。

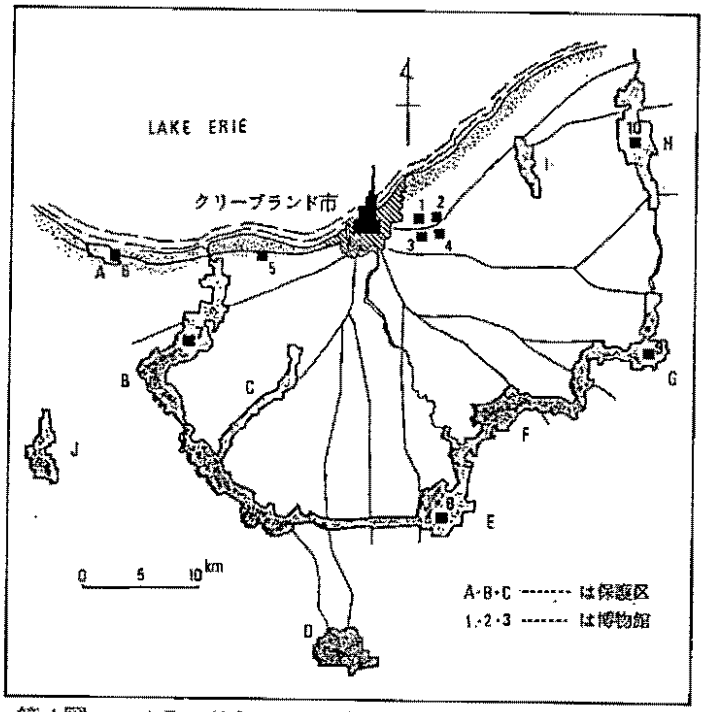
この種の整備に当たっては都市公園サイドの思想が導入される場合が多い。園内は花壇等で美しく飾られ、道路はアスファルトで舗装され、池には噴水が空中に舞うといった具合になる。このような整備は野外博物館とは全く相容れないので、くれぐれも注意すべきである。さらに危険なことは遊園地化することである。整備に当たって、やってはいけないことを明確にしておくことが大切である。

4．加曽利がさらに目指すもの

加曽利貝塚の野外博物館構想は加曽利の実現によって終わるものではない。史跡整備基本計画策定委員会が千葉市で計画している青写真からみれば加曽利は、その第一歩としての足場を得たにすぎない。千葉市内に分布する史跡、遺跡については既に委員会において報告書として出版されているとおり、おびただしい数にわたっており縄文遺跡だけでもその遺跡は596地点に達している。それ以外に先土器時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世にわたる集落、生産址、古墳、城館址、廃寺址等歴史の証人ともいうべき文化財がひしめき合っている。これらの貴重な資料を開発による破壊の波から護るために、いくつかのブロックを保護区として確保し、これらのブロックは史跡を自然環境と共に保護する。そして、それぞれのブロックは緑の回廊で結ぶという雄大な構想である。私はこの案をエメラルドネックレス構想とよぶことにする。このネックレスは千葉市をとり囲み、千葉市があたかもエメラルドのネックレスを首にかけたかに見える姿になる。そして、このネックレスゾーンを一大総合野外博物館として整備しようとするものである。そのとき、おそらく加曽利貝塚野外博物館は、そのヘッドクォーターとして位置づけられるであろう。

エメラルドネックレスは既にアメリカのクリーブランドで実現している。その意味において日本版エメラルドネックレスの資料としてクリーブランドの実態を紹介しておくので参考にされることを望む。

筆を置くに当たり、一言附言しておきたい。加曽利貝塚とその周辺地域の整備の基本方針として野外博物館構想が採用された場合にはその設計施行については全面的に千葉市史跡整備基本計画策定委員会ならびに千葉市教育委員会文化課の指導を受けるべきである。万が一にも整備の名のもとの開発にならないことを念願するものである。



1. クリーブランド自然科学博物館
2. クリーブランド美術博物館
3. ウェスタンリザーブ博物館・図書館
4. ウェスタンリザーブ大学（博物館）
5. ストーン博物館
6. エリー湖子供博物館
7. ロッキーリバー路傍博物館
8. ブレクスビル路傍博物館
9. サウスチャグリン路傍博物館
10. ノースチャグリン路傍博物館

第4図　エメラルドネックレス保護区と野外博物館

表3.　エメラルドネックレス内の各保護区の面積・施設数・利用者数（1962）

記号	保護地区名	面積（エーカー）	施設数	利用者数（1961）	利用者数（1962）	利用上昇率(%)
A	ハンティントン保護区	103.3	14	442,000人	451,700人	2.2
B	ロッキーリバー保護区	4,610.7	181	6,041,000	6,655,500	11.0
C	ビッグクリーク保護区	379.9	51	262,000	264,600	1.0
D	ヒンクレー保護区	1,675.3	76	1,159,000	1,360,600	17.4
E	ブレクスビル保護区	1,842.3	69	594,000	627,900	5.7
F	レッドフォード保護区	1,246.7	46	870,000	870,000	0.0
G	サウスチャグリン保護区	519.0	49	659,000	875,400	33.6
H	ノースチャグリン保護区	1,685.9	68	1,020,000	1,380,000	35.3
I	ユークリッド保護区	350.9	52	598,000	670,500	1.6
J	ブラッドレーウッドス	—	—	—	20,000	—
Jは1962年新設、現在建設中につき詳細は不明				11,645,000人	13,113,200人	12.7

表4.　エメラルドネックレス内の諸施設（1962）

No.	施設名	数量	No.	施設名	数量	No.	施設名	数量
1	ドライブコース	120 km	8	スケート場	5	15	野外調理施設	14
2	乗馬コース	137 km	9	水球場	3	16	軽食スタンド	7
3	自動車駐車場	153	10	記念広場	4	17	ゴルフコース	15
4	ピクニック苑地	85	11	ボート場（池）	2	18	自然観察路	4
5	球技場	122	12	キャンプ場	17	19	路傍博物館	4
6	遊技場	20	13	ブランコ	122	20	子供博物館	1
7	スキー場	17	14	休憩場	16	21	動物公園	1

第5図　野外博物館内に設けられている自然観察路を行くと格調高い路傍博物館（Trailside Museum）の標識が眼につく。下に吊してある説示板には見学者に告げる緊急情報の印刷物がはってある。リスや鹿の住む静かな森だ。アメリカ、クリーブランドのエメラルドネックレスにて。（新井重三撮影、1961）

第6図　アメリカユタ州の恐龍野外博物館の現地展示、恐龍化石を発掘している学芸員も、ここでは展示構成の重要な位置を占めている。加曽利貝塚野外博物館でも、こんな展示（発掘現場）を実現させたいものである。　（新井重三撮影、1971）

三. 遺構の保存科学的研究の推移

元東京国立文化財研究所保存科学部長
登 石 健 三

1 発掘遺構表面の保存対策の流れ

発掘に携わった人なら誰でも知っているように、新しく露出した地表は日光照射や乾いた空気との接触に起因する水分蒸発によって、忽ち乾燥して亀裂を生じたり崩れたり、雨のため表土が流されたり、霜柱で表層土が落下したり、風によって土粒や塵埃で埋められたり、或は草木の繁茂によって隠されたり、色々の変貌を引きおこす。従ってその遺構地表の形や状態をそのまま永く遺そうと思えば、自然そのままというわけにゆかず、必ず保存の手段を加えざるを得ない。

これまでの保存手段には大体二つの方策が採用されてきた。一つは表面を合成樹脂で強化することであり、他は覆屋で雨露風雪や日光照射を防ぐことである。両者は互に相俟って欠かすことが出来ない。しかも植生によって形を保つ試みをしたケースもあったが、これでは表面は地表という感じとは少々異ってくる。

合成樹脂で固めない地表は、たとえ乾燥がおこらないでも、極めて弱いため、例えば硬い靴で踏むとか覆屋建設の際の一寸した作業ミスによる衝撃でも、跡がついたり壊れたりといったことがおこるから、この処置は是非必要なことである。

しかし土表面は乾かせば割れるものであり、乾かさねば土粒子間には毛細管水を含むものであるから、乾かぬ土に合成樹脂を浸み込ませねばならず、樹脂の種類は限られてくるし、たとえ水性或は水分の存在下でも支障なく固まる都合よい樹脂であっても、既に毛細管水で占められている所に入れ代って押し込んで行くということはなかなか難しいことであるので、実際上硬化が及ぶのは、数糎などという厚さにはとてもならない。従って表面を樹脂処置しただけの地表を自然大気に曝して充分の耐久性を期することは不可能で、耐光・耐候強度の点などで欠陥がおこる。又樹脂含浸は直接今の問題に関連しないが、地表を完全に防水防湿とするものではなく、水も透すし、水蒸気も透すので、後に述べるような析出の問題が覆屋下ではおこってくる。

一方覆屋であるが、これまでの流れを見ると経済的な制約が先ず先行した感がある。すなわち最小の出費で先ず簡単な屋根で覆って雨露日光をしのぎ、それが不充分と分かると硝子壁で囲うとか、スレート壁で明り窓を付けるとかが行なわれるが、何れにしても遺構上にバラック構体を造るといった感じを出なかった。それが加曽利貝塚遺跡の覆屋に至って始めて本格的にコンクリートの建造物が採用され、これまでの仮構築の感が一新される

ようになる。しかもこの覆屋特に住居址の場合、スパンが長いので通常のコンクリート建築物とは違い、波形屋根の無柱構造を採用するなど、かなり工夫されているのが見られる。しかしスパンが大きいため波が大きいことが必要となり壁にかかる荷重に不均衡がおこっての結果か、波の底部において壁に亀裂が入るという結果（第1図）が見られるのは残念なことである。

2　加曽利貝塚遺跡の保存の現状と問題点

地下水に関して容易に想像されることは次のようなものである。貝層断面覆屋のある辺は平坦、というよりもむしろ凹所が近くにあり、地下水上面の深さは比較的浅く、これに反して住居址は丘の肩に位置するので深くなるであろう。勿論これは雨後のことが主であるが、日本の天気は雨が多いので平均的に大よそこのようになるであろう。覆屋の側壁は貝層断面の方で1.5米以上、住居址の方で2.2米も土中に入り込んではいるが、大地はその下を潜って連続しているので、毛細管水はいくらでも移動して、遺構下の土層に入ってくる。覆屋下では雨は降らず、これら毛細管水は一方的に蒸発する。これは後述するように、かって天井に断熱材を吹き付けたとき、地表をビニールシートで覆って仮保護をしたが、その裏面に驚く程の水滴の凝結を見た（第2図）ことでも明らかである。

個々について言えば、貝層断面については貝層上はほぼ完全に大地と遮断されているので、既に心土まで乾いてしまったであろう。貝層下の土は貝層からのCa分を多分に含むであろうが、上述したように地下水が高く土が乾き難いので、析出物もあまりカサカサに乾かずその割には目立ち方が少い。住居址の表面はこれに反して、時間と共に乾くので、表面の析出物は乾いて白く目立つ。特に空気に多く触れる角の部に析出が多くなるのは当然である。ところが現状では既に乾燥は心土まで及んで収縮がおこり、表面の樹脂による硬化層と心土とはかなりの場所で分離して、叩けばそれが容易に分かるようになっている。こうなると心土中の毛細管水の前線表面も分離表面よりは更に内に後退しているであろうから、析出も前線表面でおこり、遺構表面までは出て来ない。従って地表に見える析出現象は段々と収まってくるであろう。

こうなった原因は勿論上から雨水の供給がなく、一方的に土中からの蒸発があったからであって、一時遺構上の空間を通風して、むしろ乾きを促進したことでも早められたと思われる。但し、この通風は水分ではなくて、樹脂の乾燥を目的としたものであった。

流体の源となるものをsourceと呼び、流れの消滅するところをsinkと言う。この遺跡の場合は、水蒸気のsourceは両覆屋とも地下毛細管水であり、sinkは戸外となるが、実はもう一つsinkがある。それは屋内空気中の水蒸気の凝結であって、冬季天井や壁が低温とな

るとき、これが凝結原因となってその上に水が溜る現象がある。天井に凝結した水分は天井の波形の底線に溜り、其所から滴下して遺構表面に滴下穴列を作ったことがあり（第33）、この対策として断熱材を屋根下面に吹き付け、これにより滴下は止ったが、壁は壁図があるので内側からの断熱加工が出来ず、今だに冬季壁下は濡れている状態が続いている（第4図）。但し、このような凝結水は又蒸発するので、次にはsourceとなることになり、この場合の凝結点は完全な意味でのsinkではない。

3　考えられる対策

このような水分の動きは拙著「遺構の発掘と保存」にあるように、力学的なポテンシャルと、この場合は熱的なポテンシャルとでもいうべき温度に支配される。解決はこれらのポテンシャルを問題の領域内で均一化して、水分の動きを止めることである。そのためにはその領域を、水分の動きを完全に止める不透水・不透湿の層で囲むことと、熱の動きを止める断熱材で囲むことが必要である。建築物の壁・天井についてこれは行ない得ることで、地下は大地ということになるから、側壁は地中深く埋まるようにして、領域下面のポテンシャルは力学的にも熱的にも安定した状態の深さまで届くようにしなければならないが、これは限度があり現行の深さでもかまわないと思う。

さてこのように領域を囲うとすると、水分の動きすなわち土中からの水分蒸発は止まり、析出や乾燥亀裂などの不都合は無くなると予想されるが、完全に囲えば遺構の観察は出来なくなる。観察者は当然建物内に入らねば観察出来ないから、出入口において建物内と同じに調節した前後室を経て、出入りしなければならない。実を言えばこのようにした建物内の湿度は湿った土と平衡となる筈で、これは殆んど飽和状態である。従って前室・後室は遺構覆屋内の温度にして、精一杯加湿してやればよいので割合に実行容易である。しかしこれで問題は解決する訳ではない。地温にして飽和状態に保った覆屋内に観察者が入れば、それにつれて菌や細菌などが入り込むのは必至である。

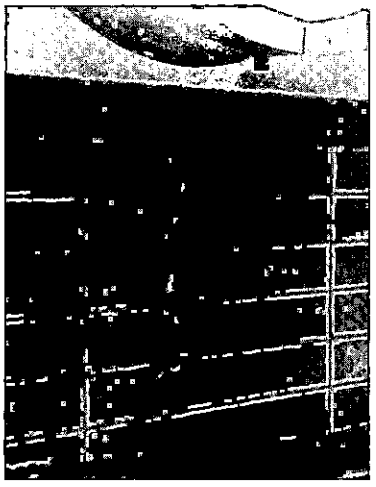
微生物は一般には相対湿度の調整で防ぐことが出来るが、それはむしろ乾燥の方向へ持ち込むことであって、飽和状態とは逆である。従って微生物対策は薬品に頼るより致し方ないことになるが、これら薬品の効いた空間に観察者が入ることは出来なくなる。この点で叙上の方式は実行出来ないことである。

それでは遺構上の水分的又熱的に閉鎖され薬品の効いた空間は観察者の通る空間とは別にしなければならない。これを実現させるためには、遺構上の空間は上述したような不透水・不透湿かつ断熱性のよい壁で閉じ、その中を観察のためのトンネルを通して、その壁を透明として容易に観察が行えるようにすることである。しかし、透明な壁とは硝子かプ

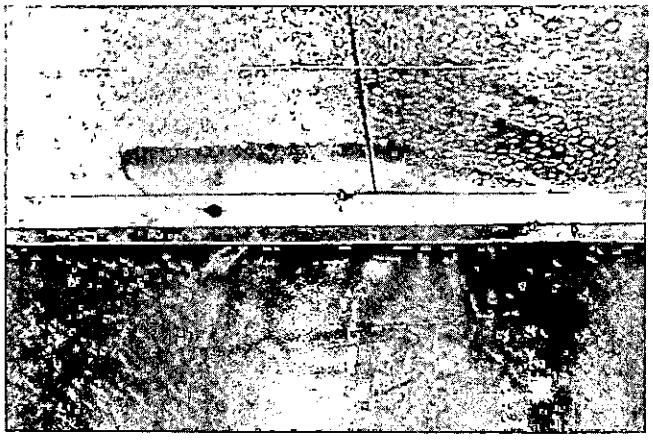
ラスチックということになるが、これらは実際上不透水・不透湿と考えることは出来るが、断熱性は全く信頼を置くことは出来ない。従って閉空間は上述の条件を満たさなくなる。しかし乍ら、熱的なポテンシャルをトンネルを含めて覆屋内で一定とすることは別の手段で可能なのであって、単にトンネル内を遺構上の空間温度と同じ温度とすればよいのであり、これは人為的な温度調節で出来ることである。

更に大きく一歩退いて、不透水・不透湿、断熱性の屋根・壁で出来た覆屋の中に硝子等のトンネルを通し、このトンネル壁が水蒸気のsinkにならなくすることでも、まず目的は達せられるであろう。sinkにならないということはトンネル壁温が遺構上空間の温度より低くならないということである。そのために遺構上空間の温度がやや上ることになるかもしれないが、これだけなら決定的な悪結果を生むとは考えられない。但し、覆屋内は凍結しない限りは低温に保つ方が生物的にも又固化樹脂の劣化を少くするためにも望ましいので、ヒートポンプを用いて遺構上空間の熱をトンネル硝子壁上へ移動さすような計画の方がより望ましいことは明らかであり、これは極めて実行容易な計画である。ヒートポンプとは低温箇所の熱を高温箇所に運ぶもので、理想的には余分の発熱はない。

以上は新しい遺構でこれから保存施設を設けようとするときの一般的な計画方針である。加曽利貝塚遺跡においては、特に住居址では以上の手段は手遅れで、今から土中からの蒸発を止めても、原状に戻ることはないであろう。すなわち既に乾燥して表面の樹脂硬化殻から離れて縮んでしまった心土は始めの大きさまで膨れて硬化殻と一体化するとは考えられない。ただこのままでは乾燥は更に進んで地下毛細管水の前線表面は猶一層後退することであろう。勿論析出面もこれに従って奥へ奥へと深まってゆくであろうし、心土の縮みも進行するであろう。この状態はもはやどうにもすることは出来ないが、一方には幸というべきか樹脂硬化殻は心土から分離してしまっているので、これ以上析出が表面で進行することはない。場所によっては猶分離していない場所も残っているであろうが、分離面積は更に段々と広がるであろう。従って現在採るべき保存手段は、現在残った表面の硬化地殻をなるべく現状のまま、或は更によいのは現在猶残っている白い析出物を取り除いて保存することである。しかしこの硬化表面地殻はやはり乾燥と共に干割れを生じている（第5図）。写真では一本の割れが見られるのみであるが、場所によってはもっと細かく、干上った田圃面のように多くの片に割れたところもある。従って表面硬化殻は上述したように心土から浮いて離れた状態でいつまでも存在することは出来ず、段々沈むであろう。いわんや掃除のためなどで人が乗ったりすれば、更に亀裂をおこし心土表面まで沈下することとなる。このためにもやはり掃除の必要がおこらぬように、観察者通路はトンネルにした方がよいのではなかろうか。勿論覆屋下トンネル外の空間には微生物対策の薬品を効かさねばならぬし、トンネル壁は冬季結露がおこらぬような微加熱が必要である。又屋根や壁の断熱ももっと充分施されることが望ましい。



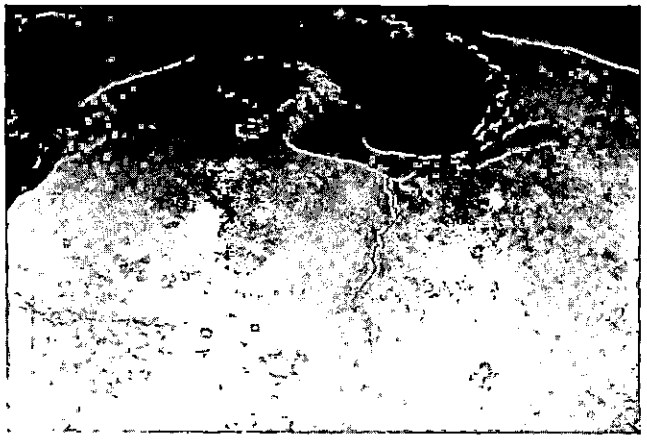
第1図　住居址群観覧施設（北貝塚）
の側壁上部の亀裂（白いシミの中央部）



第2図　遺構表面を覆ったビニールシート
下面の結露（写真上半分がビニールシート）

第4図　北壁内側の結露（黒っぽいのが水分）

第3図　天井からの滴下水による穴の列
（貝層断面および竪穴住居床面の列点が滴下痕）



第5図　樹脂硬化殻の干割れ（関東ローム層）

四. 貝塚博物館の新しいヴイジョンを求めて

早稲田大学考古学研究室
金 子 浩 昌

1 加曽利貝塚と貝塚博物館

加曽利貝塚を最初に訪れたのがいつなのか今はっきりと思い出すことができない。千葉市内の貝塚をめぐり歩くことをはじめてからもう久しく、千葉市内の貝塚全体が私にとって、貝塚研究の出発点になっているからだ。しかし、昭和37年の調査以来、加曽利貝塚は特別の遺跡として、私の意識の中に常にあったといってよい。周囲には今よりも豊かに自然の環境が残されていた。貝塚をとりまくようにしてはいり込む支谷は、貝塚形成の内湾支谷の様子をよく示していたし、林や畑の中に見えかくれしてひろがる広大な貝塚には、はてしない夢をいだかせるのに充分であった。

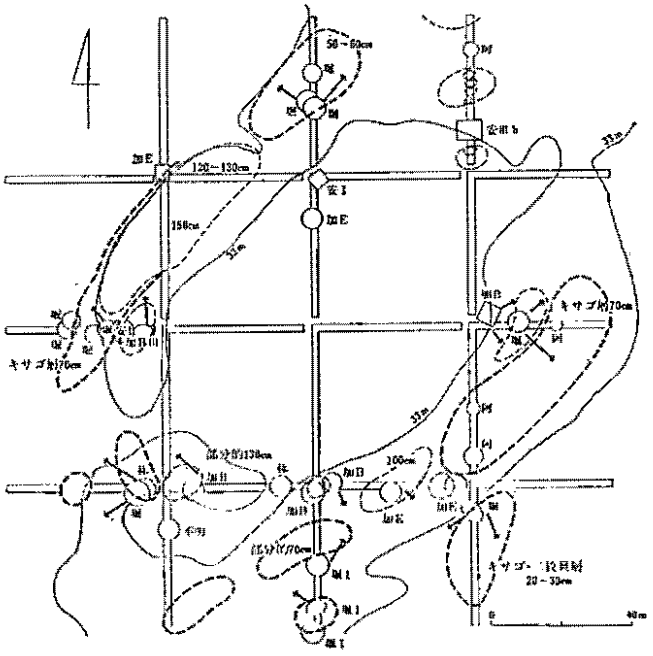
加曽利貝塚博物館が建てられてからは、博物館の展示を手伝うことが多くなった。特に昭和48年の2度目の展示がえには、後藤和民氏構想のそれに沿って、私の収集資料の多くを参考資料として出品し、当時私のもっていた貝塚観、貝塚動物の内容をでき得る限り展示に反映させた。私の貝塚展示の最初の経験であった。それ以後貝塚博物館で、貝塚の貝類の分類調査に気ぜわしい一日を過して帰ることが多くなったが、市内の貝塚踏査の拠点となったのも加曽利貝塚である。市内貝塚の生き字引のような後藤和民氏や庄司克氏によって手際よく目的地を廻ることも出来た。

特に、千葉市史跡整備基本計画策定委員会が千葉市教育委員会文化課によって結成されると都市計画という新しい視点から貝塚その他の遺跡をみるようになり、都市化の波に変貌消滅する遺跡の様子をまざまざと見たのである。私はその基本計画報告において、そうした貝塚の現状を訴え、直ちに保存に手をつくすよう要望したのであるが、貝塚博物館を考える基本にも同じような貝塚の保存を訴える気持ちが根底にあるのである。加曽利貝塚博物館の在り方について、次のような観点から将来への展望をのべてみたい。

2 加曽利貝塚の環境の保存について

貝塚が遺跡として保存される上での最も重要な条件に周囲の環境の保全がある。特に貝塚が、人々の採貝活動を通じてつくられた遺跡であるところから環境の保全問題が強く訴えられることになろう。もちろん、いずれの遺跡にあっても人々の生活と深い関りがあることはいうまでもないが、大量の貝類を伴うということになれば、それを採取した場所、

第１図　加曽利南貝塚の各時期における貝類投棄傾向図



運んできたルート、貝の処理の場所などを論ずる上で貝塚をめぐる環境の問題が最重要の課題となるであろう。従って、貝の散布の範囲をただ区画するだけのものであれば、普通の公園と変らないものになってしまうであろう。

しかし、石器時代の人々の生活と関わりがあるといっても、貝塚形成の当時そのままをここに再現してみるということではなくて、貝塚が形成されて以来、それ以後の長い歴史がこの場所にのこされてきたということに注意すべき点があり、そうした歴史をこの遺跡からたずねていくところに歴史博物館としての意義があるといわねばならないであろう。

貝塚を含むその周辺地域の歴史的な環境をいっそう明らかにしていきたいものである。このことは、この地に現在居住する人々にさらに強く文化財の重要性を認めさせることになり、郷土への結び付きを深めるのではないかと考えている。

3　貝塚の調査

(1)　貝塚の分布を考える

貝塚博物館の中心となるのはやはり貝層分布の状態である。表面に散布する貝殻の状態は見学する人々に強く印象付けることになろう。しかし、貝層の実体ということになると地表から観察のみでは理解し難いことは云うまでもない。こうしたことから貝塚のボーリング探査が行われ、貝層の分布、密度、保存状態を調べ、それを貝塚地形図中に示す作業が行われている。加曽利貝塚においてもそうした図がつくられている。しかし、貝塚のボーリング探査といっても、ボーリングステッキでさし、その主になるのは手感覚での探査で

あるから、地中の貝層の状況を知る方法としては極めてあいまいなものにならざるを得ない。例え探査の時点で、貝層の状況に種々の変化を認めたとしても、結果的にそうした図面に具体的に現われるわけではなく、極めて大まかな図面が出来ることになる。

1976年加曽利南貝塚が調査された際に、設定された調査トレンチ内で検出された貝層の形成状態とそれに基づいて探査された貝層の分布をもとに南貝塚における貝層の時期別にみた規模を知ることができた。それは従来考えられていた南貝塚よりも、その貝層は断続的であることが判ったのである。おそらくこうした状況はボーリング探査などでは到底知り得ないものであって、南貝塚の貝塚形成を考える重要な資料となった。

もちろん、この時は設定したトレンチによって検出された住居址が完掘され、その時期が明らかにされるに及んで貝塚形成の方向なども明らかとなり、中期以降後期の初頭から中葉期に至る変化をたどり得たのである。

これまでに貝塚の規模や性格を論ずる際に貝層の分布図を比較することが行われてきたが、そうした場合の資料はまだまだ不充分なものであり、場合によっては事実の認識を誤るようなことにもなりかねないことに注意しなければならないであろう。

(2) 貝塚の調査

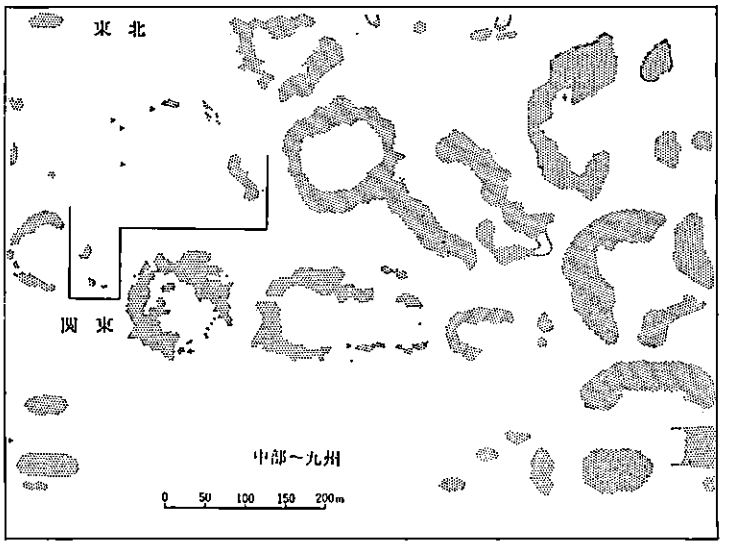
加曽利貝塚においては1976年以後数次にわたる貝層の発掘調査があり、さらにそれ以後においても、貝層分布地域以外の場所での調査が現在でもつづけられている。こうした一連の調査によって、貝塚をめぐる遺構の形成について貴重な成果が知られるに至ったことはよく知られる通りである。

しかし、貝塚自体の調査は1976年以後は行われていない。そしてそれまでに至る発掘の成果は一応これまでに報告されているが、最近の詳細な貝層調査に比べると、やはりこれまでの調査は期日的な制約もあり、決して充分な調査とはいえなかったと思う。また資料サンプリングについても、充分ではなく、加曽利貝塚を理解するための今日的な要望に答える資料のないことも事実である。加曽利貝塚の再調査の開始は今最も緊急を要する課題なのである。

このことは、筆者だけではなく、貝塚に関心を寄せている人々の誰でもが持っている考えであろうと推察するのである。今日、もし加曽利貝塚博物館が考古学的な意義を強調する歴史博物館として存続するのであれば、加曽利貝塚の貝層調査を早急に再開して、新しい成果を世に問うことが不可欠のことといってもよいであろう。

しかし、このことを実行に移すとなると決して容易なことではなく、研究のための資金やスタッフが直ちに問題となってくる。さらに問題になるのはその調査地点の選定ということがあろう。ただ、この点について加曽利貝塚の場合、これまでの調査トレンチ断面の再確認調査であればよいのであって、新たに発掘区を選定する必要はないし、広い発掘区

を設ける必要もない。かって調査したトレンチを再発掘して貝層断面を出し、その面の詳細な検討をしていけばよく、直ちにその全面を観察しながら調査ができるわけである。もちろん、断面観察のみでは不充分な場合もあるが、その時はある程度の確認調査も可能であろう。この調査によって、一定カ所の堆積関係の把握、貝類組成、その他動物遺体の調査、それらから推定される生業の問題に具体的に言及することができるようになるであろう。生業は当時の人々の生活を支える技術であり、また文化の根源ともいえる。新しい視野に立った加曽利貝塚観ともいうべきものを、調査に当った人や研究協力者たちと考えていきたいものである。そして、こうした事実が展示に反映され、貝塚博物館としての特徴を出すことができよう。



第2図　貝塚の大きさ
（佐原　真『日本生活文化史』1日本的生活の母体より）

4　展示への新しい構想

貝塚博物館の展示には、新たな貝層調査の詳しい内容を盛込んだものを加えていかねばならないであろう。例えば、貝層も“はぎとり”によって、屋内で、ゆっくりと観察できるようにし、またそれに対して適切な説明をつけることによって、次第に移り変る採貝活動を具体的に知ることができよう。

展示とともに博物館活動の一貫として、貝類サンプルの分析法を一般の人にも経験してもらう。研究の講座を開くということも考えられよう。もちろん、貝や動物のことだけでなく、また加曽利貝塚だけに留まることなく、各地の貝塚遺跡にも関心をもち、研究者間の交流を深めていくべきだと思う。

全国には貝塚遺跡を主要な展示構想のなかに持つ博物館が幾つかある。ただ、そのいずれの場合であっても、貴重な資料を充分に生かし得ているとはいえないのが現状である。加曽利貝塚博物館が新しい構想のもとに真にその名の通りの貝塚の博物館として、また研究の機関として役割を果すようになってほしいことを念ずるものである。

五. 加曽利貝塚の整備計画

後 藤 和 民

はじめに

昭和38年の加曽利貝塚保存運動以来、国民的要望として提示された条件のなかで、常に「現地を公園化し、野外博物館的施設をつくること」が求められてきた。そして昭和41年の加曽利貝塚博物館の開館以来、筆者はその学芸員として、博物館における展示のなかで加曽利貝塚について具体的な歴史叙述を試みながら、また公園整備や野外施設の建設に従事しながら、常に「野外博物館」のあるべき姿を真剣に考えてきた。

当時、一般に考えられていた「野外博物館」とは、史跡公園の中に、出土品を展示・収蔵する陳列館と収蔵庫、それに貝層断面と住居址群を固定した野外施設を建設することであった。そして実際に、昭和39年度に公園課によって北貝塚を含む約55,000㎡が「貝塚公園」として買収され、翌40年度には北貝塚を囲む円形の遊歩道路などが設置された。また昭和40～41年度に、陳列館と収蔵庫が建設され、加曽利貝塚博物館として開館した。

また昭和40～42年にかけて、発掘調査と保存科学的調査を行った北貝塚の貝層断面および住居址群を現地に固定する「野外施設」が建設され、電源を通すケーブルも埋設され、昭和43年にいちおう従来の「野外博物館」構想は完了した。しかしこの間、筆者は常にこの構想に大きな疑問を抱いてきたのである。

しかも、昭和42～45年度にかけて、南貝塚の貝層部ぎりぎりの範囲約43,000㎡を買収しそれをもって加曽利貝塚の買収はすべて完了したものとされ、その東側傾斜面は老人ホーム建設用地として買収された。しかし筆者らは当初より、その東側傾斜面のみならず、その東の支谷（坂月川）および対岸の台地上も遺跡であり、当然保存すべきであると主張してきた。そこで工事着工の前に、遺跡限界確認調査を行った結果、案の定、各種の貴重な遺構が発見され、老人ホームの建設は中止され、この東側傾斜面も指定されるに至った。

追加指定を受けた南貝塚と東側傾斜面の約73,000㎡については、昭和48年の若潮国体の際、急遽貝層部の輪郭を示す遊歩道路を設置したほかは、ほとんど未整備のまま十分には活用されていないので、本格的な整備が急がれていた。しかもその間に、国の指定史跡として、新たに月ノ木貝塚と荒屋敷貝塚の買収が進み、その整備も強く要請されていた。

こうした情勢のなかで、十数年間、「野外博物館」のあり方について調査・研究を重ねていた筆者は、昭和53年４月、千葉市における史跡整備計画と博物館設置構想を策定せよという特命を受けた。それ以来実に９カ年を費して、このほどようやく千葉市全体の史跡

整備基本構想・基本計画および加曽利南貝塚整備基本設計を完成した。ここにその概要をまとめておく必要があるだろう。

1　史跡整備の基本的観点

一概に加曽利貝塚の整備といっても、それを具体的に実現するには、その目的や必要条件を明確にし、その合目的的な整備の方法を確立しなければならない。しかしそのためには、まずその基本となるべき観点がなければならない。ここに、企画の当初より一貫して抱いてきた筆者の観点を提示しておきたい。

(1)　史跡の保存と活用

文化財保護の目的は保存と活用にあるが、本来の目的は活用にこそあり、保存はその活用のための必要条件であり、方法・手段にすぎない。現在および将来において、十分に活用できないような保存は無意味であり、破壊に等しい。加曽利貝塚の活用とは、その存在意義を縦横に発揮させることであり、将来、多角的な調査・研究によって、具体的な歴史叙述をしていくことである。しかも歴史的観点の進展に伴って、何度でも歴史を書き替えることができる可能性を確保しなければならないのである。

(2)　遺跡全体の有機的・総合的整備

加曽利貝塚の特色や存在意義は、同時代の遺跡全体のなかで、比較対照によってこそ定着されるのであって、ひとり加曽利貝塚のみによって捉えられるものではない。とくに、全国でもっとも貝塚の密集している地域のなかで、最大の規模をもち特殊な機能をもっていた加曽利貝塚の特色を示すべき整備とは、市内の縄文貝塚全体の整備のなかで位置づけるよりほかにない。したがって、各貝塚遺跡ごとに個別の整備を行うより、この際千葉市全域における縄文貝塚全体の整備計画を樹てるべきである。

しかも、縄文時代の時代的特色を捉えるには、縄文時代に前後するあらゆる時代の遺跡全体の様相を捉え、その時代的推移のなかで位置づけなければならない。そして将来の実質的な活用のためには、縄文貝塚のみを保存・整備しても無意味である。当然、千葉市内における全時代の遺跡を対象として、総合的な整備計画を樹てるべきである。すなわち、今後、月ノ木・荒屋敷などの縄文貝塚や各時代の史跡を整備するたびに個別の計画を考えるのは、あまり意味がない。もともとそれらの史跡は有機的関連をもつ歴史的事象であるから、それを捉えて、この際全時代・全域の各種の遺跡の有機的・総合的な整備計画を樹てるべきである。

(3)　自然保護と共に

市内における各時代の遺跡分布を地形図の上に重ねてみると、意外にも同じ地区に重複

しつつ集中し、その占地が限定されている傾向がある。しかも同じ千葉市内でも、沿岸と内陸、河川流域と台地平坦部など、その占地する地形によって遺跡の様相が異なっている。これは、遺跡の存在が自然条件や自然環境と密接な関係があることを雄弁に物語っている。遺跡とは、過去の人間集団が文化活動を行った舞台である。人間が地上の一動物であり、自然のなかで生存している以上、その遺跡は地上にあり、その地形・資源・植生・動物相・気候・風土・環境など、自然と密着している。その文化活動の内容や意義も、この自然のなかにこそ秘められている。だから、もともと自然なくしては人間の歴史は存在しないし、人間の歴史なくして自然の意義もない。

したがって、史跡の整備だからといって、ただ考古学的な遺構や遺物の分布範囲だけを保存・整備し、その史跡の存立基盤である地形や環境を破壊したのでは、あまりに無意味である。この際、偏狭な行政的縄張りや微視的な考古学的観点は払拭して、自然保護の観点も大いに取り入れ、歴史と自然との融合をはかるべきである。

(4) 都市計画と共に

もともと文化財保護や自然保護は、ただ単に文化財や自然に関する専門的な調査・研究・学習・教育などの対象としてのみ必要なのではない。文化的な現代人の生活条件として、歴史的環境や自然環境こそ生活のアメニテイを構成する不可欠な要素なのである。ところが従来、文化財保護や自然保護とは対立関係にあると考えられ、実際に矛盾してきた都市計画などの開発行為も、本来の目的は現代生活のアメニテイを確保するための環境整備にあり、それは「第三次全国総合開発計画」にも明記されているとうりである。このように、目的を同じくしながら、その方法・手段において矛盾・対立しているのはおかしい。どこかに、相互に融合・調和すべきところがあり、当然都市計画のなかにこそ、文化財保護や自然保護を慎重に取入れるべきである。

(5) 野外博物館的整備

これらの遺跡の整備方法は、その活用の目的や遺跡の性格や保存状態あるいは周辺地形や自然環境などによって、いろいろなパターンが考えられるが、そのなかで、もっとも望ましい形態として「野外博物館」的整備があげられる。

「野外博物館」とは遺跡そのものを、その周辺地形や自然環境とともに現地にそのまま展示し、現地で実物を直接自分の眼で確かめ、自分の足で踏みしめながら、自分の実感によって、自主的な問題意識を自由に積極的に解明していく場を提供するものである。これは、遺跡というものを、ただ考古学や歴史の学習ばかりでなく、その地形や植生や環境などの自然観察や自然教育の対象とするものである。このように「野外博物館」は、現地教育・実物教育・実感による体験学習の場であり、とくに従来観念的な教科教育や分化科学による分析的学習が多いのに対して、人文科学や自然科学の有機的・総合的な学習ができ

る場であるところに最大の特色がある。

(6) 専門家による委員会の設置

以上のような観点から、筆者は誰も試みなかった総合的な史跡整備を構想し計画し実施していこうと決心した。そのためには、より広い視野と見識で自由な発想と慎重な検討を加えるため、筆者の観点や目標と関連する各分野の専門家を外部から求めて、委員会を設置することにした。その委員構成および史跡整備の段階的な業務内容を第1表および第2表のとおりとし、昭和54年度より発足した。

以来8年間を費やして、『千葉市史跡整備基本構想』(1982)、『千葉市史跡整備基本計画』(1985)を策定し、その最初の対象に加曽利南貝塚を選び、『史跡加曽利南貝塚整備基本設計』(1986)を作成した。そして本年度は整備に先立つ予備調査として、地下レーダー探査による地下埋没遺構の確認調査を実施することになった。

第1表　千葉市史跡整備指導委員

(順不同・敬称略)

	氏名	所属	専門
1	武田宗久	市文化財保護審議会会長	郷土史・考古学
2	大塚初重	明治大学文学部教授	考古学
3	新井重三	埼玉大学教育学部教授	地学・博物館学
4	沼田真	千葉大学理学部教授	植物生態学
5	小室栄一	明治大学文学部教授	西洋史・中世城郭
6	金子浩昌	早稲田大学考古学研究室	考古学・動物学
7	小林達雄	國學院大學文学部助教授	考古学・史跡整備
8	岡田茂弘	国立歴史民族博物館教授	考古学・史跡整備
9	中村民男	中村病院院長	心理学・精神衛生
10	福富久夫	千葉大学園芸学部教授	造園学・都市計画
11	佐々木朝登	立教大学文学部講師	博物館学
12	矢野和之 (秋山邦雄)	文化財保存計画協会	建築学

第2表　史跡整備事業の経過と年次計画

年度	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
事業の段階	←市域内史跡整備計画→						〈史跡加曽利貝塚整備計画〉		←史跡加曽利貝塚整備工事→		
	①基本構想										
		②基本計画									
							③基本設計				
								④予備調査			
									⑤実施設計		
									⑥整備－Ⅰ		
										⑦整備－Ⅱ	
											⑧整備－Ⅲ

おもな事業内容	① 基本構想……○千葉市内主要遺跡全体を対象とした全体構想を樹立し、その中で加曽利貝塚整備の基本方針を位置づける。 ○『千葉市史跡整備基本構想』の策定
	② 基本計画……○千葉市内主要遺跡全体を対象とした整備方法のパターンを設定し、その中で加曽利貝塚の整備方法を設定する。 ○『千葉市史跡整備基本計画』の策定。
	③ 基本設計……○加曽利貝塚未整備部分（南貝塚）についての具体的な整備計画の樹立（予備調査の必要性） ○関係部局との調査のため、史跡整備検討部会を設置。
	④ 予備調査……○地下レーダー探査等による埋没遺構の所在調査 ○探知遺構の試掘による確認調査（無遺構部も確認） ○基本設計の可能性と限界性を確認する。
	⑤ 実施設計……○予備調査の結果に基づく具体的な設計（部分的修正） 目標植生の樹種と復元位置、復元集落の規模・範囲 貝層断面の観覧施設、遊歩道路、管理道路等の設計
	⑥ 整備－Ⅰ……○植生複原のための植栽 ○貝層部の輪郭（遊歩道路および遺構発見地点）の表示。
	⑦ 整備－Ⅱ……○貝層断面保護施設の建設（既調査地点の再試掘） ○貝層外側の縄文中期集落の複原（既調査遺構の再試掘） ○説明板・ベンチ・ビュースタンド等の設置。
	⑧ 整備－Ⅲ……○遊歩道路・管理道路・自然観察路の設置工事。 ○西側道路との境界フェンスの設置工事。 ○照明灯・排水用浸透マス等の設置工事。

3　加曽利貝塚整備の対象範囲

(1)　大型貝塚周辺の遺跡・遺構分布

昭和45～48年度における緊急発掘調査の結果、南貝塚の東側緩斜面で、縄文早期から後期にかけての各時期の炉穴・住居址および特殊遺構が発見され、それが加曽利貝塚の範囲や性格を捉える上で、きわめて重大な契機や転機となったことは否めないであろう。

実は、加曽利貝塚博物館における長年の踏査の結果、遺物や貝殻の表面散布の状態によって南・北貝塚の北側・西側・南側の平坦部、支谷（坂月川）の東側対岸の北部と南部、および南側の小支谷対岸台地上などの隣接部においても、同じような現象があり、現在までに、おもに次のような遺跡や遺構が分布していることが確認されている。(第1図)

A. 北側隣接部……縄文中期の集落（住居址・貯蔵穴等、一部モノレール用地）

B. 西側隣接部……縄文中期の集落（点在貝塚を伴う住居址群）

C. 南側隣接部……縄文後期の集落（北半部は県営第2桜木団地として造成）

D. 南側隣接部……縄文後・晩期の集落（南半部・県営第3桜木団地計画予定地）

E. 東側対岸台地北部……滑橋貝塚、縄文中～後期集落（点在貝塚を伴う住居址群）

F. 東側対岸台地南部……縄文前期集落（土器密集散布・荒地）

G. 南側対岸台地……縄文前～後期集落（土器密集散布・荒地）

これらの遺跡または遺構群は、南・北の大型貝塚の周囲を取り巻くように展開しており、それぞれの所属時期も、大型貝塚の存続時期と共通または接近しているので、決して無関係ではありえない。むしろ、加曽利貝塚の性格や大型貝塚の意義を定着するためには、将来不可欠な存在となることは明らかである。

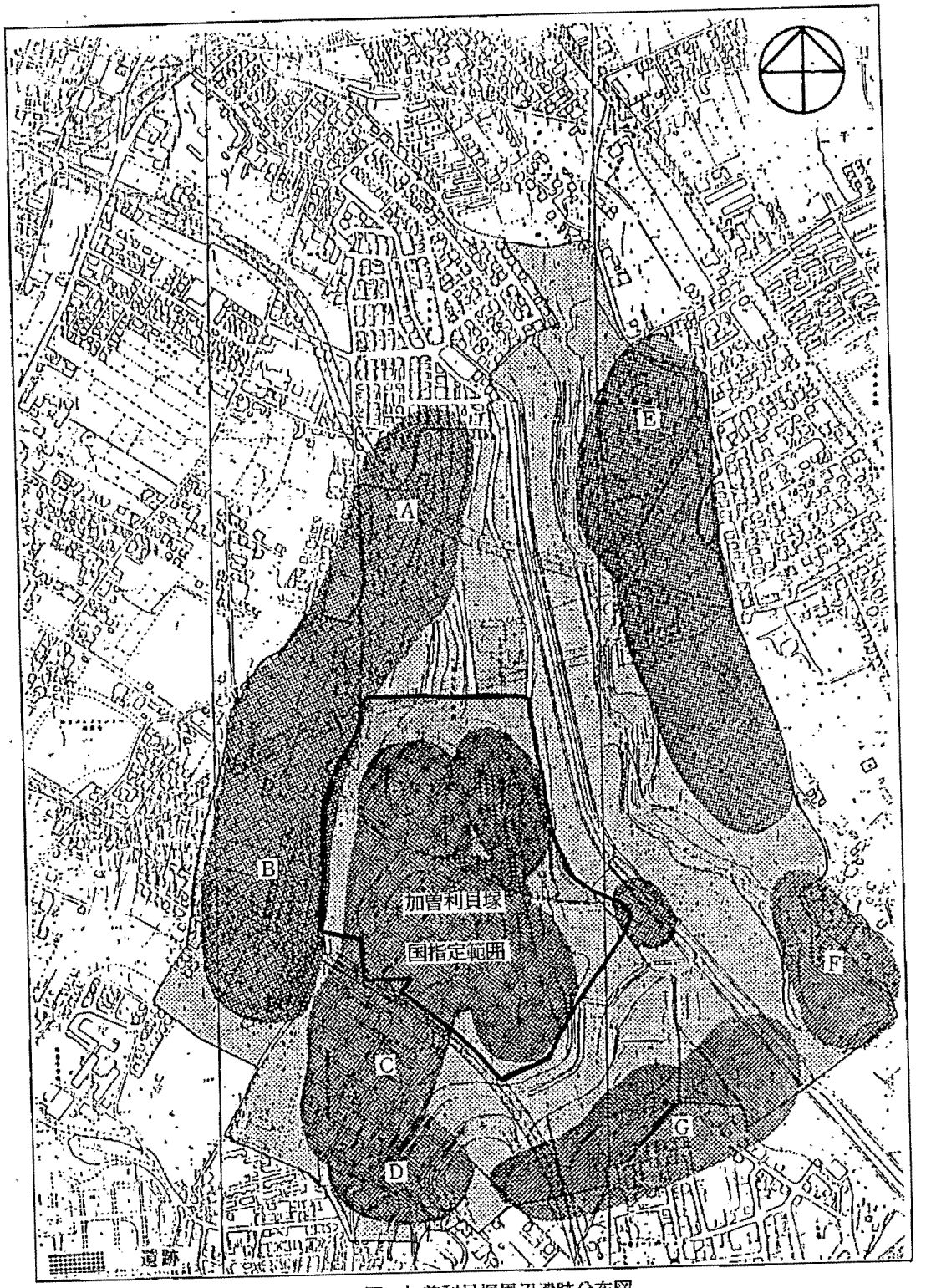
(2)　加曽利貝塚整備の基本方針

先に「加曽利貝塚の意義」で述べたように、加曽利貝塚が縄文時代の中期から後期にかけての共同生産・共同交易・共同祭祀の場であり、周辺集落結集の場であって、当時の社会構造を解明するためにはきわめて貴重な存在である。そのような特殊遺跡の具体的な整備にあたって、周辺に分布する関連遺跡の存在を重視し、将来それらと大型貝塚との対比・照合によって、相対的な意義を浮き彫りにしうる可能性を確保しなければならない。

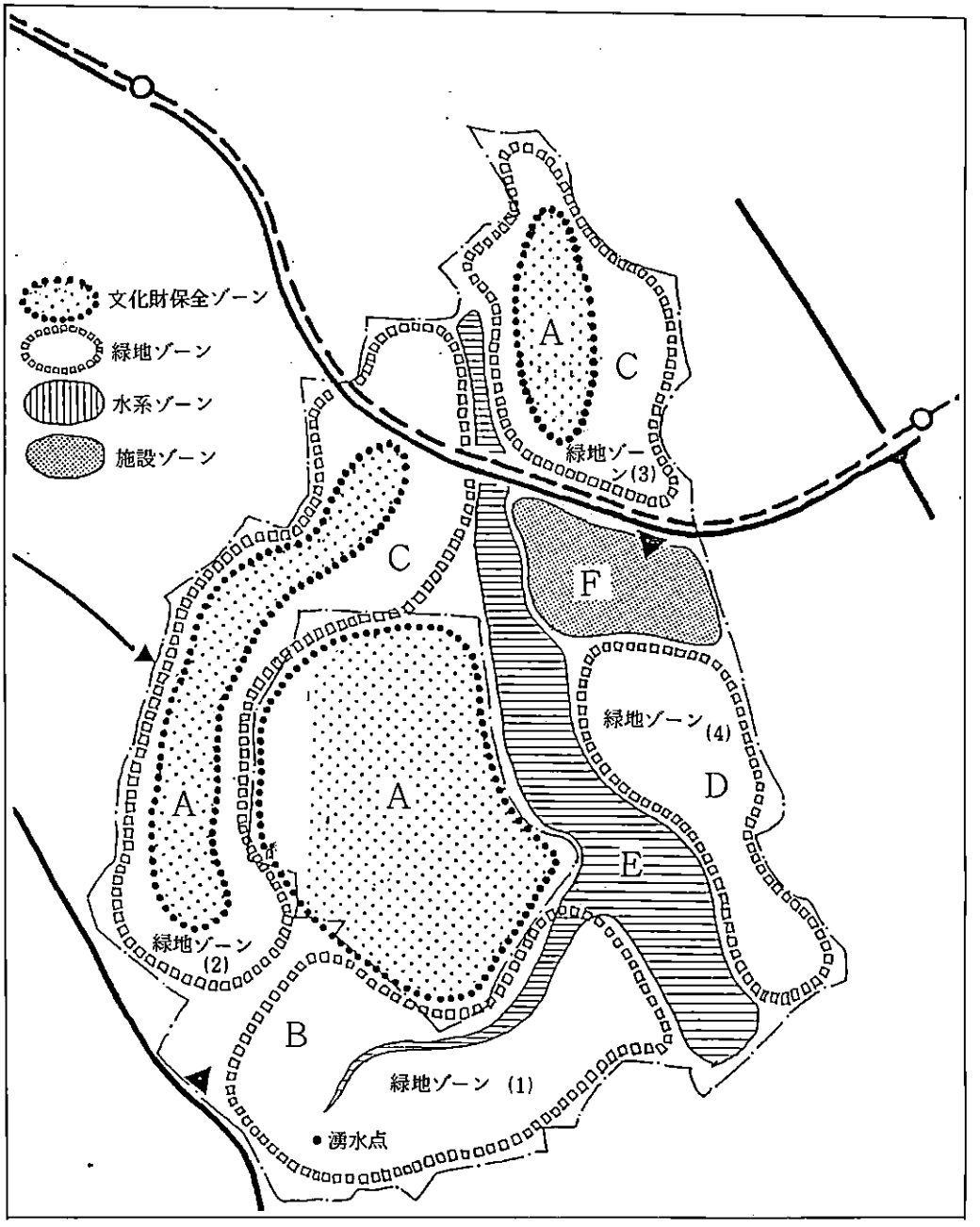
こうした総合的な環境を空間的に表現することを目指し、当時の植生や地形をできるだけ復原するとともに、現地で生活・生産・交易・祭祀などの様相がイメージされるように、関連遺構の露呈・復原・固定などによって、遺跡そのものを展示する「野外博物館」的整備を行うものとする。

(3)　計画の対象範囲

以上のような目的から、加曽利貝塚の生成－発展－消滅の歴史過程やその存在意義を広



第1図　加曽利貝塚周辺遺跡分布図



第2図　加曽利貝塚の全体的整備ゾーン

く一般に公開するためには、史跡指定範囲のみでは到底不足である。周辺の遺跡や遺構および本谷・支谷・縁辺傾斜面・対岸台地などの自然環境を保存し、加曽利貝塚との関連を明らかにし、当時の歴史環境を復原しなければならない。現在周辺において発見されている遺跡や遺構分布の推定される区域とその自然地形を、この歴史的環境として復原する対象範囲とすれば、次のようになる。

(4) 全体のゾーニング

加曽利貝塚の関連遺跡や遺構の分布とその自然地形との有機的な関連を考慮しながら、各ゾーンの整備によって全体としての歴史的自然環境を作り出すことを目標とすると、加曽利貝塚の総合的な史跡整備計画の区域は、大きく次の6つのゾーンに区分できる。(第2図)

A. 遺構保全ゾーン……貝塚・住居址・特殊遺構・埋葬遺構などが存在し、その保全・整備が主体となるゾーン。

B. 緑地ゾーン(1)……斜面緑地を主とした、樹林の保全と復原を主としたゾーン。このなかで、南側の細い谷地の自然地形と湧水地点を保存する。

C. 緑地ゾーン(2)・(3)……一部に貝塚を含む遺構保全ゾーンが重複するが、全体の中心となる、南北貝塚の存在を周辺地形や環境と共に保全するため、きわめて重要な位置を占めている。

D. 緑地ゾーン(4)……現存の斜面緑地を含むこのゾーンは、博物館等の施設ゾーンに接し、台地上は緑地を造成し、部分的には、園地・広場的利用やレクリエーション利用も考えられる。

E. 水系ゾーン……谷地に調整池を造成して水面をつくり、当時川であった縄文時代の水辺景観を復原する。水際には散策路を設け、モノレール橋をはさむ上流部分は湿地性の自然植生を復原する。

F. 施設ゾーン……既設の博物館や代官屋敷は遺跡の中心部にあって、原地形や景観を損ねているので、これら管理・研究・教育・収蔵・駐車場・展望台等の中心的な施設を移転・整備するゾーン。

4 整備計画の展開方法

(1) 第1段階(対象面積約50ha)……総合史跡整備計画の事業化の方針決定および計画

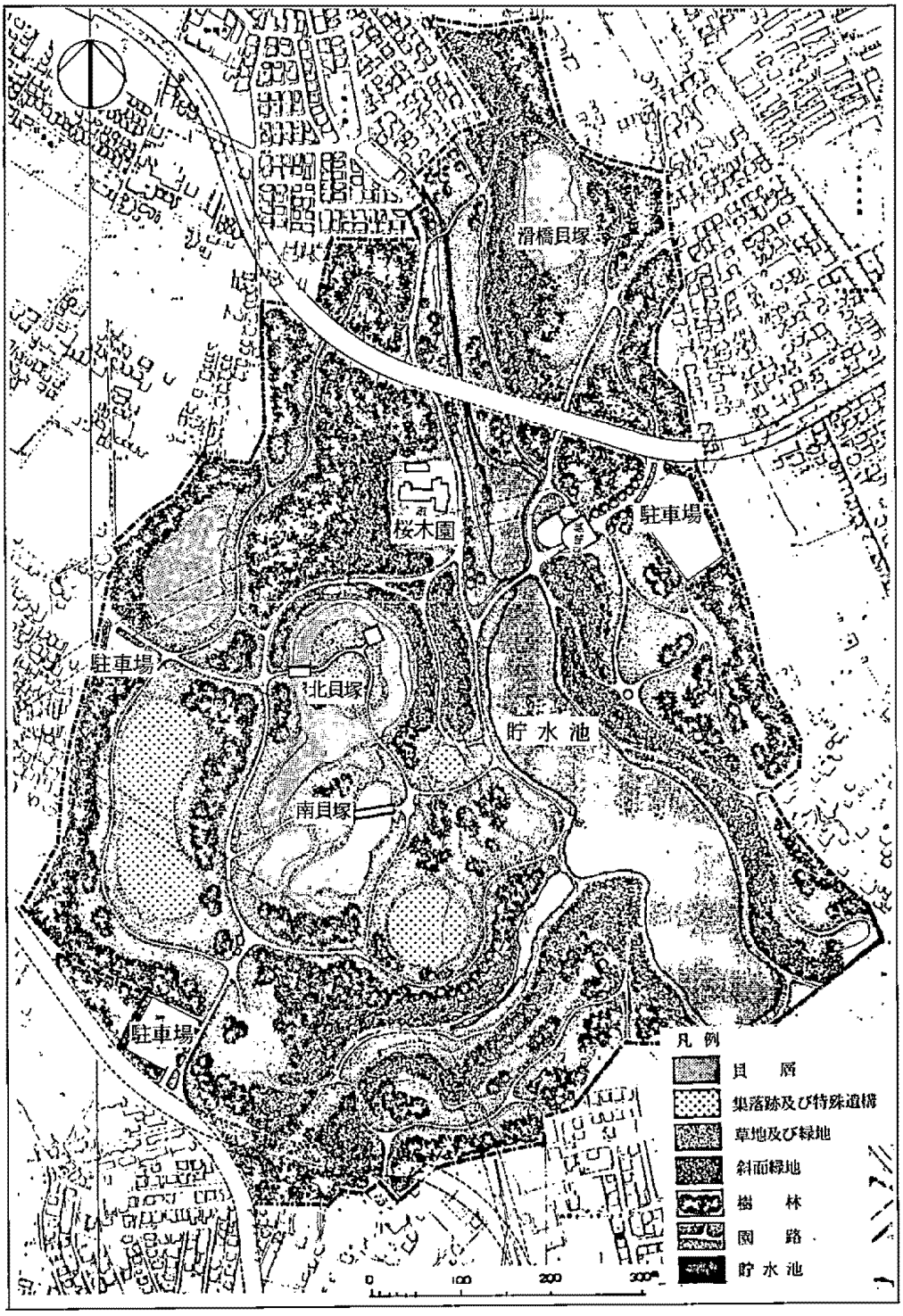
計画地域は、広範囲にわたるため、市政方針の一環として捉え、関連部局間の調整、協力をはかる。

(2) 第2段階(南貝塚約7.5、斜面約6ha)……南貝塚の整備および斜面緑地の確保と一部整備

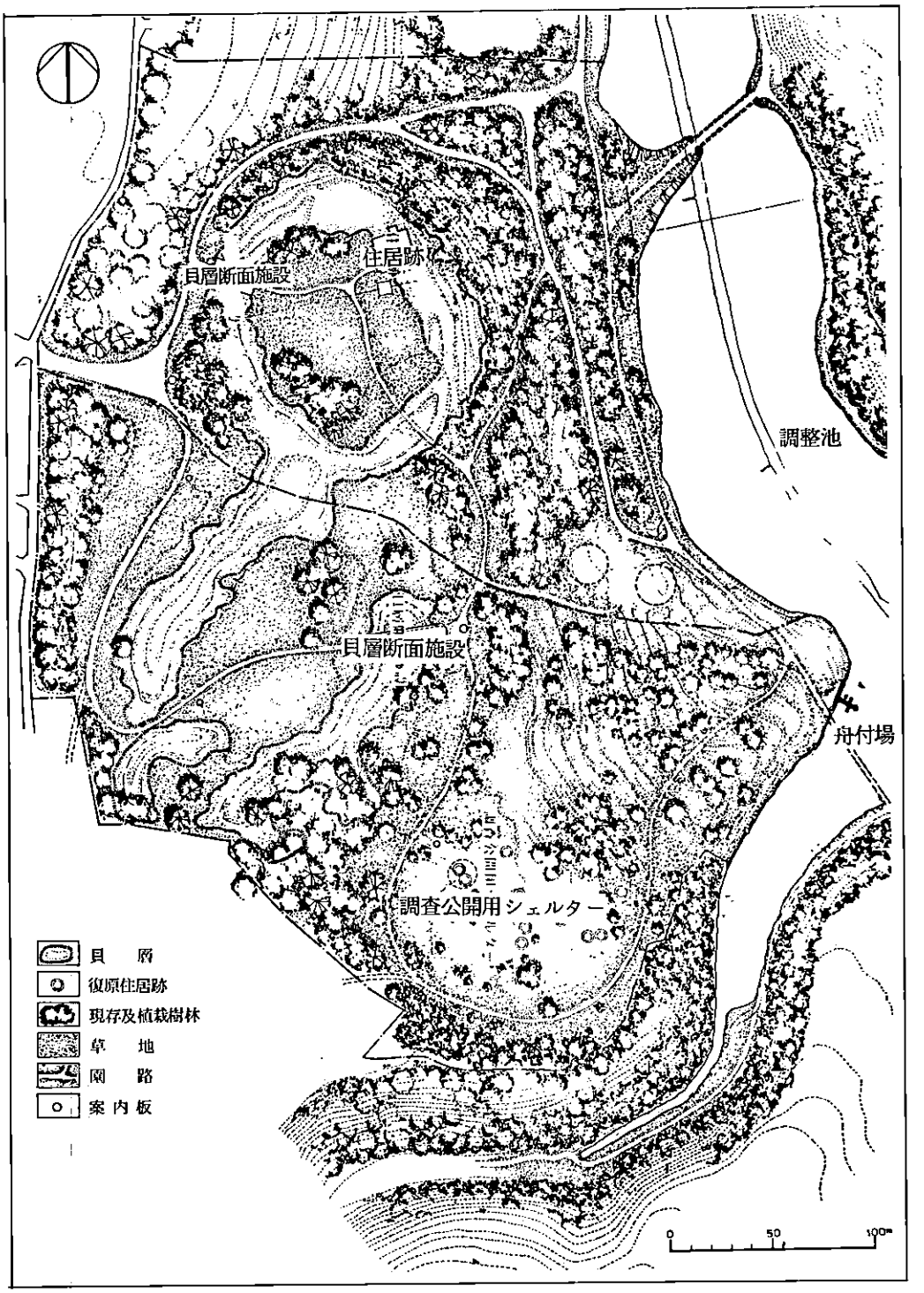
現在ほとんど未整備・未活用のままになっている南貝塚を整備し、千葉市の貴重な地形的特徴である「おぼれ谷」の地形を残すため、谷に至る斜面を確保し、一部植栽等による整備を行う。

(3) 第3段階(約12ha)……史跡の南側と東側の台地の確保と調査および整備

谷地地形のより広範な保存によって、史跡の環境を保全するため、斜面に連続する史跡



第3図　加曽利貝塚史跡整備全体計画図



第4図　加曽利南・北貝塚整備構想図

の南側および東側の台地を確保し、遺構の確認調査を行う。また、史跡対岸の遺跡として貴重な滑橋貝塚を植栽等による修景や園路等の設置によって整備する。

(4) 第4段階（約14.5ha）……史跡西側平坦部の点在貝塚・住居址等の確保と整備

加曽利北遺跡、加曽利南遺跡、加曽利西貝塚等、史跡加曽利貝塚の西側平坦部には数多くの遺跡や遺構の分布が確認されている。これらの確認のための発掘調査を行った上で、その分布範囲と周辺地形を合わせて保存し、史跡指定部との有機的な関連を捉える可能性を確保する。すでに周辺から宅地化が進み、特徴のないベット・タウン化しているこの地域の環境に新たなるうるおいを与えるため、植栽等による遺跡整備を行い、史跡加曽利貝塚との一体化をはかる

(5) 第5段階（約8ha）……支谷の確保と調査および整備

第2、第3段階によって現状保存された支谷および小支谷の泥炭層には、木質遺物をはじめ花粉などの貴重な情報が保存されているので、各種の学術的な調査を行なう。その調査に基づき、現坂月川の一部において、その水面や川幅を縄文時代の時点に復原する。すなわち、その南端部に堰を設けて人工的な池を建設し、第1～第4段階の整備によって緑化された対象地域に、水辺景観の効果を加えると共に、縄文時代の生活環境をより明確に表現する。池の周辺には散策・見学用の園路をめぐらし、橋等によって谷地を挟んだ対象地域の一体化をはかる。

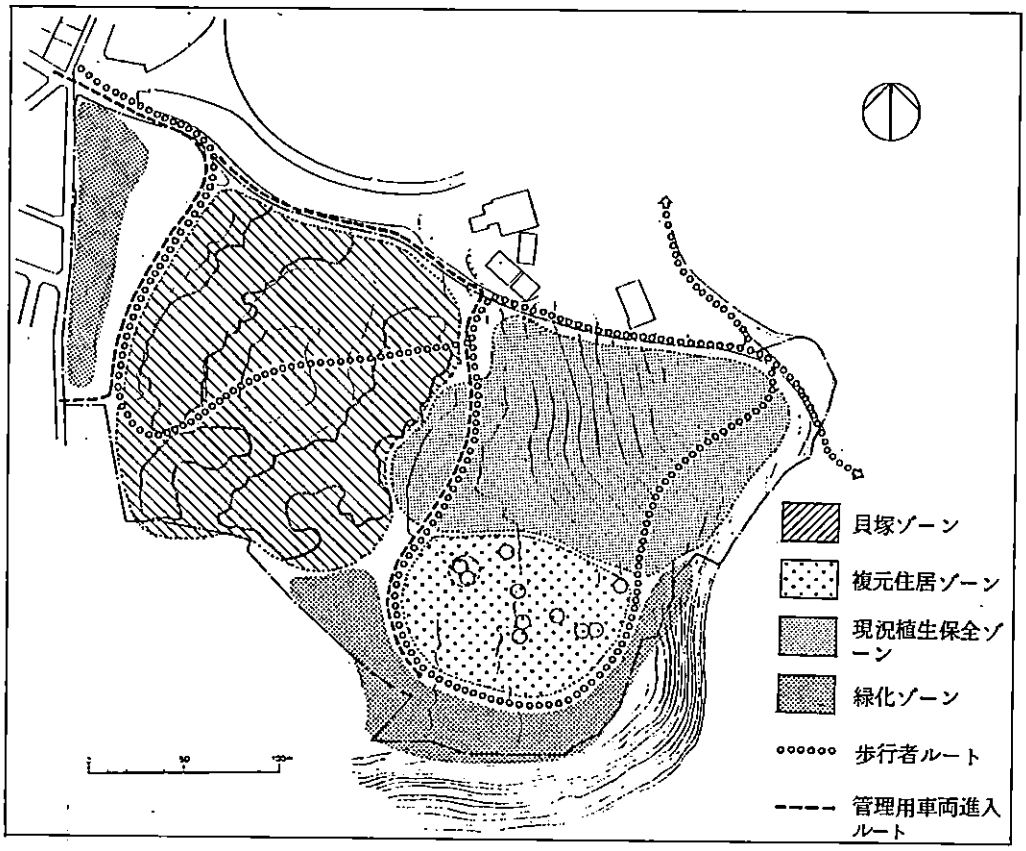
(6) 第6段階（約5.3ha）……北貝塚の再整備と博物館等の移設

整備対象地域全体の総合化、一体化をはかるため、既設の博物館・駐車場・便所等の設備を、東側対岸の遺構がない「施設ゾーン」に移設し、管理・運営の拠点とし、モノレール駅よりのアプローチや、遺跡景観全体の展望を可能にする。またそれに伴って、地形の復原、鉄塔の移設など北貝塚の再整備を行い、周辺地域との整合をはかる。

5 加曽利南貝塚の整備計画

(1) 南貝塚整備の基本方針

以上のように、将来は南・北両貝塚を中心に、周辺の遺跡群や遺構群を周辺地形と共に環境を一体化し、より総合的な縄文時代の歴史と自然を確保して、多角的・有機的に活用するための総合的な整備を行う計画である。このような全体として歴史的自然環境を具現することを目的とする以上、まず現在の自然環境を守ることを第一義としなければならない。そして現在の北貝塚における舗装の遊歩道路や高圧線の鉄塔などを取り除き、博物館等の附属施設は、対岸の施設ゾーンに移転し、南・北貝塚の調和と統合をはかりながら、全体を縄文時代の歴史と自然を探る「野外博物館」として整備する。



第5図　加曽利南貝塚のゾーニングと整備計画図

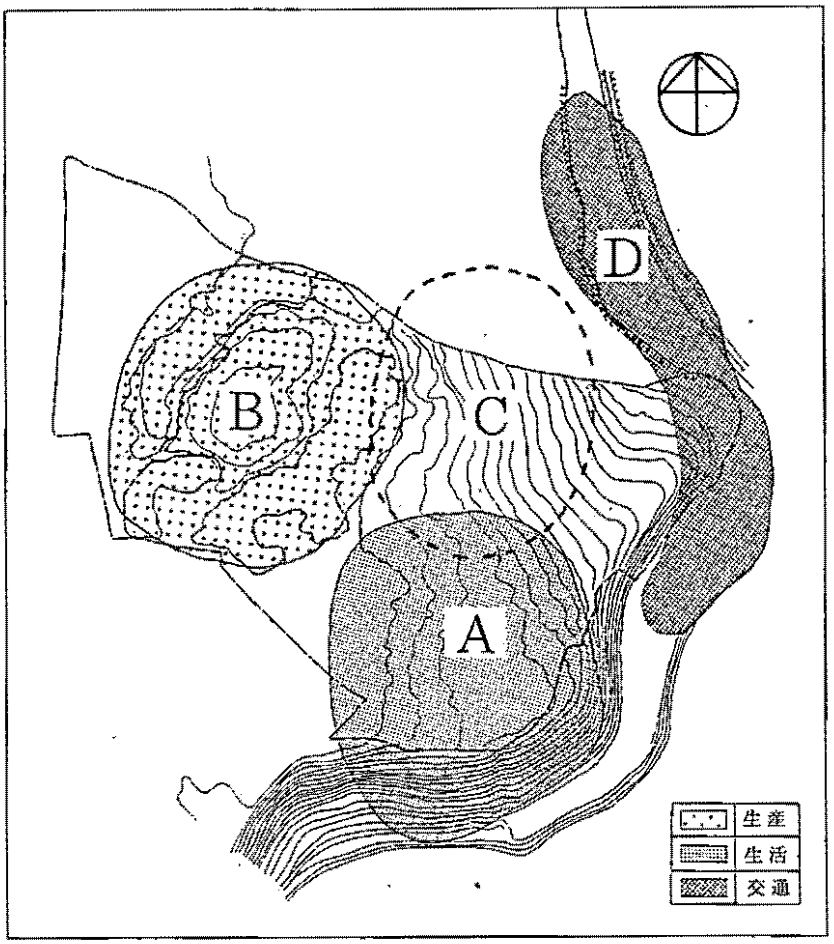
(2)　南貝塚の整備基本設計

計画実施の第2段階として、まずすでに指定史跡として買収・保存されていながら、ほとんど未整備のため、十分には活用されていないままになっている南貝塚について、早急に整備する計画を樹てなければならない。この整備に伴う基本構想および基本計画については、千葉市全体の整備計画の中で位置づけられ、方向づけられているので、具体的な基本設計を行う必要がある。この基本設計については、文化財保存計画協会に委託し、筆者の観点や指導に基づいて筆頭理事の秋山邦雄氏や曽宇泰子氏が作成した。ここではその『史跡加曽利南貝塚整備基本設計』（1986）によって、その概要を述べておく。

(3)　南貝塚のゾーニング

南貝塚は、これまでの発掘調査によって発見された遺構等の分布状態から、住居址を主とする生活ゾーン、大型貝塚を主とする生産ゾーン、特殊遺構を主とする祭祀ゾーン、坂月川を中心とする交通ゾーンに大きく分けることができる。(第5・6図)

A. 生活ゾーン……南貝塚の東側外縁から、縄文時代中期に属する住居址が13基発見されている。それらの約半数は小型貝塚を伴っており、生活用の土器や石器のみが出土して



第6図　加曽利南貝塚のゾーニング図

いる。附近は、ゆるやかな傾斜を示す緩斜面で、かつて湧水点が確認された支谷および坂月川を見おろしている。原始・古代集落として絶好の位置であり、湧水点・坂月川を含めた東側斜面一帯が居住・生活の場であったことが想定される。

B. 生産ゾーン……北貝塚と連なる南貝塚の貝層中から随所で大型の焚火址と多量の煮沸用土器が発見されており、一度に大量の貝殻が集中的に投棄されているので、大型貝塚は単なる日常のゴミ捨場ではなく、交易品として干貝を加工していた集落間共同の生産の場であったと思われる。おもに北貝塚は中期に、南貝塚は後期に属する。

C. 祭祀ゾーン……東傾斜面の柄鏡形住居址や巨大な竪穴など、特殊遺構が集中している場所や、貝塚の東南端の人骨の埋葬や土偶・石棒などの集中している場所。

D. 交通ゾーン……東傾斜面先端は坂月川に向って岬状に突出し、舟着場であったと思われ、その南方約150mの地点から丸木舟らしいものが発見されている。当時生産や交易のための水上交通の拠点であったと思われる。

(4) 野外展示の方法

A. 集落……南貝塚の東南外縁にある縄文中期の集落は、その半数に小型貝塚を伴っており、大型貝塚との関係できわめて重要な意義をもっているので、発見された住居址群をそのまま復原して展示公開する。なおそのためには、計画的な学術調査を行わねばならないが、その調査の様子を公開して、一種の演示とする。

B. 貝層……南貝塚の貝層堆積の状態を固定して展示公開する。北貝塚と南貝塚の貝層堆積状態や時期的な相違を対比させるため、昭和39年における調査トレンチを利用し、それを再発掘によって露呈し、そのままの状態を樹脂などによって固定し、その上に覆屋をかけて、貝層断面や住居址などの遺構の状態を展示公開する。

C. 舟着場……南貝塚東側傾斜面の先端部にあったと思われる舟着場を想像復原する。整備にあたっては綿密な調査を行い、調査結果を十分に検討する。また、遺構存在の基盤となる環境の復原をめざし、現在の坂月川や小支谷を当時の姿に復原するため、遺跡全体の雨水調整を兼ねた池を設置する。

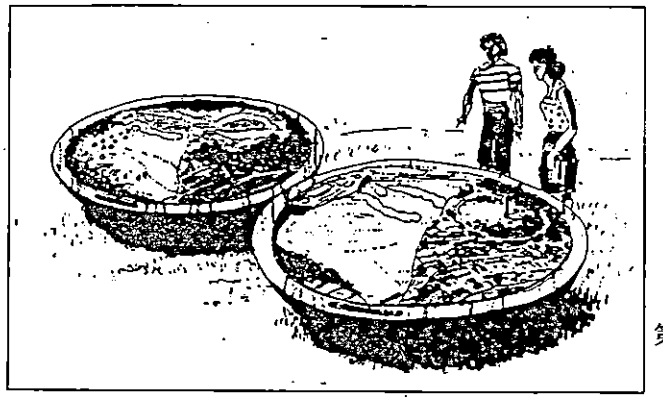
D. 特殊遺構……北貝塚の東側傾斜面から発見された巨大な竪穴の復原整備を行う。この巨大な竪穴は、規模・形態はもちろん建築構造的にも重要な意味をもち、その遺構内から発見された遺物が、土偶、石棒、異形台付土器などの特殊遺物に限られていたことから祭祀的機能をもっていたことは明らかである。このような構造や機能を明確に展示するため、建築専門家による復原と、レプリカによる遺物展示を行い、野外施設として公開する。

(5) 補助的展示

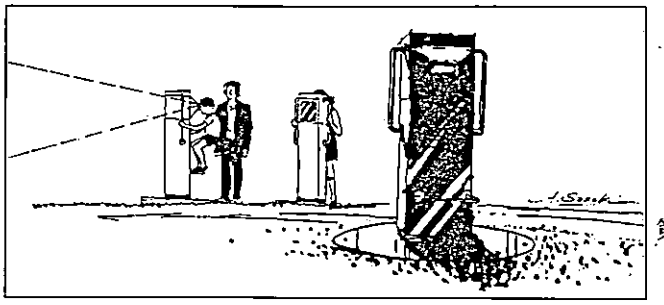
貝層や遺構そのものを実物または復原によって展示するほか、地形や景観を現地に保存し、いくら文字で説明しても、そのままではそこにおける縄文人の活動そのものが具体的にイメージできない場合、景観を損なわない範囲で、補助的な展示が必要である。一般的な看板のほかに、佐々木朝登氏によって次のようなものが提案されている。

A. ミニチュアモデル……たとえば、2m角のブロンズ盤を張ったベンチを設置し、その面に、地形・植生・住居・働く人・作業内容などを表現したり、中期から後期および現在の状況を表わして遺跡様相の変遷が一目瞭然になるようにする。文字情報では得られない効果がある。地表から40cm以内の高さにして、気楽に腰掛けられるのが要点である。

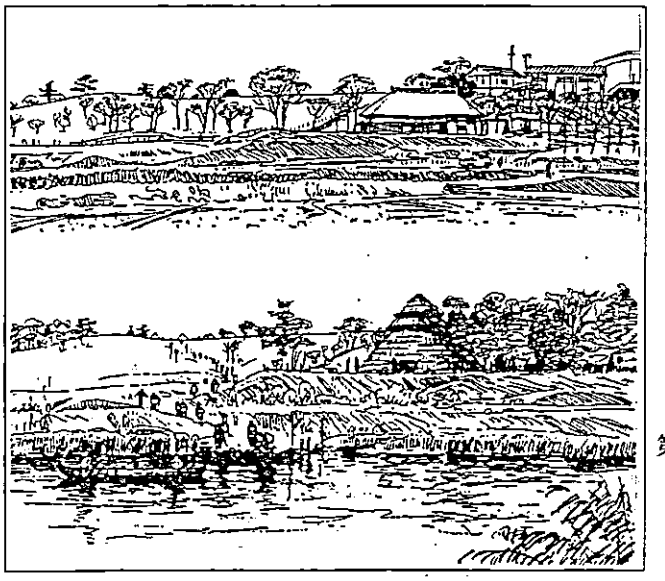
B. ビュースタンド……貝塚の現状では、ゆるやかな起伏をもった広場にしか見えないので、当時の原状を想像復原することは困難である。そこで、現在の景観をもとにして、これまでの研究結果から復原できる縄文人の生活の諸相をイラストレーションに表現して、それをビュースタンドで覗かせる。現地の現在の景観と想像復原された様相図とを重ねることによって、見学者の理解は倍加される。これは、復原すべき対象によって、



第7図　ブロンズ製ミニチュアモデル
（佐々木朝登・画、1983）



第8図　ビュースタンド（View Stand）
（佐々木朝登・画、1983）



第9図　加曽利貝塚の現況（上）とビュースタンドをのぞいた様子（下）
（佐々木朝登・画、1983）

遺跡内の随所に使用できる。たとえば埋葬地点における発掘状況の写真と埋葬方法のイラストなどをスライドして見せることもできる。なお、このビュースタンドには、「ここに死者が埋められた」とか「どのように死者を葬ったか」などという解説のテーマを明示したり、設問して問題意識を喚起することが望ましい。

(6) 環境整備計画

A. 植栽計画……この加曽利貝塚周辺は、縄文時代の生活環境を形成していた谷地、斜面、台地と連なる自然のたたずまいを、今日まで比較的よく残している貴重な例である。したがって、植栽計画は、史跡指定区域および周辺を含めたこの地区の自然地域秩序を保全・復原・育成することを主要な目標とする。

まず南貝塚の指定区域を次の3つの計画区分に大別する。(第7図)

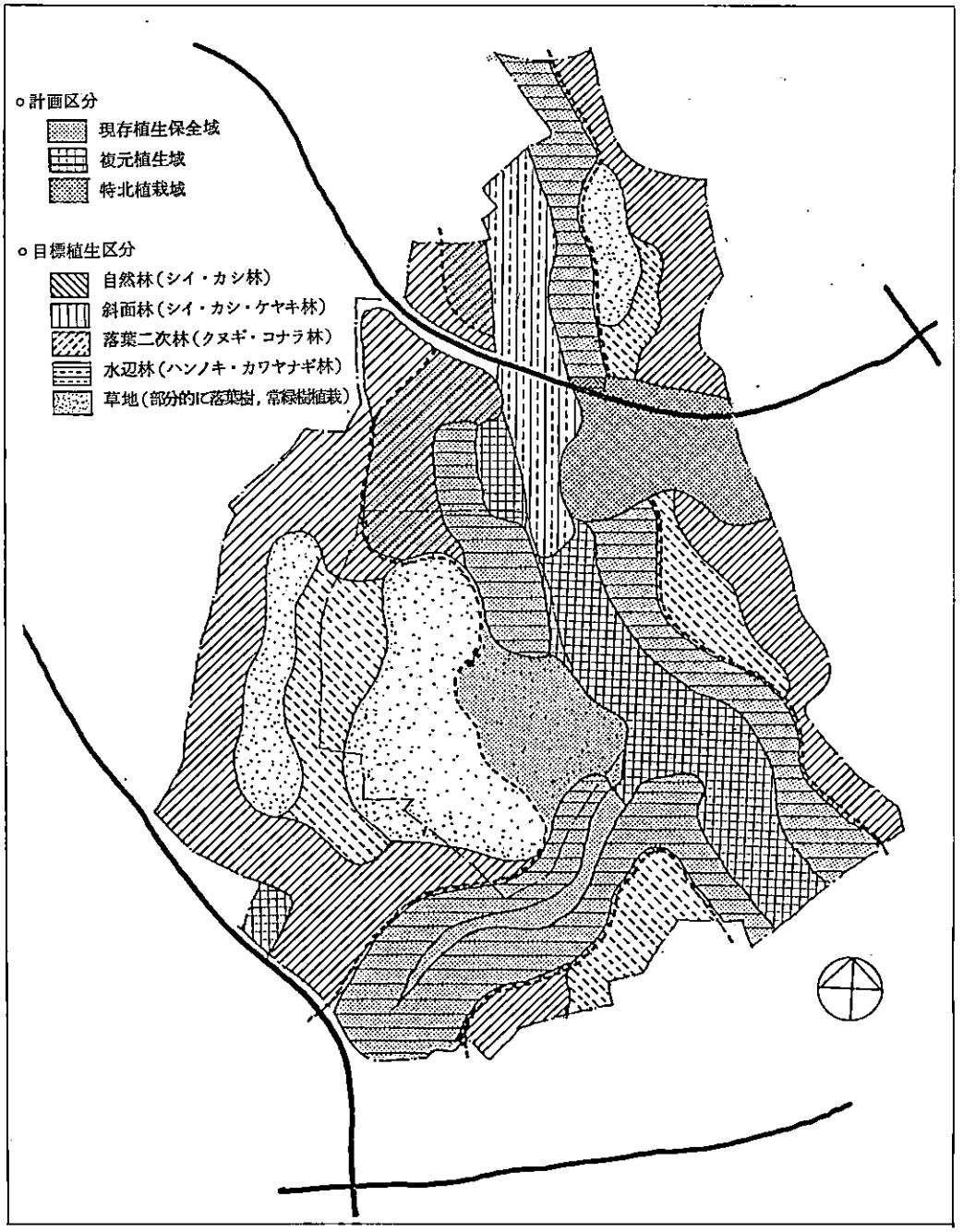
イ. 現存植生保全地域……現存植生を保全することを主とするが、必要に応じて間伐、補植等の手当を行い、目標植生への遷移を促す区域。

ロ. 復原植生地域……土地利用の現況にかかわらず、潜在的な土地条件によって目標植生を設定し、植樹とその育成管理により、目標植生の造成をはかる区域。

ハ. 特化植生地域……自然地域秩序の基盤となる現存植生保全区域や復原区域に対して、施設・設備に伴う特殊な植栽部分、たとえば、博物館周りの修景植栽、駐車場周り、道路ぎわ遮断植栽など機能的な植栽部分で、樹種は必ずしも郷土樹種に限らず、目的に応じて土地に適応しうる樹種の中から選択される。

— 目標植生区分 —

〈計画区分〉	〈現　況〉	〈目標植生〉
イ. 現存植生保全域	斜面緑地林	→○シイ・カシ・ケヤキ等斜面林
	草　地	→○草地保全、シラカシ・コナラ等点在。
	クヌギ・コナラ二次林	→○クヌギ・コナラ二次林として保全。 ○シイ・カシ林に遷移させる。
ロ. 復原植生域	クヌギ・コナラ等落葉樹林	→○シイ・カシ林に遷移させる。 ○二次林として、保全。
	畑地その他	→○シイ・カシ林及び二次林
	谷地・水田	→○ハンノキ・カワヤナギ等水辺林
ハ. 特化植栽		○施設周りの修景植栽 ○遮断植栽等



第10図　植生計画・目標植生区分図

— 基本的樹種の選定 —

目標物生	高木層	低木層
自然林 （シイ・カシ林）	シラカシ、スダジイ、シロダモ アラカシ、アカガシ、ヒサカキ ヤブツバキ	アオキ、ヒサカキ、ヤブニッケイ モチリキ、ヤブコウジ
落葉二次林 （クヌギ、コナラ林）	クヌギ、コナラ、イヌシデ、 エゴノキ、ケヤキ、エノキ、 ムクエノキ、クリ、ウワミズザ クラ、コブシ、ヤマボウシ、 ゴンズイ	ムラサキシキブ、ガマズミ、ウツギ、 マユミ、コマユミ、ニワトコ、ヤマコ ウバシ、アケビ、サワフタギ
水辺林 （ハンノキ、カワヤナ ギ林）	ハンノキ、クヌボ	カワヤナギ、イヌユリヤナギ、 ネコヤナギ
草地 （南貝塚部分）	○特色づけるもの タチフウロ、カワラナデシコ、ヤマシロギク、リンドウ、ヒヨドリバナ、 クララ、ヒキヨモギ、アキカラヤツ、レンリソウ、フタバハギ、ワレモ コウ、オミナエシ ○食用になるもの ノビル、アマドコロ、ナンテンハギ、ツリガネニンジン、ヨモギ、ヤマ シロギク、フキ、ユウゾリナ、ノゲシ、ヤマイモ ○薬用になるもの オミナエシ、オトギリソウ、クララ ーその他多種類、現存植生調査参照。	

— 育成管理 —

目標植生	育成・管理
自然林 （シイ、カシ林）	○新たに造成する場合又は落葉二次林をシイ、カシ林に遷移させる場合は、落葉樹の下に、シイ、シラカシを植栽し、林縁部に低木類による保護植栽をする。 シイ、カシの成長を持って、落葉樹を徐々に取り除く、長期的な育成管理を必要とする。
落葉二次林 （クヌギ、コナラ林）	○年一回の林内整理、下木の伐採、清掃 ○20～30年一回の伐採による新旧交代
水辺林 （ハンノキ・カワヤナ ギ林）	○新たに造成する場合は、水に近い方から、ヤナギ類、ハンノキ、クヌギの順に植栽し、自然に成長させる。 ○冠水する部分は、湿地性草木類の生息をうながす。
草地	○原則として現状保全とする。 ○年2回、6月、10月の草刈により維持。 ○特定植物の保護。

おわりに －今後の課題－

以上のように、昭和54年度から実に８カ年にわたって、千葉市内全域における各時代・各種の遺跡群の総合的な整備に関する基本構想および基本計画を策定してきた。そしてその第１歩として、加曽利南貝塚における国指定範囲内の再整備に着手し、まず昭和61年３月に、前述したような基本設計を提示した。

かねて千葉市では、市政の目標として「緑の水辺」の環境整備をめざしており、内陸の河川流域に千葉市の象徴となるような広大な緑地公園を設置する計画を樹てていた。そして、その具体的な候補地を探していたが、なかなか定まらなかった。そのとき、文化課が提示した『千葉市史跡整備基本計画』（1985）および『史跡加曽利南貝塚整備基本設計』（1986）に着目し、その候補地として加曽利貝塚とその周辺部に白羽の矢が立てられた。しかも文化課が作成した加曽利貝塚の全体的整備計画の第３段階と第５段階の一部を含む範囲を「縄文の緑と水辺公園」として造成する計画が進められるに至ったのである。

この「縄文の緑と水辺」構想のなかでは、あくまでもわれわれが提示してきた史跡とその自然環境の本来的な保存と復原を基礎とし、全体を「野外博物館」として総合的に整備・活用することが確認されている。したがってその中枢的な機関となる博物館施設も、現在のものはあまりに狭小で、構造的・機能的にも不備で、とくに史跡の中心部にあって歴史景観を大きく損ねているので、これを取払い、東側の対岸により完備された大型の博物館を新設する計画である。

これによって、史跡中心部の地形復原や環境整備もでき、これまで加曽利貝塚博物館で行ってきた基礎的な研究活動も体験学習や各種の教育活動も、はるかに充実することができる。それでこそ、自然環境を含めた実質的な「野外博物館」が実現できるのである。

しかし、この具体的な実施設計や整備工事に着手するには、なお事前の調査が行われなければならない。たとえば、考古学的な遺跡・遺構・遺物などの分布状態は、周辺の状況などからある程度の可能性を類推することはできるが、それでも確実なことは実際に発掘調査をしてみなければ、あくまでも未知数のままなのである。

従来史跡整備というと、地表面における考古学的現象や現存植生などの生物学的な現象のみにとらわれがちである。しかし、そのような人間の文化活動や植物の生存の意義は、その基盤となった大地（地形・地質）や気候・風土などの自然条件や自然環境のなかにこそ秘められている。今後はとくに、文化や歴史の基盤となったこの自然そのものの調査研究や意義づけこそ必要となるであろう。

（千葉市教育委員会文化課・主査）

六. 史跡整備のための予備調査

後 藤 和 民

1 坂月川における花粉分析調査

(1) 調査の目的

昭和60年11月、加曽利南貝塚整備基本設計に伴う環境調査として、縄文時代の植生を復原する目標植生の選定のため、加曽利貝塚の東側支谷・坂月川における泥炭層の花粉分析調査を、千葉県立幕張西高等学校の田原豊教諭に依頼した。

田原氏は、かつて1976年に同じ加曽利貝塚東側の坂月川において、「日本の稲作の起源、その伝播系路に関する花粉分析学的研究」の一環として、約3,000年前から現在までのほぼ連続した堆積物の分析を行い、その間におけるソバの栽培種を発見するなどの成果をあげている。今回は、加曽利貝塚が存続していた縄文時代の植生復原が目的なので、おもに3,000年前より以前の堆積物を対象に実施した。その分析結果の概要は次のとおりである。(『史跡加曽利南貝塚整備基本設計』1986. 千葉市教育委員会文化課)

(2) 調査の地点(第1図)

1976年には、北貝塚の末端より東方約100mの地点(Kasori-Ⅰ)を選んだので、今回はそれよりさらに東方約50mに隣接する地点(Kasori-Ⅱ)を選んで調査した。資料は、表土から深さ4mまで連続的に採取し、花粉化石の抽出には、1976年と同様にKOH-Zmcl2-Acetolysis法を用い、その試料は−290〜−380mを10cm間隔の10層に分けて処理した。

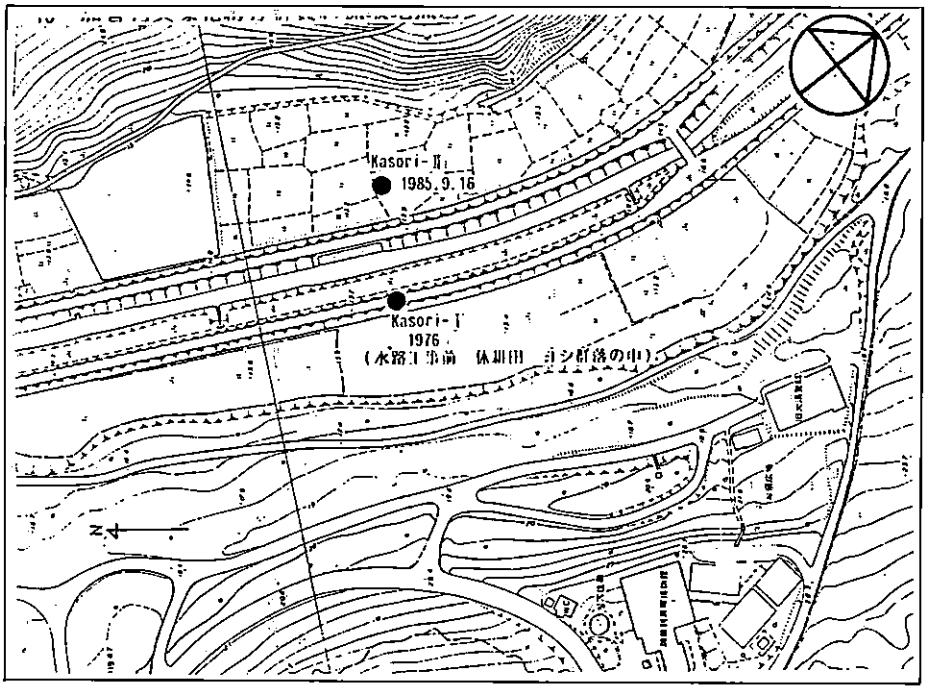
(3) 資料の年代測定

今回分析した−320〜−290cm層の年代は、放射性炭素^{14}C年代測定の結果、2,310±100年B.P.より古く8,000±170年B.P.よりは新しいことを示していた。これを、単純に堆積速度の計算によって細かい年代を推定することは危険で、各層の年代決定には、さらなる年代測定が不可欠である。なお、1976年の分析試料の年代測定や柱状図等との比較によって、今回分析した層は、2,890±75年B.P.(N−2569)より古く、少なくとも3,000年B.P.以前の堆積である可能性が高い。

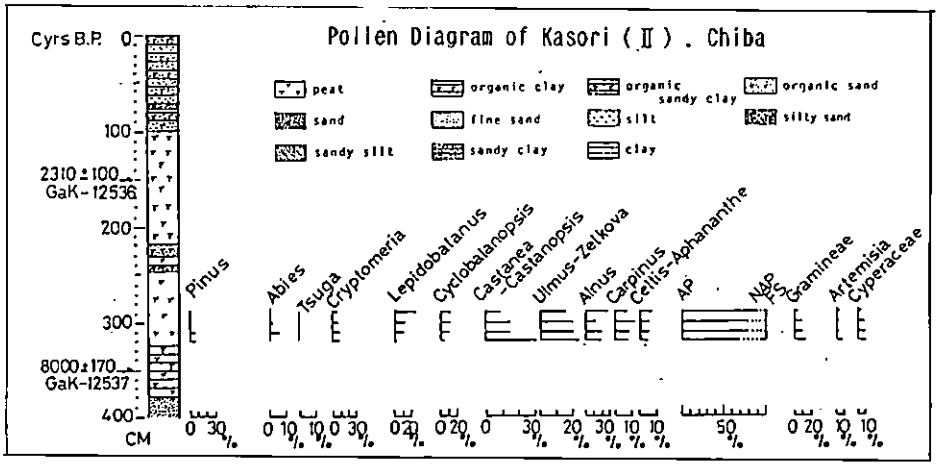
(4) 加曽利貝塚周辺の植生変遷

以上のKasoriⅠとKasoriⅡの分析結果をまとめてみると、加曽利貝塚周辺の植生変遷は、およそ次のような段階に分けることができるという。

A. シイノキ層・ケヤキ−ニレ層時代(約8,000?〜3,000年B.P.年代未定)……縄文早期〜後期に相当。加曽利貝塚の表層より深さ25cmの貝殻の^{14}C年代は3,810±75年B.P.(N−



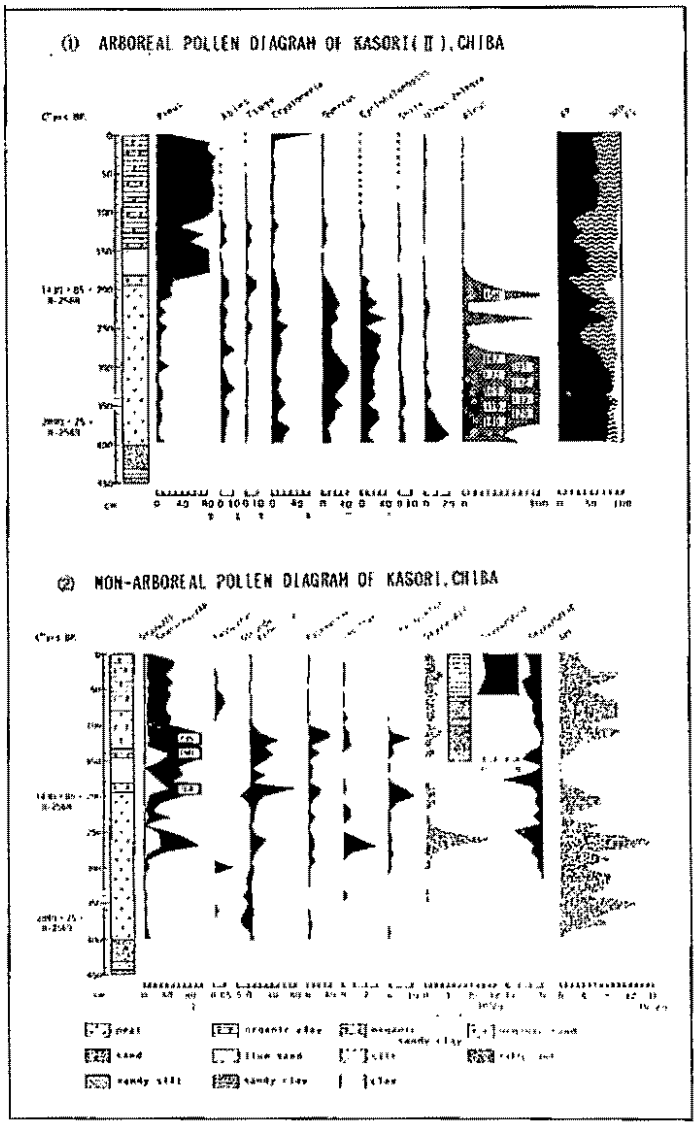
第１図　加曽利貝塚花粉分析資料採集地点図



第２図　加曽利Ⅱ地点における木本花粉出現率

2814）であることから、これが貝塚形成期にあたる可能性が強い。この時代は、シイノキ属、ニレーケヤキ属の花粉が多いのが特徴。周辺の台地上には、シイやカシなどを中心とする常緑広葉樹林が広がっていたと思われる。しかし後半には、シイは減少しはじめ、それに代ってクヌギ・コナラなどが増加してくる。また斜面には、ケヤキやニレが多く、イヌシデ・エノキ・ムクノキ・トチノキなどを含む落葉樹が成育し、谷部にはハンノキも多少進入していたようである。

B. コナラ亜属－アカガシ亜属－ハンノキ時代（約3,000～2,000年B.P.）……縄文晩期にあたる。ハンノキの花粉が多いのが特徴。谷部は前時代よりもハンノキの進入が顕著で、その湿地林が形成されていたと思われる。台地上のシイは減少し、ナラが増え、残ったカシに混って成育していく。これは、人間活動の影響は台地上に活発化したが、谷部や湿地にはあまり影響がなかったことを暗示している。ソバの花粉の出現も、現生花粉の混入でないとすると、台地上の人間活動の活発化を示すものであろう。しかし、スギやモミなどの割合もやや増加することから、気候変化も一因として考えられよう。



第3図　加曽利貝塚谷部より検出された
①木本花粉と②草本花粉

C. コナラ亜属－アカガシ亜属－イネ科時代（約2,000～約1,400年B.P.）……弥生時代から古墳時代までにあたる。ハンノキ花粉の激減と、イネ花粉を含むイネ科草本やヨモギなど草本花粉の急増が特徴。ハンノキの湿地林が伐採され水田が作られて稲作が開始された。ヨモギなど乾性草本の花粉の増加は台地上の裸地化や広葉樹の減少を暗示している。

D. マツ属－イネ科時代（約1,400年B.P.～現代）……奈良時代～現代にあたる。マツ属の花粉の激増が特徴。しかしこれは、台地上の全面がマツ林で覆われたのではなく、広葉樹がさらに減少し、裸地がさらに増えたことを示し、稲作の集約化が進んで現在に至ったものと考えられる。

2　加曽利南貝塚の現生植生調査

(1)　調査の目的

開発の進んだ千葉市内でも、加曽利貝塚周辺には緑がよく残っている。貝塚の東側の坂月川を挟んだ対岸の斜面には緑濃い雑木林があり、南貝塚の南側斜面にも高木の林が成立し、貝塚遺跡周辺の環境として良好な自然の状態が維持されている。とくに南貝塚の草原は、四季折々の草原植物が美しい花を開き、その自然景観が素晴らしく、市街化された地域ではきわめて貴重な場所である。

そこで、昭和60年6月～9月、加曽利貝塚整備基本設計に伴う保存植生の決定のため、加曽利南貝塚における現生植生の生態学的分析調査を、千葉県生物学会の小滝一夫氏に依頼した。その調査概要は次のとおりである。

(2)　南貝塚の草原植物

今回の綿密な調査によって、シダ植物3科・3種、裸子植物3科・3種、被子植物のうち単子葉植物7科・37種、双子葉植物は離弁花類38科・88種、合弁花類15科・46種、計66科・178種の植物を確認した。これは、他に類例をみない豊富さである。種の内容は、イネ科が24種、マメ科が22種、キク科が22種で、そのうちそれぞれ5種・3種・7種が外国から侵入してきた帰化植物であった。この草原の特長を種類相からみると、長い年月間生存してきた在来の種群の中に、他からの新しいメンバーの侵入が起こり、他のススキ草原には見られないほど豊かになったと考えられる。

A. 帰化植物……外国から渡来し、在来の植物群落中に侵入し繁茂した帰化植物は、その渡来の時期によって、有史以前のものを史前帰化植物、有史初期や大陸との交流開始から江戸中期にかけては旧帰化植物、江戸時代から現代にかけては新帰化植物という。

史前帰化植物は、有史以前に農耕文化の導入により農産種子と共に大陸から伝来したと考えられ、スイバ・ミミナグサ・ウシハコベなどが挙げられる。一般に人為による攪乱の大きいところほど帰化率が高い。市川市内では、台地住宅地が48%で最高、草原や林地が最低で、臨海工業地域では8.8%であったが、これに比べると加曽利南貝塚の草原は、やや人為的影響を受けている。

B. 有用植物……食用や薬用になる植物

(a)食用植物……食用になる野草は23種を数え、全種類の16.6%を占める。従来縄文人が食べたと思われてきたのは、ヤマイモ・クズ・ノビル・アマドコロ・ナンテンハギ・ツリガネニンジン・ヨモギ・ヤマシロギク・フキ・コウゾウナ・ノゲシなどの草本植物があげられる。

(b)薬用植物……薬用になる野草は55種で、31.4%を占める。現在の薬用利用がそのまま縄

文時代に適用したとは限らないが、たとえば腫れ物や解毒にはオミナエシが、止血・腫れ物・鎮痛にはオトギリソウが、ウジムシ駆除やかいせんなどにはクララというように、植物と人間生活との関係は密であるから、当時から、それらの利用があったと思われる。

要するに草原とは、人為作用の結果できあがったものであり、そのような草原には、必然的に食用植物も薬用植物も共にその群落構成種（陽生植物）の一員として生育し、人類の生活と共にあったことがうかがわれる。

C. 南貝塚を特色づける植物群……四季を通じて、この草原を彩るいくつかの植物がある。春、まだススキの小さい時期には、紫色の可憐な花をつけるレンリソウの群落を、そして秋には、ワレモコウやオミナエシなど秋の七草の姿を見ることができる。このような草原を飾る植物は、この草原でどのような生活域をもっているか、得られたデータから分析してみると、それらの分布は一致して草原の東北部に集中していた。すなわちこの東北部の地域が最も草原らしさを維持している。

(3) 南貝塚の落葉広葉樹林

今回の調査で、樹林の構成樹種の中にイヌシデが含まれる場合、コナラやクヌギ等の林よりも人為作用を受けてからの年数が経過していることがわかった。クヌギ・ナラ・クリなどの推定樹令の分布調査から、貝塚とその周辺の樹林は、10年ほどのものから40年ほどの経過年数のものがあり、それぞれの樹林の構造を維持しており、それぞれの進行遷移の方向をたどっているものと推定された。これからの樹林の維持管理の方向は、このような樹令内容を基礎にして考えるべきである。

(4) 草原と樹林成立の意義

今回北貝塚の樹林で調査中、斜面のコナラが優占する林の林床で、ラン科のマヤランが発見された。これは千葉県内での確認は少なく、本州の暖かい地方の常緑樹林に産するもので、千葉市はその生活の北限地の一つにあたる。このような貴重な種を貝塚遺跡に長く保存することも植物学上大事なことで、そのための環境の維持を図らねばならない。

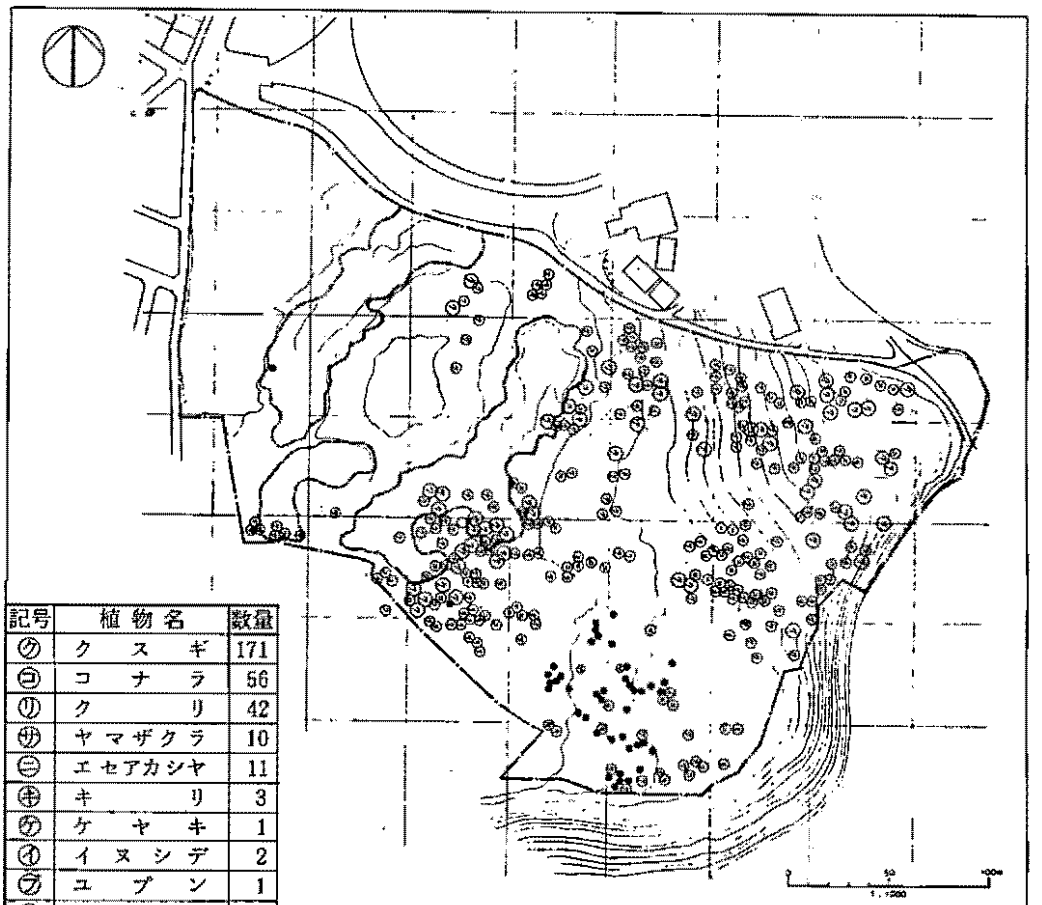
また東側坂月川の対岸で、ササの一種のコシノコチクの生育を確認した。これは、1941年新潟で発見されて以来、千葉市若松町若松小学校付近に次いで第3の発見地となった。この稀産種コシノコチクの生態調査の結果、これは本来陽のよくあたる陽地で生育するが、イヌシデ林のような遷移が進んだやや暗い林内では、小型化して細々と生きのびている。つまり光に対する適応形態をとりながら、幅広く環境適応して生きていることがわかった。

イヌシデ林は、人為が加えられた後にできたコナラ・クヌギ等に次いで成立する、より遷移段階の進んだ樹林である。コシノコチクが、このような環境下で長い間生き残って現在あるのは、人の影響で成り立った草原から、さらにコナラ・クヌギ林、そしてイヌシデ林へと、草原と樹林の繰り返しに合わせて生きのびてきたとも考えられる。従来、寒冷な

新潟県以外では発見されなかったこのササが、貝塚遺跡の多い千葉市で生存し続けている理由は、この地で自然を管理する行為が永く続けられてきたことを物語っている。

なお、栃木県星野町では、旧石器から縄文時代の遺跡群のある林の一部で、野性の小豆が発見された。これは縄文時代にあった種で、その強い生存力と、山に囲まれた袋小路のような自然環境によって、自然淘汰を免れて、先史以来生き続けてきたのであろう。

以上のように、縄文遺跡で3つの植物に関する新しい発見があった。このように、遺跡とその周辺に植物学的に重要な問題が存在することは、大いに注目すべきである。

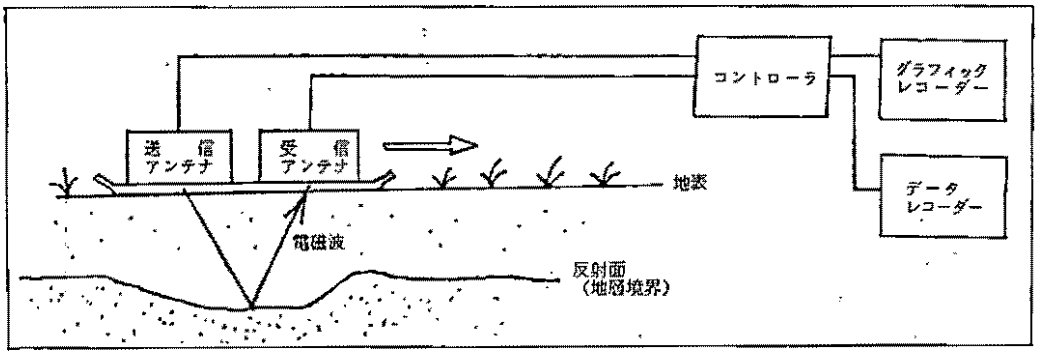


記号	植物名	数量
㋐	クスギ	171
㋑	コナラ	56
㋒	クリ	42
㋓	ヤマザクラ	10
㋔	エセアカシヤ	11
㋕	キリ	3
㋖	ケヤキ	1
㋗	イヌシデ	2
㋘	ユプン	1
㋙	ヤマナラシ	2
㋚	スギ	1
㋛	アカマツ	4
㋜	ヒノキ	3
㋝	エゴノキ	1
㋞	ニワトコ	1
㋟	アキグシ	3
㋠	サワフタギ	1
•	イヌユリヤナギ	42

草原部分の主な植物	
・	南貝塚を特色付けるもの
	タテフウロ、カワラナデシコ
	ヤマシロギク、リンドウ
	ヒヨドリバナ、クララ
	ヒキヨモギ、アオカラカツ
	レンリソウ、フタバハギ
	ワレモコウ、オミナエシ

・	食用になるもの
	ノビル、アマドコロ
	ナンテンハギ、ツリガネニンジン
	ヨモギ、フキ
	コウゾリナ、ノゲシ
	ヤマイモ
・	薬用になるもの
	オシィエシ、オトギリソウ

第4図　加曽利南貝塚現存植生図



第5図　地下レーダー装置ブロックダイアグラム

3　物理探査による遺構確認調査

(1)　調査の目的

前述のとおり、加曽利南貝塚整備基本設計において、各種の整備工事を行う計画であるが、それらの具体的な位置や形態・規模などを決定するには、南貝塚全域における地下埋没の遺構分布状態をあらかじめ確認しておかねばならない。しかし、約73,000㎡に及ぶ広大な面積を発掘調査するには、長期にわたり莫大な労力と費用を要し、しかも現状の地形や植生をかなり改変する結果になりかねない。そこで、最近群馬県黒井峰遺跡や埼玉県水子貝塚において、地下遺構の発見にめざましい効果をあげてきた物理探査法を採用し、できるだけ現状地形や植生を変えないで、しかも短期間に広範囲の遺構確認を行うことにした。

(2)　物理探査の方法

A. 電気探査（比抵抗マッピング）……2極法電極配置といわれる方法で、電極間隔を1mに固定し、調査範囲を面的に探査することによって、地盤表層部の比抵抗分布を捉えるもの。この方法で、表土から深さ1mまでの平均的な比抵抗の平面的な分布が捉えられ、地層表層部の土質の変化やその分布の状況を推定することができる。

B. 地下レーダー探査……地下に向けて放射した電磁波の地下からの反射を捉えて、地下の状況を探るもので、比較的浅い地盤の構造や埋蔵物を探知することができる。この方法は、地点貝塚や竪穴住居址などの探査にきわめて有効であり、ボーリング棒などでは得られない貝層や土層の連続性なども把握できるところに利点がある。

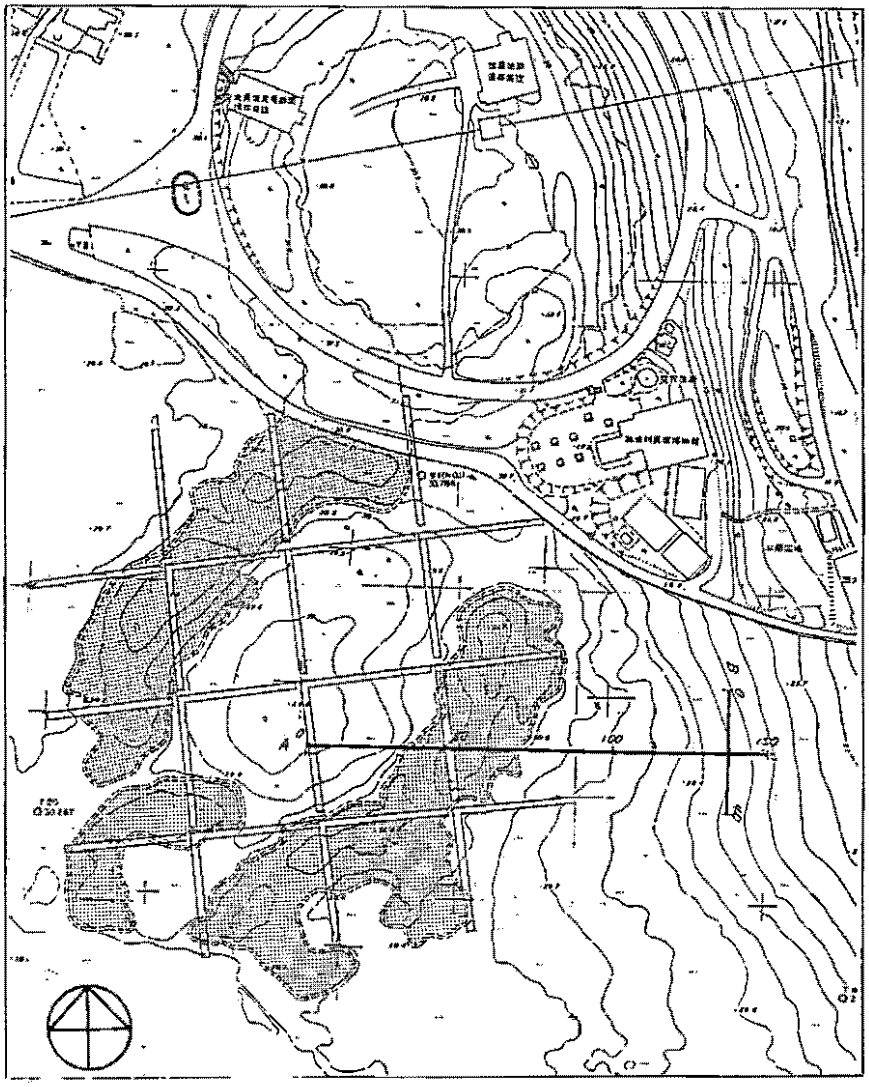
C. 貫入式比抵抗サウンディング……先端に電極を取付けた電極棒を地中に差し込み、地盤の深度方向の比抵抗分布を精度よく測定するもので、これによって、ローム層の起伏や貝層を伴わない住居址の分布などを捉える。

以上3つの探査法は、水子貝塚において実験を行った結果、いずれも有効であり、遺跡の非破壊調査法として十分な適用性をもっていることが判明した。とくに、比抵抗マッピ

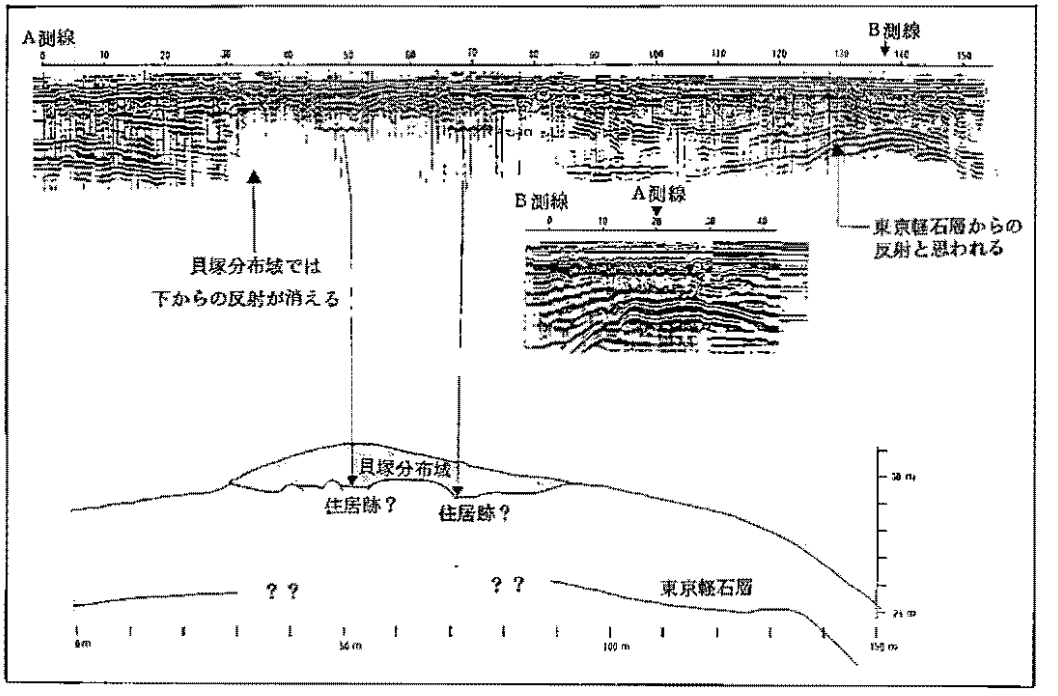
ングは表層土質の分布や大局的な構造の把握に、地下レーダーは地点貝塚の分布やその連続性の把握に、また貫入式比抵抗サウンデイングはローム層の起伏や表層土質の変化の把握にそれぞれ有効である。実際の探査においては、これらの手法を組み合わせることによって、概査から精査へのかなり幅広い段階的調査も可能である。

(4) 南貝塚における実験

埼玉県水子貝塚における実験を現地で視察した筆者は、加曽利南貝塚整備の実施設計に先立つ予備調査の方法として、この物理探査法を採用する計画を立てた。その予備実験として、昭和60年7月に応用地質株式会社の研究所による実験を、この加曽利南貝塚において実施した。その結果、およそ次のような成果を得ることができた。



第6図　加曽利貝塚地下レーダー測線図

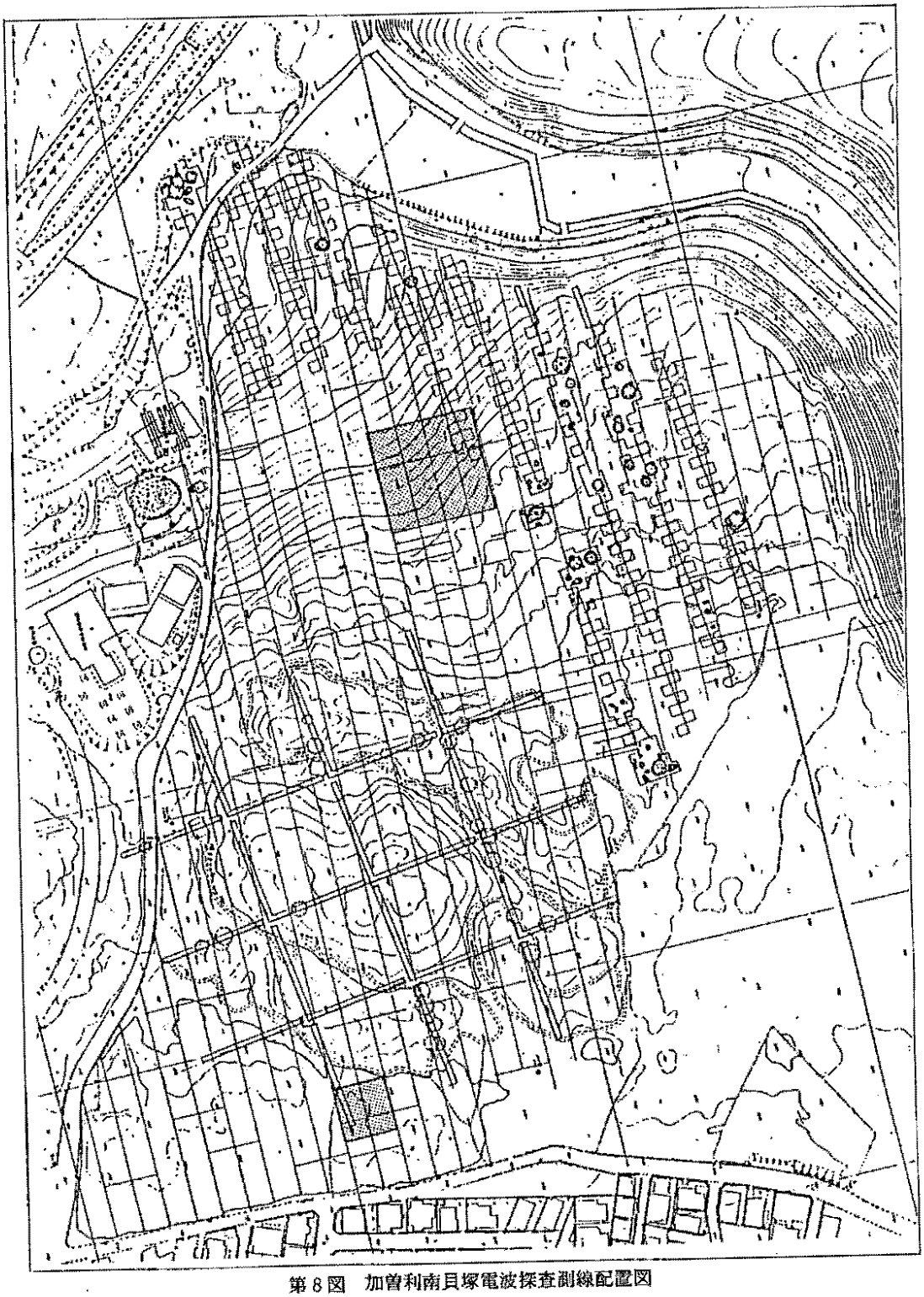


第７図　加曽利貝塚地下レーダー測定結果

A. 貝層部の把握……地下レーダー記録には、深度約４ｍ前後までの反射が捉えられているが、貝層分布範囲では、やや深い所からの反射が消えている。これは貝層内での電磁波の散乱によって、下層からの反射波が減衰・吸収されるためと思われる。これによって貝層分布域を推定することができ、現地で測定した結果、ボーリング棒による推定範囲よりも下層においては約10ｍも広がっている可能性が捉えられた。また貝層部では、貝層底面からの反射が比較的連続して識別でき、その反射面にやや起伏があり、その凹状の形態・規模などから、それが貝層底面に分布する竪穴住居址の可能性がある。

さらに、東西のA測線・南北のB測線のほぼ全域にわたって、深度約４ｍ付近からの連続した反射が認められ、その東端においては、表面地形は東に向かって下降しているのに、下層の基盤は表土から浅く、むしろ上昇している。この反射面は、ボーリング柱状断面と比較すると、ローム層下部に分布する東京軽石層に対応することが判明した。

以上の結果から、物理探査は貝層範囲と貝層下の住居址の分布およびローム層・東京軽石層などの起伏が把握できることがわかった。



第8図　加曽利南貝塚電波探査測線配置図

(5) 南貝塚全域の概査

以上の実験成果に基づいて、加曽利南貝塚の整備に先立つ予備調査の一環として、まず地下埋没遺構や貝層堆積の分布状況を概括的に捉えるため、南貝塚の指定範囲約73,000㎡を対象として、昭和61年7月～8月に、物理探査による概査を行った。

A. 測線の設定……昭和60年3月に千葉市文化課で作成した加曽利貝塚の測量図に基づき、その経緯線に合わせて、南貝塚全域を50m方眼のメッシュで区画し、その間に10m間隔に東西方向の測線を設定した。今回は予算の関係上、この測線上における地下レーダー探査を主として概査することにした。

B. 貝層堆積範囲の確認……従来、ボーリング棒による感触によって、貝層の分布を推定してきたが、その深さは地表から1mほどが限度であり、そのあたりの感触も不確実であり、また貝層の連続も試錐点によって推測するという不確実性があった。これに対して、地下レーダー探査によって、貝層部最底面の分布とその連続性や点在状態が把握され、従来の貝塚形態をかなり修正することができた。

C. 遺構分布の確認……南貝塚においては、その北西部・北東部および南端部において、未調査の空白区域がある。これらの区域における遺構の所在を確認することが、今回の最大の課題となる。なお、南端部の縄文中期住居址群を集落として復原するため、未調査部分における遺構分布の確認も必要であるが、今回の探査では、その精査は行わない。むしろ、対象区域全体の概査によって、遺構分布の全体的な傾向を把握し、その結果によって、精査の方法を再検討すべきである。

D. トレンチ調査による検証……すでに、10m間隔の測線上における地下レーダー探査によって、未調査区域から各種形態の遺構群が予測され、その分布の傾向もある程度捉えられている。しかし、それらの把握がどこまで正しいか、遺構の認められないところには、はたして遺構は存在しないのか、発見された遺構とは、いかなる時期のいかなる形態・規模および性格のものであるかなどの問題を検証するため、一部の有効な地点や遺構を選んで、トレンチによる小発掘を行う。その場合最小限度の必要条件を確認したら、後日の精査のため、遺構は埋めもどしておく。

以上の予備調査によって、新しい発見や所見を得る可能性が大きいので、加曽利貝塚そのものに対する再認識や再評価やその可能性を検討した上、具体的な実施計画をたてる。

なおこの調査は、この稿を執筆している現在は、まだ地下レーダーの測定中であり、そのデータの分析や検証のための試掘も行なわれていないので、これ以上の報告はできない。しかし、試掘の結果、予想外の遺構の発見や問題が提起される可能性が十分にあり、この物理探査法の活用の仕方によっては、遺跡の大局的な把握のためにきわめて目覚ましい効果を上げることができることは、すでに確実になった。今後、加曽利貝塚の広域にわたる

保存や整備のため、周辺の関連遺跡や遺構を確認するとき、重大な役割を果すであろうことは明白である。これによって、従来の微視的な観点による局部的保存・整備から、新しい巨視的な観点による広域的保存・整備の段階に止揚できれば、その意義はきわめて大きいであろう。

4　今後の調査

(1)地形・地質の調査

千葉市の「縄文の緑と水辺」の構想により、いまや坂月川を堰止めて縄文の河川を復原し、東側の対岸台地とその縁辺の緑を確保することになった。しかし、その地形・地質などの特色や意義を捉えずに造成すると、かえって遺跡や歴史の存立基盤を失うことになる。

たとえば、坂月川に突出した東傾斜面の岬(みさき)状地形も、昭和45年度の発掘調査の結果、その先端から半分欠落した古墳時代の住居址が発見され、かつてはさらに数mほど谷中に突出していたことが判明している。だから坂月川の形態も、水量や河床の変化などを調べて、縄文時代の原状に復原しなければならない。また、坂月川を挟んで西側の台地は緩傾斜を呈し、東側の台地縁辺は急傾斜になっている。これは千葉県下における「おぼれ谷」の両岸地形にみられる典型的な現象であるが、その成因についてはいまだに定説がない。このような地形のなかで、なぜ大型貝塚は西側にあり、一般集落は東側にあるのか、その選地の理由や意義は、その地形などの自然条件のなかにこそ秘められているのである。

(2)　泥炭層遺跡の調査

昭和40年のボーリング調査によって、坂月川には約4～5mの泥炭層が発達しており、花粉の豊庫であると同時に、独木舟(まるきぶね)らしい木質遺物が埋没していることがすでに確認されている。最近では、市内浜野町の浜野川遺跡から、縄文前期の低湿地貝層と多数の木器などが出土している。この坂月川も大型貝塚と同様に、他の遺跡では残らない有機質遺物が豊富なので、きわめて貴重な泥炭層遺跡である。こうした好条件の2種の遺跡を広範囲に保有していることこそ、加曽利貝塚の価値は増加され、ここから発見される多種多様な資料によって、他の遺跡とは比較にならぬほど具体的な歴史が叙述でき、それだけ一般国民が多角的に活用しうる可能性をもっているのである。

このように、加曽利貝塚がもっている潜在的な価値をできるだけ多く確保し、その活用の可能性を最大限に残すことこそ、現代のわれわれの義務である。確実な調査研究もなく、明確な根拠もなく、ただ皮相的な景観や雰囲気だけで浅薄な造成や整備を行うならば、それは何らの実質的な保存にも活用にもならず、結局、悔いを千歳に残すことになろう。

(千葉市教育委員会文化課・主査)

第三部

20周年に寄せて

千葉市立加曽利貝塚博物館20周年に寄せて
――“ 縄文ロマンの里 ” を育もう ――

加曽利貝塚博物館友の会々長
土 屋 秀 雄

このたび千葉市立加曽利貝塚博物館が設立20周年を迎えられ、当冊子を発行されましたことは、誠に意義深くお慶び申しあげます。

昭和41年11月24日に開館の加曽利貝塚博物館は、縄文時代の集落遺跡を永く保存するとともに現代人が考古学習の場として活用することをねらいに設立され、開館以来、多くの人びとが日本人のルーツを学ぼうと館を訪れ遠く先史の時代に思いを馳せ、未開とはいえあの日輪と蒼天と緑野のめくるめく自然風土の中にあって逞しく生き抜き、平和な日々を送っていた縄文人と親しくコミュニケートでき得る唯一の拠点施設として大きく寄与して参りました。とくに開館以降の館の運営・管理にあたっては歴代の館長さんや職員の方々が並々ならぬご苦労を重ねられ、ことに最近では「縄文土器づくりの会」「古代食調理の会」「先史・有史時代の遺跡めぐり」などユニークな企画の実践活動を展開されて、一般市民との交流を密にされておられることに対し、多大の敬意と衷心よりの謝意を表する次第であります。

顧りみますと、加曽利貝塚の存在は明治20年、当時の研究家・上田英吉氏が著した『下総国千葉郡介墟記』によって学界に紹介され、20年後の明治40年に東京人類学会が「遠足会」と称して実施した試掘（予備的発掘調査）によって日本最大の貝塚として一躍有名になり、その後は再三にわたり東京大学人類学教室が人骨採集のための発掘を行なったと伝聞しています。そして、大正13年には同教室が貝塚の層位的な発掘調査を実施したとき、南貝塚のB地点と北貝塚のE地点から新しい型式（タイプ）の土器が上層と下層から発見され、それぞれ加曽利B式および加曽利E式と名づけられ、しかも、その層位的な上下関係によって年代の新旧関係が確認できたことから土器型式による縄文時代の編年の基礎となったといわれています。

こうした学術的な基礎固めが出来ようとしたとき、わが国の軍国化と戦争への盲進によって日本人のルーツを探る学問は蔑（ないがしろ）にされ、暗黒時代に置き去りにされてしまいました。やがて敗戦後、混迷の時代は意外と短期間に過ぎ、わずか15年にして所得倍増、高度成長の時期を迎えたころは、期せずして日本中が“考古学ブーム”に沸き立つ時代

でもありました。

わが千葉県は、京葉工業地帯造成の開発行政が進められ、内湾沿岸地区の海面埋立地への工場配置も徐々に実現しました。その半面では後背地の宅地造成などの開発も進められたことに伴い、千葉市にも開発の波が押し寄せました。学界が注目し、かつ、市民が誇りとしていた加曽利貝塚も、宅地や工場用地として白羽の矢がたち、貝塚は全面破壊の危機に瀕したのであります。想えば、昭和37～38年のことでした。私どもは貝塚を守るための手立てをこうじました。それが全国的な貝塚保存運動へと盛り上がり、市当局も貝塚の学術的価値を確認するため緊急調査を行なうことにしました。

昭和39年、市の要請により、日本考古学協会加曽利貝塚調査特別委員会は加曽利貝塚調査団を編成し、南貝塚の緊急調査に当たりましたが、調査の途中で南・北貝塚の市買い上げと保存が実現することが約束され、昭和40～41年には、北貝塚の保存設備事業が進められることになりました。私どもが「貝塚を守ろう」という、やむにやまれぬ気持ちから進めた保存運動の目的が、この時ようやく到達点を見たのであります。

博物館が開館してまもなく、「貝塚を守る会」は「貝塚友の会」になり、それまでの発掘調査の成果により加曽利貝塚の重要性が認識され、昭和46年３月に北貝塚が国史跡として指定されたのです。いわば遺跡に“ハク”がついたのです。こうなると今度は博物館を見捨てて置くわけにいかなくなり、博物館運営の全面バックアップが友の会の間で話し合われたのです。

昭和50年代に入ると、館には外国人が訪れるようになりました。保存のための発掘調査の逐年進行とともに加曽利貝塚は地球上における唯一最大規模の先史遺跡として諸外国から認識されるようになったのであります。そして、昭和59年９月には南貝塚も国史跡に指定されました。「もう捨ててはおけん」というのが友の会々員の心情でした。50年代の半ばまでには「加曽利貝塚博物館友の会」としての新たな会則や組織固め等についての成案を見ました。ところが、守る会時代から永年にわたり会のために尽力されてきました会長の鈴木正夫先生（千葉大学名誉教授）が病床に倒れて辞任されたため、代わって私が就任させていただいたのが昭和55年のことでした。

その翌年夏、鈴木先生は惜しくもご他界されたことは残念でなりませんでしたが、医学者でありながら古代史・考古学に深く通じておられた鈴木先生のご遺志を常に念頭に頂くとともに、幸い友の会役員の方々や博物館職員の方々の心強いご後援に支えられながら友の会は、今、諸事業の推進へ向け鋭意努力しているところであります。

縄文のロマン”を持つ“日本人のルーツの里”として国際的注視を集めている加曽利貝塚博物館の充実をはかることが今後の使命といえる時、ここに開館20周年を迎えた博物館の益々のご発展を祈念し、私のお祝いのご挨拶といたします。　（千葉日報社長）

加曽利貝塚博物館と郷土博物館

千葉市文化財保護審議会委員
中　村　民　男

はや20周年を迎えるとのこと、開館を迎えるまでに、またその後もさまざまな困難や危機があったが、それらに打ちかって努力をされた沢山の方々の力によって今日がある。これらの方々に深く感謝と敬意を表したい。

加曽利貝塚は明治20年にはじめて学界に紹介され、以後何度にも亘って調査が行われ、その価値は高く評価されていたが、保存とか管理ということになると配慮されず、放置されていたようだ。

長年この調査を手がけられていた武田宗久氏がある時現地を訪れると、立木は伐採され所々に杭が打ちこまれていたという。これは大変、破壊されてしまう、と文化財委員会に早急に調査をすることを提案された。調査の結果、土地は次々と転売され所有者が変り、工場予定地になっていることが判明した。また加曽利貝塚の価値の重要性が更に立証されるようなものが発掘された。

そして世界に誇る貴重な文化財が破壊の危機に瀕している、と報道され、保存の機運が高まっていった。しかし、現実の問題となると、今まで放置されていたものが急に貴重品扱いになるようなことだから、地主や地権者には寝耳に水、言い分もあっただろう。国や県、市としても戸惑ったに違いない。この解決は相当困難のように思われた。

当時の社会教育課長遠藤健郎氏もこの保存問題に大変頭をつかい、心を痛め、努力されていたが、「いくら考えたって、頑張ったって無駄だよ、やっぱり無理だよ」などといわれるくらい見通しは暗かった。

ところがどうだろう、ある時急に宮内市長が理解を示し、遠藤課長に積極的な協力と適切な措置を講ずるよう指示された、というのである。これは武田氏が宮内さんに加曽利貝塚は千葉県の誇る最大の文化遺産で、日本の四大遺跡の一つ……というようなお話をされた席だったという。

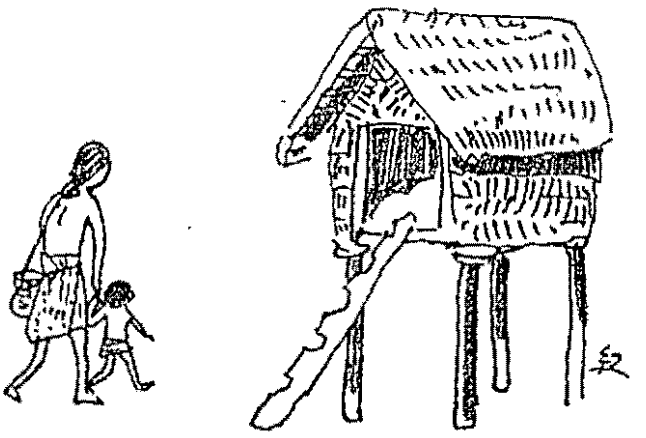
その後、友納知事も協力を約束、土地の買収……と次第に道は開け、建設の道を歩んだ。表面的に荒すじをたどると何のことはなかったようだが、あれだけの難関が開けていったのだから、多数の関係者の中でさまざまな交渉、折衝、また妥協、譲歩、配慮……といったことが行われ、少しずつ糸ぐちができて解きほぐされていったものだと思う。

宮内さんは子供っぽいところがあり、大きな夢をもつ方だった。思いつくと何にしても実行したくなり、反対者がいると気になってしょうがない。何としても説きふせてだまらせてやろう、というようなところがあった。京葉工業地帯も軌道にのり、市長の席も安泰。太平洋と東京湾を運河でつないで千葉市を九十九里まで拡げたい……などということは流石に実現の方向には進まなかったが、亥鼻山にお城、これだけはどうしても造りたかったようだった。言葉には気をつかって純日本式、眺望性のある高楼建築、瓦葺、白壁の土蔵造り、などとすぐに察しられてしまうのにてれくさかったのか、まわりくどい表現をされていた。

いわゆる千葉市の文化人なるものは、かつてなかった天主閣のようなものを造ることは史実をあやまって伝えるおそれがある、と反対であった。青年会議所やロータリークラブでも賛否のアンケートをとった。建築関係者の中に回答をしぶった人がいたが、あとは皆反対であった。新聞紙上でも賛否が論じられ宮内さんは何時もこのことではいらいらされていたようだった。

自分の発案で海を埋め川鉄を誘致。これが引き金で内陸工業地帯の急造成となり、その結果各所で文化財破壊が問題となり、そして今度は加曽利貝塚の保存が大きく叫ばれるようになった。宮内さんとしても内心、良心の呵責があったのではなかったか。たまたまある時考えがひらめき、加曽利貝塚の保存に理解を示せば自分は市長として行政的にも文化的にも立派な仕事をしたことになるし、市民からの評価は上がるだろう、そして亥鼻城建設反対の声は下火になるかもしれない。宮内さんがそう考えられたかどうかは知るよしもないが、全く考えられないことではないように思う。

宮内市長があれだけの決断を下すには、学者、地権者、国や県、市議会、住民、マスコミ……等あらゆる情勢から検討されたあげくであるのはわかっている、しかしこのような要素がゼロであったとは思えないがどうだろう。　　（中村病院院長）



カソリという地名

千葉県立美術館長
平野　馨

カソリという地名には何となくエキゾチックな響きがある。似たような音で連想するのは、青森下北の霊地恐山の別名ウソリ＜宇曽利＞や、舞楽の曲名ナソリ＜納蘇利＞等だが、それらとのかかわりは聊か見出しにくい。

千葉のカソリという地名は、和名抄では糟苅(カスウリ)と表記されている。苅は瓜である。勿論、初めに呼び名があって、漢字は後で発音に近い字を当てたのである。諸書に、糟瓜とは冬に熟するカツウリ(加豆宇利)・カザシウリ(金釵瓜)という瓜のことだとあり、その発音のつまったのがカソリだろうと記されている。なるほど、カスウリ→カスリ→カソリという過程を思わせる。

或いはまた、サソリ(蠍蝪)のことを常陸などではカソリというので、そのサソリにかかわるのではないか、ともされてきた。

邨岡良弼はこんなことをいっている。日本書紀に、雄略天皇の5年、百済の加須利(カスリ)の君が、弟を日本に帰化させたとあるが、その子孫がこの地を領したとの推測のもとに、カスリの君という名に起因してカソリの地名が生じたのではないか、としている。中世の初め、千葉常胤の孫、成胤はカソリに居館を構え、加曽利冠者小太郎を称したとの記録がある。従ってその頃は既に現在と同様に、加曽利という表記をしていたわけである。

さて、カソリの語源を全く別の観点から、カとソリに分解して考えてみたい。カは暫くおくとして、ソリであるが、これは焼畑に関係するソリではないかと思う。焼畑とは雑草や雑木等を焼き払い、そこに作物を栽培するという初期的な農耕法である。耕作が数年続いて地力が衰えると、土地を放置し休ませ、或る一定の年数が経つと再び畑としたので切替畑ともいった。ソリとはソラス（荒らす）という動詞の名詞化したものといい、休耕中の焼畑のことだったようである。

カソリのソリもこれに関連があるのではないかというわけだ。ただ、この程度のことが土地の名前として定着しうるのかとの疑問が生ずるかも知れないが、全国的に展望するとかつて焼畑が行われて

いたと思われる所にその地名例は多い。県内でもソウリ（木更津市の相里）・ソリマチ（富津市の雪車町・君津郡袖が浦町の反町）等、10数か所にある。カソリの場合も、焼畑があったということがいえるかどうか、これが1つの課題だ。

ソリは一応これで止めるとして、カソリのカはどうか。これもなかなか難問である。カ（加）という地名が本県流山市にある。ここはもと加村といったがそれは桑（クワ）村の訛りではないかといわれている。カソリのカはどうなのか。植物の名が地名となった事例は多いが、カソリの場合、桑が地名となるほどに人々に存在を意識させ強く印象づけた時代があったのだろうか、いずれ調べたい。

地名の起源を探究することほど牽強付会に陥りやすいことはないだろう。先ず実地に歩き今と昔の自然条件を考察するとともに、古い記録等を客観的に検討すべきことはいうまでもない。以上は従来の諸説を踏まえたほんの話題提供的随想に過ぎないが、何かと御教示をいただき、少しでも前進できれば幸いだと思っている。

縄文のにおい

―― 土器づくり同好会の活動から ――

加曽利貝塚土器づくり同好会長
早　川　行　一

太古の時代に、ここ加曽利貝塚の地で、多くの人びとが集まり、貝を煮ていた。そのニオイはどんなであっただろう。この大貝塚は、2千年も3千年もの気の遠くなるような長い間にできたという。ここに生活した多くの人びとのニオイ……貝を煮る、薪を集める、土器を作る、焼く……、個人の家族生活や集団の生産の中に、いろいろなニオイがあったことでしょう。

今日の都会に、人びとが集まり生活するさまとの違いは、どのようなものでしょうか。いろいろと思いを馳せ、皆様の心のうちを聞かされながら、一回一回、土器づくりの行事が過ぎていきます。その積み重ねのなかに、人と人の結びつきが楽しく営まれていく「加曽利貝塚土器づくり同好会」も、はや12年にならんとしております。会員各位の熱心な縄文土器づくりの活動に支えられて、今日を迎えました。

博物館の、ちょっと湿ったほこりくささ、土くささというか、独特なニオイに包まれ、

代官屋敷の内や外で、土器の製作、煮たきの実験等々を行う同好の士の集まりは、一つの心豊かなニオイでもあります。「ここに来ると、本当に楽しい」という言葉も出る。遠く県外からも集まる。これも同好会のニオイかも知れません。

近年、各地で縄文土器づくりが盛んに行われております。私達もその一団体ですが、私達の会が一番古く、一番進歩していると確信しております。これもひとえに博物館の指導のたまものと思っております。

しかし、この程度の活動では、縄文土器を本当に知ったことにもわかったことにもなりません。ただ土器の形ができ、それで煮たきができたという程度では、「縄文時代とは何だったのか」、「なぜいま、加曽利貝塚なのか」などと、いろいろ考えると、この同好会も、ほんのちょっと縄文のニオイをかいただけのようなものです。

全国各地には、50を越える土器づくりの会があるようです。また、土器づくりが学校教育の一助にもなりつつありますが、本当に人間の歴史のはじまりを確実にとらえる糸口になるような、そんな縄文土器づくりでありたいと希つております。

土器に賭けた司郎さん

新　井　みちよ

司郎さんが、縄文時代の小さな壺や、古墳時代の鳥の埴輪などを作りはじめたのは、昭和36年の暮、私たちが結婚する3年ぐらい前、私もまだ「司郎さん／」と呼んでいたころのことでした。

その年の10月上旬に、開店したばかりの私たちの小さな店で、司郎さんが友人の相沢忠洋さんと毎日毎日、古代のロマンを飽かず語り合っているのを、私はただそばで聞いているだけでした。私のことより、私との結婚話よりも、「土器」のことばかりが司郎さんの頭の中を支配し、開店したばかりの店（喫茶店『新樹』）の経営や、生計のことや、司郎さんの子供（先妻の子2人）の世話など、すべては私の役割で、だから私には当時のことは、ただ忙しさだけしか思い出せません。

そんなある日、「まず店で使ってみな」と縄文土器に似た灰皿を50個あまり焼いて持って来ました。それからというもの、司郎さんの作った小さな縄文土器が、店の棚に少しずつ数を増していきました。しかし、その縄文土器は、毎日使い、そして毎回洗わなければなりません。そうしなければ、発掘品のような本当の土器の光を放たないのです。私は、

土器を焼く故新井司郎氏

その手助けだけをしていたようでした。

その後だんだん欲が出てきて、各地の素晴らしい形や文様の縄文土器をつくりたくなり、そのような土器を作るためには、そのアトリエや露天焼きをする場所が持ちたくなりました。そして、土地探しがはじまりました。それと平行して、材料となる粘土や砂や土、燃料となるものなど、大量に集められていきました。

桐生の市街・郊外をかまわず歩き廻るのに、司郎さん一人の日もあれば、日曜や休日には、家族を連れたり、また友人と二人であったりしましたが、私も、それはそれはよく歩かされたものでした。

その甲斐あって、知人の世話で、良い地所が郊外の相生町にみつかり、そこが生涯のアトリエとなりました。司郎さんがアトリエにいる時は、まるで縄文人になりきって仕事をします。そして、土偶、埴輪、花びん、皿形、壺形と、いろいろ手掛けましたが、土器そのものがだんだん大型化していきました。

そのうち、私たちの生活までが、縄文人になったようです。近所の人たちと連れだって、春や夏には、ハイキングだといって山に入り、裸足のまま川の中を歩かせられ、「川下り」をさせられたり、野原で野草の食事をさせられました。こうして司郎さんは、周囲の人たちまで巻き込んでしまうのです。はた目には、さぞかしのん気そうに見えたことでしょう。

その頃でした。千葉市の加曽利貝塚博物館からのお話がありました。そのお話は、当時まだ大学生だった増田修さん（現在桐生市教育委員会勤務）が、加曽利貝塚博物館が行う発掘調査に参加しているうち、自分の郷里の喫茶店に並べられた土器を見て、桐生で独学で縄文土器作りをしている人がいますよと博物館の後藤和民先生に司郎さんのことを紹介したようです。

後藤先生は、かねて加曽利貝塚博物館で縄文土器の製作技術の実験的研究をしようと考えられていたようで、早速先生みずから桐生まで来られました。そして、まだ開館して間もない博物館に、「縄文土器製作技術研究所」の所長として来るようにと誘われました。その時は、大変な悩みようでした。本人は、「これは大変な事が起きるぞ」と、ただひと言。私は行くように勧めたかった。私自身大いに悩みながらも、

それでもなお、勧めたかったのです。それは私にとっても、本人にとっても、生活が180度転換することなのです。それを覚悟の上、司郎さんは加曽利貝塚博物館行きを、後藤先生に承諾したのでした。

故新井司郎氏とみちよ夫人（昭和40年、桐生市内）

それは博物館の嘱託の形で、いまでいえば「単身赴任」、1ケ月のうち半分は加曽利へ、半分は桐生というのでした。桐生にいる半月も、加曽利から宿題を持ち帰っていたので、以前にもまして忙しくなり、人が変わったかと思うほどに大変な熱の入れようでした。髭を剃る時間さえ惜しみ、頭髪はもじゃもじゃのまま、店のことも家族のことも眼中にはないようでした。縄文土器の製作で、あんなに燃えていたのは、自分の寿命を知っていたからなのでしょうか。

街中でも、司郎さんの「土器づくり」は有名でした。その熱狂ぶりをみて、大変な「変わり者」などと呼ばれたりもしましたが、本人にとってそのことは、却って名誉であるような口ぶりでした。

昭和46年9月、相生町のアトリエで持病の心臓発作を起こし、入院してからは、しきりと加曽利貝塚に心を駆せていました。そして、とうとう病床で心筋梗塞のため、この世に別れをつげました。そのとき、姉から贈られた句にこんなのがあります。

土器に賭けし生涯一灯消ゆる秋　公子

いろいろな想い出は尽きませんが、司郎さんと一緒だった生活は、一瞬の花火のようでした。来年はもう十七回忌になります。

（故新井司郎氏夫人）

生きていた壁画

画　家
松　下　紀久雄

私が壁画制作委託をうけ、加曽利貝塚を訪ねたのは44年の６月であった。案内された現場は屋根が食パンのような、コンクリート造りの一見倉庫風の建物であり、中は地べたを掘じくり上げた大穴がぽっかりあいていて、杭穴がいくつもあった。それが縄文期の住居跡だといわれた。

中は土臭く、足もとからじわーっと湿気がのぼってくるのだが、それよりか、眞中あたりにある玉石で囲んで練瓦色に変色した炉跡や、人が寝おきしたであろう、つるりとした地べたから人のいる気配を感じた。妙な気持ちになるのは、他人さまの家を訪ねた時に感じるのと同じであろうか。

絵の制作は冬に入ってからだった。まず東の正面から始まった。近景に穴の中のタヌキ図があり、左手に丸木舟をつくる人、そしてヤリでサカナを捕る人を描いた。右方は縄文の集落があって広場で年寄りババの語りべの話を聞く人々を描く。

とにかく現場は霜柱が立つほどで大変寒いのだ。係が気を利かせて石油罐に炭火をおこしてくれたのだが、水溶性のアクリル塗料は凍るせいかネバネバしてくる。そんな時にはどうしても下の住居跡の方へと目が移る。（ここに住んだ人間たちも、もっと寒かったに違いない）などと思うのだ。

壁画は予算の関係で、二次制作の西北面は翌年となった。しばらくぶりで訪ねる貝塚は周囲のどんぐり林が実を落とす秋であった。まず西壁面にはタテ穴住まいのくらしと、新しいムラを探して移動する家族の一団をテーマにした。

北壁面はタテ穴住居の建設場面と、獲物をかつぐ男衆と、食物貯蔵庫と、住まいにくつろぐ縄文一家を楽しく描いた。最初の東壁面は私の絵友達に助っとを頼んだのだが、二回目の西北面は助っとは変わり、セガレ夫婦がペンキだらけになって40メートルほどの長さがある空間を色で埋めた。

さて、私たちは戦場から帰る兵士のように、ローラ刷けをつける竹棒をかつぎ、ペンキ罐や皿や箪を入れたリックを背負って東京へと帰ったのだが、数日たった或る日加曽利から電話がきた。北面に描いた絵が消えている。という悪い知らせであった。

私はさっそく加曽利へ飛んだ。あれほど克明に描いた絵が消えていた。まるで水で洗い流したように、タテ穴を建築中の男はあとかたもなく、どこかへ行ってしまい、獲物をかつぐ2人はオバケのように下へと、ツララのように流れ出ていた。山は平坦な野原と化し、空飛ぶ鳥類は地に落ちるという惨たんたるものであった。(縄文人の怒りにふれたのではあるまいか？) 私は本当にそう思った。

それから4・5回、この北面の補修が続いた。ひどい時は昼に仕上げた絵が夕方にはもう消えることもあった。

北側は乾きが遅いせいだろう。いや、あの壁の間には水が溜まっとるんだ。などと北壁面に対する疑惑は人によってまちまちである。

南面の壁は何年も遅れて制作にとりかかった。暑い夏の真っ盛りに、ヤグラを組んで貰い、それによじ登って描いた。病人のまくらもとに人が集まり、祈禱師のオババが祭壇をつくり、祈っている図がある。中央の広場では、いまのスーパーストアのようなもので、物々交換の賑いなどもある。

長さ80メートル高さ3メートルのこの大壁画のしめくくりがこの南面の図である。この面は日当りもよろしく、湿気もなく制作は快調に終ったものだ。

だが一難去ってまた一難。通報を受けて加曽利へと駆けつけて見ると。なんと、壁画に登場している縄文のオッさんも、オバさんも、子どもも、みんな眼が無くなっている騒ぎ。よくよく調べて見ると5ミリほどの深さにえぐられていて、壁の白い部分が露出していたのだった。「これは、子どもがコインか何んかで目のところだけ、こじったんですナ」と係が困ったような目つきでいった。推理は当っていた。まさにコインでゴリゴリこじったような穴である。

「先生の描いた人間はここを見学する子どもたちを見つめるような格好なんですね。子どもが気になるせいでしょうか」という係もいる。

その目玉の修理は、パテを塗り込んだ上に絵具で描くだけで意外と簡単に済んだ。しかし、北面のオバケ壁には、いまだに未解決である。何かいい知恵はありませんか。

南貝塚発掘調査のころ

千葉市埋蔵文化財センター常務理事
大塚喜一

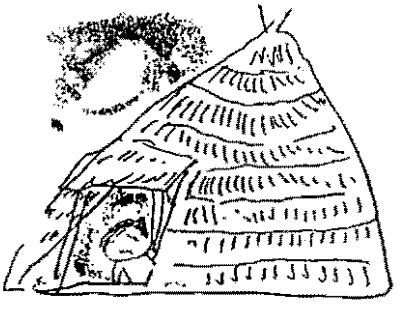
加曽利貝塚が、衆人の注目を浴びはじめた昭和37年、当時の社会教育課長遠藤健郎氏が一緒について来いと言うので桜木町の雑木林へ行った。そこで目にした光景は、どこかのおっさんが学生相手に穴掘りをしている姿であった。そのおっさんこそが武田宗久氏であり、その穴が今の北貝塚にある住居跡展示施設であって、加曽利貝塚の運命を決定づけた試掘であった。

当時、私は社会教育施設係長という職名で公民館等の施設整備を担当していた。加曽利貝塚の大発掘は、ご承知のとおり38年から2ケ年、滝口宏早大教授を団長に実施されたのであるが、遠藤課長曰く、大塚君は自動車の免許証を持っており、山登りばかりしているので体は頑健だろうから発掘現場の全般を担当するようにとの命令であった。

縄文式土器という名称は知っていたが、加曽利貝塚は知らなかった。事前準備は大変なもので、テンヤワンヤの大騒ぎの毎日であった。担当者は素人の私一人、当時早大の学生であった宍倉昭一郎君を手伝いにたのんでどうやら発掘着手までにこぎつけ、色々問題はあったが2ケ年で調査は終了した。

幸い、日本考古学協会を中心とした民間の力と国・県・市の関係機関の努力で加曽利貝塚は守られた。御同慶の至りである。以上が文化財に足をふみ入れることとなった経緯であり、次に博物館長を拝命し、遂に文化財から足を洗うことが出来ず、現在も千葉市文化財調査協会でお世話になっている。

関係者の皆様には大変お世話になりました。博物館20周年を心よりお祝い申し上げます。



博物館と泥メンコの思い出

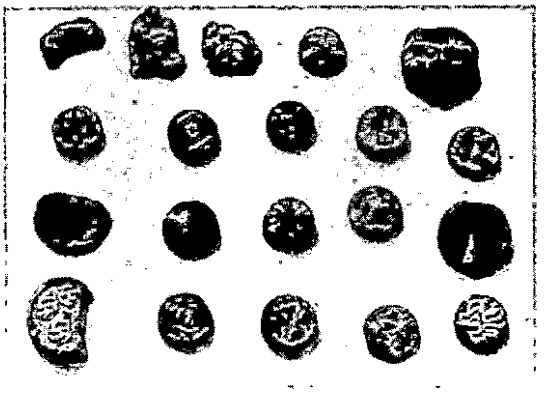
博物館友の会会員
大　塚　　要

加曽利貝塚博物館が開館されてから満20周年を迎えたと聞き、光陰矢の如しの感を強くしている。その博物館の近くにある桜木小にかつて勤務していた時のことである。ある日、4年生の田野君が小箱を大切に持参し、自分の家の畑で見つけたのだが、何というものなのか教えてほしいという。蓋をあけると、いろいろな面の形をした素焼の小さな茶色い物が詰まっていて、それぞれに細かい細工がしてあった。

居合わせた2、3の職員と話し合ってみたが一向に要領を得ないので、昔のよしみで、貝塚博物館の久野館長を訪ねた。その結果、その小さな焼き物は、面や玉の型の中に粘土を詰め込んで焼いた物で、江戸時代末期から明治にかけての子どもの遊び道具であったことがわかった。これらは、江戸の市場から出たワラや野菜くずと一緒に舟で検見川海岸に陸上げされ、カワナ(アオサ)をまぜて肥料として売られたとのこと。　こうして、台地の畑にまかれた中から素焼きの面が出土したわけで、「江戸ごみ」といわれ幕張から船橋近辺の畑でよく見かけるという。田野君が、眼を輝かしてこの話を聞き、嬉しそうに帰って行ったことは今でも忘れられない。

私は、早くから郷土史や考古学に興味をよせていたので、博物館での縄文土器の製作講習や、毎年実施される講座や見学会には出来るだけ参加させていただいた。

中でも、昭和56年9月(6・13・20日)の3日間に実施された郷土史講座の最終日の見学会は、深く印象に残っている。見学場所は、神楽場貝塚、飯郷作古墳、江原台曲輪内貝塚、大崎台遺跡、荒海貝塚であった。特に、曲輪内貝塚と大崎台遺跡は、ちょうど発掘調査中の現場を見学させていただき、調査責任者の篠原先生・柿沼先生より貴重なご説明とご苦労話を伺うことができ、非常な興味と感銘を覚えた。　(元桜木小学校長)



加曽利貝塚博物館開館20周年に際して

千葉市教育委員会文化課長
石　井　雅　男

加曽利貝塚博物館が設置され、本年20周年を迎えましたこと、誠に喜ばしく、これまで博物館の活動、運営にご指導ご協力を賜わりました皆様に心よりお礼申し上げます。

お陰をもちまして、その活動も年々充実して参りました。特に全国の博物館に先きがけて実施した土器作りの会、あるいは文化財めぐりの会等は、博物館事業として定着しております。また、20周年記念事業の一つとして開催した特別講座も多くの市民の方々の好評をいただきました。

このほか、施設整備として、展示内容の充実を計ると共に、全館に空調設備を施し、観覧者へのサービス向上をはかりました。なお史跡の整備については、文化庁等関係機関のご理解のもとに南貝塚及びその縁辺部が追加指定され、指定面積も約13万平方米と拡大されました。南貝塚の整備は、本年度基本計画策定と基礎調査を実施し、明年度より３ケ年計画で整備をしたいと考えております。更には、加曽利貝塚を中心とした「縄文の森と水辺」構想も、市長部局との連携のもとに現在検討中であり、完成時には、全国に例を見ない史跡公園になるものと考えております。

これらは、20年にわたる歳月の流れの中で多くの方々のご支援により、博物館活動の大きな柱である文化財の保護、啓蒙、普及にその持てる力を十分に発揮できた結果であろうかと存じますが、まだ残された課題も多々ございますので、今後とも努力をしてまいる所存であります。関係各位のより一層のご指導ご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

終りに、この記念誌の発刊にあたり、ご尽力賜わりました皆様に厚くお礼申し上げます。

第四部

一、加曽利貝塚博物館小年表
二、博物館の利用状況
三、博物館の職員
四、博物館協議会委員
五、博物館の刊行物
六、加曽利貝塚関係文献

一、加曽利貝塚博物館小年表

昭和41年度

5月　加曽利町兼坂古墳緊急発掘調査（古墳時代）市教育委員会

6月　加曽利北貝塚貝層堆積群調査区の発掘調査（加曽利貝塚調査団）

7月　博物館本館・収蔵庫竣工

9月　第2回文化財保護審議委員会にて
加曽利貝塚博物館・開館準備について諮問

11月　復原住居建設（博物館入口）
「加曽利貝塚を守る会」を解散し、「加曽利貝塚友の会」を設立　会長　鈴木正夫
加曽利貝塚博物館　開館式（24日）

42年3月　加曽利町新山古墳群緊急発掘調査（古墳時代）市教育委員会

昭和42年度

5月　日本博物館協会入会

9月　秩父宮妃殿下ご来館

10月　菱名貝塚、荒屋敷貝塚、草刈場貝塚の現状調査（千葉県考古学会）
－地形測量図の作成を主とし、菱名貝塚は一部発掘調査も実施－

11月　野外施設建設工事に伴う補充発掘調査（加曽利北貝塚貝層堆積群調査区及び、住居址群調査区）加曽利貝塚調査団
千葉日報社主催「伸びゆく千葉展」（千葉そごう）に出品

43年3月　加曽利南貝塚買収開始
博物館登録
野外施設（住居址観覧施設・貝層断面観覧施設）竣工

昭和43年度

4月　野外施設整備事業開始（1年次）指導・東京国立文化財研究所
展示室・展示替え「縄文人の生活」

7月　千葉県博物館連絡協議会、当館講堂にて開催
市内遺跡分布調査（東南部地区）千葉県考古学会

8月　野外施設電線埋設工事に伴う発掘調査（加曽利貝塚調査団）

10月　第3回全国史跡整備等関係市町村協議会、加曽利貝塚視察

11月　旧大須賀家移築に伴う発掘調査（加曽利貝塚調査団）

11月　東寺山町西前原遺跡緊急発掘調査（古墳時代）加曽利貝塚博物館

12月　宝導寺台貝塚緊急発掘調査（縄文時代）市教育委員会

44年３月　旧大須賀家移築（大須賀富美子氏寄贈）

昭和44年度

４月　野外施設整備（２年次）貝層断面及び住居址床面　特殊加工指導・東京国立文化財研究所

大森町向台貝塚現状調査（縄文時代）市教育委員会

６月　市内主要遺跡現状調査（月ノ木貝塚・辺田台貝塚など）加曽利貝塚博物館

菱名古墳群の一部緊急発掘調査（古墳時代）市教育委員会

７月　展示室展示替え、テーマ「縄文時代集落における文化の様相」

道標保存移設（若松町より）

県立桜ケ丘養護学校へ説明パネル・貝類を寄贈

９月　縄文土器製作技術研究委託開始（１年次）新井司郎

刈田子町古文書調査（市教育委員会）

10～３月　へたの台古墳群緊急発掘調査（古墳時代）市教育委員会

11月　館外展示（県立桜ケ丘養護学校文化祭）

12月　野外施設（住居址保存施設）に壁画製作　松下紀久雄

45年１月　千葉県博物館協会例会開催（博物館講堂）

大覚寺山古墳発見（生実町）

２月　千葉市制50周年記念により観覧料無料

３月　大覚寺山古墳予備測量調査（市教育委員会）

大覚寺山古墳、県重要遺跡に指定される

昭和45年度

４月　縄文土器製作技術調査研究委託（２年次）新井司郎

遺構・遺物に関する保存等の研究委託（東京国立文化財研究所長・関野克）

５月　野外施設整備事業（３年次）指導・東京国立文化財研究所

６月　文化財保護審議会にて老人ホームの加曽利南貝塚隣接地移転の件について諮問

７～９月　源町すすき山遺跡緊急発掘（縄文時代）市教育委員会

８～９月　第１次加曽利南貝塚遺跡限界確認調査（加曽利貝塚調査団）

９月　「土器づくりの会」開催－県立千葉高生ほか

博物館外装工事

9月　縄文土器製作技術研究委託（2年次）新井司郎

10月　市内遺跡現状調査（破壊危機にある遺跡の保護パトロール）

大覚寺山古墳買収

館外展示　轟中学校文化祭「縄文時代の人々の生活」

11～3月　大椎城址測量調査（千葉市史編纂に伴う調査）

46年2月　施設整備事業（館内換気整備防犯設備工事）

3月　野外施設（住居址保存施設）の壁画製作及びコーティング工事（松下紀久雄）

防犯設備取付工事野外施設

北貝塚国指定史跡告示

昭和46年度

4～9月　縄文土器製作研究委託（3年次）新井司郎

5月　展示資料借用調査　青森県小河原湖方面

6月　常陸宮・常陸宮妃両殿下ご来館

6～3月　第2次加曽利南貝塚遺跡限界確認調査（加曽利貝塚調査団）

7月　文化財保護対策協議会加曽利貝塚視察（老人ホーム移転問題）

多部田町平和公園内遺跡分布調査（縄文時代・平安時代）市教育委員会

千葉県博物館協会研究会開催（加曽利貝塚博物館講堂）

8月　国道51号線バイパス建設予定路線区間遺跡分布調査（市教育委員会）

原町土地区画整理事業区域内遺跡分布調査（市教育委員会）

日本考古学協会埋蔵文化財特別委員会加曽利貝塚視察

野外施設整備事業（4年次）指導　東京国立文化財研究所

9月　小河原湖博物館より資料借用（縄文晩期土器）

10月　多部田貝塚北遺跡（平和公園内）予備調査（縄文時代、平安時代）市教育委員会

11月　館外展示「縄文土器展」

（桐生周辺の縄文文化と故新井司郎氏の縄文土器の製作技術展）桐生市中央公民館

民俗資料採集調査（園生町・高田町）

11～3月　特別展「新井司郎遺作展」（故新井司郎氏の縄文土器の製作技術展）博物館講堂

47年2月　発掘出土動物遺体鑑定研究開始（1年次）金子浩昌（早稲田大学講師）

3月　文化財めぐりの会（第1回）宗吾霊堂・成田山史料館芝山はにわ館ほか

講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会委員）

3月　第2収蔵庫竣工

昭和47年度

4～10月　市内民俗資料収集調査（2年次）

4～12月　千葉市史編纂に伴う遺跡分布調査（縄文時代～中世遺跡）加曽利貝塚博物館

4～3月　民俗資料収集委託調査（宍倉健吉・吉田公平）

5～3月　第3次加曽利南貝塚遺跡限界確認予備調査（加曽利貝塚調査団）

5月　保存化学的調査研究委託（東京国立文化財研究所長　関野克）

発掘出土岩石資料鑑定研究委託（1年次）新井重三（埼玉大学教授）

発掘出土動物遺体鑑定研究委託（2年次）金子浩昌（早稲田大学講師）

6月　野外施設整備（5年次）野外施設遺構露出面保全管理に関する保存科学的処理（指導　東京国立文化財研究所）

8月　土器づくりの会（博物館友の会主催）明治学院大学考古学研究会

10月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民

12月　旧大須賀家案内説明板設置

旧大須賀家囲炉裏端復原工事

48年3月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民

昭和48年度

4月　展示替えに伴う展示資料収集調査（八王子郷土資料館ほか）

野外施設整備（6年次）貝層断面及住居址床面特殊加工（指導・東京国立文化財研究所）

6～9月　本館展示室の展示替え、及び内装工事

6～3月　第4次加曽利南貝塚遺跡限界確認調査（加曽利貝塚調査団）

発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（2年次）新井重三（埼玉大学教授）

発掘出土動物遺体鑑定研究委託（3年次）金子浩昌（早稲田大学講師）

7～9月　加曽利南貝塚遺跡環境整備（貝層分布範囲に大谷石敷設）

10月　天皇・皇后両陛下ご来館

皇太子・皇太子妃両殿下ご来館

12月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民

49年2～3月　旧大須賀家現状調査委託（千葉大学教授　大河直躬）

3月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民

文化財めぐりの会（第2回）大原幽学保存館・香取神宮宝物館周辺ほか

3月　講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会委員）・後藤和民

昭和49年度

6月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（4年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（3年次）新井重三（埼玉大学教授）
市内民俗資料収集調査委託　吉田公平、和田茂右衛門

5月　野外施設整備事業（7年次）貝層断面保存科学実験研究委託、住居址床面保全管理研究委託（東京国立文化財研究所）

7～3月　旧大須賀家復原調査委託　大河直躬（千葉大学教授）

11月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民

9月　加曽利貝塚土器づくり同好会発足

50年3月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民
文化財めぐりの会（第3回）「印旛沼周辺の文化財」師戸城址・松虫陣屋址ほか　講師　和田茂右衛門（千葉市文化財保護審議会委員）・渡辺太助（郷土史家）
第3収蔵庫竣工

昭和50年度

5月　野外施設整備事業（8年次）指導　東京国立文化財研究所
土器づくりの会（博物館貝塚友の会主催）一般市民

6月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（5年次）金子浩昌（早稲田大学講師）

6月　発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（4年次）新井重三（埼玉大学教授）

10月　土器づくりの会（博物館友の会主催）一般市民

51年3月　文化財めぐりの会（第4回）「養老川周辺の文化財」県立総南博物館ほか
講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会委員）・渡辺太助（郷土史家）

昭和51年度

5月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

6月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（6年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（5年次）新井重三（埼玉大学教授）

10月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

52年3月　文化財めぐりの会（第5回）房総風土記の丘・竜角寺ほか　講師　和田茂右衛門（千葉市文化財保護審議会委員）・川戸彰（千葉県史編纂室）

昭和52年度

6月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民
発掘出土動物遺体鑑定研究委託（7年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（6年次）新井重三（埼玉大学教授）

9月　南貝塚国指定史跡告示

10月　加曽利貝塚石碑建立（公園内）

53年3月　文化財めぐりの会（第6回）大椎城址・土気城址ほか　講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）・後藤和民
郷土史講座（第1回）「東京湾沿岸における縄文時代の貝塚文化」講師　金子浩昌（早稲田大学講師）・後藤和民　ほか
土器づくりの会（博物館主催）一般市民

昭和53年度

5月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

6月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（8年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（7年次）新井重三（埼玉大学教授）

7月　郷土史講座(1)「遺跡・遺物からみた千葉市の歴史」（先土器時代～古墳時代）
講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）・後藤和民

9月　三笠宮殿下ご来館

10月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

9月　郷土史講座(2)「遺跡・遺物からみた千葉市の歴史」（王朝時代～中世）
講師　平野　馨（県立大利根博物館長）ほか

11月　縄文土器作品展（第1回）「早期の土器」土器・土偶の展示　土器づくり同好会共催
復原住居修理（屋根ふき替え）

54年3月　文化財めぐり（第7回）「佐倉市周辺の中世史跡」本佐倉城址・臼井城址ほか
講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）・渡辺太助（郷土史家）

昭和54年度

4月　機構改革により社会教育課より文化課独立　加曽利貝塚博物館は文化課の所属となる。

5月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（9年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（8年次）新井重三（埼玉大学教授）

5月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民
8月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民
9月　郷土史講座（第3回）「千葉市の民俗」講師　平野　馨（県立大利根博物館長）ほか
11月　土器づくりの会「子どもの土器づくり」小・中学生（博物館主催）
縄文土器作品展（第2回）「子どもの土器づくり」（土器づくり同好会共催）
55年3月　文化財めぐりの会（第8回）「多古町周辺の文化財」多胡城址・志摩城址ほか
講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）ほか
博物館案内板設置（公園内および国道51号線入口）

昭和55年度

5月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（10年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（9年次）新井重三（埼玉大学教授）
土器づくりの会（博物館主催）一般市民
8月　土器づくりの会（博物館主催）小中学校教員
9月　郷土史講座（第4回）「千葉市の貝塚」講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）
浩宮殿下ご来館
10月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民
11月　縄文土器作品展（第3回）「火焔土器に挑戦」土器づくり同好会共催
11月　荒屋敷貝塚発掘調査（縄文時代）市教育委員会
56年2月　貝塚博物館友の会、鈴木正夫会長辞任　土屋秀雄会長就任
3月　文化財めぐりの会（第9回）「多古町周辺の文化財」多胡城址・志摩城址ほか
講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）・浜名徳永（芝山町観音教寺・住職）

昭和56年度

5月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（11年次）金子浩昌（早稲田大学講師）
発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（10年次）新井重三（埼玉大学教授）
8月　土器づくりの会（博物館主催）小中学校教員
9月　郷土史講座（第5回）「千葉市周辺の貝塚」講師　武田宗久
土器づくりの会（博物館主催）一般市民
11月　縄文土器作品展（第4回）「縄文土器の用途」ボーイスカウトの作品展示　土器づくり同好会共催

57年２月　「収蔵品展」購入資料の公開（縄文土器・石器・動物骨格標本など 160点）

３月　文化財めぐりの会（第10回）「千葉市内の中世史跡」　講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）

加曽利E地点、B地点、特殊遺構出土地点に説明板設置

野外便所設置

昭和57年度

５月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（12年次）金子浩昌（早稲田大学講師）

発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（11年次）新井重三（埼玉大学教授）

土器づくりの会（博物館主催）一般市民

８月　土器づくりの会（博物館主催）小・中学校教員

９月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

10月　郷土史講座（第６回）「掘り出された千葉の歴史」講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）

11月　縄文土器作品展（第５回）「阿玉台式土器をつくる」　土器づくり同好会共催

58年３月　文化財めぐりの会（第11回）「千葉市北部の指定史跡をたずねて」

講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）　博物館友の会共催

昭和58年度

４月　千葉市博物館設置条例改正に伴い名称変更「千葉市立加曽利貝塚博物館」となる。

５月　発掘出土動物遺体鑑定研究委託（13年次）金子浩昌（早稲田大学講師）

発掘出土鉱物資料鑑定研究委託（12年次）新井重三（埼玉大学教授）

土器づくりの会（博物館主催）一般市民

８月　土器づくりの会（博物館主催）小中学校教員

９月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

10月　文化財めぐりの会（第12回）「国立民俗博物館とその周辺史跡を訪ねて」

講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）

渡辺太助（郷土史家）　ほか　博物館友の会共催

11月　縄文土器作品展（第６回）「土器づくり同好会10年の成果」（土器づくり同好会共催）

59年３月　郷土史講座（第７回）「加曽利貝塚とその調査」講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）

昭和59年度

5月　縄文土器胎土分析委託（1年次）富沢　威（東京国立文化財研究所）
土器づくりの会（博物館主催）一般市民

8月　土器づくりの会（博物館主催）小中学生
本館外壁塗装工事

9月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

10月　文化財めぐりの会（第13回）「佐倉市吉見台遺跡と印旛沼周辺の史跡を訪ねて」
講師　田川　良・小川和博（日本考古学研究所）ほか　博物館友の会共催

11月　縄文土器作品展（第7回）「大型土器をつくる」土器づくり同好会共催

60年3月　展示室展示替え（1年次）ガラス縦ケースの新築、内装工事を行う
郷土史講座（第8回）「千葉市における埋蔵文化財の調査」講師　武田宗久（千葉市文化財保護審議会長）ほか

昭和60年度

4月　展示室展示替え（2年次）英文入りの解説パネル等設置

5月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民
縄文土器胎土分析委託（2年次）富沢　威（東京国立文化財研究所）

7月　郷土史講座（第9回）「加曽利貝塚周辺の自然環境の変化」
講師　杉原重夫（明治大学教授）・小滝一夫（千葉市緑化植物園相談員）

8月　土器づくりの会（博物館主催）小中学生

9月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

10月　文化財めぐりの会（第14回）「堀之内貝塚と北総地方の史跡を訪ねて」
講師　堀越正行（市立市川考古博物館学芸員）ほか　博物館友の会共催

11月　縄文土器作品展(第8回)「縄文後期の土器を考える」(土器づくり同好会共催)

昭和61年度

5月　貝塚出土人骨鑑定委託　小泉清隆（東京大学人類学教室）
貝塚出土動物遺体の鑑定委託　金子浩昌（早稲田大学講師）
土器づくりの会（博物館主催）一般市民

5～10月　開館20周年記念特別講座「加曽利貝塚の自然と文化」開催
都賀地区コミュニティセンターにて、講師　鈴木尚（東京大学名誉教授）ほか11名

8月　土器づくりの会（博物館主催）市内小・中学生

9月　土器づくりの会（博物館主催）一般市民

11月　文化財めぐりの会（第15回）「市原市と長南町の文化財」上総国分寺址、笠森観音、報恩寺ほか　講師　田中喜作（市原市文化財審議会委員）博物館友の会共催

加曽利南貝塚の史跡整備に伴う発掘調査（市教育委員会・加曽利貝塚博物館）

電波探査による遺構の有無を発掘調査によって確認（62年2月まで）

11月　花粉分析調査委託　田原　豊（県立幕張西高校）

縄文土器作品展（第9回）「後期の土器をつくる」（土器づくり同好会共催）

62年3月　郷土史講座「貝塚の貝は、いつとられたか？」講師　小池裕子（埼玉大学助教授）

二　博物館の利用状況

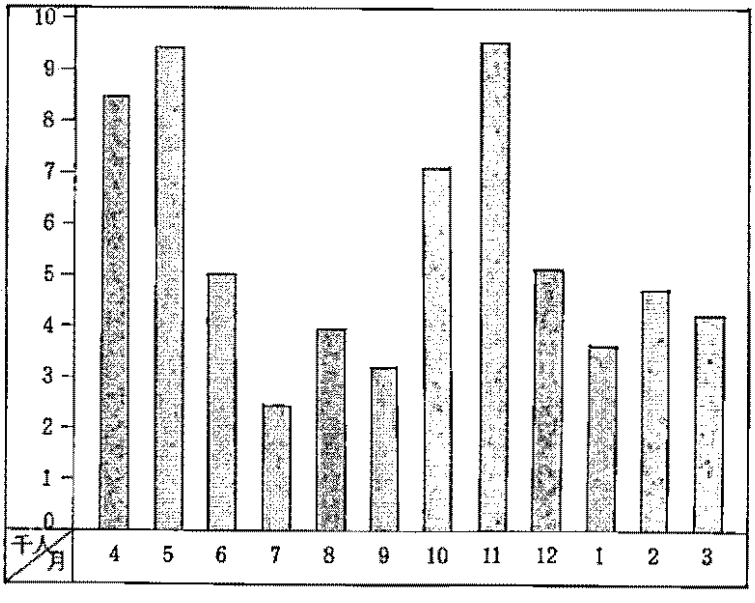
○年度別入館者数　　（単位：人）

年度	開館日数	個人 大人	個人 小中学生	団体 大人	団体 小中学生	入館料免除等	計	1日平均	備考
41	91	2,151	933	539	1,617	2,321	7,561	83	41.11月開館
42	293	7,110	2,678	2,921	8,987	2,357	24,053	82	
43	287	5,455	2,381	2,393	9,370	1,506	21,105	74	
44	207	4,759	2,096	1,656	11,614	1,610	21,735	105	7～10月休館
45	297	7,083	3,453	2,017	16,226	2,368	31,147	105	
46	298	7,865	4,520	2,665	18,993	3,536	37,579	126	
47	298	7,905	4,309	5,737	20,957	3,231	42,139	141	
48	169	5,021	3,550	2,998	13,443	1,212	26,224	155	5～10月休館
49	294	9,900	7,782	5,139	23,724	2,252	48,797	166	
50	295	9,360	7,210	5,323	25,788	4,020	51,701	175	
51	252	7,746	6,995	4,855	29,096	2,732	51,424	204	1. 2月休館
52	293	8,647	7,695	4,726	28,600	3,479	53,147	181	
53	294	8,496	7,786	5,676	36,970	3,247	62,175	211	
54	294	10,047	9,046	4,606	34,603	3,381	61,683	210	
55	258	10,246	8,279	5,324	41,931	2,932	68,712	266	7. 8月休館
56	296	10,794	8,559	3,947	42,866	5,199	71,365	241	
57	295	11,086	9,038	3,532	46,337	3,232	73,225	248	
58	296	9,445	6,845	3,414	44,345	3,098	67,147	227	
59	270	9,633	6,626	2,103	43,727	2,059	64,148	238	3月休館
60	287	8,428	5,556	2,192	35,740	2,181	54,097	188	4／1～4／10休館
累計	5,364	161,177	**115,337**	71,763	534,934	55,953	939,161	175	

○個人と団体の割合（56～59年度　5か年平均）

個人 大人	個人 小中学生	団体 大人	団体 小中学生	入館料免除者
15%	11%	5%	64%	5%

○月別入館者数（56～59年度　5か年平均）



三 博物館の職員

年度	職・氏名	
41	課長兼務 館長	遠藤　健郎
	館長代理 学芸員	後藤　和民
		中山　仁
	管理人	林　忠雄
42	館長	遠藤　健郎 42.12.31まで
	学芸員	後藤　和民
		今井　公子 42.10. 1まで
	管理人	林　忠雄
43	館長	大塚　喜一 43. 1. 1～
	学芸員	後藤　和民
		今井　公子
	管理人	林　忠雄
44	館長	大塚　喜一
	学芸員	後藤　和民
		今井　公子
		山本　勇
	管理人	林　忠雄
45	館長	大塚　喜一
	学芸員	後藤　和民
		今井　公子 45. 6.30まで
		山本　勇
		庄司　克
		薬師寺　崇 45. 7. 1～

年度	職・氏名	
45	管理人	林　忠雄
46	館長	大塚　喜一
	学芸員	後藤　和民
		山本　勇
		庄司　克
		薬師寺　崇
47	館長	佐久間直義 48. 1. 1まで
	課長兼務 館長	高橋　一郎 48.1. 2～14
	学芸員	後藤　和民
		庄司　克
48	館長	譜久里長通 48.1.15～5.2
	課長兼務 館長	高橋　一郎 48.5. 3～6.30
	館長	吉野　六郎 48. 7.1～
	学芸員	後藤　和民
		庄司　克
		森谷　孝一
		小林恵利子
49	館長	吉野　六郎
	学芸員	後藤　和民
		庄司　克
		森谷　孝一
		小林恵理子 49. 6.30まで
	主任主事	伊藤　嘉国 49. 7. 1～

年度	職・氏名	
49		野田　政実 49. 7. 1～
50	館長	吉野　六郎 50. 7. 9まで
	館長	榊　忠将 50. 7.10～
	学芸員	後藤　和民
		庄司　克
		森谷　孝一
	主任主事	伊藤　嘉国
		野田　政実
51	館長	榊　忠将 51. 7.28まで
	課長兼務	池田　貫徹 51.7.29～8.31
	館長	久野　勝 51. 9. 1～
	学芸員	後藤　和民
		庄司　克
		森谷　孝一
	主任主事	伊藤　嘉国
		野田　政憲
52	館長	久野　勝
	学芸員	後藤　和民
		庄司　克
	主任主事	伊藤　嘉国
		森谷　孝一
		野田　政実
53	館長	久野　勝

年度	職・氏名	年度	職・氏名	年度	職・氏名
53	学芸員　庄司　克	57	館長　橋口　隼人	60	学芸係長　庄司　克
	小澤　清男		学芸員　薬師寺　崇		学芸係　小澤　清男 60. 4.30まで
	主任主事　荒木　武		小澤　清男		学芸係　学芸員 60. 5. 1 ～ 村田六郎太
	井内　孝則		石橋　一恵		学芸係　石橋　一恵
	八木　繁夫		主任主事　山形　公一		管理係長　山形　公一
54	館長　久野　勝		井内　孝則		管理係　三須　正和
	学芸員　庄司　克		三須　正和 58. 1. 1 ～		管理係　今井　綾子
	小澤　清男	58	館長　橋口　隼人	61	館長　片岡　茂房
	主任主事　荒木　武		学芸係長　薬師寺　崇		学芸係長　庄司　克
	井内　孝則		学芸係　小澤　清男		学芸係　学芸員 村田六郎太
	八木　繁夫		学芸係　石橋　一恵		学芸係　石橋　一恵
55	館長　橋口　隼人		管理係長　山形　公一		管理係長　山形　公一
	学芸員　庄司　克		管理係　三須　正和		管理係　三須　正和
	小澤　清男		管理係　今井　綾子		管理係　今井　綾子
	主任主事　荒木　武	59	館長　片岡　茂房		
	井内　孝則		学芸係長　薬師寺　崇 59. 9.30まで		
	八木　繁夫 55.10.31まで		学芸係長　庄司　克 59.10. 1 ～		
56	館長　橋口　隼人		学芸係　小澤　清男		
	学芸員　庄司　克		学芸係　石橋　一恵		
	小澤　清男		管理係長　山形　公一		
	倉田　義広		管理係　三須　正和		
	主任主事　荒木　武		管理係　今井　綾子		
	井内　孝則	60	館長　片岡　茂房		

四、博物館協議会委員

◎印　委員長　　○印　副委員長

①昭和41年度～55年度	◎鈴	木 正 夫	千葉大学名誉教授
	滝	口 宏	早稲田大学教授
	杉	原 荘 介	明治大学教授
	清	水 潤 三	慶応義塾大学教授
	武	田 宗 久	県立千葉高校教諭
②昭和56年度～57年度	◎滝	口 宏	早稲田大学文学部教授
	杉	原 荘 介	明治大学文学部教授
	清	水 潤 三	慶応大学文学部教授
	武	田 宗 久	千葉市文化財保護審議会長
	鈴	木 利 朗	千葉市大森小学校長
③昭和58年度～59年度	伊	藤 正	千葉市立星久喜小学校長（昭和58年のみ）
	小	山 天 祐	千葉市立北貝塚小学校長（昭和59年のみ）
	大	塚 恵 章	大日寺住職
	○小笠原	長 和	千葉大学名誉教授
	清	水 潤 三	慶応大学名誉教授
	◎杉	本 郁太郎	千葉市文化振興センター理事長
	鈴	木 繁 夫	千葉市観光協会々長
	○滝	口 宏	早稲田大学名誉教授
	武	田 宗 久	千葉市文化財保護審議会長
	吉	田 公 平	千葉市文化財保護審議会委員
	杉	原 荘 介	明治大学教授（58. 9死去）
④昭和60年度～61年度	磯	部 琇 三	東京大学東京天文台助手 日本天文学会評議員
	大	塚 恵 章	大日寺住職
	○小笠原	長 和	千葉大学名誉教授
	清	水 潤 三	慶応義塾大学名誉教授
	◎杉	本 郁太郎	千葉市文化振興センター理事長
	鈴	木 繁 夫	千葉市観光協会々長
	○滝	口 宏	早稲田大学名誉教授
	武	田 宗 久	千葉市文化財保護審議会長
	中	村 進	千葉市立真砂第三小学校長
	吉	田 公 平	千葉市史編さん委員

※昭和58年より、博物館協議会は市条例の改正により郷土博物館と合同で行い、委員の定員は両館合わせて10名となった。

五、博物館の刊行物

(1) 貝塚博物館紀要

創刊号（1968年３月）

「貝塚博物館」の開館　鈴木　正夫
加曽利貝塚博物館に望む　滝口　宏
加曽利の博物館　清水　潤三
加曽利貝塚博物館への期待とあり方
加曽利貝塚の意義と保存対策　武田　宗久
世界的史跡を守る－「守る会」と「友の会」について　上野　豪彦
千葉市加曽利町兼坂古墳発掘調査概報　後藤　和民
千葉市加曽利町新山古墳群発掘調査概報　後藤　和民
縄文時代集落考（Ⅰ）　後藤　和民

第２号（1969年３月）

昭和42年度千葉市指定候補文化財調査報告　和田茂右衛門
加曽利貝塚貝層中発見の炉跡について　庄司　克
千葉市大森町　西の花遺跡の予備調査　平田美智子
千葉市平山町　菱名貝塚調査概報　後藤　和民・庄司　克
いわゆる馬蹄形貝塚の構造について(1)　今井　公子
縄文時代集落考（Ⅱ）　後藤　和民

第３号（1970年３月）

昭和43年度千葉市指定候補文化財調査報告　和田茂右衛門・宍倉　健吉
千葉市都町　宝導寺台貝塚発掘調査概報　庄司　克
昭和43年度　野外施設整備調査概報　後藤　和民
市川市堀之内貝塚発見の縄文土器　庄司　克
加曽利E期の世界観（Ⅰ）　堀越　正行
縄文時代集落考（Ⅲ）　後藤　和民

第４号（1971年３月）

千葉市仁戸名町　へたの台古墳群発掘調査概報　後藤　和民

昭和44年度　野外施設整備事業調査概報　　薬師寺　崇

習志野市　花咲貝塚調査概報　　堀部　昭夫

加曽利E期の世界観（Ⅱ）　　堀越　正行

第5号（1972年3月）

千葉市源町　すすき山遺跡発掘調査概報　　後藤　和民・庄司　克

昭和45年度　野外施設整備事業調査概報　　薬師寺　崇

加曽利E期の世界観（Ⅲ）　　堀越　正行

第6号（1981年3月）

昭和45・46年度　加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報　　後藤　和民・美智子・庄司　克

昭和46年度　野外施設整備調査概報　　薬師寺　崇

茨城県陸平貝塚発見の縄文土器　　庄司　克

第7号（1981年3月）

昭和47年度　加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報　　後藤　和民・庄司　克

茨城県台門貝塚の採集資料と周辺遺跡　　寺門　義範

堀之内Ⅱ式土器小考（Ⅰ）　　庄司　克

縄文時代集落考（Ⅳ）　　後藤　和民

第8号（1982年3月）

昭和48年度　加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報　　後藤　和民・庄司　克・飯塚　博和

昭和48年度　野外施設整備事業調査報告　　関野　克・岩崎　友吉・登石　健三・
江本　義理・樋口　清治・薬師寺　崇

千葉市殿台貝塚出土の遺物について　　阿部　芳郎

縄文時代中期終末期における文化様相
－千葉市すすき山遺跡を中心として－　　横田　正美

縄文時代集落考（Ⅴ）　　後藤　和民

第9号（1983年3月）

柄鏡形住居址とその遺物について
－千葉市源町　餅ケ崎遺跡－　　横田　正美

千葉県下における縄文時代前期後半期の諸問題（Ⅰ）　寺門　義範

房総半島における縄文時代遺跡出土の植物種子をめぐって

－特に堅果類の採集から廃棄までのプロセスを中心に－　小澤　清男

第10号（1983年３月）

千葉市内の平安時代遺跡について

－金親町・中原窯跡－　倉田　義広

窯跡から出土した須恵器（胎土）の鉱物学的分析について

－千葉市中原窯跡、宇都志野窯跡－　宇津川　徹

須恵系土器の製作技法について　村田六郎太

第11号（1984年３月）

野外施設における現状と問題点　薬師寺　崇

縄文時代前期後半から中期にかけての一資料

－千葉市宝導寺台貝塚出土の資料を礎にして－　寺門　義範

鹿島川流域の縄文時代の遺跡(1)

－千葉市八反目台貝塚－　田中　英世

千葉市文六第２遺跡出土の銅鏡について　石橋　一恵

第12号（1985年３月）

縄文時代前期後半の一資料

－千葉市東田遺跡出土の資料を礎にして－　寺門　義範

千葉市野呂山田貝塚出土の舟形土器

－鹿島川流域の縄文時代遺跡(2)－　田中　英世

千葉市旦谷町北原遺跡発見の独鈷石　小澤　清男

縄文時代集落考（Ⅵ）　後藤　和民

第13号（1986年３月）

千葉市芳賀輪遺跡出土の沈線文土器をめぐって

－鹿島川流域の縄文時代遺跡(3)－　田中　英世

土器の胎土分析とその応用

－加曽利貝塚を中心とした出土土器の放射化分析－　富沢　威・庄司　克・薬袋　佳孝・富永　健

房総における土器片錘に関する一考察
－貝塚遺跡出土の土器片錘の在り方－　石橋　一恵
縄文時代集落考（Ⅶ）　後藤　和民

(2)　貝塚博物館調査資料

貝塚博物館調査資料No. 1

「加曽利貝塚」Ⅰ（1967年３月）

調査の経過　武田　宗久
遺跡の位置と周辺の状態　武田　宗久
調査の概要　宍倉昭一郎
遺物の概要　宍倉昭一郎
人骨の出土状態　宍倉昭一郎
人骨の所見　小片　保

貝塚博物館調査資料No. 2

「加曽利貝塚」Ⅱ（1968年３月）

加曽利南貝塚の調査　滝口　宏
加曽利南貝塚の調査経過　後藤　和民
加曽利南貝塚の地理　貝塚　爽平・杉原　重夫
加曽利南貝塚の植物　亘理　俊次
加曽利南貝塚の動物　金子　浩昌
加曽利南貝塚についての年代測定　木越　邦彦
加曽利南貝塚の形成　清水　潤三
加曽利南貝塚の住居址　後藤　和民
加曽利南貝塚の土器　西村　正衛・戸沢　充則・鈴木　公雄
加曽利南貝塚の石器　後藤　和民・今井　公子
加曽利南貝塚の骨・角・牙・貝製品　金子　浩昌
加曽利南貝塚の特殊石製品　後藤　和民
加曽利南貝塚の土偶および土製品　野口　義麿
加曽利南貝塚の装身具　小林　三郎
加曽利南貝塚人の埋葬　後藤　和民
加曽利貝塚発掘の人骨　鈴木　尚・本村　賛・馬場　悠男

加曽利南貝塚について　杉原　荘介

貝塚博物館調査資料No. 3

「加曽利貝塚」Ⅲ（1970年３月）

加曽利北貝塚の調査　滝口　宏

加曽利北貝塚の調査経過　後藤　和民

加曽利北貝塚の動物　金子　浩昌

加曽利北貝塚についての年代測定　木越　邦彦

加曽利北貝塚の貝層堆積　後藤　和民

加曽利北貝塚の住居址群　後藤　和民

加曽利北貝塚の土器　庄司　克・堀越　正行

加曽利北貝塚の石器　今井　公子・市川　勇

加曽利北貝塚の骨・角・牙・貝製品　金子　浩昌・牛沢百合子・寺島和秀

加曽利北貝塚出土の特殊遺物　清水　潤三・鈴木　公雄

加曽利北貝塚人骨の埋葬　後藤　和民

加曽利北貝塚の保存　関野　克

加曽利北貝塚について　杉原　荘介

貝塚博物館調査資料No. 4

「加曽利貝塚」Ⅳ（1971年３月）

調査の経過　後藤　和民

調査区の概況と文化層の把握　庄司　克・堀越　正行

遺構の把握　後藤　和民

埋葬の状態　後藤　和民

調査区出土の土器　庄司　克・堀越　正行

土製品　今井　公子

石器および石製品　市川　勇

特殊遺物　今井　公子

動　物　金子　浩昌・長岐　勉

骨・角・牙・貝製品　牛沢百合子

(3) 貝塚博物館研究資料

貝塚博物館研究資料 1

「縄文土器の技術」（1973年 3 月）

実験的研究の目的と意義　後藤　和民

縄文土器の技術　新井　司郎

断章　新井　司郎

故新井司郎氏の研究成果について　庄司　克

新井さんから学んだこと　伊藤　晋祐

新井司郎氏の土器製作の道程とその志向したもの　増田　修

亡友を語る－故新井司郎氏の歩んだ道－　小林　一好

貝塚博物館研究資料 2

「集落遺構の保存」（1980年 3 月）

集落遺構現地保存の目的と意義　後藤　和民

遺構保存の沿革と施設の構造　関野　克

遺構保存の方法　岩崎　友吉

施設内における一般的現象　薬師寺　崇

合成樹脂による保存処置　樋口　清治

施設内における物理的現象　登石　健三

施設内における化学的現象　江本　義理

施設内における生物学的現象　江本　義数・江本　義理

生物による劣化とその防除　新井　英夫・鮎川　博

貝層断面における加湿実験　石川　陸郎・三浦　定俊

技術上の問題点　薬師寺　崇

活用上の問題点　庄司　克

維持管理と今後の課題　後藤　和民

貝塚博物館研究資料 3

「貝塚出土動物遺存体の研究」（1982年 3 月）

関東東南部における縄文時代の貝塚　金子　浩昌

主要貝塚の立地と動物相　金子　浩昌

脊椎動物遺存体の分布密度　金子　浩昌・丹羽百合子

収束と今後の課題　金子　浩昌

貝塚博物館研究資料4（1983年3月）

石器・石材研究の目的と意義　後藤　和民
加曽利貝塚出土の石器について　庄司　克
研究委託と調査・研究の経過について　新井　重三
加曽利貝塚より出土した石器用石材について　新井　重三
岩石分類学の立場からみた石器用石材の特徴　新井　重三
関東地方における砕石用石材と石器用石材との関係　新井　重三
千葉県の地質と石器用石材の分布　新井　重三
関東地方の地質と石器用石材の分布　新井　重三
加曽利貝塚周辺の地形・地質と古環境　新井　重三
関東地方より出土した磨製石斧の岩質　新井　重三
加曽利貝塚より出土した磨製石斧の岩質　新井　重三
加曽利貝塚出土石器用石材の原産地　新井　重三
石器の採取と流入経路　新井　重三

(4). 加曽利貝塚案内パンフレット

「加曽利貝塚」　加曽利貝塚調査団編　1965年
「加曽利貝塚」　千葉市加曽利貝塚博物館友の会　1967年
「加曽利貝塚」　千葉市加曽利貝塚博物館友の会　1970年
「加曽利貝塚」　千葉市加曽利貝塚博物館　1980年3月
「加曽利貝塚」　千葉市立加曽利貝塚博物館　1985年3月

六、加曽利貝塚関係文献

番号	発行	論文名・書名
1	1887. 9	上田英吉　「下総国千葉郡介墟記」『東京人類学雑誌』2－19
2	1893. 3	山崎直方　「下総曽谷・千葉の二貝塚に就いて」『東京人類学雑誌』8－84
3	1893. 4	山崎直方　「下総貝塚遺物図解」『東京人類学雑誌』8－85
4	1907. 11	大野雲外　「加曽利貝塚の概況」『東京人類学雑誌』23－26
5	1909. 4	「加曽利貝塚の滑車形土製品」『東京人類学雑誌』24
6	1915. 11	石田収蔵　「下総国千葉郡加曽利貝塚」（口絵説明）『東京人類学雑誌』30－11
7	1915. 11	小田桐健児　「下総加曽利貝塚踏査」『東京人類学雑誌』30－11
8	1915. 11	上羽貞幸　「東京人類学会遠足会」『東京人類学雑誌』30－432
9	1923. 7	上羽貞幸　「加曽利貝塚の近況」『考古学雑誌』
10	1924. 6	八幡一郎　「千葉県加曽利貝塚の発掘」『東京人類学雑誌』39－4・5・6
11	1924. 1	M・M生　「下総加曽利行」『東京人類学雑誌』40－1
12	1926. 7	平瀬信太郎　「加曽利貝塚の貝類に就いて」『東京人類学雑誌』41－3
13	1926. 11	東木龍七　「貝塚分布の地理學的考察」『東京人類学雑誌』41－11
14	1926. 11	小金井良精・松村瞭　『The Kasori Shell Heaps Guide Book Exaursion』
15	1926. 12	「汎太平洋學術会議見学旅行加曽利行」『東京人類学雑誌』41－12
16	1937. 3	大山史前学研究所　「加曽利貝塚概要」（プリント）『史前学雑誌』9－1
17	1937. 3	大山史前学研究所　「千葉県千葉郡都村加曽利貝塚調査報告」『史前学雑誌』9－1
18	1937. 3	大宮守誠　「千葉県加曽利古山貝塚に就いて」『考古学雑誌』27－6
19	1938. 2	藤沢宗平　「加曽利貝塚に就いて」『早高史学』1

番号	発行	論文名・書名
20	1952. 12	麻生優「加曽利貝塚発見の玉器」『上代文化』23
21	1953. 2	武田宗久「原始社会」『千葉市誌』
22	1959. 3	伊藤和夫・金子浩昌・千葉県教育委員会『千葉県石器時代遺跡地名表』
23	1961. 5	酒詰仲男『日本縄文石器時代食糧総説』
24	1963. 3	芹沢長介「千葉県千葉市加曽利貝塚」『日本考古学年報』11
25	1963	武田宗久「加曽利貝塚の発掘と現状について」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』
26	1963. 6	岡本勇「加曽利貝塚の意義」『考古学研究』10－1
27	1964. 4	武田宗久「加曽利貝塚の意義と保存対策」『房総史学』5
28	1964. 4	酒詰仲男『日本貝塚地名表』
29	1964. 7	甘粕健「加曽利貝塚の発掘と保存運動」『考古学手帖』23
30	1965	近藤義郎「加曽利貝塚を思う」『考古学研究』11－3
31	1966. 11	杉原荘介『加曽利貝塚』
32	1967.	後藤和民『加曽利貝塚』加曽利貝塚友の会
33	1968. 3	武田宗久編『加曽利貝塚Ⅰ』貝塚博物館調査資料第1集
34	1968. 3	鈴木正夫「加曽利貝塚に望む」『貝塚博物館紀要』創刊号
35	1968. 3	滝口宏「加曽利の博物館」『貝塚博物館紀要』創刊号
36	1968. 3	清水潤三「加曽利貝塚博物館への期待とあり方」『貝塚博物館紀要』創刊号
37	1968. 3	上野豪彦「世界的史跡を守る－「守る会」と「友の会」について」『貝塚博物館紀要』創刊号
38	1986. 3	加曽利貝塚調査団編『加曽利貝塚Ⅱ』貝塚博物館調査資料第2集
39	1969. 3	庄司克「加曽利南貝塚貝層中発見の炉跡について」『貝塚博物館紀要』第2号
40	1969. 3	千葉市教育委員会『千葉県文化財総覧』
41	1970. 3	加曽利貝塚調査団編『加曽利貝塚Ⅲ』貝塚博物館調査資料第3集
42	1970. 3	後藤和民「昭和43年度野外整備調査概報」『貝塚博物館紀要』第3号
43	1970. 6	竹内理三・杉原荘介編「加曽利貝塚の発掘状況」(口絵写真)『古代の日本』7
44	1971. 3	滝口宏編『加曽利貝塚Ⅳ』貝塚博物館調査資料第4集
45	1971. 3	薬師寺崇「昭和44年度野外施設整備事業調査概報」『貝塚博物館紀要』第5号

番号	発行	論文名・書名
46	1971. 7	後藤和民「加曽利貝塚の保存と博物館」『月刊文化財』94
47	1971	千葉県教育委員会『千葉県記念物所在地図』
48	1972. 3	薬師寺崇「昭和45年度野外施設整備事業調査概報」『貝塚博物館紀要』第5号
49	1972	庄司克「加曽利南貝塚の遺跡限界確認調査の意義について」『museum ちば』創刊号
50	1972	後藤和民「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」1972年度第22回地方史研究協議会研究発表要旨
51	1973. 3	千葉県教育委員会『千葉県文化財総覧』
52	1973. 3	後藤和民「加曽利遺跡」『日本考古学年報』24
53	1973. 3	新井司郎『縄文土器の技術－その実験的研究序説－』貝塚博物館研究資料第1集
54	1973. 3	杉原荘介『加曽利貝塚』
55	1973. 9	後藤和民「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』
56	1974	後藤和民「遺跡案内 加曽利貝塚」『日本考古学の視点』上
57	1974. 3	千葉市史編纂委員会『千葉市史第1巻原始古代・中世』
58	1974	後藤和民「加曽利貝塚博物館」『考古学ジャーナル』98
59	1974	後藤和民「東京湾東岸の貝塚群とその保存」『考古学研究』82
60	1976. 3	千葉市史編纂委員会『千葉市史資料編1原始・古代・中世』
61	1976. 3	杉原荘介編『加曽利南貝塚』
62	1976. 6	林謙作「書評加曽利南貝塚」『考古学雑誌』62－1
63	1977. 3	杉原荘介編『加曽利北貝塚』
64	1977. 3	滝口宏編『加曽利貝塚Ⅳ』
65	1977.	田原豊・中村純「千葉県における稲作の起源に関する花粉分析学的研究」『稲作の起源と伝播に関する花粉分析学的研究』
66	1981. 3	千葉市教育委員会『史跡整備の現状と問題点』（中間報告）
67	1981. 3	関野克・後藤和民・岩崎友吉・薬師寺崇・樋口清治『集落遺構の保存－その実験的研究序説－』貝塚博物館研究資料第2集
68	1981. 3	後藤和民・庄司克・後藤美智子「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』第6号

番号	発行	論文名・書名
69	1981. 3	薬師寺　崇　「昭和46年度野外施設整備調査概報」『貝塚博物館紀要』第6号
70	1981. 3	後藤和民・庄司　克　「昭和47年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』第7号
71	1982. 3	関野　克・岩崎友吉・登石健三・江本義理・樋口清治・薬師寺　崇　「昭和48年度野外施設整備事業調査報告」『貝塚博物館紀要』第8号
72	1982. 3	後藤和民・庄司　克・飯塚博和　「昭和48年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概要」『貝塚博物館紀要』第8号
73	1983. 3	金子浩昌　『貝塚出土の動物遺体－関東地方・縄文時代貝塚の動物相とその考古学的研究－』貝塚博物館研究資料第3集
74	1983. 3	小沢清男　「房総半島における縄文時代遺跡出土の植物種子をめぐって－特に堅果類の採集から廃棄までのプロセスを中心に－」『貝塚博物館紀要』第9号
75	1983. 12	後藤和民　「そもそも－行政的遺跡－とは何ぞや」『考古学研究』30－3
76	1983. 12	橋口尚武　「史跡－加曽利貝塚－隣接地の試掘はこれでよいのか」『考古学研究』30－3
77	1983. 3	千葉県教育委員会　『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
78	1984. 3	新井重三　『縄文時代の石器－その石材の交流に関する研究－』貝塚博物館研究資料第4集
79	1984. 3	薬師寺　崇　「野外施設における現状と問題点」『貝塚博物館紀要』第11号
80	1984. 3	千葉市教育委員会　『千葉県埋蔵文化財分布地図』
81	1986. 3	千葉県文化財センター　『加曽利貝塚－県営桜木町第2団地に伴う埋蔵文化財調査報告書』
82	1986. 3	富沢　威・庄司　克・薬袋佳孝・富永　健　「土器の胎土分析とその応用－加曽利貝塚を中心とした出土土器の放射分析」『貝塚博物館紀要』第13号
83	1986. 3	石橋一恵　「房総における土器片錘に関する一考察－貝塚遺跡出土の土器片錘の在り方－」『貝塚博物館紀要』第13号
84	1966.	田原　豊　「加曽利貝塚における花粉分析」『史跡－加曽利南貝塚整備基本設計』

加曽利貝塚博物館20年の歩み
―野外博物館をめざして―

昭和62年3月25日　印刷
昭和62年3月31日　発行

編集・発行　千葉市桜木町1-6-3番地
☎（0472）31－0129
千葉市立加曽利貝塚博物館

印刷所　千葉市都町2－5－5
☎（0472）33－2235
有限会社　正文社